

V 古墳分布の概要

1 北足立郡市

北足立郡南部における古墳は、旧入間川沿いの台地上や自然堤防上、また西側の武蔵野台地縁辺部に所在している。こうした中で、初期の古墳は、旧入間川沿いの地域に点在している。旧入間川と市野川との合流地点付近の台地南端に位置する桶川市熊野神社古墳は径約40mの円墳で、粘土槨と思われる主体部内から勾玉などの玉類、石釧・巴形石製品などの石製品、筒形銅器などが出土している。また、近年の墳形確認調査で底部穿孔壺形土器も出土しており、築造年代は4世紀後半と考えられている。現在のところ当地域における最古の古墳といわれている。この古墳に続いては、やや南に位置する上尾市江川山古墳、殿山古墳があげられる。江川山古墳は、明治期の開墾で消滅したが、出土した捩文鏡と獣形鏡の二面の小型仿製鏡や土器などの検討から4世紀末頃の年代が与えられている。殿山古墳は、径約40mの円墳で、発掘調査によって周掘部分から鉄鎌とともに、和泉式(古)段階の土器が出土しており、5世紀前半の年代を考えられている。この古墳の北側からは、方形周溝墓も発見されている。大宮台地南端部では、全長75mの前方後円墳である川口市高稲荷古墳があげられる。この古墳は土取り工事の際に発掘調査が行われ、主体部は粘土槨であることが確認された。出土遺物が少ないが、主体部の構造、埴輪をもたないこと、前方部が未発達なことなどを合わせ、5世紀初頭に築造されたものと考えられている。さらに、最近の発掘調査によって、この両地域の中間にあたる浦和市白鍬地内において、白鍬塚山古墳の周堀内から、B種横刷毛整形の埴輪の破片がみられることや、与野市八王子地区の樽形甕、高坏、白鍬遺跡の壺形土器などの古式須恵器の出土があり、特に白鍬遺跡では古墳との関わりが考えられ、この地域において5世紀の後半もしくは、さらに古い段階から古墳が築造されていたことが考えられるようになった。

その後6世紀にはいると、戸田市南原古墳群、浦和市白幡古墳群、中島古墳群、大久保古墳群、大宮市側ヶ谷戸古墳群、植水古墳群、朝霞市根岸古墳群など、当地域に見られるほとんどの古墳群が形成されるようであり、その後引き続き7世紀代まで古墳が築造されるようである。川越市から和光市にかけての武蔵野台地縁辺では、横穴墓群が分布し、当地域においても朝霞市根岸横穴墓群、和光市吹上横穴墓群、市場峡横穴墓群などの横穴墓群が分布している。さらに、終末期には二重の周堀をもつ朝霞市八塚古墳や浦和市本空古墳、与野市今宮1号古墳などの方墳が築造されている。(小倉 均)

北足立郡北部にあたる大宮台地の北部は、東側に元荒川、西側に荒川(和田・吉野川)が南流し、南北に半島上に延びている。また、北の境目となる吹上町付近は、両河川の分岐する地点にあたり広く氾濫原となっているが、埋没ローム台地と自然堤防の発達をみている。荒川に面する西側に支谷の発達が著しく小支台を数多く形成しているのに対して、東側は比較的緩やかな地形で支谷の発達も余りみられない。このことから北足立郡北部の後期古墳は、大宮台地の東西縁辺部を中心として、両河川の形成した自然堤防や埋没ローム台地上に立地している。しかし、本地域の古墳は、早くから開発されて消滅した古墳が多い。

本地域の後期古墳群は、元荒川流域では北から吹上町袋・台古墳群、鴻巣市箕田古墳群、新屋敷古墳群、生出塚古墳群、安養寺古墳群、笠原古墳群がある。この他墳丘削平のため詳細不明であるが、三ッ木古墳群などのように埴輪を出土する地点や単独で立地する古墳がいくつか存在する。大宮台地の北端部に位置する三島神社古墳は全長70m以上の大型前方後円墳であり、現在は単独で存在しているものの周辺に古墳の存在を予想させる。また、生出塚・新屋敷古墳群は、最近の発掘調査で両群合わせて40基以上の古墳跡が検出され、当時は100基前後の古墳からなる基荒川流域最大の古墳群であったことが明らかになっている。

一方荒川流域では北より鴻巣市糠田古墳群(消滅)、馬室古墳群、北本市北袋古墳群、中井古墳群、八重塚古墳群、桶川市川田谷古墳群が連綿と存在しているが、上尾市域に至っては後期古墳の分布が認められず、大宮市植水古墳群との間には大きな空白域がみられる。大宮台地西側に分布するこれらの古墳群は、荒川低地から入る支谷によって支群が形成されているが、特に川田谷古墳群は、西台支群、原山支群、柏原支群、樋詰支群の4支群よりなる比較的大規模な群集墳で、現在までに60基前後の古墳の存在が確認されている。

そのうち、柏原支群に属するひさご塚古墳は、横穴式石室を主体部とする全長41mの前方後円墳であり、同古墳群の主墳と目されている。また、馬室將軍塚古墳、北袋1号墳、中井1号墳が詳細は明らかでないが、それぞれ群中の前方後円墳と考えられている。

なお、これらの古墳群の分布と密接に関連するように元荒川流域に生出塚埴輪窯跡群、荒川流域に馬室埴輪窯跡群がそれぞれ立地し、埴輪の需給関係など注目されている。(山崎 武)

1 入間郡市

当地域は、横穴墓と低墳丘石室墳が散在する狭山市、所沢市など南・西部と、円墳を中心にやや密な古墳分布が認められる川越市、坂戸市、毛呂山町など北部とが好対照をなしている地域である。

前期に属するものは荒川右岸の台地縁辺部に所在する川越市仙波古墳群の三変稲荷神社古墳である。一辺20.5~25mの不整形台形を呈する方墳で、かつて白銅質の甕龍鏡と碧玉製石釧が採集され、最近の調査でも底部穿孔壺形土器(埴輪壺)が出土しており、4世紀末頃の築造と考えられる。入間地域最古の古墳である。近傍では五領期の集落や方形周溝墓群も確認されており、当地域の古墳文化の受容を考える上で重要である。周囲の前方後円墳群も後続するものではあろうが、時期や規模が確定しているものはない。

これ以後、6世紀前半あたりから築造されるのは当地域の北端部の越辺川南岸の台地上の勝呂古墳群、雷電塚古墳群、新町古墳群などや、入間川と小畔川の合流点付近の台地上に立地する下小坂古墳群である。雷電塚古墳群・新町古墳群を中心とした入間北端部の古墳群は、主墳と見られる雷電塚古墳(雷電塚1号墳、全長47m)や胴山古墳(新町1号墳)(全長60m)のような中規模の前方後円墳や大型円墳が目立ち、後期から終末期にかけての首長墓を多く含んでいるように見受けられる。

下小坂古墳群は、前方後円墳3基・方墳1基・円墳20基以上で構成されていたらしい。東洋ゴム化学工業建設の事前調査によって粘土槨・木炭槨・木棺直葬などの竪穴系主体部を持つ古墳が多いことが確認されており、6世紀前半以降展開する初期群集墳とされている。東端部のどうまん塚古墳からは剣菱形杏葉・楕円形鏡板付簪などの馬具類や挂甲・変形獸列鏡・多数の滑石製白玉など優秀な副葬品が出土した。

6世紀後半以降になると、当地域北西部の坂戸市北峰古墳群・善能寺古墳群、毛呂山町大類古墳群・川角古墳群など高麗川流域に分布の中心が移るが、径20mにも満たないものが多い。

さらに入間川のやや上流域の狭山市笹井古墳群・上広瀬古墳群などでは墳丘がほとんど盛られず狭長な石室を主体部とする古墳群が形成される。遺物が僅少で時期が明らかではないが、7世紀以降と考えたい。

入間川のやや下流域の山王塚古墳(上円下方墳)、小畔川のやや上流域の鶴ヶ丘古墳群(方墳)は終末期に属する古墳であり、7世紀中葉頃と考えられる。この時期以降は横穴墓の形成が数カ所で見られ、不老川左岸の川越市岸町横穴墓群、柳瀬川上流域の滝之城横穴墓群は特に顕著なものであろう。(田中 信)

3 比企郡市

比企郡市内には発掘調査等により確認された古墳を含めて1000基以上の古墳・横穴墓が存在していたことが確認されたが、このうち実に8割以上が東松山市、滑川町、嵐山町に集中している。玉川村、都幾川村の2村には現在のところ古墳の存在は確認されていない。

郡市内の古墳群の分布状況を概観すると、小河川により開析された開析谷に面した北比企丘陵支丘上には三千塚古墳群(東松山市)、円正寺古墳群・天神前古墳群・寺前古墳群・月輪古墳群(滑川町)、古里古墳群他(嵐山町)の古墳群が分布している。三千塚古墳群の中央の丘陵頂部には雷電山古墳がある。ハート型の透孔をもつ特異な円筒埴輪を樹立することが埴形確認調査で確認された。5世紀初頭の築造とされる。また、月輪古墳群においては横穴式石室以前の埋葬施設をもつ5世紀代の古墳を含み、横穴式石室を採用する7世紀の古墳まで60基以上が築造されている。北比企丘陵に含められる吉見丘陵上には、久米田古墳群・北吉見古墳群・黒岩横穴墓群・吉見百穴横穴墓群が形成されている。この丘陵の東側の低地を望む尾根上には前方後方墳の山の根古墳がある。周堀から高坏・甕などの土師器を出土し、4世紀代でもかなり古い時期に遡り、

高坂台地の諏訪山29号墳と並んで郡内最古の古墳であろう。黒岩・吉見百穴の二つの横穴墓群は大規模であり、合計 700基以上に達するが、現状では位置を確認できないものが多い。北比企丘陵から東松山台地になる境、都幾川の左岸には、山王古墳群・寺山古墳群・向原古墳群他（嵐山町）、西原古墳群・下唐子古墳群・附川古墳群他（東松山市）が、東松山台地の東方には、古凍・柏崎古墳群が分布している。古凍・柏崎古墳群は近年道路建設の事前調査で数多くの古墳跡を確認しているが、方形周溝墓も含めて4～7世紀の長期間にわたって築造されていることが判明した。更には高坂台地縁辺を取り巻くように、諏訪山古墳群・高坂古墳群・毛塚古墳群が分布する。高坂古墳群も道路建設の事前調査で20基以上の円墳跡が検出されている。

郡内全域で特徴的なことは、凝灰質砂岩截石積みの横穴式石室を埋葬施設とする古墳が、関越自動車道・日本住宅公団関連の調査などを中心に数多く確認されていることである。6世紀末頃から7世紀後半までに築造された古墳の埋葬施設に採用されたようである。

以上のように、郡市内の古墳の多くは北比企丘陵、東松山台地、高坂台地上で認められる。このような背景には、可耕地としての地形的条件による生産基盤の確立が古墳群の成立に深く関わっているものといえる。

（宮嶋 秀夫）

4 秩父郡市

秩父郡市では約 300基の古墳が確認されている。大部分の古墳は荒川及び赤平川・横瀬川流域の河岸段丘上に形成されている。その多くは直径10～15m、高さ2m程度の小円墳である。年代の判明している古墳は少ないが、そのほとんどが7世紀のものであり、6世紀にさかのぼる古墳は非常に少ない。

荒川流域には、下流に向かって金室古墳群（秩父市）、飯塚・招木古墳群（秩父市）、大塚古墳（皆野町）、金崎古墳群（皆野町）、上長瀬古墳群（長瀬町）などが形成されている。このうち飯塚・招木古墳群は左岸の河岸段丘上にある古墳群で、総数 125基を数える秩父地方最大の古墳群である。群を構成するのはすべて円墳で、ほぼ9割が直径15m以下の小円墳である。昭和53年に7基が調査されたが、副葬品は少なく、鉄鏃及び須恵器と土師器の破片が少量見つかっただけで、埴輪はなかった。また、発見された主体部は4基であったが、いずれも横穴式石室であった。古墳群が形成された時期は7世紀後半である。金崎古墳群と上長瀬古墳群は近接しており、同一の古墳群とする考えもある。金崎古墳群の天神塚古墳は、埴輪を伴うことから6世紀第3四半期の築造と考えられており、今のところ秩父最古の古墳とされている。主体部は横穴式石室である。上長瀬古墳群は4基の古墳が調査されたが、いずれも7世紀後半の築造である。

赤平川と横瀬川は荒川の支流であり、横瀬川は秩父市内で、赤平川は秩父市と皆野町との境で荒川と合流する。赤平川の流域には、上流から千尋原古墳群（小鹿野町）、春日野道下古墳群（小鹿野町）、取方古墳群（吉田町）、安中古墳群（吉田町）などがある。いずれも小円墳からなる古墳群である。これらの古墳群についての詳細は不明であるが、安中古墳群の安中1号墳からは極めて小規模な横穴式石室が発見され、築造時期は7世紀後半から8世紀初頭とされている。横瀬川流域には左岸を中心として大野原古墳群が形成されており、現在24基の古墳が確認されている。この古墳群はかつて2回発掘調査が行われ、蕨手刀と和同開珎を出土した古墳及び半地下式の横穴式石室を持つ古墳が確認された。これらの古墳の築造年代は7世紀後半から8世紀初頭と考えられるので、古墳群自体もこの時期に形成されたと推定されている。

吉田町の太田部古墳群は、これらの河川流域に形成された古墳と異なり、標高 953.9mの塚山の山頂に近い東面の山腹に形成されている。標高は 830～870mで、県内最高所に位置する古墳群といわれ、現在10基が確認されているが、中・近世の塚である可能性もあることが指摘されている。（小澤 守）

5 児玉郡市

当地域で前期に比定される墳墓は、丘陵部や台地縁辺部に形成されているものが多く、美里町南志渡川遺跡、児玉町塩谷下大塚遺跡、本庄市下野堂遺跡、神川町前組羽根倉遺跡等が挙げられる。これらは弥生時代からの伝統的墓制である方形周溝墓の形態を継承している。しかし、美里町南志渡川遺跡・村後遺跡におい

ては前方後方形周溝墓が存在し、首長層の段層分化が推定される。さらにより上位の首長により造営された古墳が児玉地域最大規模を誇る児玉町入浅見の低丘陵に占地する児玉町鷲山古墳で、これは埼玉県内における初期古墳に共通する前方後方墳である。

中期の古墳は身馴川・志戸川、女堀川流域及び本庄台地端部に集中し、40m程度の円墳が多く含まれる。志戸川流域の美里町長坂聖天塚古墳は、方格規矩鏡等の畿内の副葬品を所有することから児玉地域を掌握した首長墓と考えられる。女堀川流域には本庄市前山1・2号墳、公卿塚古墳がある。公卿塚古墳は格子目叩きと有黒斑横刷毛埴輪を持つ大型円墳である。生野山丘陵には、物見塚古墳、將軍塚古墳、金鑽神社古墳が存在する。物見塚古墳は生野山丘陵の最高点に位置し、生野山丘陵最初の首長墓の可能性が考えられる。公卿塚古墳、金鑽神社古墳、將軍塚古墳には格子目叩きを用いた埴輪が知られ、須恵器生産との関係が注意されよう。志戸川中流域及び本庄台地端部に営まれた古墳も見逃せない。志戸川左岸の微高地に位置する美里町道灌山古墳は、葺石・埴輪が認められず周堀から古式土師器が検出されていることから、竪穴系の埋葬施設を有する古式古墳と推定される。対岸の志渡川古墳は横刷毛有黒斑の埴輪を出土する。本庄市・上里町に展開する旭・小島古墳群の八幡山古墳、三空山古墳に埴輪は伴わず、八幡山古墳には箱式石棺が知られる。身馴川中流域の児玉町長沖157号墳からも横刷毛有黒斑の埴輪が検出された。このように5世紀中頃には各集団ごとに墓域が設定され古墳群の基盤が確立するが、美里町諏訪山古墳の一例を除き円墳に限られている。

児玉地域の前方後円墳は、5世紀末に築造が始まり6世紀後半で終了するが、100mを越える古墳が存在しない当地域では児玉町生野山銚子塚古墳、生野山16号墳、秋山諏訪山古墳、神川町白岩銚子塚古墳が最大級である。この時期の埋葬施設として、児玉町長沖1号墳、27号墳の主体部に見られる礫椀状小石室の構築が認められるが、6世紀中葉には横穴式石室の受容が開始される。同時に小円墳から構成される群集墳が丘陵・台地・自然堤防上に出現し、これまで集落とされた地域まで墓域が拡大する。神川町青柳古墳群、上里町大御堂古墳群、児玉町長沖古墳群、秋山古墳群、美里町広木大町古墳群、白石古墳群等である。群集墳の中には横穴式石室導入期の狭長袖無型横穴式石室が存在しており、これらは竪穴式石室に羨道部を付設したものでなく、形式化した状況のもとで採用された横穴式石室である。奥壁には大型角礫、側壁には小口状に小礫を模様積みし、石室外側を馬蹄形に圍繞する控積を設置する古墳が多数存在する。このような埋葬施設を伴う古墳が児玉地域の広範囲に営まれていることは、対峙する上毛野地域の影響下にあったと見做すこともできよう。児玉地域における前方後円墳の築造は6世紀末葉を最後に姿を消し、角閃石安山岩を用いた本庄市御手長山古墳・上里町浅間山古墳や児玉町生野山58号墳に見られる胴張型横穴式石室を採用した30m程度の円墳に変化する傾向が伺われる。この時期まで埴輪は残るが底部調整が加えられることや器形の縮小化が顕著となる。小円墳にも埴輪の使用は認められるが数量的に減少し形象埴輪が樹立されなくなる。石室形態も前代の規模に比較し縮小傾向が見られ、石材も全体的に小礫を多用する傾向が伺われる。だが、美里町諏訪林古墳は、埴輪を持たず大型凝灰岩を面調整した石室と、河原礫控積を有し墳麓へ二列に葺石状の集石列を巡らした円墳も依然として存在する。旭・小島古墳群、青柳古墳群、塚本山古墳群、白石古墳群等は長期間継続的に構築された群集墳である。群中に方墳が認められずほとんどが円墳で構成されていることに当地域の古墳終末期の特徴がある。

(長滝 歳康)

6 大里郡市

大里郡の古墳は、近年の各種開発に伴う発掘調査の増加とともに新たな注目すべき事実を蓄積している。ここでは、今回の調査によって加わった資料から郡内の動向を時期別にみることにしたい。

前期古墳では、弥生時代以来の伝統的な方形周溝墓が発見される場合が多く、岡部町石葺B遺跡の調査以来郡内の発見例は微増であり、地域も志戸川流域・妻沼低地・江南台地上と偏りがある。大里村船木遺跡では弥生時代から継続して方形周溝墓が造られており、他とは遺跡の性格を異にする。また、江南町塩古墳群・熊谷市万吉下原遺跡では墳丘を良好に留めた、いわゆる方形台状墓が確認されている。とくに、塩古墳群中の狸塚支群1号墳は前方後方形をしていることが確認されている。同25号墳では木棺直葬の埋葬主体部が検

出されている。これらは、現大里郡域の周辺部に位置し当時でも児玉・比企等の隣接地域と深い関わりを持って成立しているものと推定される。

中期古墳は調査例が少ない。熊谷市前原遺跡では円形周溝墓が、江南町新山1号墳では方墳が検出されている。榛沢郡衙正倉跡と推定される岡部町中宿遺跡でも方墳跡が検出されているにすぎない。

後期古墳は、調査例も多い。沖積地・市街地に所在し新たに古墳群として把握された遺跡には次のようなものがある。深谷市上増田古墳群は妻沼低地に埋没した古墳群であったことがわかり、周辺部の自然堤防上からも城北遺跡・居立遺跡・上敷免遺跡等の集落跡が新たに発見されている。上増田古墳群はこれらの大規模な集落を背景として成立しているものと考えられる。また、後背地に当たる櫛引台地縁辺に分布する木の本古墳群中には前方後円墳が確認されたことと考えあわせなければならぬだろう。小前田古墳群の外側に広がるのがわかった寄居町樋ノ下遺跡では後期末の円墳跡9基が検出され、市街地まで古墳群の分布していたことが明らかになった。このように妻沼低地では集落の発見とともに古墳群の存在も注意しなければならず、上増田古墳群の例は空白地域での古墳群の存在の可能性を如実に物語っている。熊谷市横塚山古墳一帯はそのような埋没、削平された古墳群の所在する可能性の高い地域として注意が必要である。

周知の古墳群中において調査された例では、寄居町高城・番場遺跡があり、埴輪を伴う古墳を含め方墳4基、円墳20基が確認された。また小型の箱式石棺も検出されている。熊谷低地では熊谷市肥塚古墳群の調査で横穴式石室が検出されている。同市の籠原裏古墳群では埋没墳の例だが八角形の墳丘を持つ古墳が確認されている。江南台地と周辺地域では、川本町箱崎古墳群に埴輪を伴う円墳跡が、江南町塩古墳群西原支群では5基の円墳が調査され、截石組の胴張り型横穴式石室を構築し埴輪を伴うものと伴わない古墳が検出されている。大里村では東山遺跡・円山遺跡・阿諏訪野東遺跡・桜谷東遺跡・同西遺跡・大境南遺跡等で円墳跡を主体に調査されたが、東山遺跡・大境南遺跡では埴輪を共伴しない前方後円墳が確認されている。前方後円墳の消滅過程を示す良好な例といえる。同様な例は終末期の前方後円墳とされる岡部町お手長山古墳も周堀の調査により埴輪を共伴しないことが判明している。

大里地域の古墳は前期では志戸川流域・妻沼低地・江南台地と遺跡の分布に偏りがあり、中期も大きな変化を見ない。しかし、後期にいたっては各地に集落・古墳群が成立していく。ここ数年の調査によってもこの傾向は跡付けられるものであり、隣接する埼玉・児玉・比企の動向を踏まえると周辺の有力な勢力間に取り残された緩衝地帯のようでもあり、後期にいたっての遺跡の増加は周辺地域またはもっと外からの開発を契機とするような様相が伺われる。 (新井 端)

7 北埼玉郡市

北埼玉郡市における古墳の立地条件の特色は、地質学でいわれる関東造盆地運動による地盤沈降の影響を受けていることである。つまり、本来台地上につくられた古墳が地盤の沈降により沖積上に覆われてしまい、数mの墳丘高を持つ中小古墳が結果として現在の水田面下に埋没してしまったという現象である。この現象は特に利根川右岸地域、行田、羽生、加須市に多い。そのためこの地域で確認される古墳の数は限られているが、実際には多くの古墳が未発見になっていると推測される。

本郡市にはまだ初期古墳は発見されていない。この空白地に5世紀後半のある時期埼玉に稲荷山古墳が出現する。近くの南河原村・とやま古墳や、羽生市・永明寺古墳などの前方後円墳が相次いで築造されたようで、本格的な古墳築造の時期が到来したとともに、その出現の仕方が唐突であることが特色である。

6世紀代になると、埼玉ではこの百年の間に集中して大型古墳が築造されるとともに、周辺にも前方後円墳を中心とした古墳群が盛んに築造されてくる。しかし7世紀になると、埼玉古墳群では將軍山古墳が6世紀代に入ることが確認されたことより、中の山古墳が7世紀前後に位置付けられているだけで、大型前方後円墳は現在確認されていない。これに対して、100mを越える前方後円墳の小見真観寺古墳、巨大な石室を持つ円墳・八幡山古墳などが突出した古墳としてとらえられている。

最近の調査でいくつか大きな成果が得られている。埼玉古墳群では前述したように、將軍山が二重の周堀

を持つこと、墳丘に埴輪が巡らされていること、完全に破壊されたと思われた石室の一部が残存し、遺物も残されていたことなどから、6世紀代に入る時期に位置付けられることが確認された。また、古墳群の南側に位置する戸場口山古墳の確認調査により、二重の周堀を持ち、堀幅を含めて75m前後の方墳である可能性が指摘されたことは、この古墳群の終末を考える上で大きな鍵になるであろう。

稲荷山古墳の北側に白山古墳がある。近年この周辺の道路整備に関連した調査で白山2号墳の周堀の一部が掘られ、人物や馬、大刀、靱、鉾など生出塚窯跡から供給されたと思われる埴輪が多く出土している。また、白山古墳もさきたま資料館の測量調査により、50m級の円墳と考えられるようになった。埴輪は持たず、石室は角閃石安山岩を壁材として使用している点などから7世紀前半代に位置付けられている。このことは白山古墳と、稲荷山古墳の北側に広がる小円墳群が忍川を挟んで別の古墳群と見るか、一つの古墳群と見るかの問題とともに、埼玉古墳群の終末の様相を知るのに戸場口山古墳と同様重要な意味を持っていると考えられる。それは、八幡山古墳が今回の試掘・測量調査の結果のように約80mの円墳とすれば、それに匹敵するものとして白山古墳、戸場口山古墳を位置付けることができるからである。

將軍山古墳の数多い副葬品の中に、馬冑と蛇行状鉄器が含まれていた。ほぼ同時期と思われる酒巻14号墳から出土した埴輪に、この蛇行状鉄器を表現した馬があり、その共通性が窺える。また、14号墳の人物埴輪の衣装や、力士像などに当時朝鮮半島と交流があったことが認識され、このことは6世紀後半にこの地域に大きな変動があったことを指摘できる。

埼玉古墳群以外では、若小玉古墳群の中で、地籍図などでしか想定できなかった前方後円墳の一つ三方塚古墳が調査され、密集した小円墳群を伴うことが明らかになった。今後この周辺の調査が進めば数多くの前方後円墳と小円墳群の実態が明らかになるだろう。真名板高山古墳は、測量調査により100mを越える前方後円墳であることが確認されたが、ボーリング調査により約3m墳丘が沈降していること、堀は二重であることが指摘され、高山古墳が単独墳ではなく周辺に埋没した古墳がある可能性が高くなったといえよう。

(斎藤 国夫)

8 南埼玉・北葛飾郡市

南埼玉郡と北葛飾郡は中川低地を挟み対峙した地形を為している。南埼玉郡内の地形は中川・元荒川・綾瀬川などが南北に流れ、これ等の河川により台地は侵食されたため、台地は河川の流路に沿った地形となっている。これらの河川の縁辺の台地上に遺跡の立地がみられる。南埼玉郡の北部に位置する菖蒲町、久喜市、鷲宮町付近では台地が埋没しており、河川の氾濫原と台地との境が明瞭ではないところもある。一方北葛飾郡はかつて千葉県の台地と同一の台地を形成していたが、江戸川の開堀により切り放され、中川低地に面した台地となっている。

南埼玉郡内では3市2町で発見されている。元荒川流域には菖蒲町に3群の古墳群が存在する。栢間古墳群である。夫婦塚古墳を中心とする群、天王山塚古墳を中心とする群、東浦古墳の各群である。総数12基であるが、削平されたものも相当数あると思われる。蓮田市にも3群の古墳群が存在する。すべて削平されており、墳丘を持つものはない。上流より右岸には十三塚古墳、笹原古墳が所在する。左岸には椿山古墳があり、発掘調査により発見されたものである。当市内の古墳に使われた石室の石材はすべて砂岩製であり、市内馬込のローム層下の基盤層に類似する。岩槻市には5基の古墳が確認されている。

中川流域では大宮台地側に2群の古墳が確認されている。宮代町姫宮神社古墳群、春日部市内牧塚内古墳群である。塚内4号墳では下総型の埴輪の検出がある。

北葛飾郡内の古墳は4町で発見されているが、杉戸町に集中しており、目沼・木野川古墳群の2群が形成されている。計28基、現在数11基である。庄和町には向之内古墳ほか計3基が存在するのみである。

(大塚 孝司)

VI 詳細調査の概要

今回の古墳詳細分布調査においては、詳細調査として、全県下の主要古墳の中から合計17か所の古墳を選択して試掘・測量調査を行った。

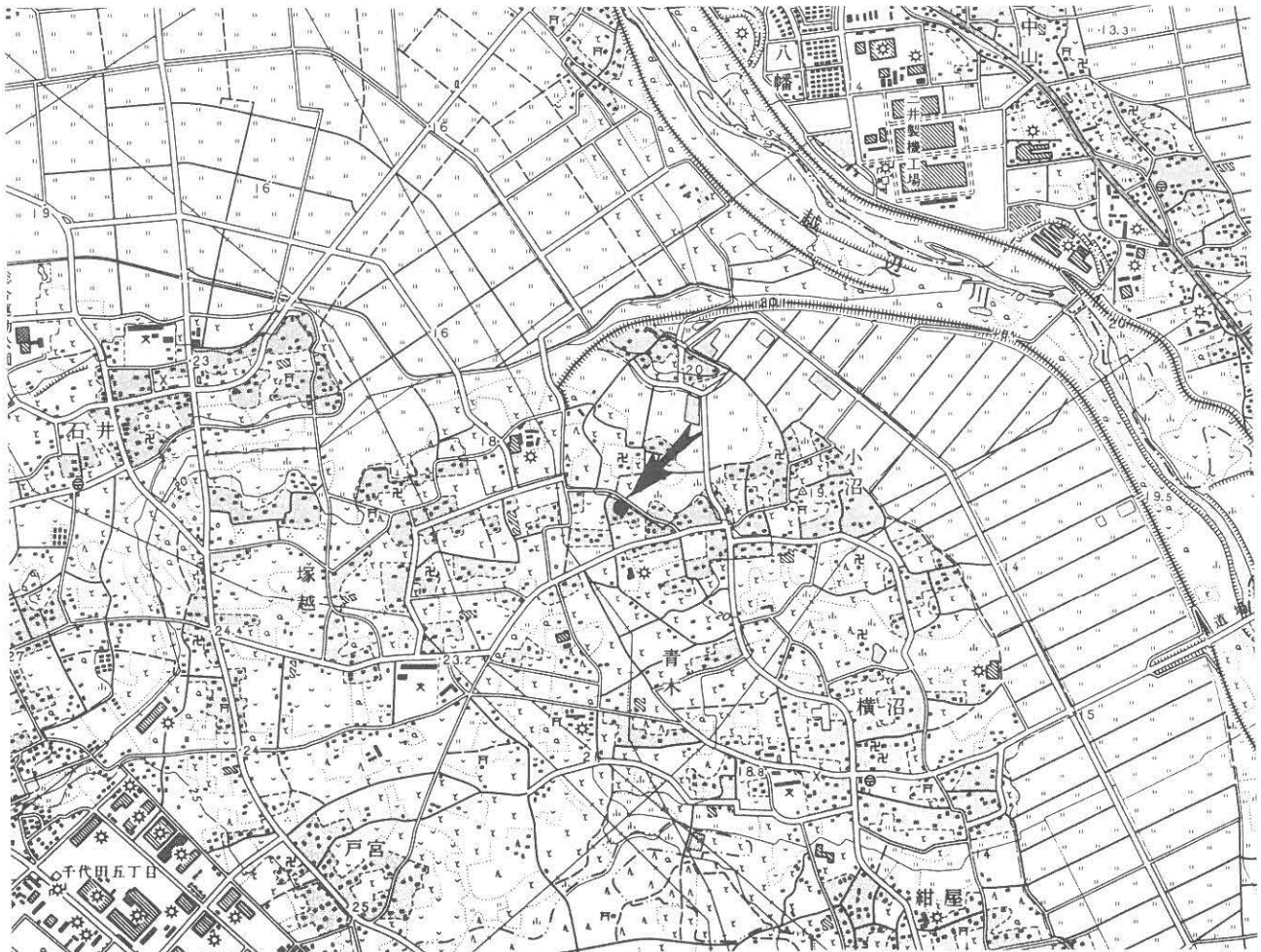
調査は、墳丘測量と試掘坑（トレンチ。以下はすべて「トレンチ」とする）による試掘調査を並行して行い、5～8日間を標準に、延びても14日間を超えない軽微な調査を実施することにした。

測量調査は、①墳丘の中心点を任意に決め、簡易トラバースの設定をする、②この中心点に平板を据え、墳丘全体に標高差20cmないし25cmインターバルの測量点をとる、③縮尺1/100で等高線図を作図する、という方法により行い、各トレンチは遺構・遺物の密度が高いなど必要があった場合には縮尺1/20の平面図を作図した。試掘調査は、墳丘の要所要所にトレンチを設定して、墳丘裾部及び周堀位置を検出することを目標とした。先行して作図した墳丘測量図からトレンチ設定位置をあらかじめ決め、対角位置やくびれ部など墳形の確認が容易になる位置を吟味しながら、最小限の労力で最大限の効果を産むように心がけた。

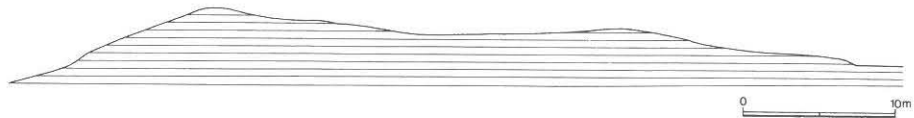
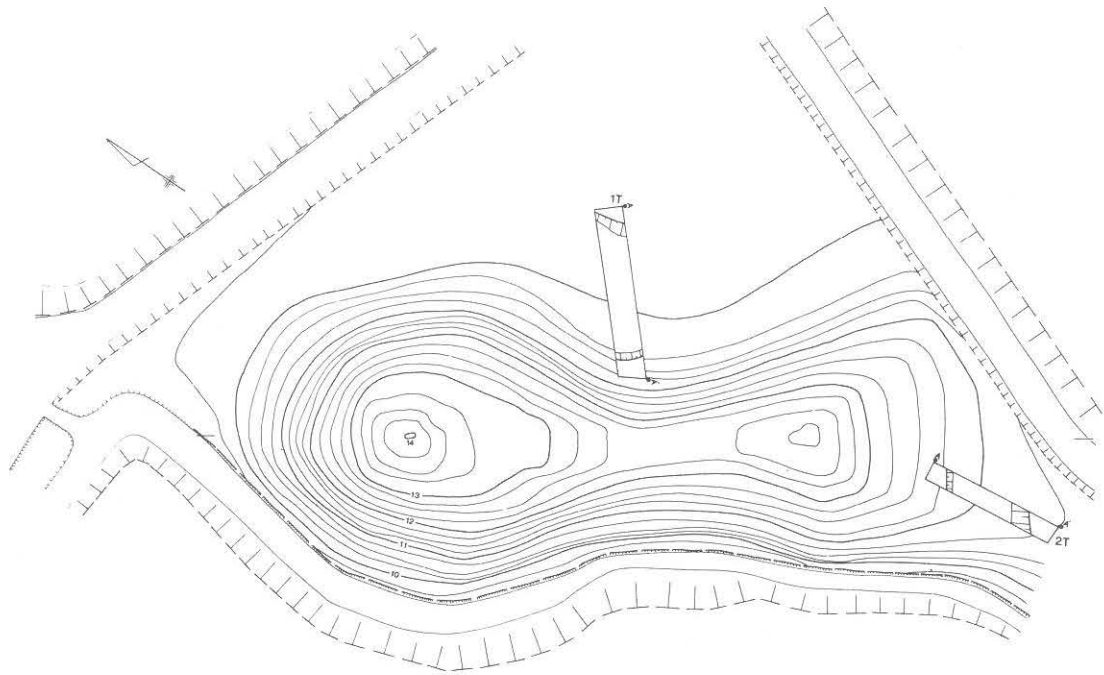
調査時期は、各年度の概況調査終了後の9月以降、秋冬の時期を主体とした。

平成元年度は比企・人間郡市から6か所、平成2年度は秩父・児玉郡市から5か所、平成3年度は北埼玉・南埼玉・北葛飾郡市から3か所、平成4年度は北足立・大里郡市から3か所である。

平成元年度・2年度の調査は調査古墳を多くして、数多くの古墳の実態を究明すべく取り組んだのであるが、実際には各古墳ごとの調査に費やせる日数が5日間前後と少なくなってしまい、調査成果が不十分にならざるをえない状況であった。そこで、平成3年度・4年度は3基を対象とし、各古墳の状況把握のために

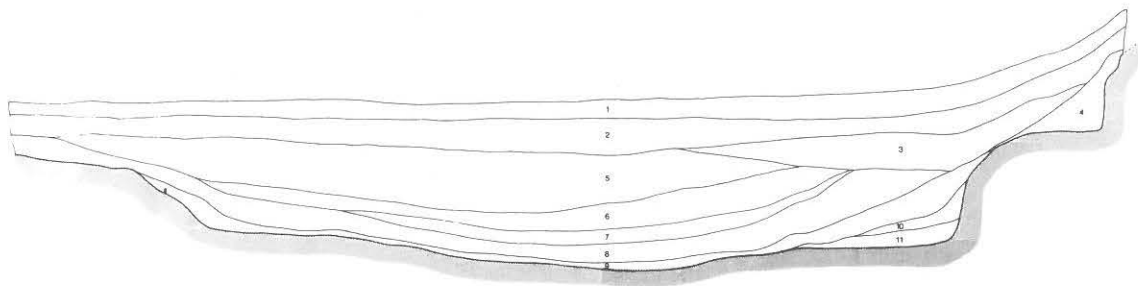


第1図 雷電塚古墳位置図



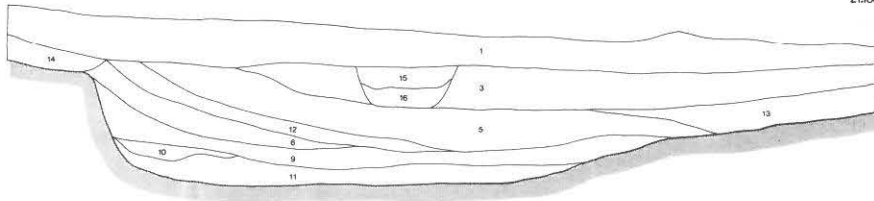
A-1T

A
20.900m



A-2T

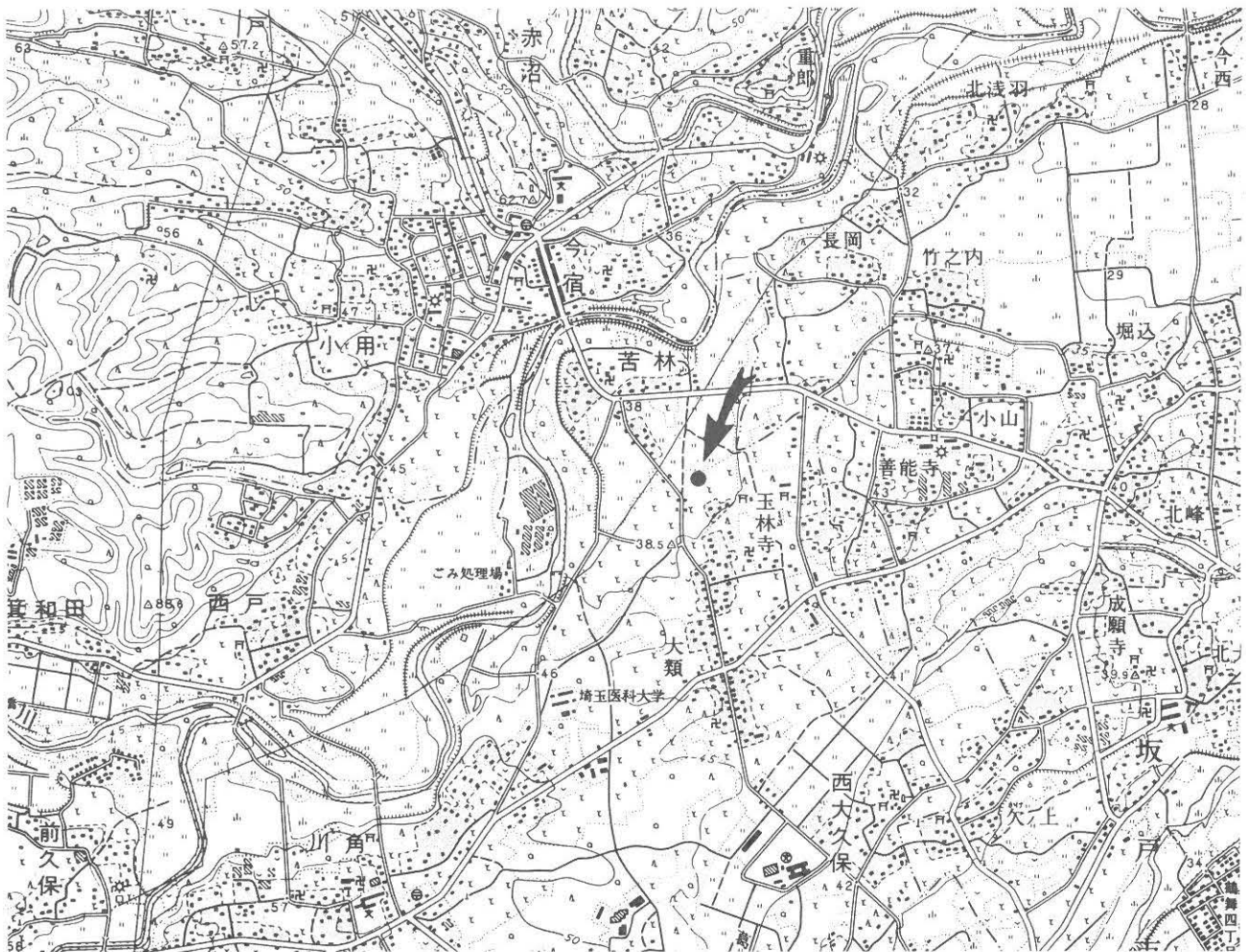
A
21.100m



- | | | | |
|---------|------------------------------|----------|----------------------------|
| 1 茶褐色土 | 粉土状で、しまり弱。 | 9 暗黄褐色土 | ローム土再堆積。しまり弱。 |
| 2 明褐色土 | ローム粒を含む。 | 10 黄褐色土 | ロームブロック・ローム粒主体。しまり強。 |
| 3 暗黄褐色土 | ローム粒・ロームブロック・炭化物・焼土粒を少量含む。 | 11 黄褐色土 | ロームブロック主体。しまり強。 |
| 4 褐色土 | ロームブロックをやや多く含む。 | 12 褐色土 | ローム粒をやや多く含む。しまり弱。 |
| 5 暗褐色土 | ローム粒を多量に含む。 | 13 褐色土 | ロームブロックの小塊を塊状に含む。攪乱土。しまり中。 |
| 6 黒褐色土 | ローム粒をやや多く含む。 | 14 褐色土 | しまり中。 |
| 7 漆黒色土 | しまりやや強。緻密で真っ黒な土。埴輪片を多量に包含する。 | 15 暗褐色土 | 炭の小片・ローム粒を少量含む。しまり中。 |
| 8 黒色土 | ローム粒を多量に含む。埴輪片を多量に包含する。 | 16 炭と焼土層 | 骨片を含む。しまり中。 |

0 2m

第2図 雷電塚古墳測量図



第3図 大類2号墳位置図

十分な調査ができるように調査の方針を変更した。

したがって、個別の古墳の調査の状況については各年度の条件が同じではなく、本章の記述もやや精粗のばらつきがあることを最初にお断わりしておきたい。

遺物と調査記録類の整理作業は、調査終了後随時行ったが、遺物実測・写真撮影・図版作成以下の編集作業は5年度に行っている。

以下に調査年次順に調査概要を記述してみたい。必ずしも調査順ではないので、各古墳の項には調査年月日を付け加えておいた。出土遺物については別項を設け、調査概要の後に記述した。

1 遺構の概要

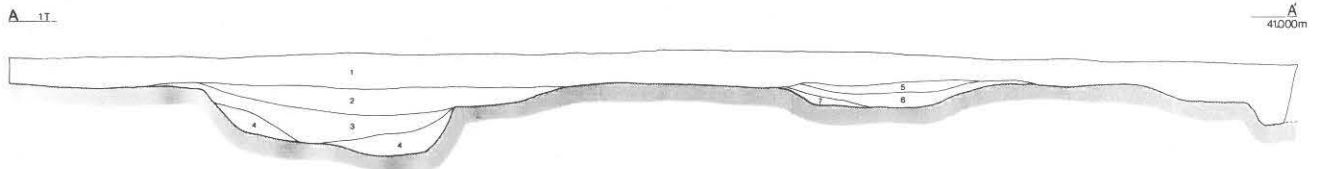
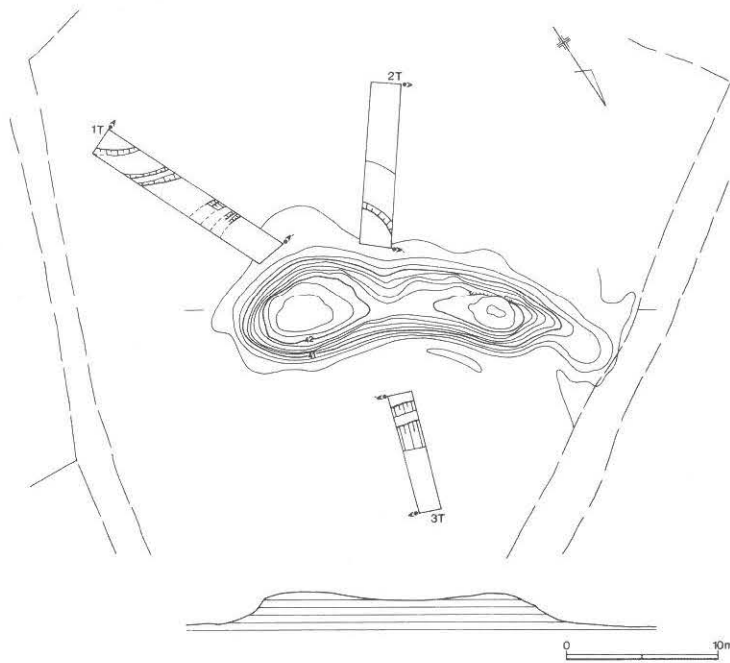
(1) 雷電塚古墳（坂戸市）

所在地 坂戸市大字小沼 269

調査年月日 平成2年1月10日（水）～平成2年1月19日（金）（5日間）

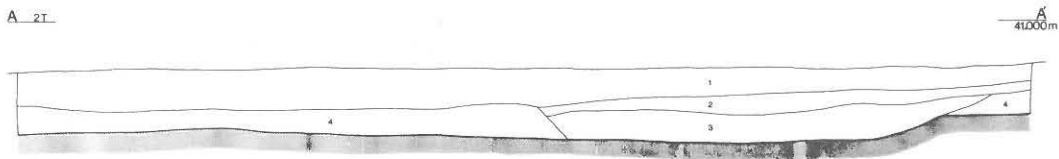
立地・現況 雷電塚古墳（雷電塚1号墳）は、東武東上線坂戸駅の東方約2.7kmの、坂戸台地の末端に位置する。台地の縁からはやや奥まったところに占地し、北側に越辺川の沖積地を望む。周辺の標高は18mである。周囲には2基の古墳が所在しており、雷電塚古墳群と呼ばれている。昭和31年には、この地域を代表する前方後円墳であることにより、県指定史跡となっている。

墳丘上及び古墳の東側は山林、墳丘の西側は畑地となっており、保存状態は全体的に良好である。後円部墳頂には小祠がある。墳丘西側裾部は、畑地と山林（墳丘）の境目に深い根切り溝が掘られており、若干削られていた。現在の墳丘の規模は、全長47m、後円部径25.5m、後円部高4.5m、前方部幅23m、前方部高3.25mを測る。前方部が比較的発達した形態である。



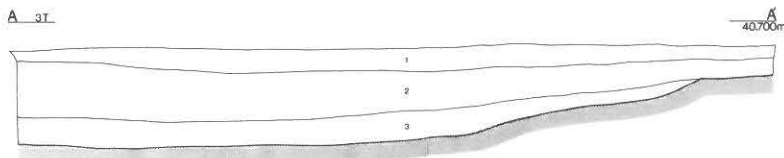
第1トレンチ

- | | | |
|---|-------|--------------------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 耕作土。しまり強。 |
| 2 | 暗褐色土 | しまり強。 |
| 3 | 褐色土 | ロームブロックを多量、黒褐色土ブロックを少量含む。しまり中。 |
| 4 | 黒褐色土 | ロームブロックを少量含む。しまり中。 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム粒・焼土粒・炭化物粒を少量含む。しまりやや強。 |
| 6 | 暗黄褐色土 | ローム粒を多量に含む。しまり中。 |
| 7 | 黄褐色土 | ロームブロック主体の崩落土。しまり中。 |



第2トレンチ

- | | | |
|---|------|----------------------------|
| 1 | 褐色土 | 耕作土。 |
| 2 | 茶褐色土 | 細礫・土器細片を含む。 |
| 3 | 黒褐色土 | 小礫・土器片を含む。周堀内堆積土。 |
| 4 | 暗褐色土 | 小礫・土器片を含む。 |
| 5 | 明褐色土 | やや粘性あり。小礫を含む。褐色のローム質土。基底層。 |

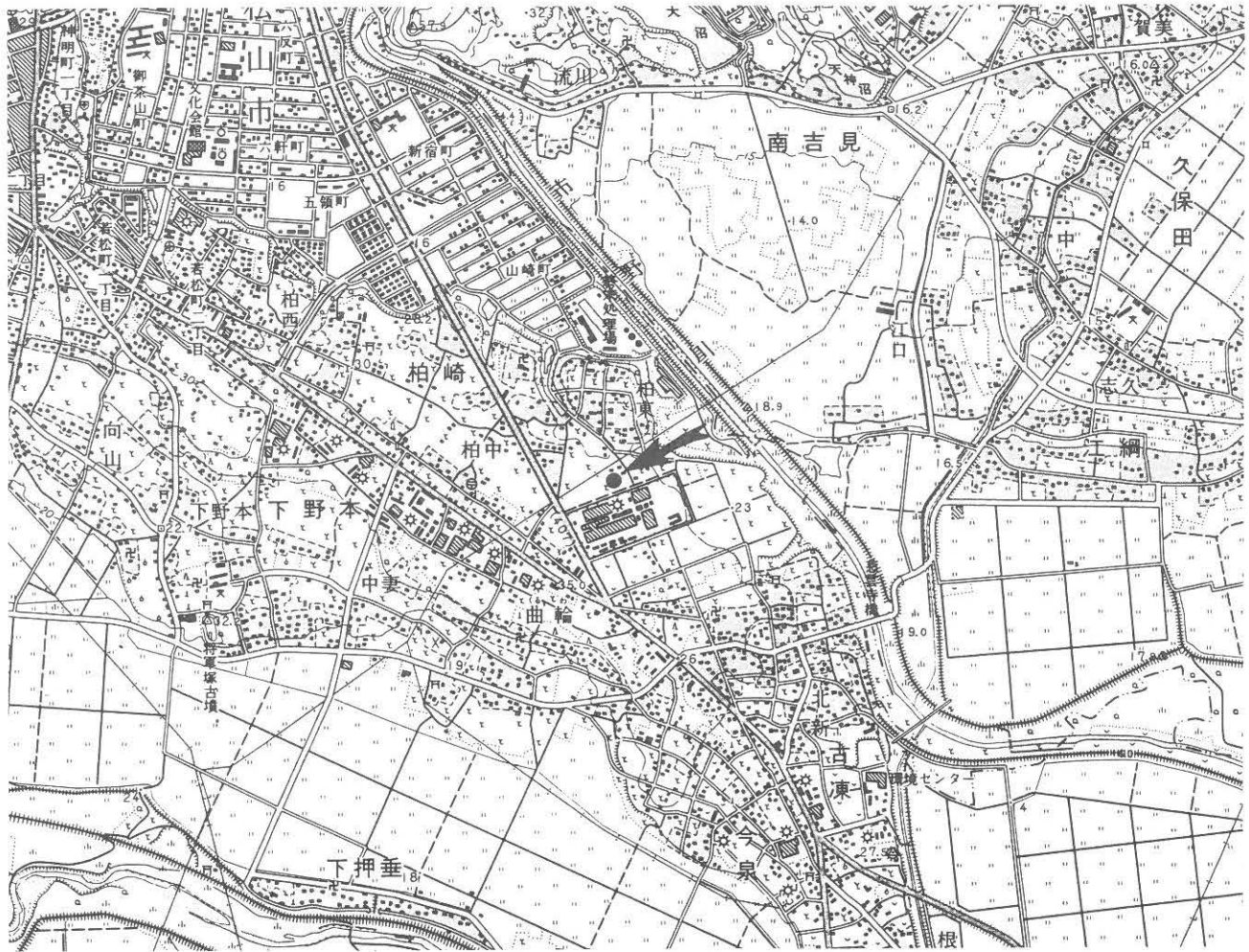


第3トレンチ

- | | | |
|---|-------|-----------------------------------|
| 1 | 茶褐色土 | ローム粒・細礫を少量含む。しまり中。 |
| 2 | 暗黄褐色土 | ローム粒・炭化物粒・小礫をやや多く含む。しまり強。 |
| 3 | 暗褐色土 | 粘性あり。墳丘から崩落した大礫、埴輪片を含む。しまり中。粘性あり。 |

0 2m

第4図 大類2号墳測量図



第5図 天神山古墳位置図

調査の概要 調査は、墳丘東側くびれ部に第1トレンチ、前方部前面のやや西寄りの部分に第2トレンチを設定して進めた。第1トレンチは幅2m、長さ11.5mで、幅9.8mの周堀が検出された。墳丘裾部は垂直に近い立ち上がりであり、周堀外側立ち上がり部は傾斜がやや緩かった。第2トレンチでも、周堀を検出したが、くびれ部に比べてやや幅狭になり、幅5.5mであった。深さもやや浅く、墳丘側で1.2mであった。外側立ち上がり部の傾斜は、くびれ部以上に緩くなっていた。

2本のトレンチからの判断ではあるが、この古墳の周堀は墳丘相似形と考えられ、後円部全体と前方部側面はほぼ同じ幅でめぐり、前方部前面をやや幅狭にしていたものであろう。

出土遺物は大半がくびれ部の周堀内に転落していたものである。多量の円筒埴輪片のほか、朝顔形埴輪片、形象埴輪片、須恵器片がある。

築造時期は、出土した埴輪の特徴や墳形から6世紀中葉頃と推定される。

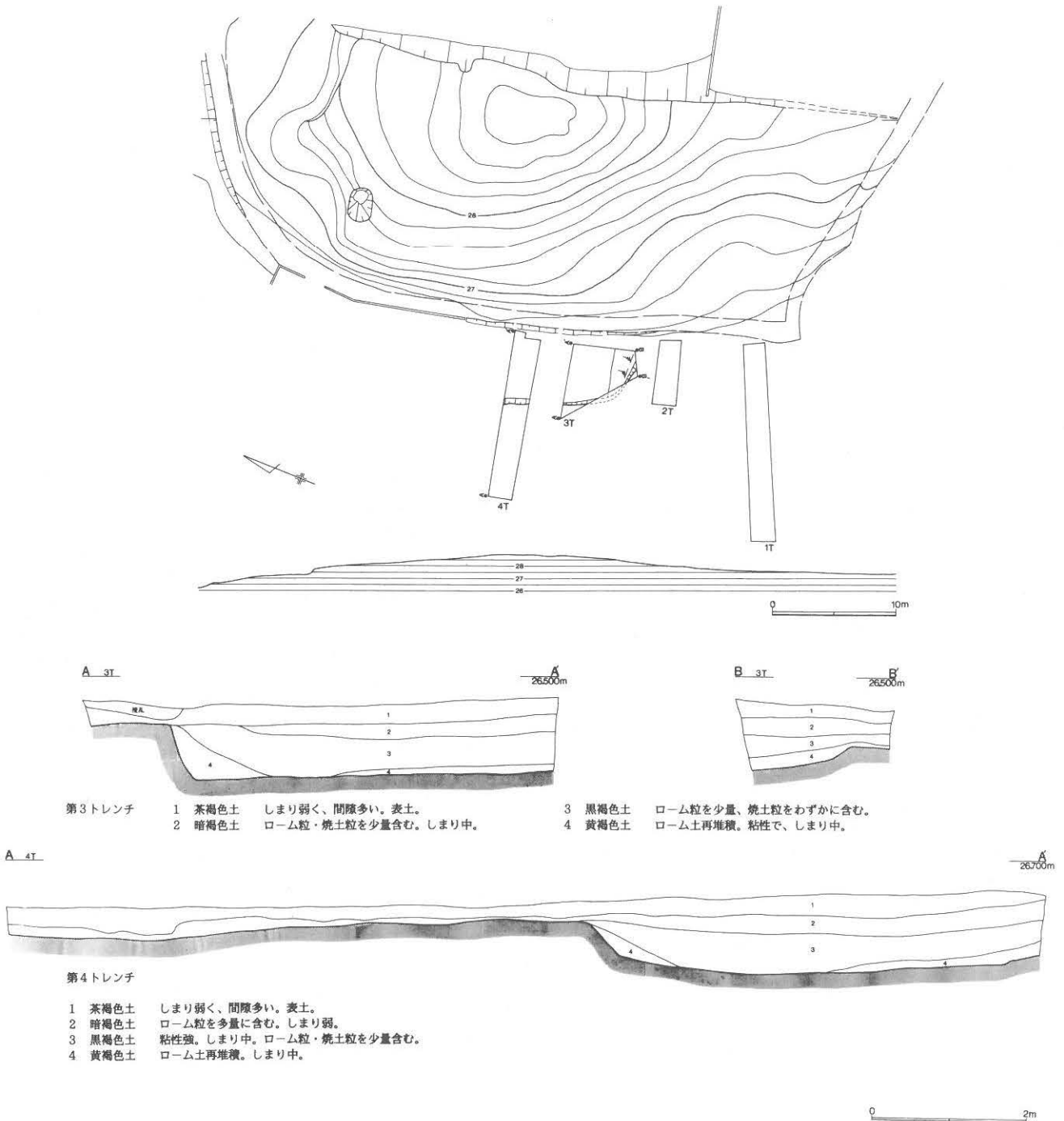
(2) 大類2号墳（毛呂山町）

所在地 入間郡毛呂山町大字川角字塚原2219

調査年月日 平成元年12月11日（月）～平成元年12月18日（月）（5日間）

立地・現況 大類2号墳は、越辺川右岸の坂戸台地上に所在する。台地西側には5m下がった段丘面が広がっている。台地は広い平坦地が続き、毛呂山町から坂戸市にかけて数多くの古墳が分布している。市町境を越えた全体の名称を苦林古墳群と呼んでいる。坂戸市側は前方後円墳3基、円墳11基の合計14基で構成される塚原古墳群、毛呂山町側は前方後円墳2基、円墳39基の合計41基からなる大類古墳群である。大類2号墳は、市町境に近く、古墳群全体の中央部に位置する前方後円墳である。

古墳の周囲はすべて畑地で、墳丘の周りは開墾され、前方部と後円部の中心が残存するのみで、本来の墳

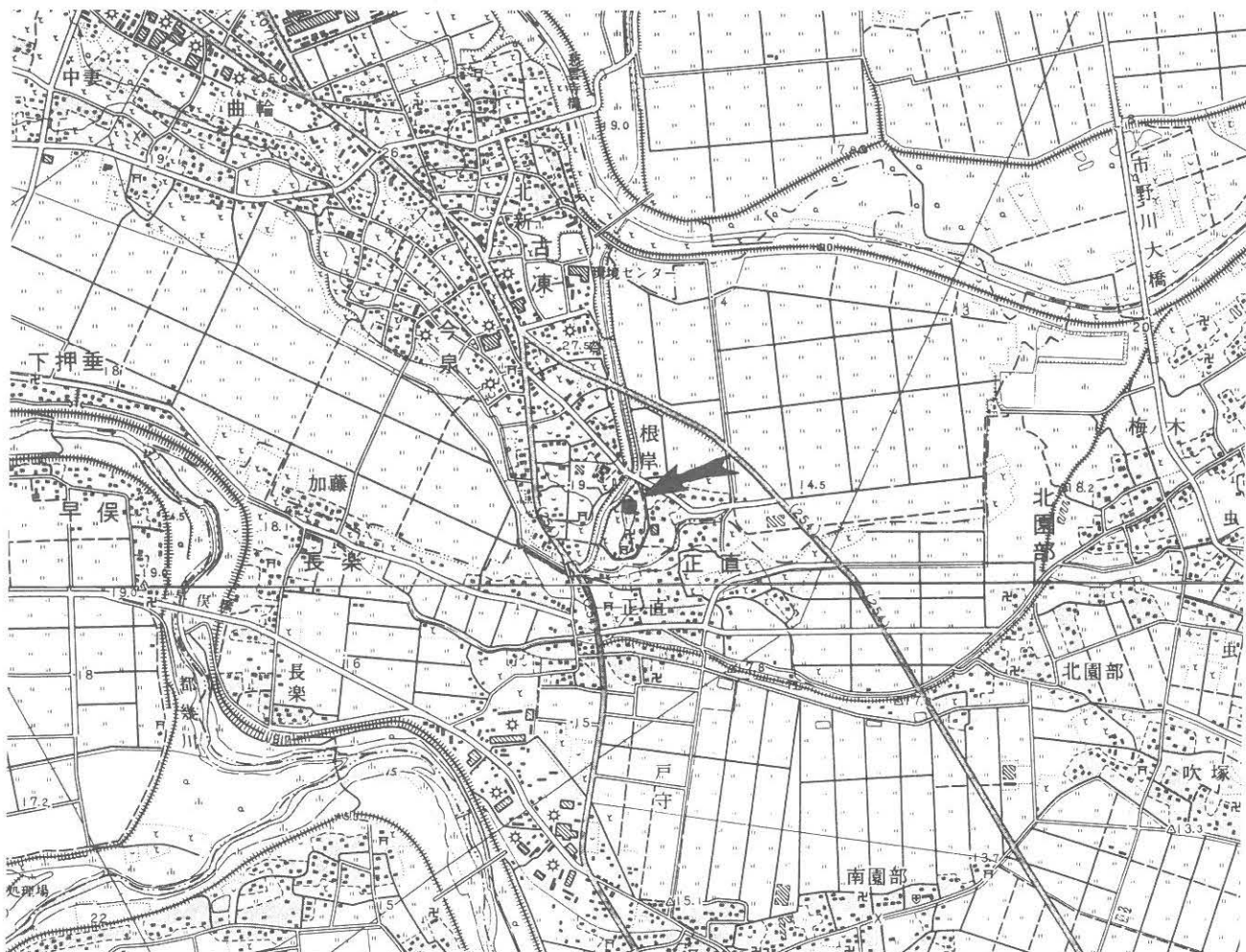


第6図 天神山古墳測量図

丘形態が想像できないほど変形していた。現況では、墳丘の全長は26m、幅8.5m、後円部の高さ2.2mを測る。墳丘には多量の川原石が堆積しており、葺石で覆われていた可能性が高い。

調査の概要 東西に長い墳丘に対して、墳丘東端付近で南方方向に第1トレンチ、南側くびれ部に第2トレンチ、北側くびれ部に第3トレンチを設定し、調査を実施した。墳丘西側にはトレンチを設けられなかったため、正確な墳丘全長は確認できなかった。幅2m、長さ11mの第1トレンチでは幅2.6mの周堀が確認された。トレンチの南部では、隣接する円墳の周堀と思われる溝も検出されている。第2トレンチでは、基盤層がローム層でなく暗褐色土層であるため、周堀自体ははっきりしなかったが、土層断面から3m程度であることが予想された。第3トレンチでは、掘り込みが最も深く、調査範囲内には周堀の外側立ち上がりが納まらず、幅7.5m以上になる。

発見された遺物は、第1トレンチで土師器片が出土したほか、第3トレンチを中心に埴輪が多量に出土し



第7図 根岸稲荷神社古墳位置図

ており、須恵器大甕片等も見られた。

築造時期は、出土した土師器杯の特徴から6世紀前葉から中葉頃と考えられる。

(3) 天神山古墳（東松山市）

所在地 東松山市柏崎134-12

調査年月日 平成2年3月8日（木）～平成2年3月19日（月）（6日間）

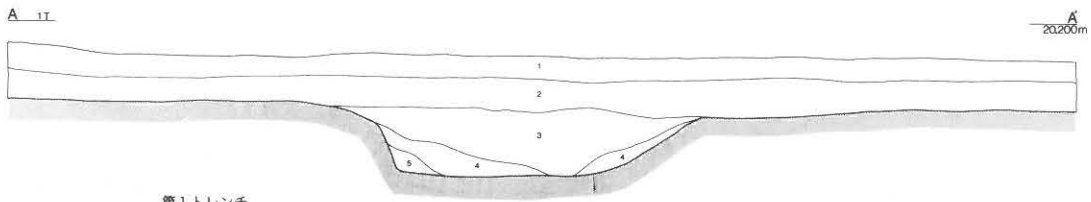
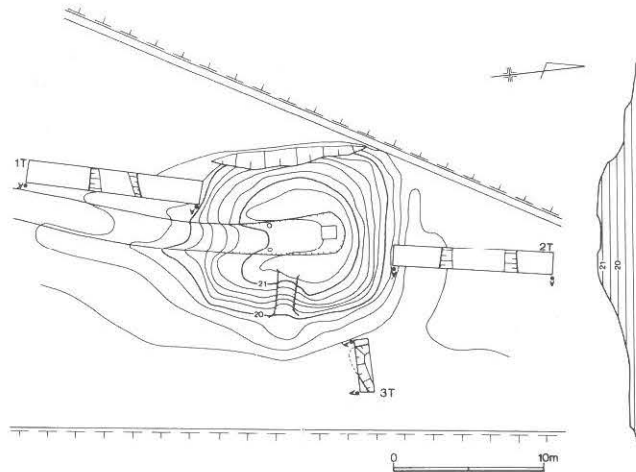
立地・現況 天神山古墳は、松山台地のうち東方に長く張り出す舌状台地上に位置し、台地中央部に占地する前方後円墳である。北に市の川の沖積地を望む。古墳周辺の標高は26mである。天神山古墳の周囲には、全長62mの前方後円墳である、おくま山古墳のほか、円墳15基が現存しており、柏崎古墳群と呼ばれている。工場建設などのために、消滅した古墳も多い。

古墳は墳丘の東半部が削平され、住宅が建てられている。主軸方向はほぼ南北であり、全長約57mを測る。北側が高く、南側が低平で、くびれ部に相当する部分があるため前方後円形の墳形を想定されている。墳丘の高さは現存高で約4mであるが、かつては2倍の高さがあったという、近隣住民の記憶もある。

調査の概要 調査は、西側平坦地に4本のトレンチを設定し、西側くびれ部付近の周堀と墳丘裾部の形態確認を目的に実施した。しかしながら、この古墳には現状の墳丘裾部まわりに生活道路が一周しており、それを壊して掘ることが不可能であるため、結果的には墳丘裾部と周堀の内側立ち上がり部を確認することができなかった。4本のトレンチは南から1・2・3・4という順序であった。くびれ部よりやや南寄りに第1トレンチ、くびれ部のやや北寄りに第2トレンチ、後円部西側に第3・4トレンチという配置である。

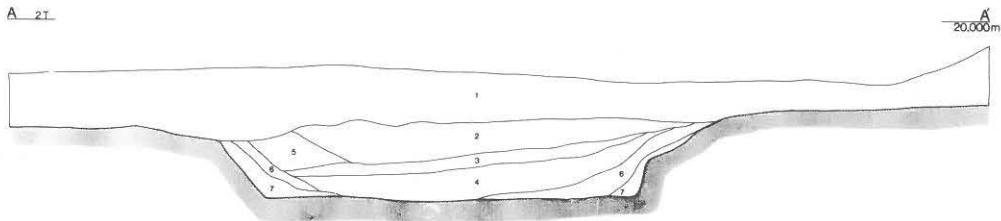
周堀は第3・4トレンチで確認されたが、外側立ち上がり部の形態を確認するに留まった。このため、墳丘形態・規模を明らかにできなかったわけではない。

第3・4トレンチで確認された周堀外側立ち上がり部はくびれ部付近でほぼ直角に内側方向に屈曲するこ



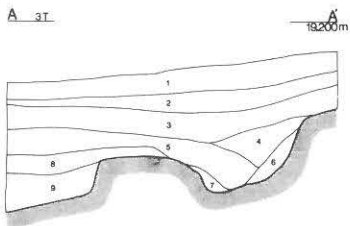
第1トレンチ

- | | |
|--------|----------------------|
| 1 表土 | 竹の根が張る。 |
| 2 暗褐色土 | |
| 3 黒褐色土 | 有機質土層。粘性に欠ける。 |
| 4 赤褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 5 褐色土 | ローム粒を多量に含む。サラサラした感じ。 |



第2トレンチ

- | | |
|--------|-----------------------------|
| 1 表土 | 竹の根多い。 |
| 2 黒褐色土 | 有機質土層。 |
| 3 暗褐色土 | |
| 4 暗褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 5 褐色土 | ローム粒をわずかに含む。 |
| 6 茶褐色土 | ローム粒を含む。 |
| 7 褐色土 | 壁の立ち上がり部分の崩落土。ローム微細粒を多量に含む。 |



第3トレンチ

- | | |
|---------|--------------------|
| 1 茶褐色土 | 表土。腐食土層でしまり悪い。 |
| 2 明茶褐色土 | しまり悪い。 |
| 3 暗黄褐色土 | ローム粒を少量含む。 |
| 4 褐色土 | ローム粒を少量含む。 |
| 5 暗褐色土 | しまり中。 |
| 6 黄褐色土 | ローム質盛土崩落土。しまり強。 |
| 7 暗黄褐色土 | ローム粒をやや多量に含む。しまり弱。 |
| 8 灰黄褐色土 | ローム粒を少量含む。しまり中。 |
| 9 暗灰褐色土 | しまり特に強。旧表土か。 |

0 2m

第8図 根岸稲荷神社古墳測量図



第9図 天神山横穴墓群位置図

とが確認され、後円部西側においても直線的に移行していく形態であることが判明した。つまり、墳丘相似形周堀が、四角い墳丘のまわりに掘られていたと考えることができる。このため従来「後円部」と考えていた部分が「後方部」になり、墳形が前方後方墳になる可能性が高くなった。

同じ柏崎古墳群内の前方後円墳であるおくま山古墳が盾形に近い馬蹄形の周堀を有することも、天神山古墳を前方後方墳と考える傍証にすることができよう。

出土遺物は、縄文土器片、土師器壺片、坏片等であった。埴輪は検出されていない。かつての出土遺物としては、昭和初期に土取りされたときに石室状の施設が見つかり、彷彿内行花文鏡の破片と玉類が出土している。

築造時期は、土師器壺の特徴や鏡などから、4世紀後葉に遡ると推測される。

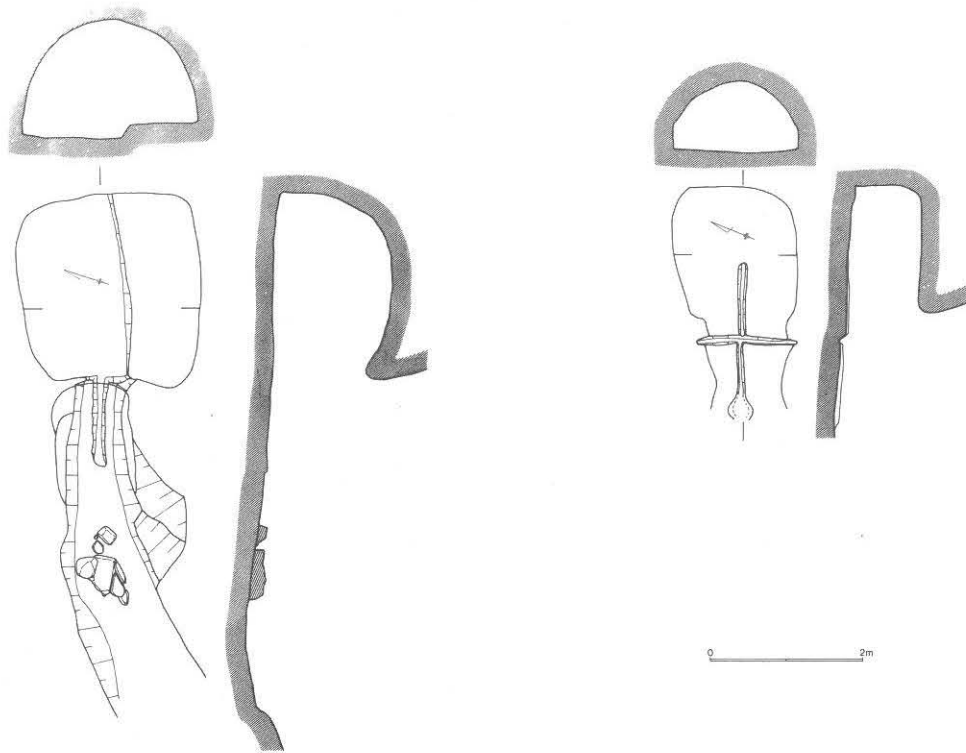
(4) 根岸稲荷神社古墳(東松山市)

所在地 東松山市大字古凍字根岸1156他

調査年月日 平成2年2月13日(火)～平成2年2月23日(金)(5日間)

立地・現況 根岸稲荷神社古墳は、松山台地の南東部の端部、新江川を望む台地上にあり、墳丘裾部の標高19.4～19.6mである。東に川島町の低地帯を遠望することができる位置に占地している。川を挟んで対岸の北西方向には、円墳38基からなる古凍古墳群が広く分布している。

現況は神社の敷地になっており、墳頂部に根岸稲荷神社の社殿と参道がある。これらのため、やや削られているようである。東側も古い参道の痕跡が残る。現存の墳丘形態は方墳状を呈し、東側に造出し状のわずかな盛り上がりがある。西側は墳丘裾部ぎりぎりまで新江川の河川改修工事で削られ、断崖状になっている。規模は一辺15m、高さ1.6mを測る。



第10図 天神山横穴墓群測量図(左1号墓・右2号墓)

調査の概要 調査は、墳丘から周囲の平坦地にかけるように、南側に第1トレンチ、北側に第2トレンチ、東側に第3トレンチの3本のトレンチを設定した。第1トレンチは、幅1.5m、長さ11.5mで、墳丘裾部から4m離れた位置に周堀が検出された。周堀の幅は上幅3.5m、下幅2.3m、遺構確認面からの深さ0.8mである。第2トレンチは幅1.5m、長さ10.5mで、墳丘裾部から2.3m離れた位置に周堀が検出された。この部分では周堀の上幅は5m、下幅3.5m、遺構確認面からの深さ0.9mである。墳丘東側の第3トレンチは造出し状盛り上がりを調査する目的で設定した。幅1m、長さ3.5mである。ここでは周堀の立ち上がり部が墳丘内側に向いたものと南向きのものが確認され、くびれ部であることが判明した。

これらの調査の結果、この古墳は後方部の一辺約20m、くびれ部幅7m、前方部の長さ5m以上の、小型の前方後方墳であることが推定されることになった。あくまで推測の域を出ないが、前方部は通路状になって前面が閉じない形態になる可能性もある。

周堀からの出土遺物は、弥生土器系統の壺と土師器壺が共伴しており、興味深い資料である。

根岸稲荷神社古墳の築造時期は、前方後方墳の墳形と土師器壺の特徴などから4世紀前葉頃と考えることができる。

(5) 天神山横穴墓群(滑川町)

所在地 比企郡滑川町大字福田字中在家3218-3ほか

調査年月日 平成2年3月1日(木)～平成2年3月8日(木)(6日間)

立地・現況 天神山横穴墓群は荒川大橋の南方約2kmの熊谷東松山有料道路沿いに位置し、谷田を望む低位丘陵の南西斜面に分布している。丘陵麓の標高は52m、最高所の標高68.9mである。調査時に開口していた横穴墓は1基であり、玄室の規模も大きく、棺台が設けられていた。これを1号横穴墓とした。1号横穴墓の南東側は比較的丘陵の傾斜が緩やかで、表面が土壌に覆われているが、北西側は急で、砂質泥岩の基盤層



第11図 山の根古墳位置図

の露出する部分も認められた。

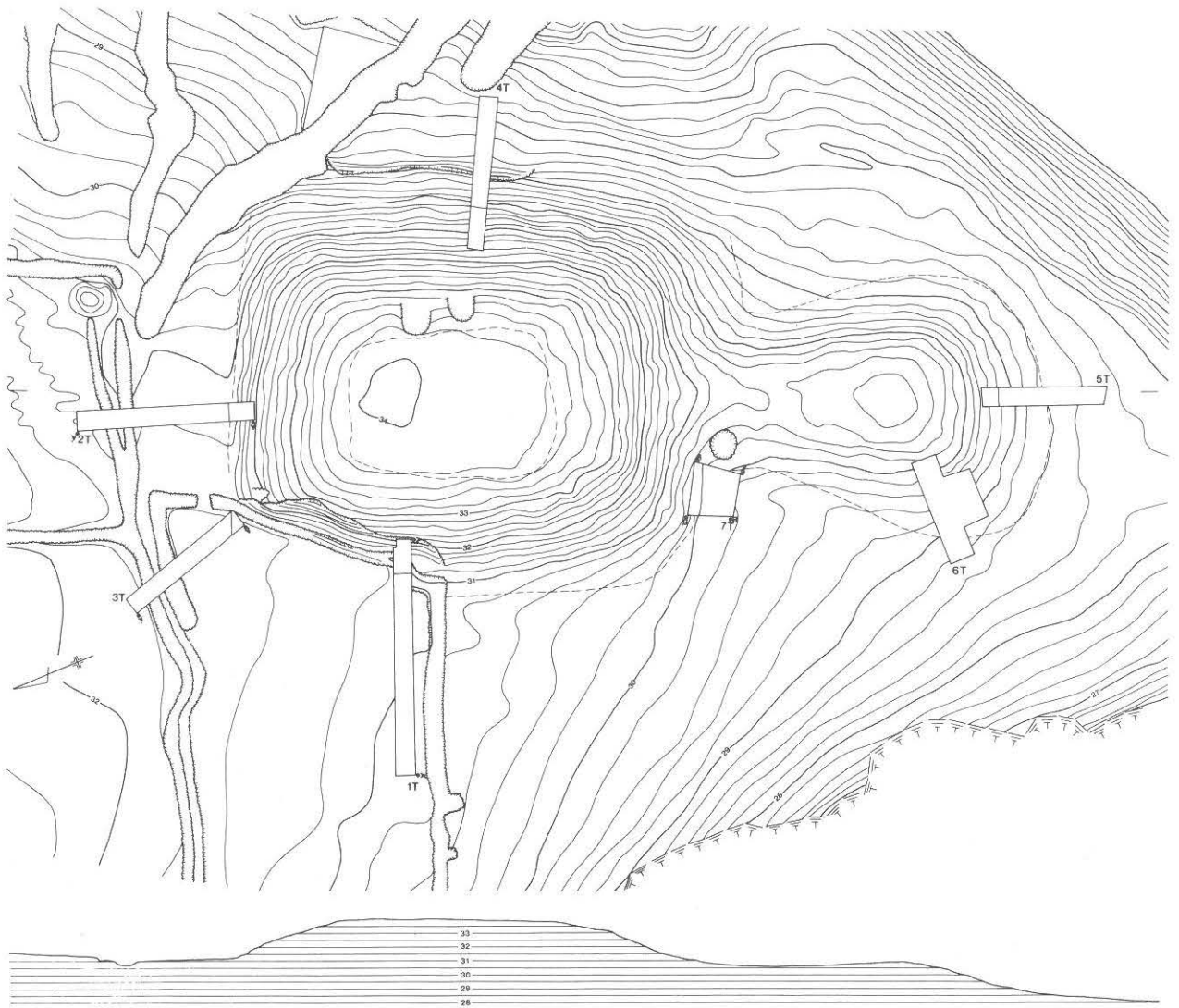
調査の概要 この調査においては、当初新規の横穴墓を発見することを目的とし、1号横穴墓の南東傾斜面の中腹に幅2m、長さ15mのトレンチを設定したが、砂質泥岩の基盤層の検出に留まり、横穴墓は発見されなかった。

このため、かつて開口していたが、戦後埋め戻しをした横穴墓があるとの地元住民の情報に基づいて、1号横穴墓の北西約16mの丘陵麓部の調査を実施した。その結果、比較的小規模な横穴墓が1基検出された。これを2号横穴墓と呼んだ。玄室の平面形は胴張り長方形で、幅1.64m、長さ1.98mを測る。天井部はカマボコ形を呈し、玄門部には閉塞石をはめこんだと推定される溝が掘られていた。羨道部の平面形はまったくびれてから開く形態をとり、最小幅0.68m、長さ1mである。玄室の中央部から羨道部の中軸線上には、排水溝と考えられる溝が掘られており、玄室・羨道の床面も外側に向けて傾斜をもたせる配慮が見られた。

1号横穴墓は玄室内に土砂が再堆積していた。この横穴墓については玄室内を清掃し、全体の実測図を作成することを目的に調査を行った。その際、羨道部と墓道がこの時点で確認されているよりも外側まで続いていることが判明したので、羨道部・墓道の発掘調査も合わせて実施した。玄室の平面形は胴張り方形で、幅・長さともに2.44mを測る。玄門側の壁面は内湾している。玄室の左側壁に接して、掘り残しの棺台が設けられていた。玄室の天井部は2号横穴墓と異なって、アーチ形を呈し、中央部が最も高く、高さ1.56mを測る。羨道部は下端幅0.44mと狭く、中心に排水溝が掘られている。羨道部の前方には南側にやや屈曲する形態の墓道が設けられており、羨道部と墓道の境界には閉塞石がわずかに残っていた。

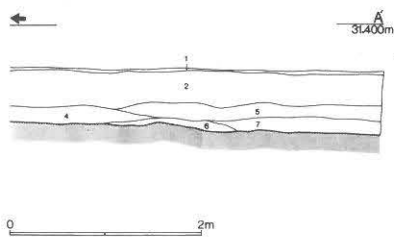
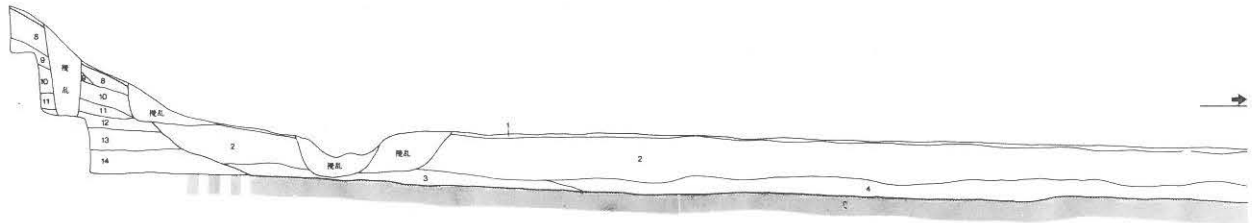
また、2号横穴墓の北西10mの地点にもう1基の横穴墓が閉塞状態で確認された。これを3号横穴墓と呼んだ。3号横穴墓は、今後の保存を考えて、これ以上の調査を控えることにした。

1・2号横穴墓は、双方とも盗掘されていたため、調査時の玄室内の遺物は皆無であった。1号横穴墓の



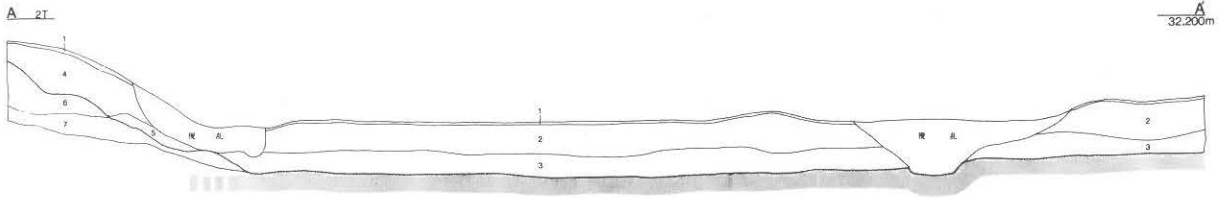
A 1T

32800m



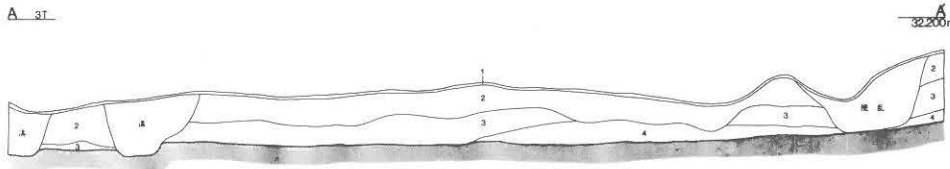
- 1 腐食土
- 2 茶褐色土
- 3 褐色土
- 4 黒褐色土 有機質を含む。
- 5 暗褐色土
- 6 黒褐色土
- 7 暗褐色土 ローム土・粘土をやや多量に含む。
- 8 黄褐色土 粘土を多量に含む。
- 9 褐色土
- 10 黄褐色土と地山粘土の互層
- 11 黄褐色土 粘土をやや多量に含む。
- 12 黄褐色土
- 13 黒褐色土
- 14 暗褐色土 地山。

第12図 山の根古墳測量図(1)



第2トレンチ

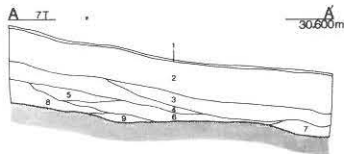
- | | | |
|--------|--------|---------------|
| 1 表土 | 5 褐色土 | やや黄色味を帯びる。 |
| 2 茶褐色土 | 6 茶褐色土 | やや粘質で、しまりがよい。 |
| 3 褐色土 | 7 暗褐色土 | 硬くしまっている。 |
| 4 茶褐色土 | | |
- やや白味を帯びる。地山の粘土を含む。
軟質の流出土。しまりなく、間隙大きい。



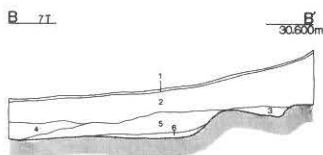
第3トレンチ

- | | |
|--------|---------|
| 1 表土層 | 腐食あり。 |
| 2 茶褐色土 | |
| 3 褐色土 | 粘質あり。 |
| 4 暗褐色土 | 有機質を含む。 |

第7トレンチ東壁

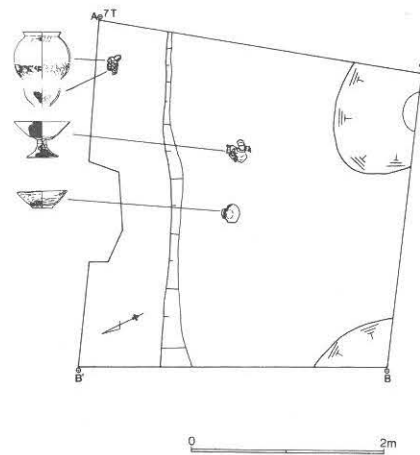


- | | |
|---------|----------------------------------|
| 1 表土 | |
| 2 茶褐色土 | 黒色マンガン粒をごく少量含む。 |
| 3 暗茶褐色土 | 黒色マンガン粒を少量含む。2より硬く粘性強。 |
| 4 暗茶褐色土 | 黒色マンガン粒を少量含む。3より硬く粘性強。 |
| 5 明茶褐色土 | 地山粘土ブロックをやや多量に含む。4より硬く粘性強。 |
| 6 明褐色土 | 地山粘土ブロックを多量に含む。5より硬く粘性強。 |
| 7 黒褐色土 | マンガン粒・粘土ブロックを少量含む。6より硬いが粘性に欠ける。 |
| 8 黒褐色土 | マンガン粒・粘土ブロックを少量含む。6より硬いが粘性に欠ける。 |
| 9 明褐色土 | 地山粘土ブロックまたはマンガン粒を多量に含む。6より硬く粘性強。 |



第7トレンチ西壁

- | | |
|--------|--------------------------------|
| 1 表土 | |
| 2 茶褐色土 | 黒色マンガン粒を若干含む。軟らかい。 |
| 3 黒褐色土 | マンガン粒を若干含む。硬くよくしまっている。 |
| 4 黒褐色土 | マンガン粒を多量に含む。硬くよくしまっている。粘質。 |
| 5 黒褐色土 | マンガン粒を多量に含む。硬くよくしまっている。4より粘性強。 |
| 6 明褐色土 | 地山の粘土粒を多量に含む。軟らかくしまりよい。5より粘性強。 |



第13図 山の根古墳測量図(2)

閉塞石付近から須恵器大甕の小片1点を検出したのが唯一の出土遺物であり、築造時期を推定することはできない。

(6) 山の根古墳(吉見町)

所在地 比企郡吉見町大字久米田五の耕地746ほか

調査年月日 平成2年1月29日(月)~1990年2月13日(月)(8日間)

立地・現況 山の根古墳は吉見丘陵から派生する尾根上にある。尾根の先端部に前方部を向けて築かれている。この古墳から北西に35mの位置には一辺25mの方墳である山の上2号墳がある。さらにもう1基の円墳



第14図 狐塚古墳位置図

とともに3基で構成される山の上古墳群（山の根古墳群）の主墳である。

墳丘の保存状態は良好で、前方後方形の墳形をよく留めている。谷側にあたる後方部東墳丘部は自然の傾斜面を削り出しているほか、前方部も尾根先端の地形を利用して築造されている。

調査の概要 調査は、後方部の西に第1トレンチ、北に第2トレンチ、北西隅角に第3トレンチ、東に第4トレンチ、前方部前面に第5トレンチ、南西隅角に第6トレンチ、西側くびれ部に第7トレンチを設定し、墳丘形態及び周堀の確認を行った。古墳の東側は丘陵斜面であるため、最初から周堀は確認されることが予想されたが、墳丘西側の平坦面においても周堀は確認されなかった。西側平坦面も、墳丘の盛土を得るために白色粘土層まで削り出した地山整形面であることが明らかとなった。

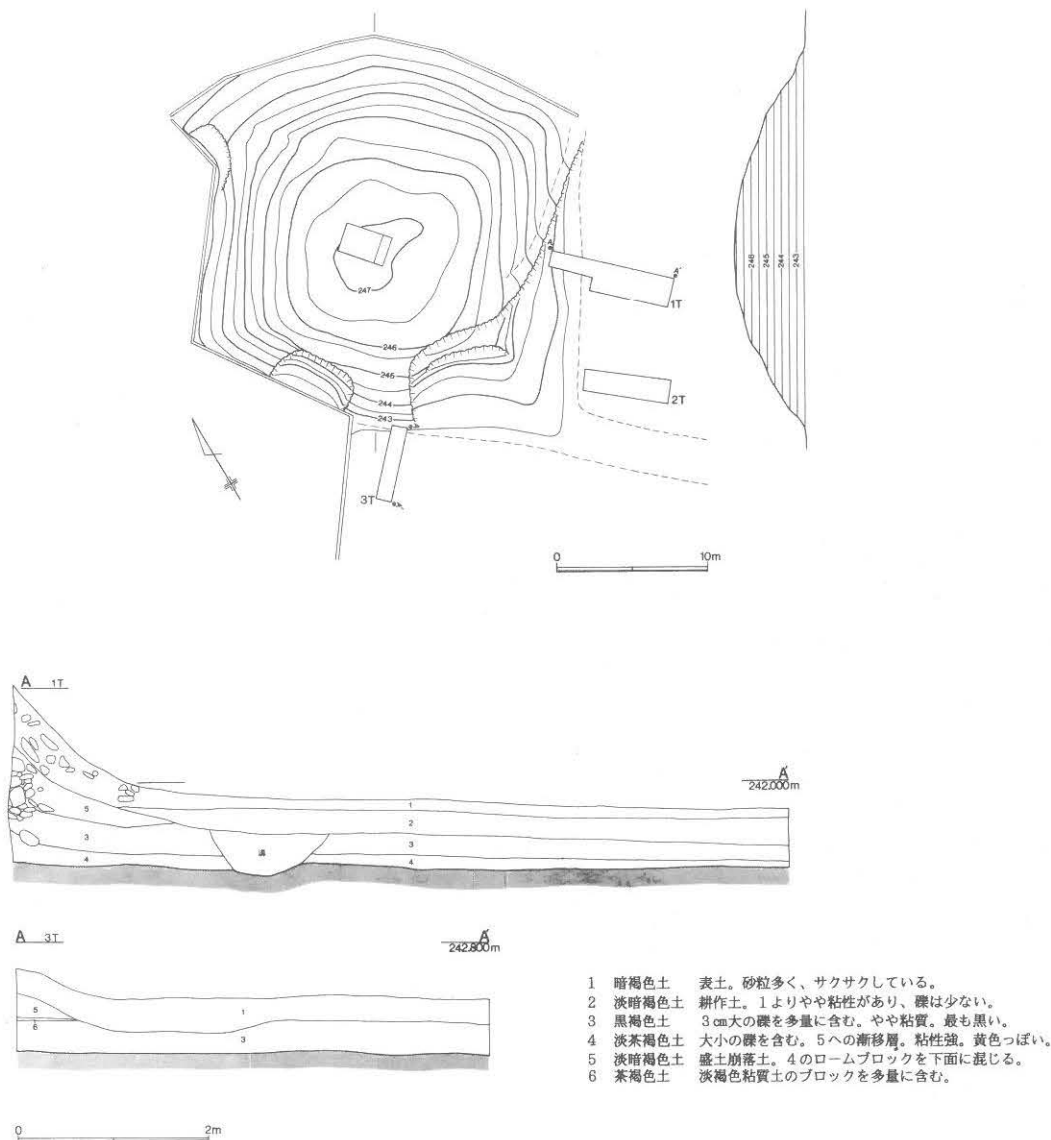
西側くびれ部に設けた第7トレンチでは、後方部の墳丘裾ラインが直線的に検出され、これに沿ってテラス状の平坦面があった。この部分から墳丘外の地山面にかけて、かなりの遺物が検出された。

第6トレンチ以外では墳丘裾部の位置を確認することができたので、古墳の形態・規模は不十分ながら推定することができた。測量図から計測すると、主軸方向の全長は54.8m、後方部長33.6m、幅26.2m、前方部長21.2m、幅19.2mである。墳丘の高さは傾斜面に築造されているため西と東で異なるが、基底部分から測ると、後方部は3m、前方部は1.9mとなる。後方部が縦長の長方形を呈し、前方部が低平な前方後方墳である。

出土遺物は土師器高坏・鉢・甕・小型甕などであり、ほとんどが第7トレンチからの出土である。これらに基づいて古墳の年代を考えるとよければ4世紀代でもかなり古い年代を想定することができよう。

(7) 狐塚古墳（秩父市）

所在地 秩父市大字影森字下原



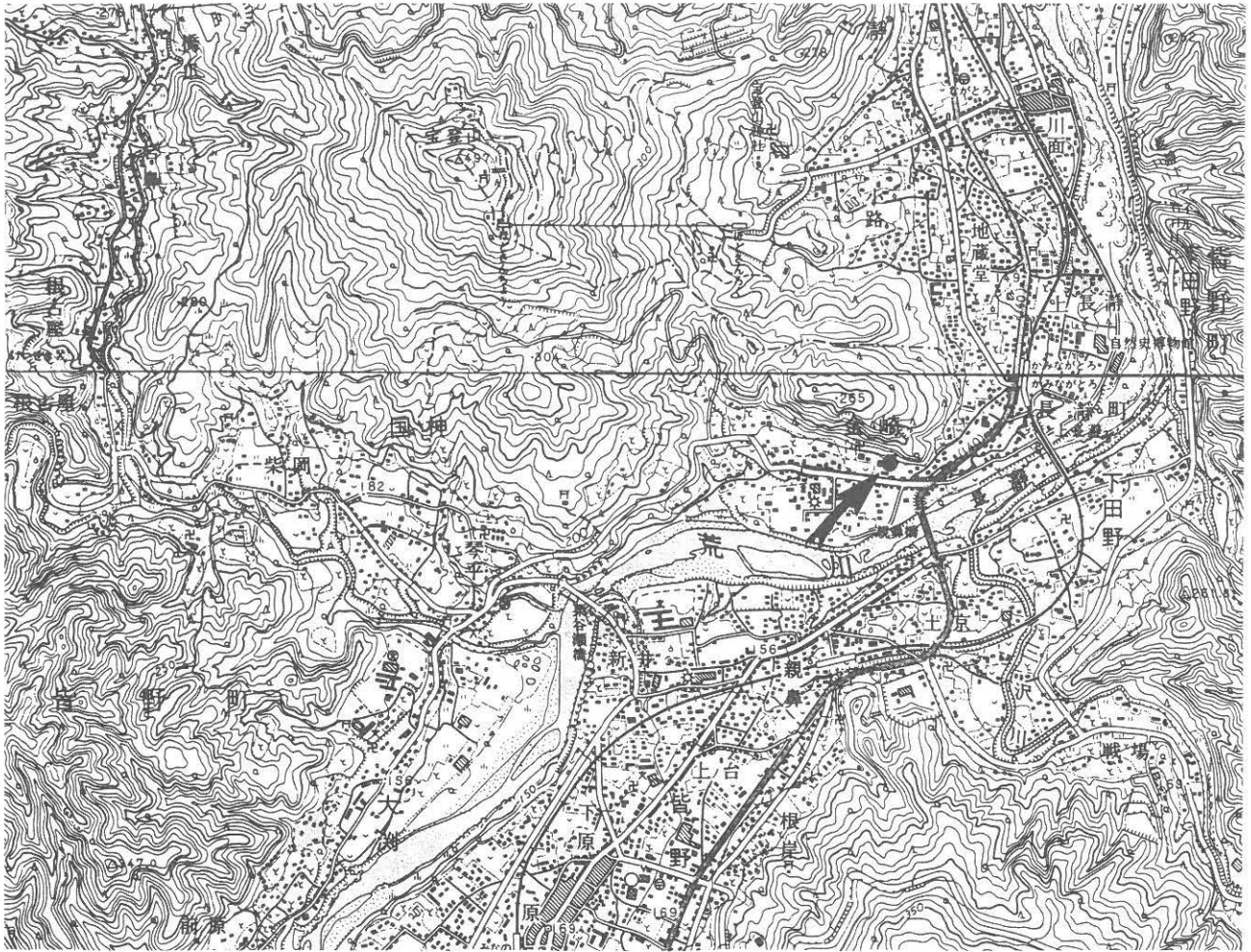
第15図 狐塚古墳測量図

調査年月日 平成2年10月23日(火)～11月1日(木)(6日間)

立地・現況 狐塚古墳は、荒川右岸の河岸段丘上の古墳で、河岸からは約100m奥まっている。古墳の周囲は標高242m程の平坦面が広がっている。荒川沿いの秩父の谷筋では最も西にある古墳だが、周囲に古墳は存在しない。周囲で土器片や石斧など縄文時代の遺物が散布する区域はあるが、古墳時代に関する遺物はまったく採集されておらず、詳細不明とされていた。

墳丘の周囲は宅地化が著しく、古墳の東側も西側も宅地となっている。墳頂部には稲荷社が祀られ、若干削平されているが、保存状態は比較的良好である。最もくずれが大きいのは南東隅から東辺で動物の巣穴や「むろ」が掘られていた。北東隅、南西隅には本来の形態が伺えた。各辺とも直線気味で、一辺24m程度、高さ4mの方形の墳丘と思われる。秩父地域では最大級の古墳であると言われている。墳丘の傾斜は下半が急傾斜で、上半がやや緩い傾斜となるが、通常古墳の墳丘から考えれば、全体的に傾斜がきついように見える。

調査の概要 調査は、墳丘東辺中央外側に第1トレンチ、南東隅に第2トレンチ、南辺中央に第3トレンチを設定して進めた。いずれのトレンチからも周堀を検出することができなかった。そこで、第1トレンチを墳丘側に延長して調査を継続したところ、現墳丘の裾から若干入った位置で、0.5m程の高さで乱雑に積み上げられた石積み遺構が見られた。石積みは旧地表と思われる部分からであった。この部分は墳頂部の稲荷



第16図 天神塚古墳位置図

社の参道にあたり、崩れも著しいので補強のために築かれたものかもしれない。

(8) 天神塚古墳 (皆野町)

所在地 秩父郡皆野町大字金崎字岩下

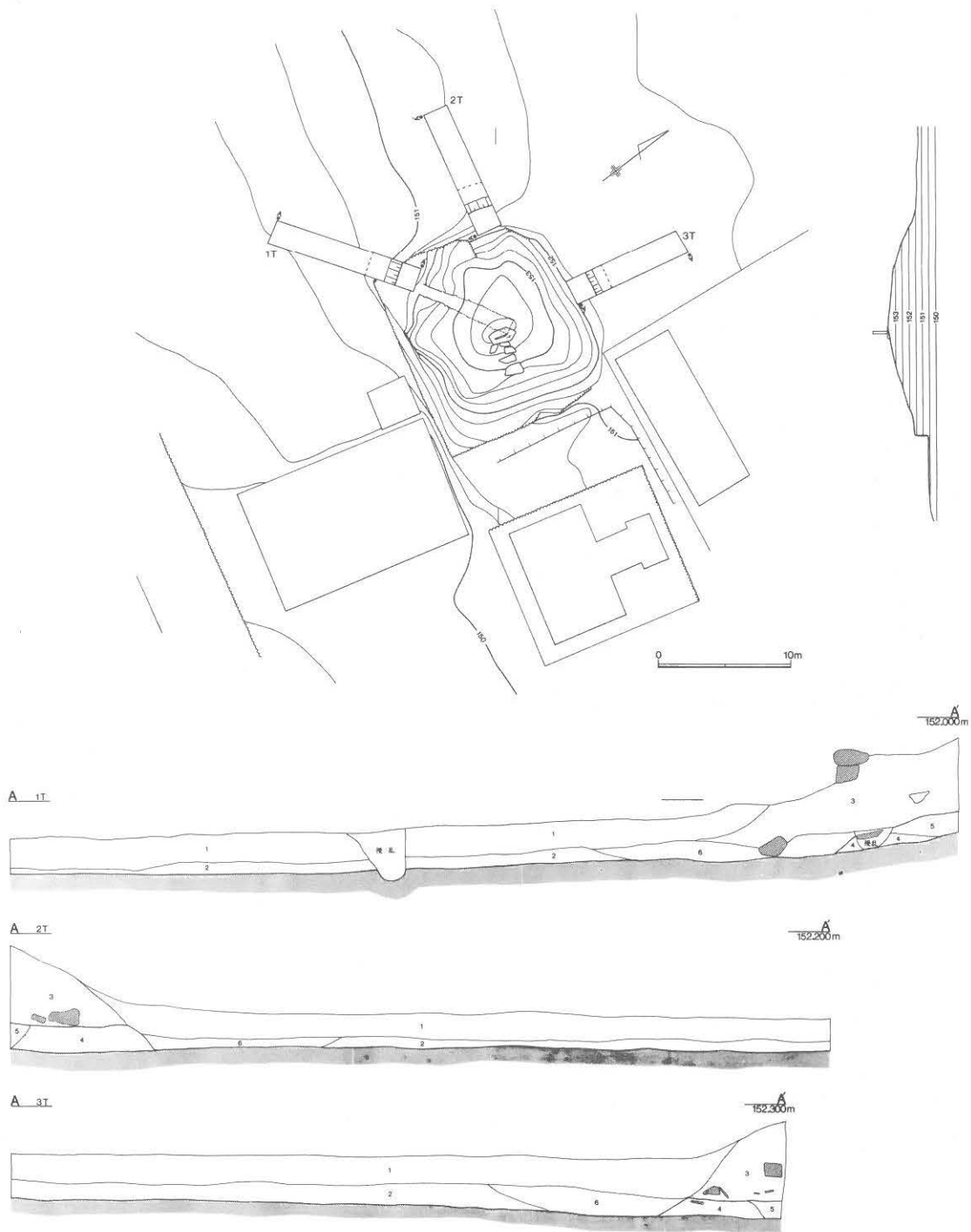
調査年月日 平成2年12月4日(火)～平成2年12月12日(火)(7日間)

立地・現況 天神塚古墳は、親鼻橋のたもとから国神方面に抜ける県道沿いにあり、隣接して金崎神社が鎮座する。地形的には、荒川の左岸、宝登山の南西方向に延びる山地下に開けた河岸段丘上に位置している。墳麓は三方を宅地や畑で削られ、四角形に変形しており、周囲は石垣が組まれていた。墳頂部には「大東亜戦争忠魂碑」と書かれた石碑が建てられている。直径のわりに低墳丘であり、土取りされている可能性がある。埋葬施設は、結晶片岩を用いた短冊形の横穴式石室で、南西方向に開口している。この古墳の北東300mの地点には、やはり横穴式石室の開口する大塚3号墳がある。これらは秩父地方の代表的古墳群として天神塚古墳を含めて4基が県指定史跡になっている。

調査の概要 調査は、石室が開口する方向になる墳丘の南西隅に第1トレンチ、墳丘西側に第2トレンチ、墳丘北側に第3トレンチの3本のトレンチを設定して、墳形・周堀の確認を行った。周堀は保存状態が悪く、土層断面で検討せざるをえなかったが、細かい観察の結果、周堀下端が約2m幅で巡ることが明らかになった。

墳形は円墳と考えられ、直径15.6mに復原できる。墳丘は、土を積み上げてはいるが、10～30cm程度の大きさの片岩を大量に含んだ状態で築成していた。また、第2トレンチでは墳丘裾部の保存状態が良好で、片岩を用いた貼り石が残存していた。

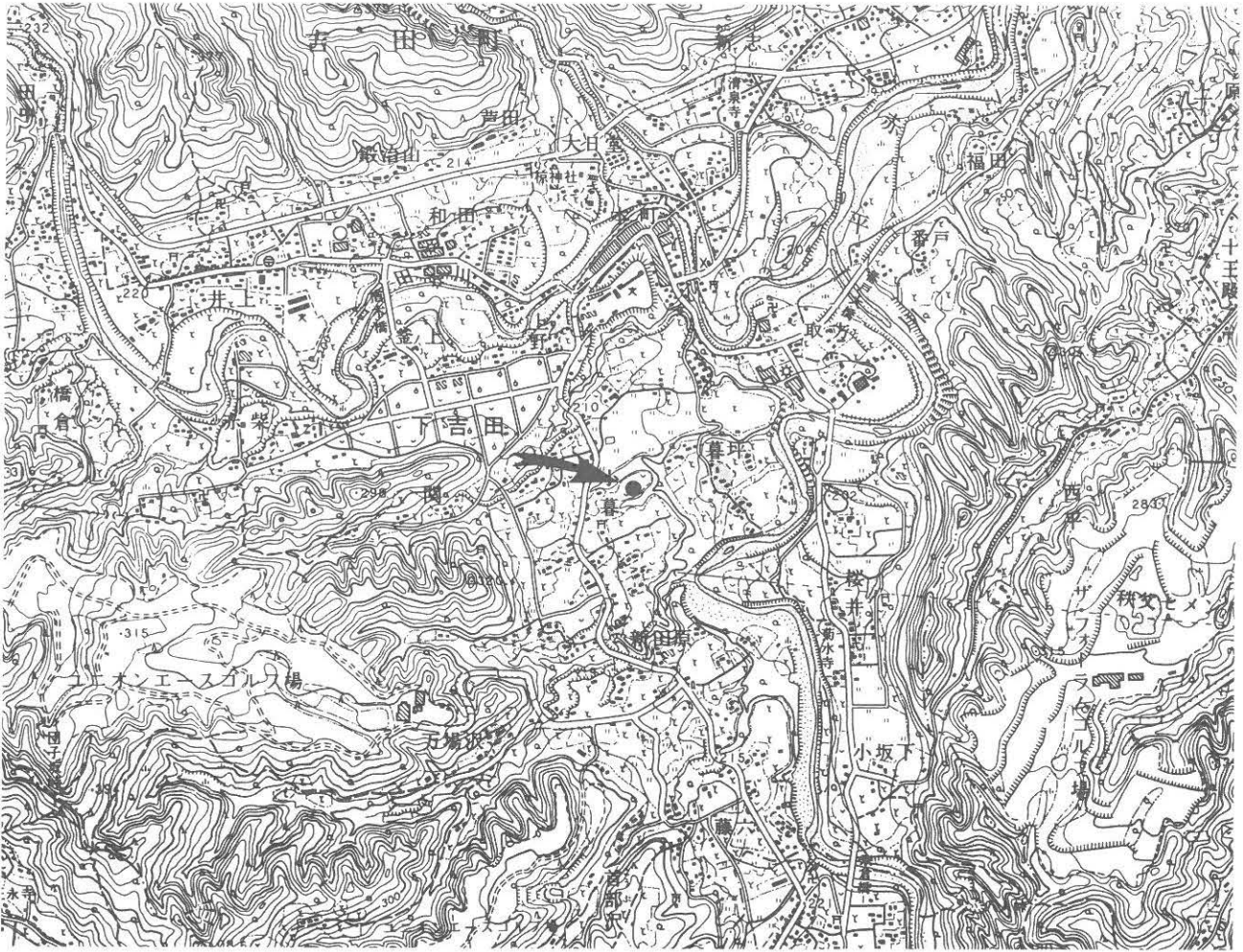
出土遺物は円筒埴輪片、形象埴輪片があるが、いずれも転落した位置での出土である。現在のところ、秩



- | | | |
|---|-------|---|
| 1 | 灰褐色土 | 表土。1~5cm大の礫を少量に含む。しまりよく、粘性弱。 |
| 2 | 暗黄褐色土 | ローム土と暗褐色土の混土层。天明期テフラが散在。礫を少量含む。しまりよく、粘性強。耕作土。 |
| 3 | 暗褐色土 | 10~30cm大の礫を多量に含む。しまり悪く、粘性弱。二次堆積土。 |
| 4 | 黒褐色土 | ロームブロックを部分的に含む。しまりよく、粘性中。 |
| 5 | 黒色土 | ロームブロックを少量含む。しまりよく、粘性中。 |
| 6 | 暗褐色土 | ロームブロックを少量含む。しまりよく、粘性強。 |



第17図 天神塚古墳測量図



第18図 牧林古墳位置図

父郡下で埴輪を持つことが確かな唯一の古墳である。

天神塚古墳の築造時期は、短冊形の石室形態が、大塚3号墳のような胴張り形の石室に先行することや、円筒埴輪の特徴などから6世紀後葉頃と推定される。

(9) 牧林古墳 (吉田町)

所在地 秩父郡吉田町大字下吉田字小暮3307

調査年月日 平成3年1月8日(火)～1月21日(金)(9日間)

立地・現況 牧林古墳は、赤平川左岸の河岸段丘上にあり、赤平川の支流、土橋沢右岸にあり、古墳は段丘崖に面している。下吉田地内には、この古墳の北西に芦田古墳群、北東に取方古墳群があるが、この古墳はこれらとは離れた位置に所在しており、最も近い古墳でも南西100mの位置に行人塚古墳があるのみである。ただ古墳に関する遺物は発見されておらず、詳細不明である。

墳丘の周囲は、上水を利用した水田と、桑畑となっている。また、墳丘上はかつて雑木林であったが、調査時には伐採されていた。墳頂部にはかつて浅間社が祀られていたというが、そのためか墳頂南西部には参道状の窪みが見られた。墳丘裾部は畑地として利用されていたため、若干削られており、一見方形に近い墳丘形態で保存されていた。現存する墳丘は長径約28m、短径約25m、高さ約3.5mを測る。

調査の概要 調査は、墳丘西側に第1トレンチ、北側に第2トレンチ、北東隅に第3トレンチを設定して、墳丘裾部と周堀の確認を行った。周堀は、3本のトレンチのいずれにも検出されなかったが、墳丘裾部と粘土層まで削られた平坦面が確認された。墳丘も少し断ち割ってみた。盛土は粘土と茶褐色土の互層を成しており、やや細か目に積み重ねられて版築風に叩き締められているようであった。

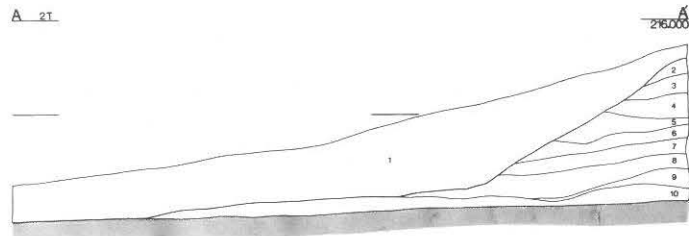
確認された墳丘裾部から測った墳丘規模は、直径約28m程度であり、裾ラインの巡り方から見る限り円墳



第1トレンチ

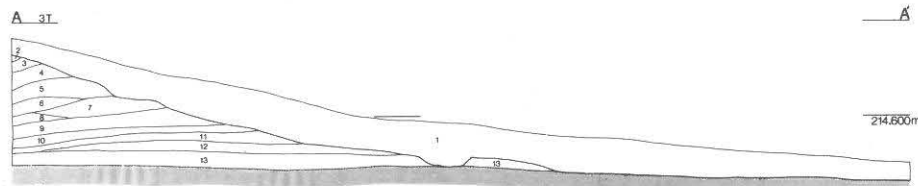
- 1 茶褐色土 表土。
- 2 淡茶褐色土 灰褐色粘土・褐色粘土を少量ブロック状に含む。軟質。粘性中。
- 3 暗褐色土 灰褐色土を少量含む。軟質。粘性中。
- 4 明茶褐色土 粘質土。腐食土・粘土を含む。しまりよく、粘性強。
- 5 淡茶褐色土 粘質土。褐色粘土を層状に含む。しまりよく、粘性強。
- 6 淡茶褐色土 粘質土。白色粘土を少量含む。しまりよく、粘性強。

- 7 暗灰褐色土 粘質土。灰褐色粘土を多量に含む。しまりよく、粘性強。
- 8 灰褐色土 粘質土。下部に茶褐色土を含む。しまりよく、粘性強。
- 9 灰褐色土 粘質土。上部に黄色味ある粘土ブロックを含む。しまりよく、粘性強。
- 10 暗灰褐色土 粘質土。灰褐色粘土ブロックを多量に含む。しまりよく、粘性強。
- 11 暗灰褐色土 暗褐色土が主体。灰褐色粘土を多量に含む。しまりよく、粘性強。
- 12 暗褐色土 灰褐色粘土を含む。しまりよく、粘性強。旧表土。



第2トレンチ

- 1 茶褐色土 表土。
- 2 明茶褐色土 粘質土。3に類似。やや明るい色。しまりよい。
- 3 明茶褐色土 粘質土。灰褐色粘土を多量に含む。しまりよい。
- 4 淡茶褐色土 粘質土。灰褐色土を多量に含むが、均質。しまりよい。
- 5 茶褐色土 粘質土。茶褐色土と灰褐色土の混土层。茶色味強い。しまりよい。
- 6 灰褐色土 粘質土。茶褐色土を少量含む。しまりよい。
- 7 灰褐色土 粘質土。灰褐色粘土ブロックを上部に含む。しまりよい。
- 8 暗灰褐色土 粘質土。9と茶褐色粘土の混土层。9よりやや明るい色。
- 9 暗灰褐色土 粘質土。灰褐色粘土ブロックを多量に含む。
- 10 暗灰褐色土 粘土。堅緻。鉄分多い。上面黄色味を帯びる。粘性強。



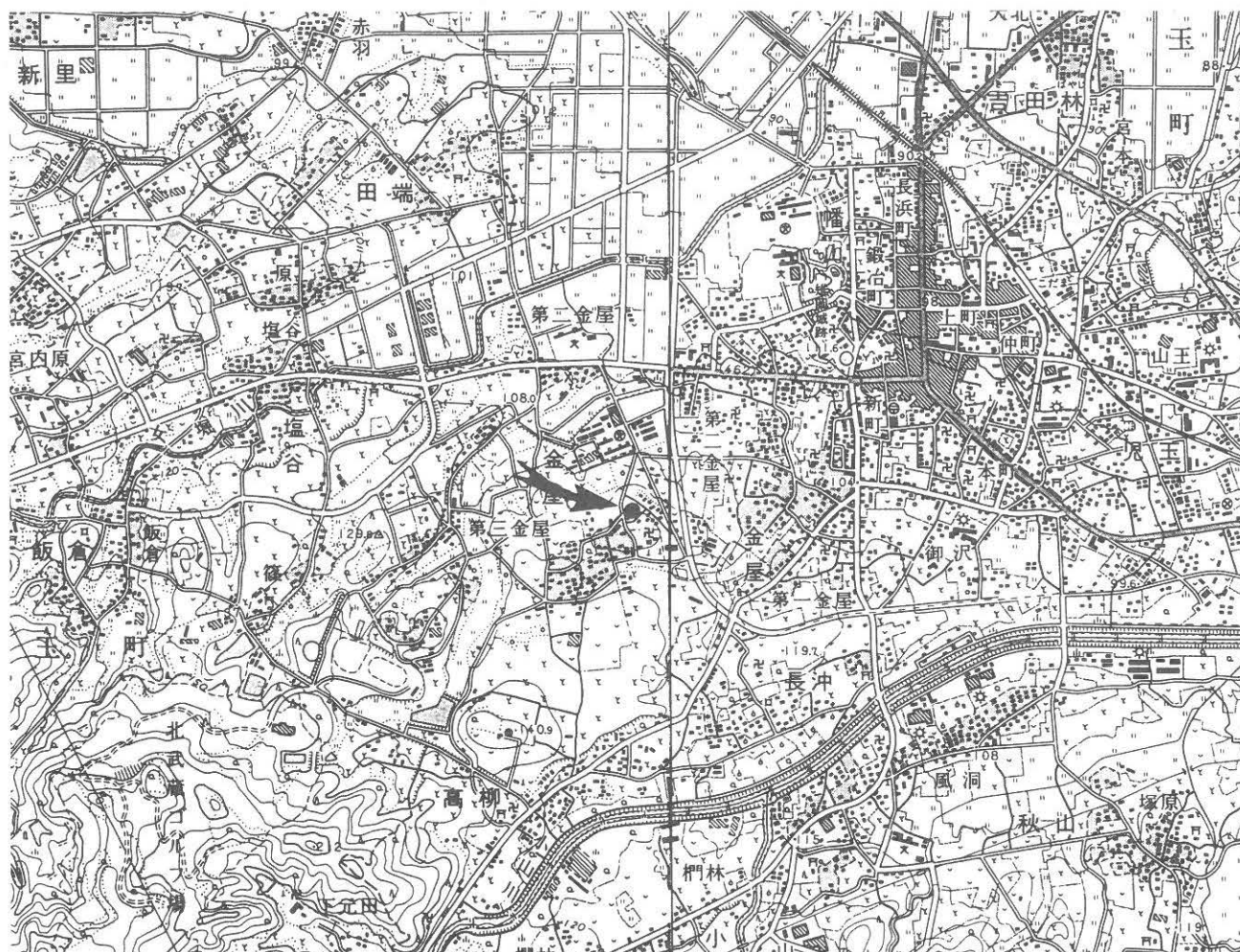
第3トレンチ

- 1 茶褐色土 表土。
- 2 明茶褐色土 粘質土。5に類似。大きめの白色粘土ブロックを含む。
- 3 茶褐色土 粘質土。4に類似。やや暗い色。
- 4 明茶褐色土 粘質土。黄褐色土をブロック状に含む。
- 5 淡茶褐色土 粘質土。7に類似。白色粘土を2~3cmのブロック状に部分的に含む。
- 6 淡灰褐色土 粘質土。8に類似。
- 7 淡茶褐色土 粘質土。11に類似。灰色粘土を多量に含む。茶色味が強く、明るい。
- 8 淡灰褐色土 粘質土。10に類似。白色粘土ブロックを少量含む。

- 9 淡灰褐色土 粘質土。灰白色粘土を多量に含む。やや白っぽい。
- 10 灰褐色土 粘質土。11に類似。灰色味が強い。
- 11 灰褐色土 粘質土。やや黄色味強く、12より明るい色。粘土ブロックを多量に含む。しまりよい。
- 12 暗灰褐色土 粘質土。13に類似。やや褐色気味。
- 13 暗灰褐色土 粘土。堅緻。鉄分多い。上面黄色味を帯びる。粘性強。

0 2m

第19図 牧林古墳測量図



第20図 長沖157号墳位置図

と考えて差し支えなさそうである。

出土遺物は発見されず、墳頂や周囲の表面上の精査によっても遺物・埋葬施設に関連する手がかりは得られなかった。

(10) 長沖 157号墳 (児玉町)

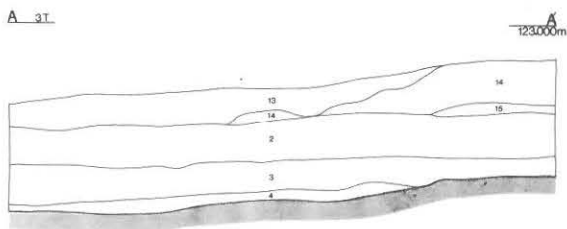
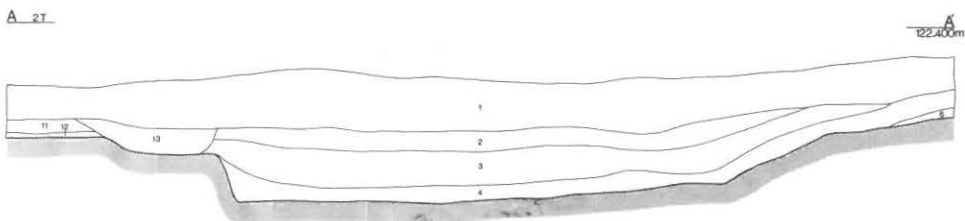
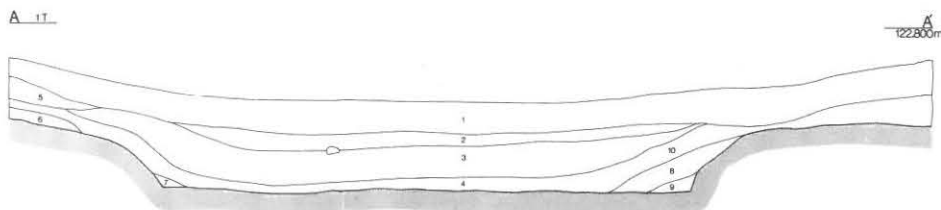
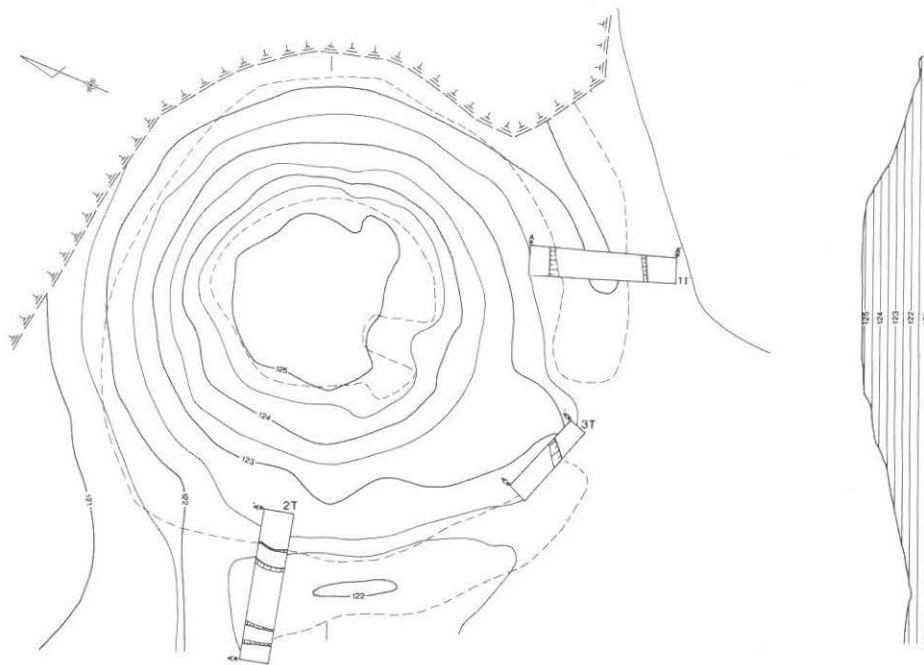
所在地 児玉郡児玉町大字長沖字金屋885-1

調査年月日 平成2年9月6日(木)～9月19日(水)(7日間)

立地・現況 長沖古墳群は児玉丘陵の北側、小山川(身馴川)の左岸の台地沿いに広く分布しており、南北500m、東西1500mの範囲に157基の古墳が密集している。157号墳は、古墳の密集している台地とは浅い谷を隔てた奥の台地にある。古墳は舌状台地の先端近くの馬の背状の部分の標高120mの地点に築造されている。

墳丘東側の裾近くまで宅地造成による削平が行われているが、墳丘部分はほぼ残っていた。墳頂部はかつて稲荷社があったためか平坦であるが、わずかに均された程度であるようであった。墳形は現状でも丸く見え、原型を保っているようである。西側、南側の墳丘裾部には、周堀の跡かと思われる窪みも見られた。南側墳丘下半部はやや平坦化され、削られているようにも見えるが、稲荷社に登る参道のために変形されたものであろう。

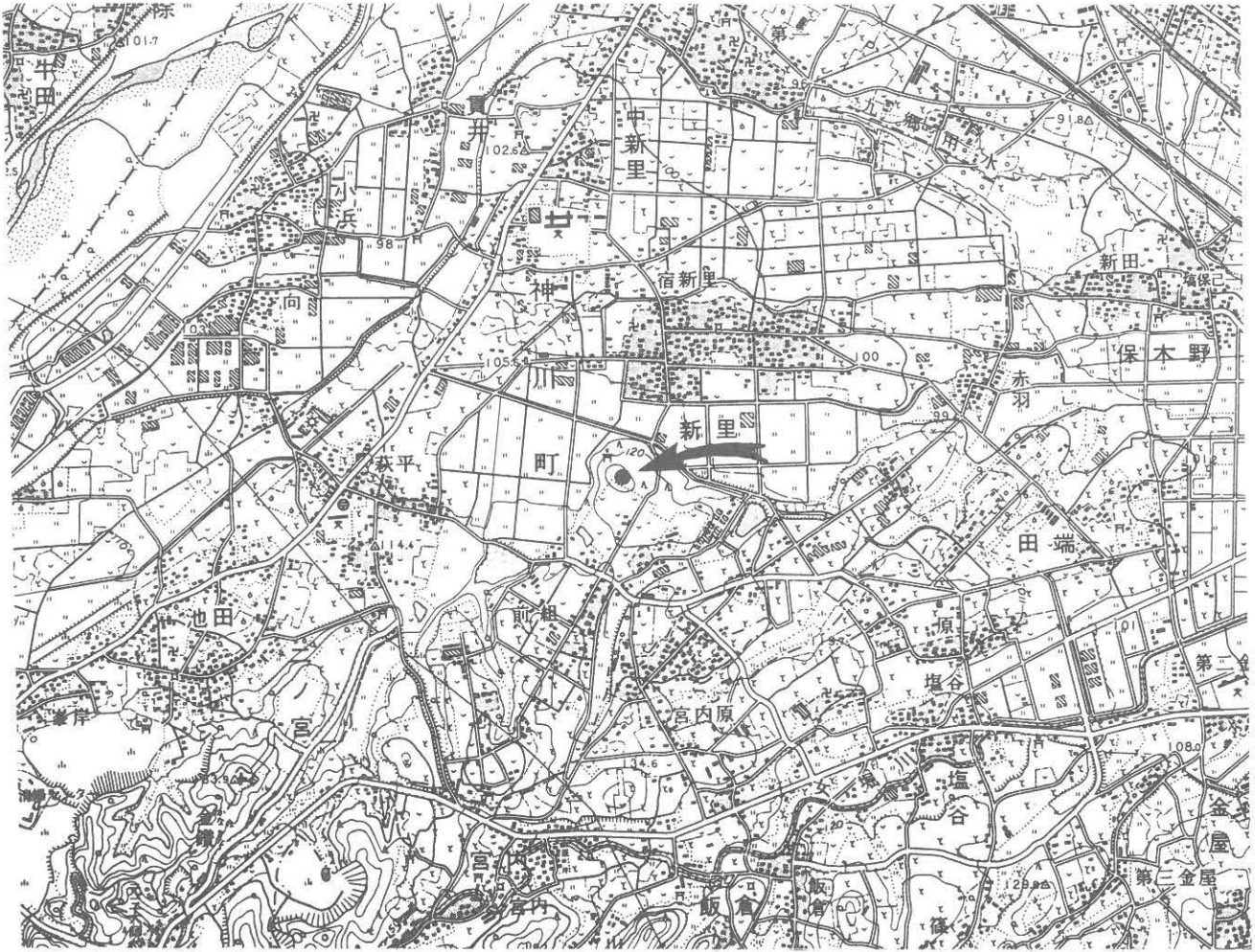
調査の概要 調査は、墳丘南側の窪みに第1トレンチ、西側の窪みに第2トレンチを設けて進めた。幅2m、長さ9.6mの第1トレンチでは、原墳丘裾からはじまる幅6mの周堀を確認した。長さ10mの第2トレンチでは、墳丘寄り部分で緩い傾斜の平坦面に続いて、幅7mの周堀が検出された。第1トレンチに比べ、やや幅広で深かった。墳丘寄りの部分にある平坦面は、墳丘裾部全体に巡っている可能性がある。



- | | | |
|----|-------|-------------------------------|
| 1 | 淡褐色土 | 表土。 |
| 2 | 暗褐色土 | やや軟質。粘性中。 |
| 3 | 黒色土 | しまりよく、サクサクしている。 |
| 4 | 暗黄褐色土 | 黒色土とローム土の混土层。しまりよく、粘性強。 |
| 5 | 淡褐色土 | やや軟質。 |
| 6 | 黄褐色土 | ロームブロックを多量に含む。しまりよく、粘性強。 |
| 7 | 褐色土 | 褐色ロームブロックを含む。粘性強。 |
| 8 | 淡暗褐色土 | 4に類似。ロームブロックを多量に含む。しまりよく、粘性強。 |
| 9 | 褐色土 | 7に類似。均一でやや軟質。粘性強。 |
| 10 | 褐色土 | ソフトローム。軟質。粘性強。 |
| 11 | 暗褐色土 | ロームブロックを含む。しまりよく、粘性強。 |
| 12 | 褐色土 | 10に類似。やや暗い色。 |
| 13 | 褐色土 | 軟質。黒色土を多量に含む。穴の埋め戻し土。 |
| 14 | 褐色土 | 13との境目に天明期テフラを含む。 |
| 15 | 明褐色土 | 均質。しまりややよい。上面に河原石を敷く。 |



第21図 長沖157号墳測量図



第22図 白岩銚子塚古墳位置図

墳丘南西側は平坦化され、等高線の乱れがあるので、張り出し部等の施設の有無を確認するため、第3トレンチをこの部分に設定して掘り下げた。ここでは、東寄りの部分がブリッジ状にやや高くなる掘底を確認した。結果的には、円墳の可能性の方が高くなった。

墳丘規模は測量図と2本のトレンチの調査結果から直径約32mの円墳と推定される。

出土遺物は決して多くはないが、外面調整B種ヨコハケの円筒埴輪が主体であり、築造時期も5世紀中葉頃に遡りそうである。

(1) 白岩銚子塚古墳（神川町）

所在地 児玉郡神川町大字新里字白岩

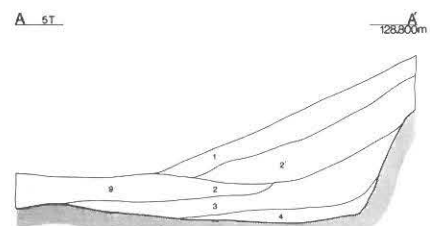
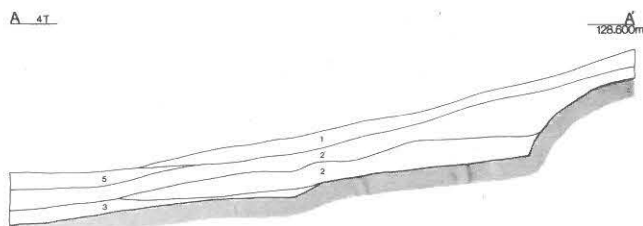
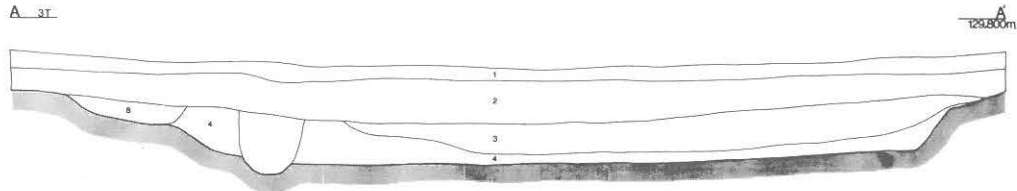
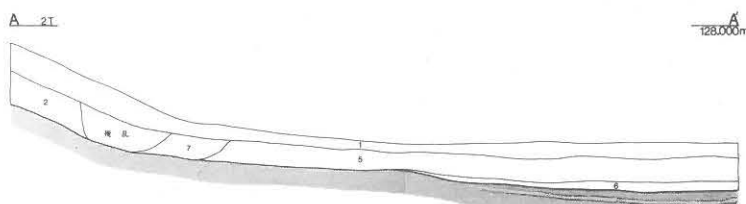
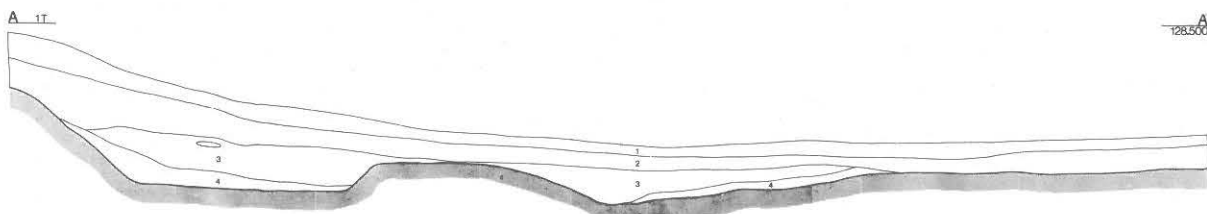
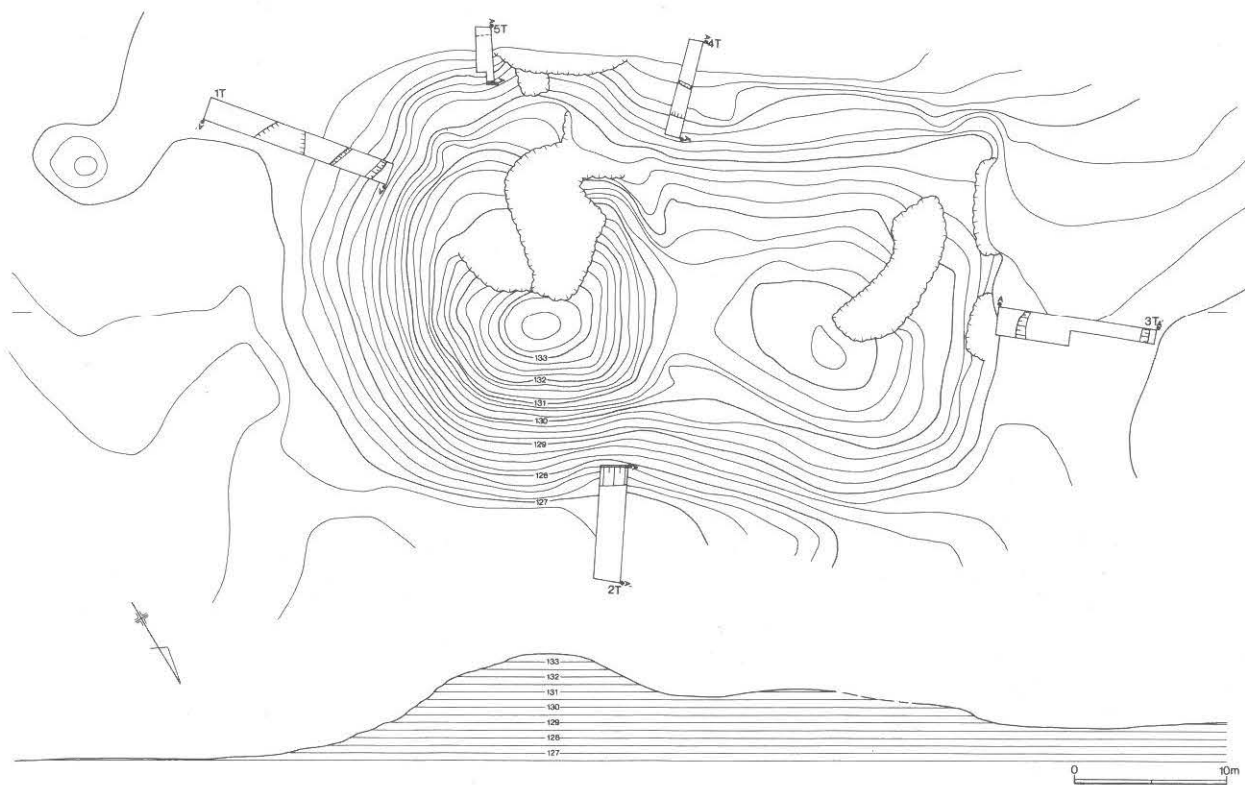
調査年月日 平成2年11月5日（火）～11月21日（火）（11日間）

立地・現況 銚子塚古墳は、児玉丘陵の一部である標高133mの白岩丘陵上にある前方後円墳で、丘陵頂部付近の鞍部に占地している。周囲には4基の小円墳が散在し、白岩古墳群と呼ばれている。

墳丘上は山林となっており、保存は比較的良好であるが、後円部の南西側に大規模な盗掘壕があり、前方部墳頂付近にも椎茸栽培用の穴がある。盗掘壕の付近には、石室用材と見られる大きな礫が転がっていた。墳丘の周囲には周堀の痕跡が部分的に残り、特に前方部の北西側と後円部の南西側は顕著に見られる。

調査の概要 調査は、後円部南東側の主軸位置に近い墳丘裾部付近に第1トレンチ、北側くびれ部に第2トレンチ、前方部北西側の主軸位置付近に第3トレンチ、南側くびれ部に第4トレンチ、後円部左側面になる南西側に第5トレンチと5本のトレンチを設定して行った。

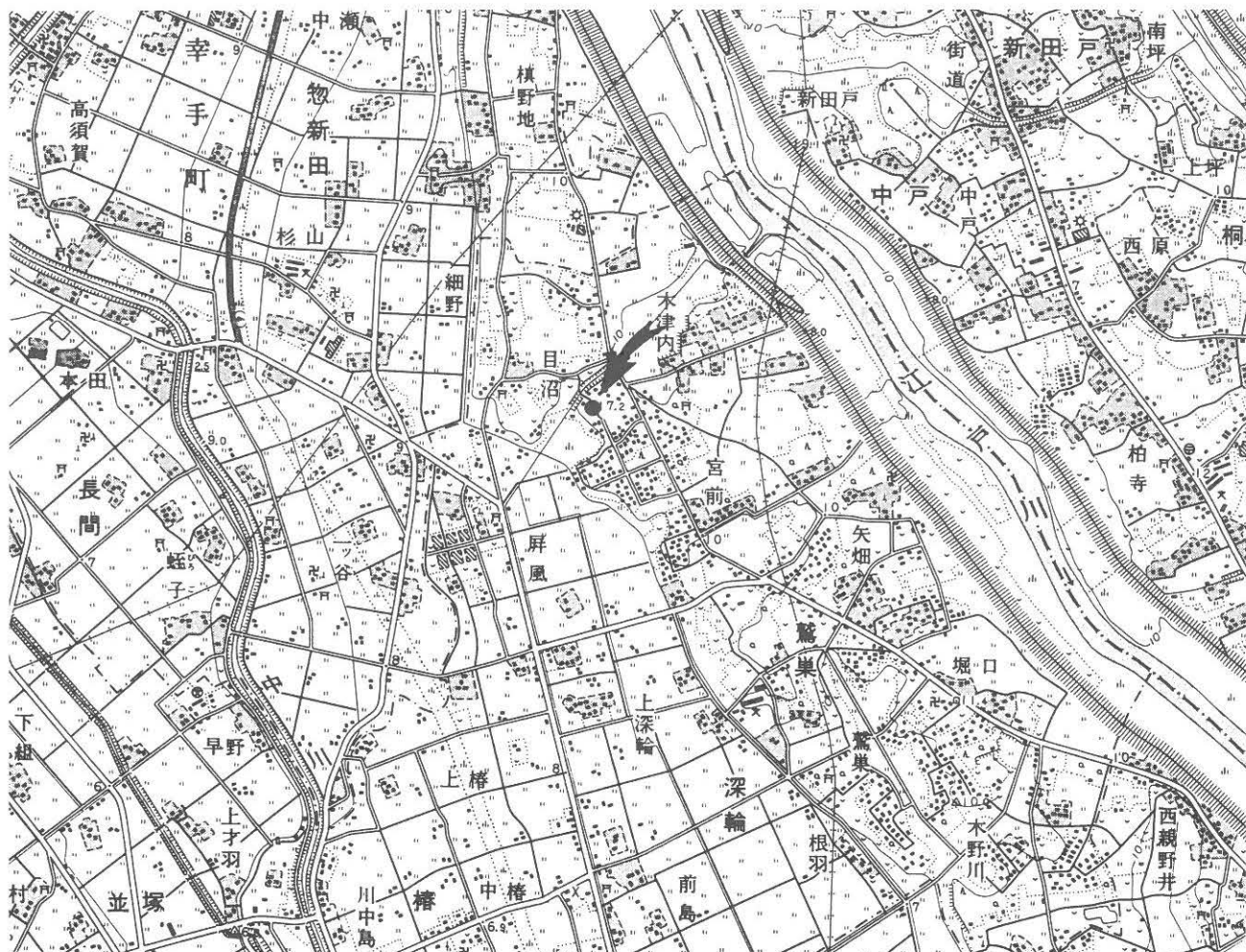
第1トレンチでは、旧表土層とローム地山層を掘削した墳丘裾部が検出された。周堀は上幅2.7m、深さ0.3mで、覆土中からは、埴輪片とともに、墳丘から転落した葦石が出土した。周堀の外側には幅4mの堀



- 1 表土 腐食土層。
- 2 茶褐色土 ローム粒・炭化物粒を含む。天明期テフラの塊状堆積あり。
- 2' 明茶褐色土 ローム土をやや多量に含む。1との境目に天明期テフラを多量に含む。
- 3 暗褐色土 ローム土を少量含む。草石・植輪片を多量に含む。
- 4 暗黄褐色土 ロームブロック主体で、暗褐色土をやや多量に含む。粘性強。
- 5 茶褐色土 2を主体とするが、ブロック状。天明期テフラが混入する。
- 6 暗黄褐色土 地山のローム土と5の混土層。
- 7 茶褐色土 5に類似。表土をやや多く混入する。
- 8 暗褐色土 黒褐色土ブロック・ロームブロックを含み、やや軟質。



第23図 白岩銚子塚古墳測量図



第24図 目沼10号墳位置図

がもう一つ確認されており、外堀になる可能性もある。第2トレンチでは墳丘裾部は削平されていたが、周堀の外側立ち上がり部も検出されていない。地山面が外側に傾斜することから、北側くびれ部には周堀がなかったことも考えられる。第3トレンチでは墳丘裾部は現在の裾の外側2.5mの位置に検出された。周堀の幅は広く、上幅8.2m、深さ0.6mである。覆土中には、円筒埴輪片のほかに平安時代の遺物も含まれていた。第4トレンチでは、良く叩き締められた墳丘盛土が確認された。その外側には緩傾斜面があり、さらに外側でわずかに掘りくぼめられていた。これを周堀と推定した。くびれ部には幅2m程度のテラスが設けられていたと見られる。

今回の調査により、墳丘規模は主軸方向の全長46m、後円部径28m前後となり、従来想定されていた規模とほぼ同じ数値となった。なお、前方部幅については両側隅角部分の墳丘の保存状態はあまり良好ではなく、トレンチをこの位置に設定する余裕がなかったため、今回は明らかにすることはできなかった。現状からは25~30mの間になるということだけ確認しておきたい。後円部墳頂は平面形がやや四角くなっており、盛土等によって墳丘に改変が加えられているようであった。したがって、現状の高さでは前方部と後円部の比高差は約2.3mもあるが、もう少し小さくなると思われる。

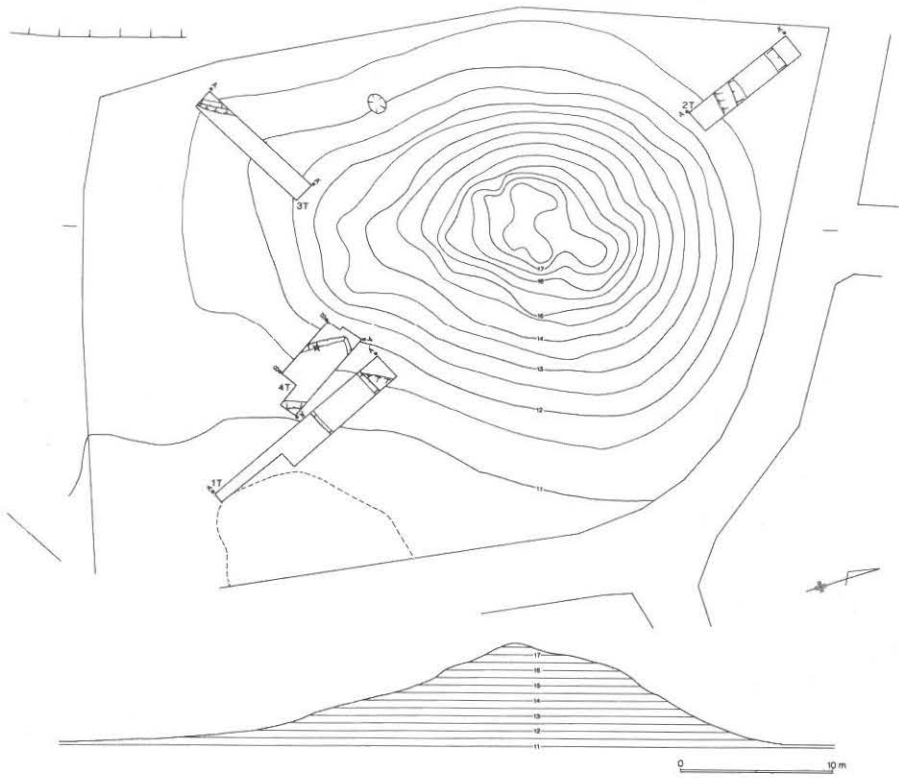
出土遺物はあまり多くなかったが、円筒埴輪片、馬や器財などの形象埴輪片、須恵器甕片などがある。築造時期は、墳形と出土した埴輪の特徴から、6世紀前葉~中葉頃と考えられる。

(12) 目沼10号墳 (杉戸町)

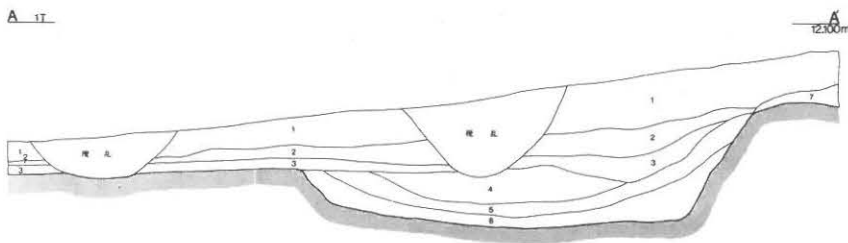
所在地 北葛飾郡杉戸町大字目沼字浅間398

調査年月日 平成3年10月21日(月)~平成3年11月1日(金)(10日間)

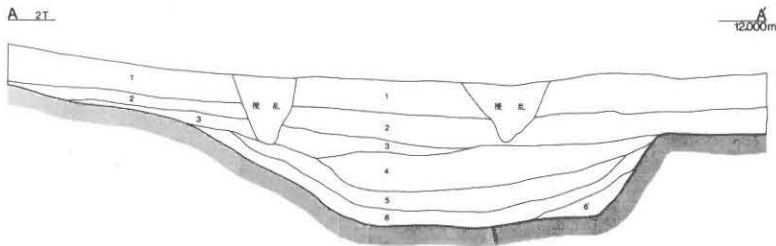
立地・現況 目沼古墳群は江戸川を東に望む、宝珠花台地上に立地している。東西300m、南北500m程度



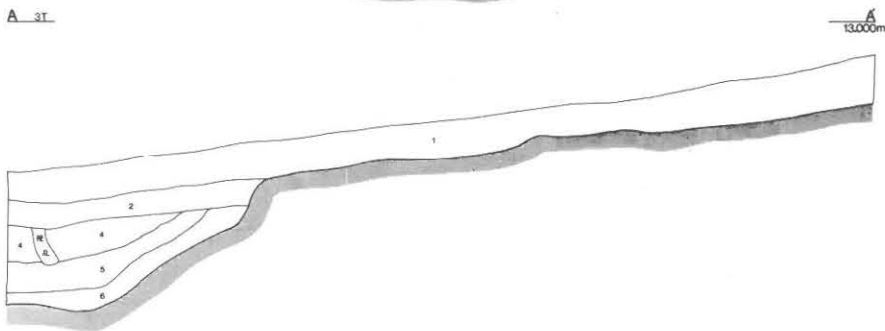
A 1T



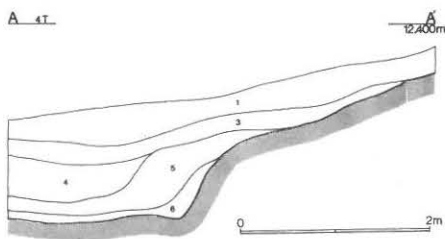
A 2T



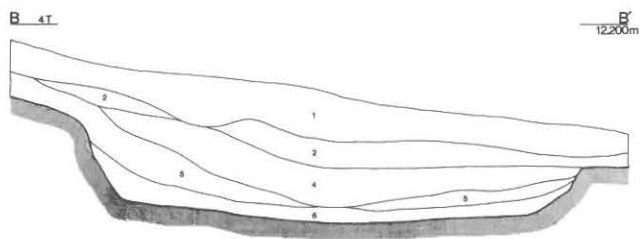
A 3T



A 4T

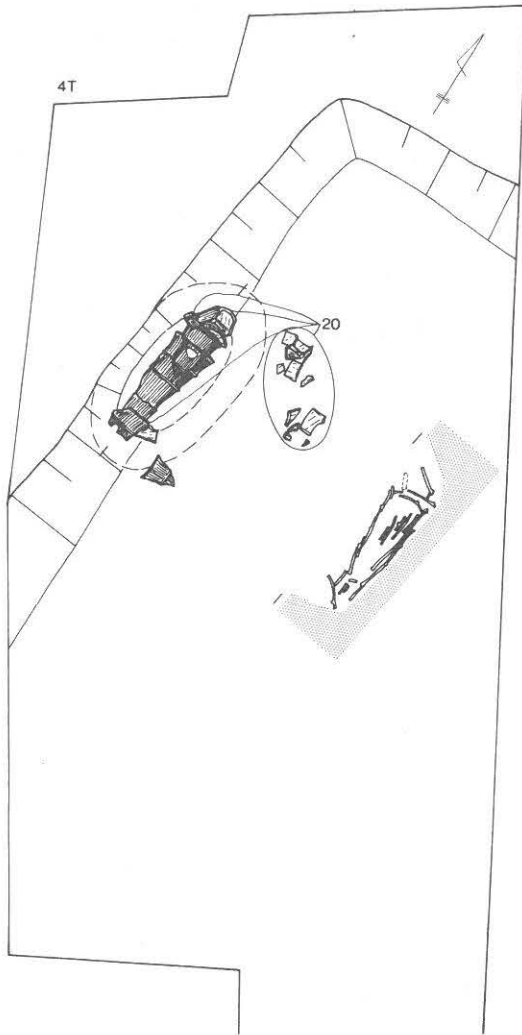
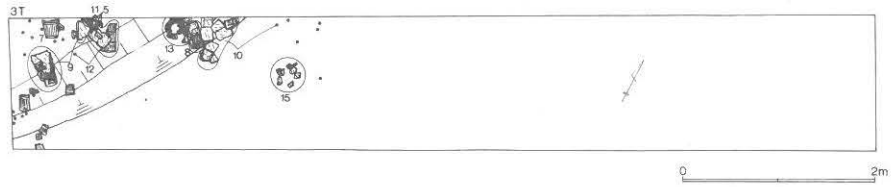
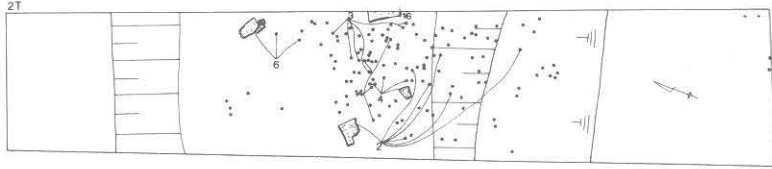
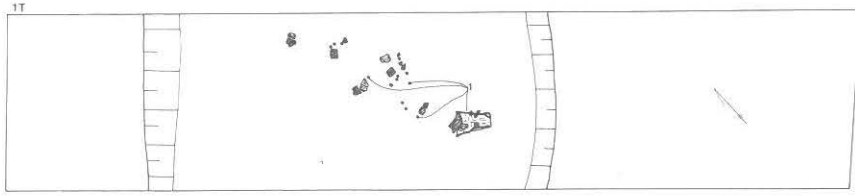


B 4T

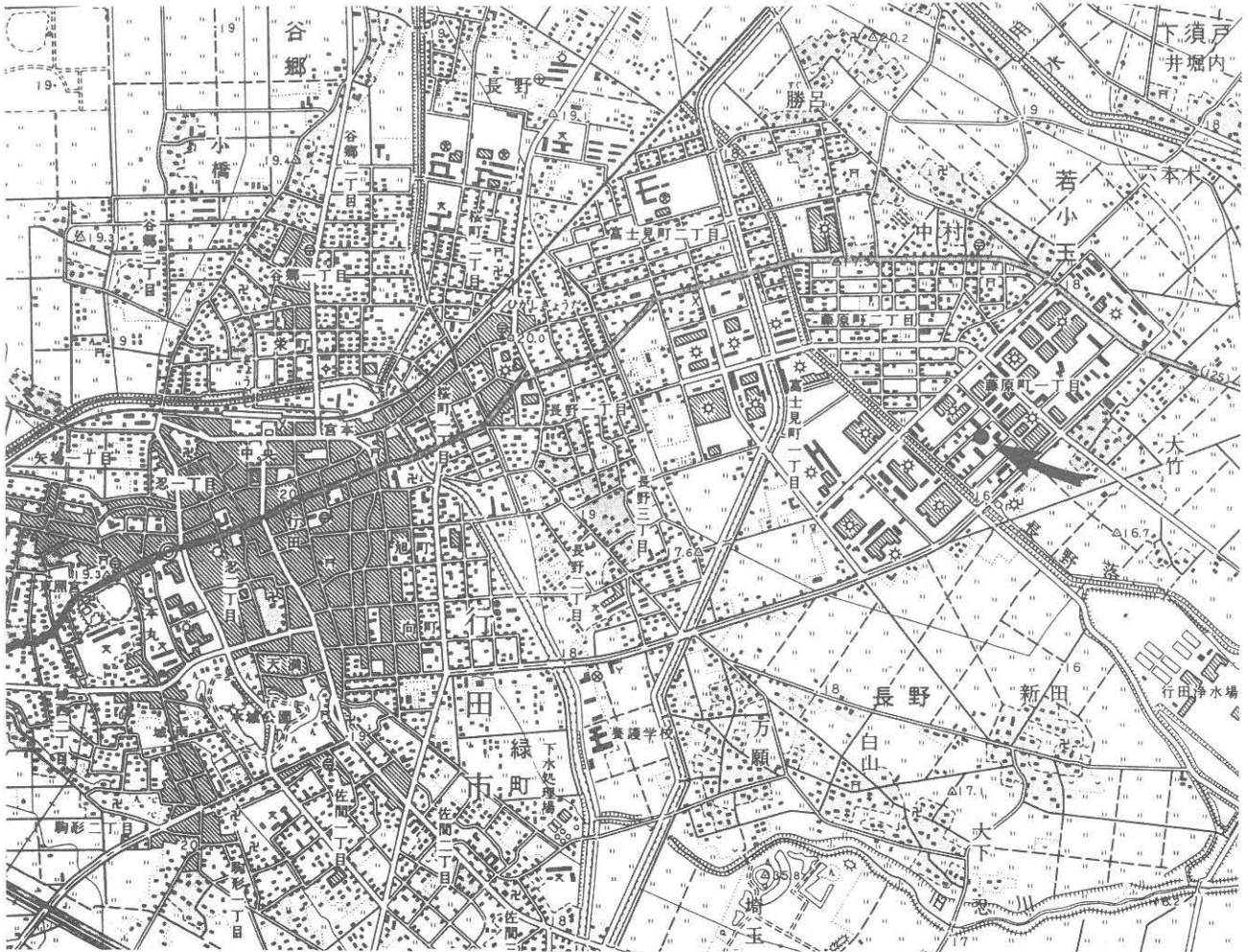


- 1 茶褐色土 表土。下層部に天明期テフラを多量に含む。軟質で間隙大きい。
- 2 淡暗褐色土 天明期テフラを混入する。炭化物粒を含む。しまりよい。
- 3 暗茶褐色土 黒褐色土と暗褐色土の混土層。土壌の粒子が細かく、しまりよい。
- 4 黒褐色土 しまりよいが、粘性弱。
- 5 暗褐色土 土壌の粒子やや粗い。サクサクしている。
- 6 暗褐色土 ロームブロックを下層を中心に多量に含む。土壌の粒子やや粗い。粘性弱。
- 6' 暗褐色土 6より黒味強い。ロームブロックを多量に含む。軟質。しまり悪い。
- 7 淡暗褐色土 2に類似。粘性中。墳丘崩落土か。

第25図 目沼10号墳測量図(1)



第26図 目沼10号墳測量図(2)



第27図 八幡山古墳位置図

の範囲に古墳が分布しており、消滅したものを含め、総数20基が確認されている。10号墳は、古墳群中の南部にある。昭和41年の杉戸町教育委員会で調査され、鈴杏葉などが出土した9号墳や、8号墳とは小支谷を隔てた台地端部に位置している。

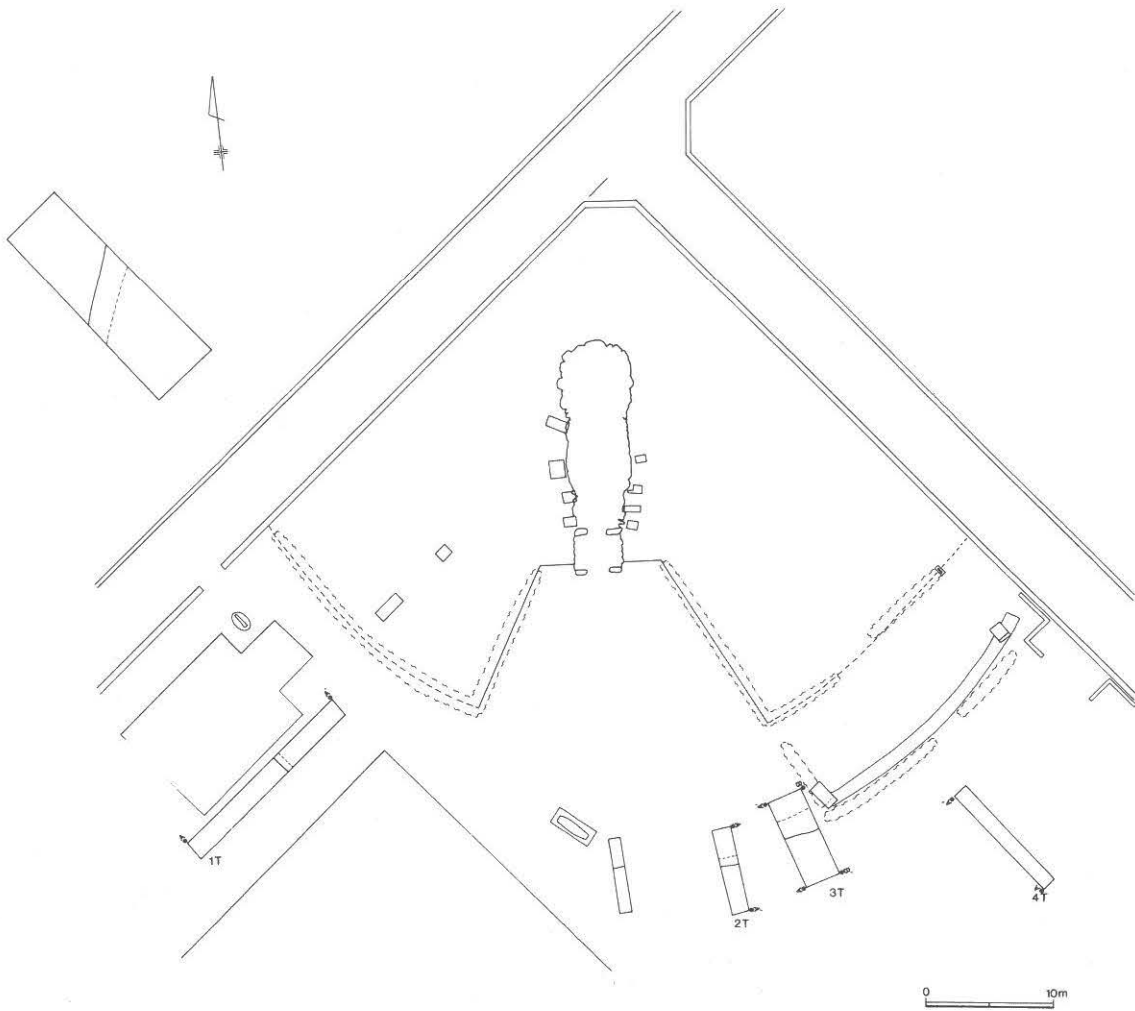
この古墳は、かつて墳頂部に浅間社が祀られていたために、2 m程の余分な盛土が行われており、急に高くなっているように見える。周囲は宅地化が著しく、現存する墳丘も裾部ぎりぎりに近い位置でフェンスに囲まれている。現墳丘は土取りでやや変形しているようである。南北にやや長いが、円墳状を呈し、径約28 mである。

調査の概要 調査は、限られた敷地の中で周堀確認が十分可能で、墳形・規模の確認ができる位置を選定し、墳丘南側に第1トレンチ、北側に第2トレンチを設定して進めた。また、南側は前方部ないし張り出し部の存在が予想されたので、その形態を確認するために、南西方向に第3トレンチを設定した。

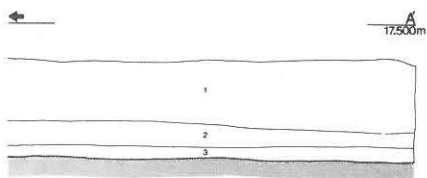
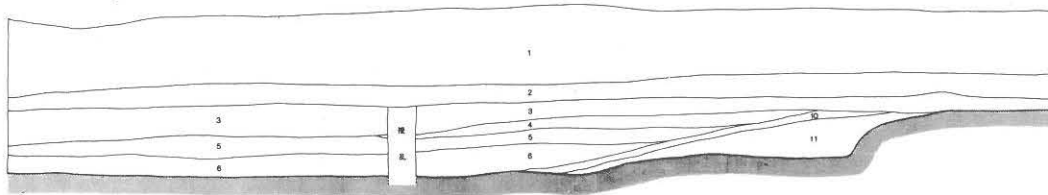
第1・2トレンチはほぼ対角に設定したので、古墳の径はほぼ判明した。第1トレンチでは、幅4.8 m、深さ1.2 mの周堀を検出した。覆土中から円筒埴輪、朝顔形埴輪が出土している。第2トレンチでは、幅5 m、深さ1.1 mの周堀が検出された。覆土中には多量の円筒埴輪片があたかも投げ込まれたような状態で、重なって出土した。

第3トレンチでは、周堀はトレンチの方向をはずれるように直線的に外に延びていた。このことは大きな前方部が存在したことを示している。このトレンチでも、墳丘から周堀に転落した状態で埴輪が出土した。

これらの3本のトレンチの状況と現墳形、地形から推定すると、前方部はフェンスで囲まれた敷地の外まで延びていることが容易に推定された。つまり、古墳の全長を試掘調査によって確認することが不可能であることがわかった。そこで、くびれ部位置を確認して、前方後円形の状態をさらに明らかにするために、第1トレンチの西側に第4トレンチを設定した。

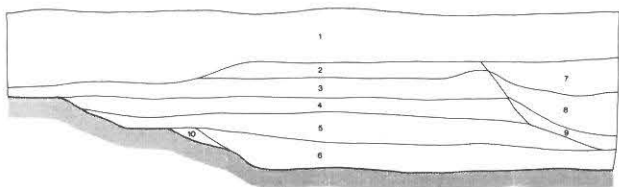


A 1T

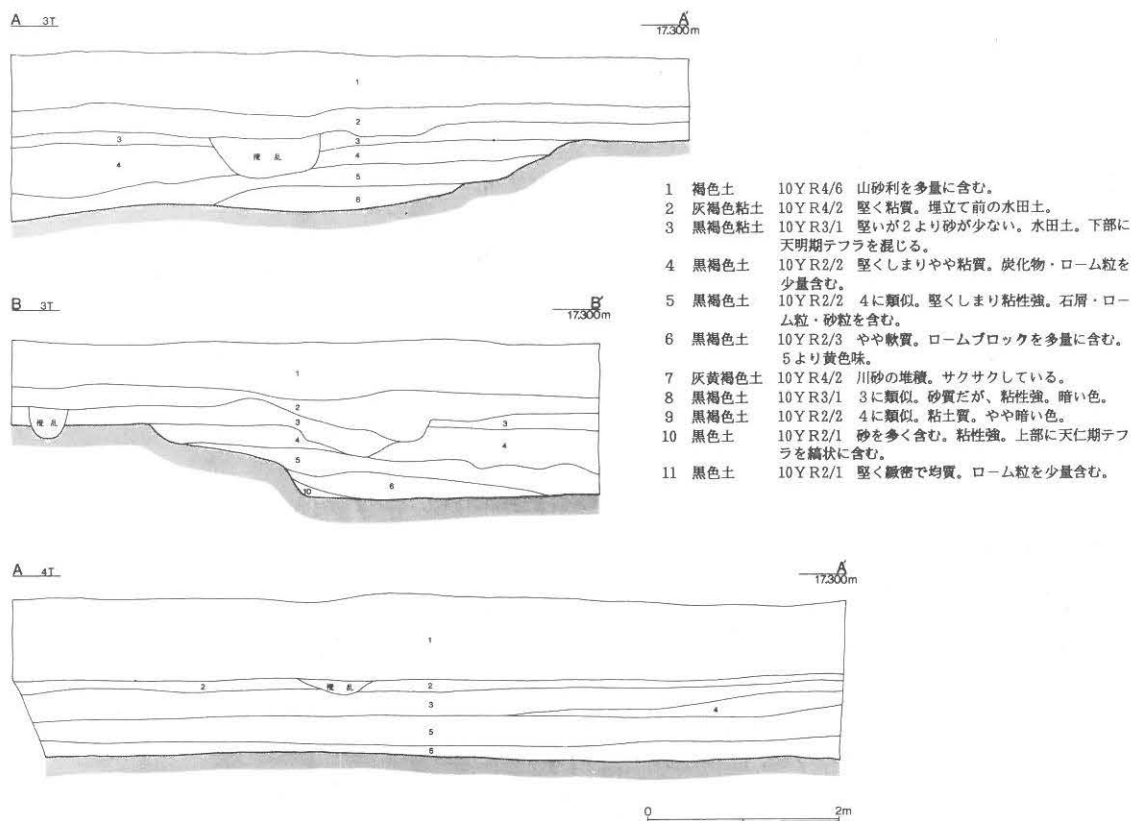


- | | | | |
|----|-------|----------|--------------------------------|
| 1 | 褐色土 | 10Y R4/6 | 山砂利を多量に含む。 |
| 2 | 灰褐色粘土 | 10Y R4/2 | 堅く粘質。埋立て前の水田土。 |
| 3 | 黒褐色粘土 | 10Y R3/1 | 堅いが2より砂が少ない。水田土。下部に天末期テフラを混じる。 |
| 4 | 黒褐色土 | 10Y R2/2 | 堅くしまりやや粘質。炭化物・ローム粒を少量含む。 |
| 5 | 黒褐色土 | 10Y R2/2 | 4に類似。堅くしまり粘性强。石屑・ローム粒・砂粒を含む。 |
| 6 | 黒褐色土 | 10Y R2/3 | やや軟質。ロームブロックを多量に含む。5より黄色味。 |
| 7 | 灰黄褐色土 | 10Y R4/2 | 川砂の堆積。サクサクしている。 |
| 8 | 黒褐色土 | 10Y R3/1 | 3に類似。砂質だが、粘性强。暗い色。 |
| 9 | 黒褐色土 | 10Y R2/2 | 4に類似。粘土質。やや暗い色。 |
| 10 | 黒色土 | 10Y R2/1 | 砂を多く含む。粘性强。上部に天仁期テフラを縞状に含む。 |
| 11 | 黒色土 | 10Y R2/1 | 堅く緻密で均質。ローム粒を少量含む。 |

A 2T



第28図 八幡山古墳測量図(1)



第29図 八幡山古墳測量図(2)

第4トレンチでは、東側くびれ部の位置とくびれ部外側の立ち上がりを検出した。第1トレンチと第4トレンチの周堀の状況から、墳丘相似形の周堀であることが判明した。また、くびれ部付近の覆土中に掘り込まれた土壌から、円筒埴輪4本を使用した円筒埴輪棺が出土した。

この調査の結果、目沼10号墳は、全長46m以上、後円部径30.4m、高さ5mの前方後円墳であることが確認された。くびれ部部分の幅は13~15m程度であるので、全体のプロポーシオンから考える限り、50mを大きく越えることはないであろう。

築造時期は、出土した大量の埴輪類の特徴から6世紀前葉頃と考えられよう。

(13) 八幡山古墳 (行田市)

所在地 行田市藤原町2丁目27-2

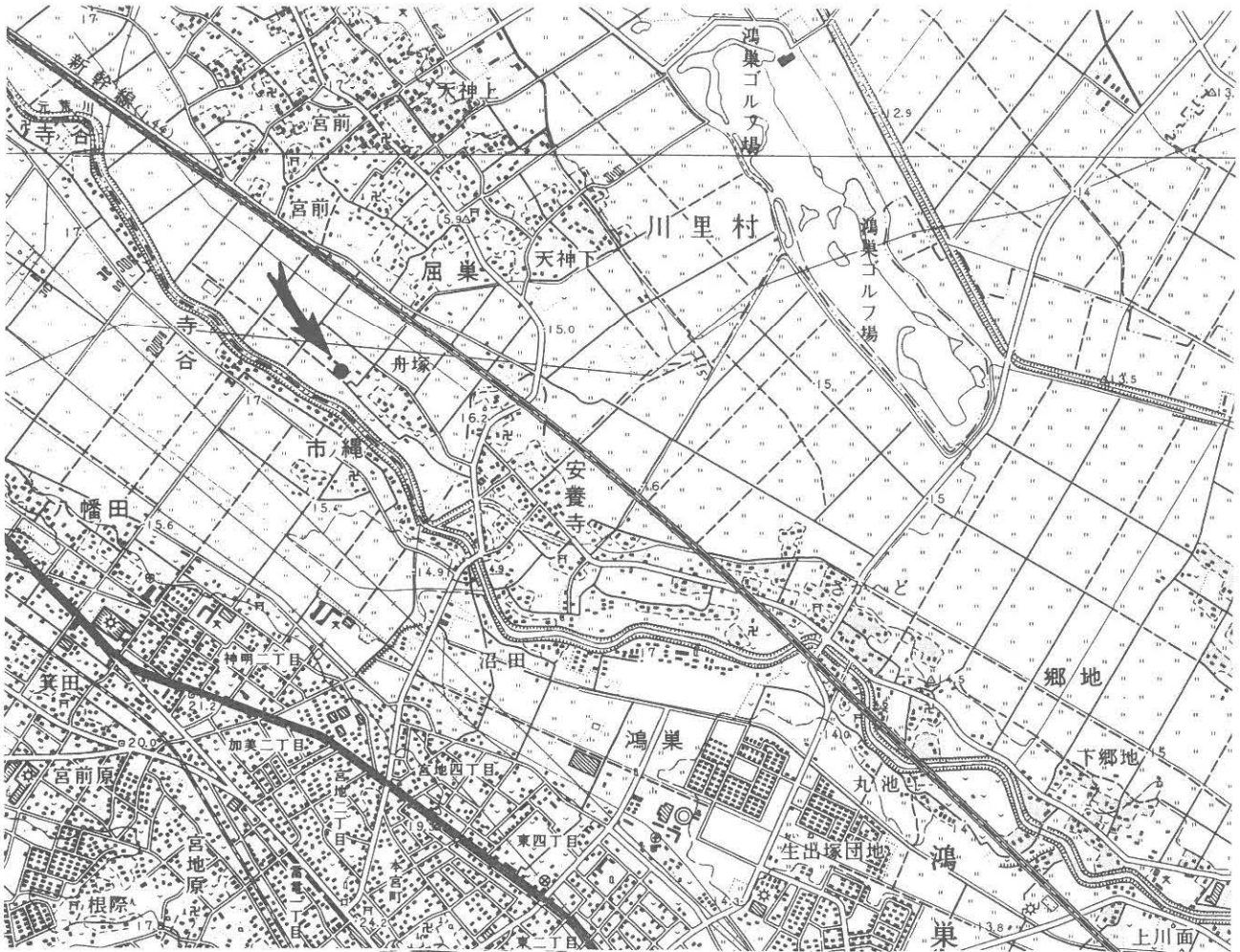
調査年月日 平成3年12月10日(火)~平成3年12月26日(木)(13日間)

立地・現況 若小玉古墳群は、行田市市街地の東方、南に埼玉古墳群を望む埋没ローム台地上にあり、現在の藤原町の工業団地から小針地区までの広大な範囲に分布している。かつては8基の古墳の分布が知られるのみであったが、近年の工業団地地域の発掘調査によって30基以上の古墳が存在していたことがわかっている。しかし、墳丘の残る古墳数は激減しており、工業団地内には八幡山古墳と地蔵塚古墳が存在するのみである。

八幡山古墳は群の北西部にある。昭和10年頃土取りされ、石室が露呈した。昭和52~54年度には埼玉県教育委員会によって石室復原工事が行われた。現在では史跡公園として整備され、三室構造の横穴式石室に入ることができ、石室構造を観察することができる。

なお、この復原工事に関連して、周堀部分の一部にトレンチによる確認調査が実施されている。この調査の結果、八幡山古墳は径74mの円墳とされた。

調査の概要 調査は、前回の確認調査を補足する意味で、横穴式石室の南西部から南東部にかけて4本のト



第30図 舟塚古墳位置図

レンチを設定して進めた。第1トレンチは墳丘の南西側、第2・3トレンチは南側やや西寄り、第4トレンチは南東側である。前回は西側と石室前面、墳丘内、南東側裾部に計6本のトレンチが調査されたので、今回分を合わせて10本のトレンチが入ったことになる。なお、第4トレンチは、前回の墳丘西側のトレンチとは対角に近い位置になる。

第1トレンチにおいては、良好なローム土と黒色土による版築と周堀を検出した。また、墳丘裾部から10m程外へ延びた位置においても、周堀の外側立ち上がりは検出されなかった。

第2・3トレンチにおいても、第1トレンチとほぼ同様にローム土と黒色土による版築と周堀を検出し、若干の須恵器片や石屑片等を出土した。

第4トレンチは、植え込みとコンクリート製の溝による墳丘裾部の表示を避けて、裾部から15m程外側の位置に設定したが、ここでも周堀の外側立ち上がりは検出されなかった。

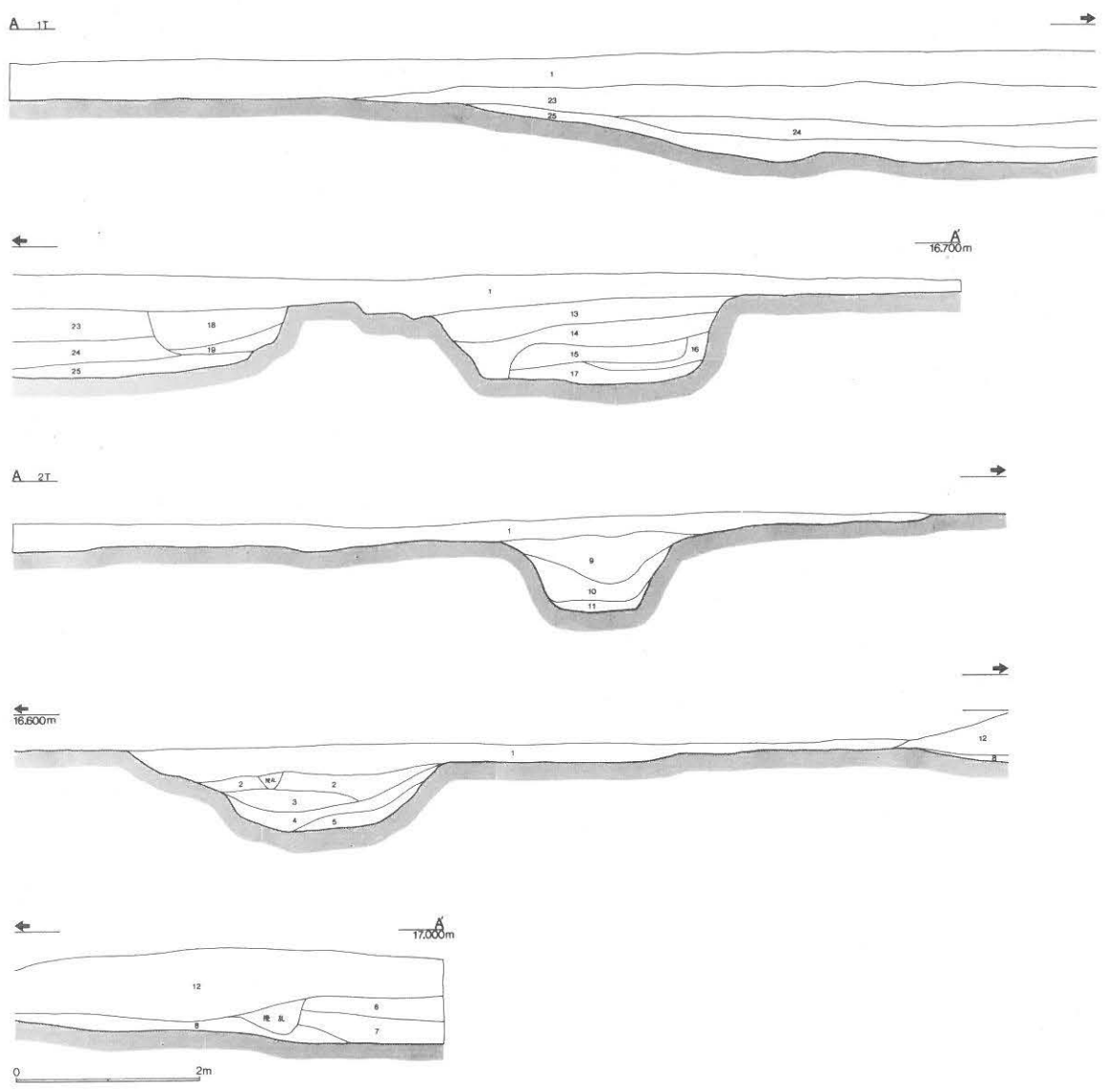
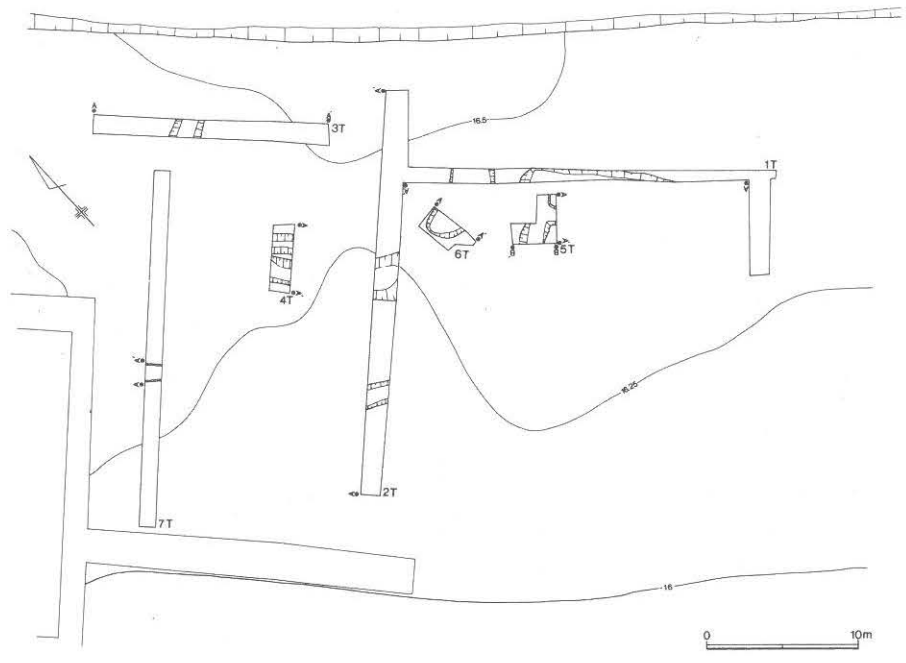
この4本のトレンチ調査に前回の成果を加味して八幡山古墳の規模を推定すると、従来よりやや大きく径約80mということになる。いずれにせよ、埼玉古墳群消滅後の最大規模の古墳であることは動かない。

(14) 舟塚古墳 (川里村)

所在地 北埼玉郡川里村大字屈巢字舟塚

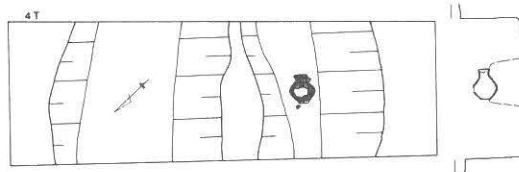
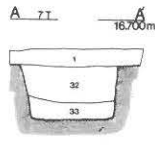
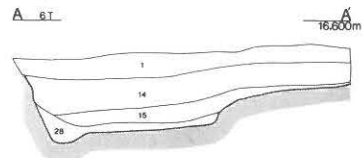
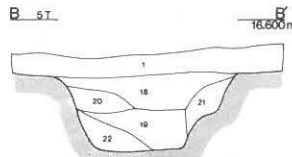
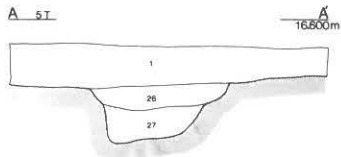
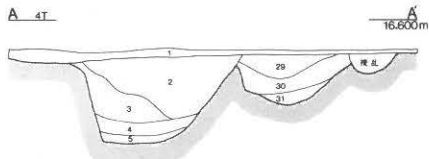
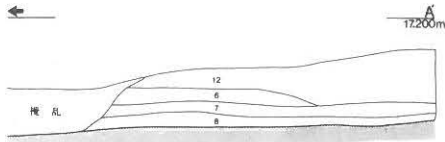
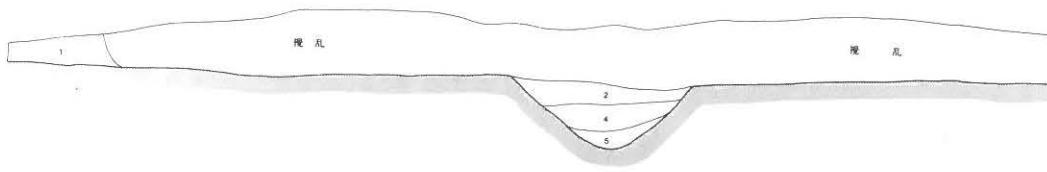
調査年月日 平成4年1月16日(木)～平成4年1月25日(土)(8日間)

立地・現況 舟塚古墳は、鴻巣市との境を流れる元荒川左岸の、標高14m程の微高地上に立地する。周囲1km程は低いローム台地であるが、水田面との比高差がほとんどなく、全体的に平坦に見える地形である。南東方向約500mには鴻巣市の安養寺古墳群が所在する。舟塚古墳の隣接区域は墳丘の残る古墳はまったくなく、遺物の散布状況から古墳の存在を確認したにとどまる。埋蔵文化財散布地としての遺跡全体の内容は、



第31図 舟塚古墳測量図(1)

A 3T



0 2m

- | | |
|---------|--|
| 1 暗褐色土 | 表土（耕作土）。 |
| 2 黒褐色土 | 10Y R2/3 ローム粒を均一に混入。サクサクしている。 |
| 3 暗褐色土 | 10Y R3/4 ローム土を多量に含む。粘性あり。 |
| 4 黒褐色土 | 10Y R2/2 最も黒い。粒子が緻密で堅くしまる。 |
| 5 黒褐色土 | 10Y R3/2 ロームブロックをやや多く含む。粘性。 |
| 6 黒色土 | 10Y R2/1 旧表土。 |
| 7 黒褐色土 | 10Y R2/3 漸移層。しまりよい。 |
| 8 褐色ローム | 10Y R4/4 しまりよい。 |
| 9 黒褐色土 | 10Y R2/2 ローム粒を混入。サクサクしている。 |
| 10 黒褐色土 | 10Y R2/3 均一にローム粒を含む。しまりよく、やや粘性あり。 |
| 11 暗褐色土 | 10Y R2/4 細かいロームブロックを含み、粘性。 |
| 12 暗褐色土 | 暗褐色表土。 |
| 13 黒褐色土 | 10Y R2/3 細かいローム粒が混入。軟質。 |
| 14 黒褐色土 | 10Y R2/2 13に類似。やや黒味強い。軟質。 |
| 15 暗褐色土 | 10Y R3/3 ロームブロックを多量に含む。粘性でしまりよい。 |
| 16 黒褐色土 | 10Y R2/3 黒色土とロームの混土层。 |
| 17 暗褐色土 | 10Y R3/4 黒色帯のロームブロックを多量に含む。ややしまり、粘性あり。 |
| 18 黒褐色土 | 10Y R2/3 ローム粒を含む。軟質。 |
| 19 黒褐色土 | 10Y R2/2 ローム粒・ロームブロックをやや多く含む。 |
| 20 暗褐色土 | 10Y R3/4 細かいロームブロックを多量に含む。 |
| 21 暗褐色土 | 10Y R3/4 20に類似。細かいローム粒を多量に含む。やや軟質。 |
| 22 暗褐色土 | 10Y R3/3 褐色ロームブロックを含む。やや軟質。 |
| 23 暗褐色土 | 10Y R2/3 ローム土を多量に含む。サクサクして、軟質。 |
| 24 黒褐色土 | 10Y R2/3 23に類似。黒味が強い。 |
| 25 暗褐色土 | 10Y R3/3 ローム土をやや多く含む。やや軟質。粘性あり。 |
| 26 暗褐色土 | 10Y R3/4 23に類似。黄色味強い。軟質。 |
| 27 黒褐色土 | 10Y R3/2 26に類似。ローム粒・ロームブロックを含む。 |
| 28 黒褐色土 | 10Y R2/3 16に類似。やや黒味強い。 |
| 29 黒褐色土 | 10Y R2/3 ローム粒・炭化物粒を含む。サクサクして、しまりよい。 |
| 30 黒褐色土 | 10Y R3/2 29に類似。ローム粒をやや多量に含む。しまりよい。 |
| 31 暗褐色土 | 10Y R3/3 ロームブロックを多量に含む。しまりよい。粘性あり。 |
| 32 暗褐色土 | 10Y R3/3 ローム粒を多量に含む。軟質。 |
| 33 黒褐色土 | 10Y R3/2 32に類似。ローム粒を少量含む。 |

第32図 舟塚古墳測量図(2)



第33図 黒田2号墳位置図

古墳以外では、縄文時代晩期・古墳時代前期の遺物を出土する複合遺跡ということになる。

舟塚古墳の周囲はすべて畑地となっている。周辺は、川に沿って南東から北西に延びる低台地で、古墳所在地の東側の畑地は土取りにより1 m程削平されており、古墳の一部が破壊されていることも懸念された。この部分は篠山の状態になっている部分が最も高く、標高16.8 mである。また、この地点だけから、形象埴輪片が出土している。

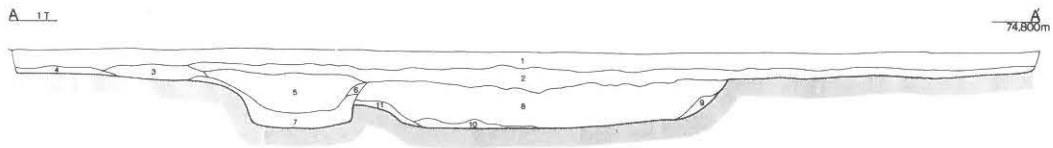
調査の概要 調査は、埴輪片の集中している畑の後方の若干高い、篠山部分を中心として、南東方向に第1トレンチ、これと直交する南西方向に第2トレンチ、そして北西方向に第3トレンチを設定して実施した。

第1トレンチでは2か所で、溝状遺構が確認された。南側の溝は南へのびていたため、この溝の限界を追うため、さらに南に拡張区を設定したが、溝はここまでは延びていなかった。

舟塚古墳に伴うと思われる周堀は、第1トレンチでは北側の溝であることが後に判明したが、第2・3トレンチでも確認された。第2トレンチでは、上幅3.2 m、深さ0.6 m、第3トレンチでは幅2 m、深さ0.7 mであった。この周堀のつながり方を確認し墳形を確定するために、サブトレンチとして、第2～3トレンチの間に第4トレンチ、第1～2トレンチ間に第5・6トレンチを設定して調査を進めた。第4トレンチでは、第2トレンチと第3トレンチにつながる、幅1.75 mの古墳の周堀が確認された。ここでは覆土中から土師器片が出土した。第6トレンチにおいても、第1トレンチから続いている周堀が確認された。ここではトレンチの西壁の付近で、立ち上がってしまうため、ブリッジを持つ部分になるものと思われる。

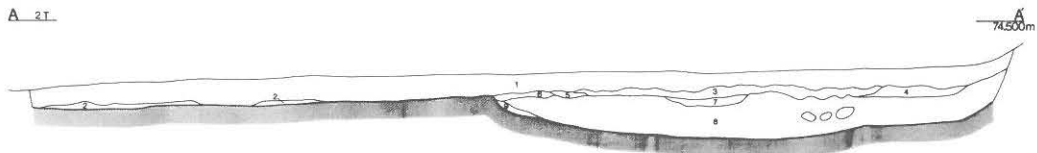
第2・4トレンチでは、古墳時代前期の土師器壺が出土している。特に第4トレンチの壺は完形で、底部穿孔されており、方形周溝墓に伴う溝と推定される。第2・4トレンチは別々の溝と思われるので、2基またはそれ以上の方形周溝墓の存在を推定できる。

また、第1・5トレンチで検出された溝は、土層の観察から近世のものと考えられ、地元住民の談話では、



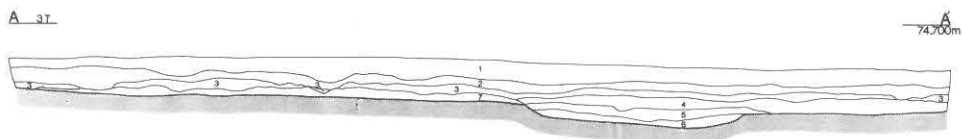
第1トレンチ

- | | | | |
|--------------|--|---------|-----------------------|
| 1 茶褐色土 | 粘質で硬い。小礫をやや多く含む。耕作土。 | 8 黒褐色土 | 礫を少量、灰色砂質土・ローム土も少量含む。 |
| 2 茶褐色土 | 1より淡い色。灰色粘土・黒色土を若干含む。礫を多く含むが、周縁直上は少ない。 | 9 褐色土 | 砂質。黒褐色土と灰褐色土を斑状に混じる。 |
| 3 暗褐色土 | 砂質シルト質。灰色砂質土ブロックを含む。礫も少量含む。 | 10 暗褐色土 | 砂質。基盤礫層に漸移的に移行する。 |
| 4 茶褐色土 | 2とほぼ同じ色。砂質シルト質でやや柔らかい。 | 11 暗褐色土 | 砂質。黒褐色土やや多量、灰褐色土若干含む。 |
| 5 暗褐色土 | 砂質シルト。粘性やや弱い。礫・ローム粒を若干含む。 | | |
| 6 灰褐色砂質土ブロック | 黒色土を少量含む。 | | |
| 7 黒褐色土 | 砂質土。砂質のロームブロックを多く含む。 | | |



第2トレンチ

- | | | | |
|---------|----------------------------------|---------|-----------------------------|
| 1 茶褐色土 | 間隙多い。小礫をやや多く含む。耕作土。 | 7 暗褐色土 | 砂質シルト質で、やや硬い。粘土粒・ローム粒を若干含む。 |
| 2 黄褐色土 | ローム土再堆積。やや砂質シルト質。 | 8 黒褐色土 | ローム粒・褐色土粒をやや多く含む。 |
| 3 茶褐色土 | 1より淡い色。砂質シルト質。小礫少量、ローム粒・粘土粒若干含む。 | 9 暗黄褐色土 | 砂質。ローム土再堆積。 |
| 4 暗褐色土 | 礫を若干含む。 | | |
| 5 暗褐色土 | 砂質だが、粘性強。ローム土を若干含む。 | | |
| 6 暗茶褐色土 | 砂質シルト質で、粘性やや強。ローム土・小礫を若干含む。 | | |

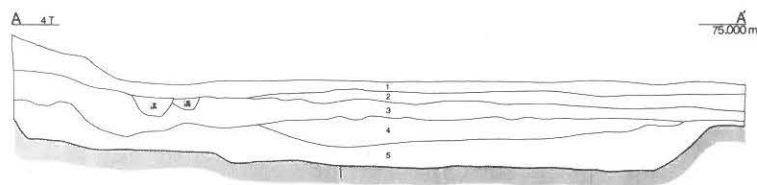


第3トレンチ

- | | |
|---------|--------------------------|
| 1 茶褐色土 | 間隙多い。小礫・ロームをやや多量に含む。耕作土。 |
| 2 黄褐色土 | 小礫・茶褐色土を多量に含む。 |
| 3 暗灰褐色土 | 灰色粘土・暗褐色土を多量に含む。 |
| 4 暗茶褐色土 | 黒色土・灰色粘土・褐色土を均等に含む。 |
| 5 黒褐色土 | 砂質シルト質。灰色粘土をやや多く含む。 |
| 6 灰褐色土 | 砂質シルト質。暗褐色土をやや多く含む。 |
| 7 黄灰褐色土 | 砂質シルト質。暗褐色土少量含む。 |

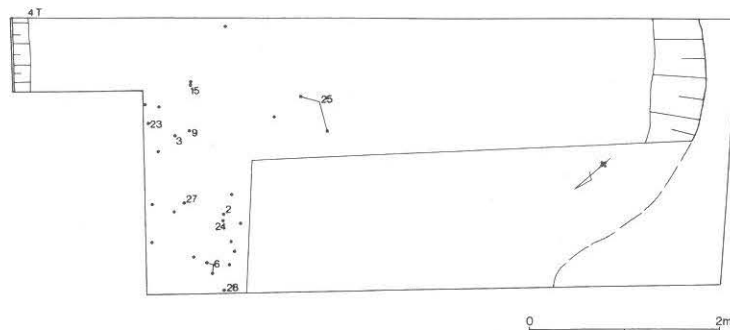
0 2m

第34図 黒田2号墳測量図(1)



第4トレンチ

- | | | |
|---|-------|--------------------------|
| 1 | 茶褐色土 | 間隙多い。小礫・ロームをやや多量に含む。耕作土。 |
| 2 | 黄褐色土 | ロームブロック・小礫をやや多量に含む。 |
| 3 | 灰褐色土 | 砂質シルト質。灰色粘土をやや多く含む。 |
| 4 | 暗灰褐色土 | 黒色土・灰色粘土をやや多量に含む。 |
| 5 | 暗褐色土 | ローム粒・褐色土粒をやや多く含む。 |



第35図 黒田2号墳測量図(2)

ゴボウイン（御坊院）という名の草堂が建っており、それに伴うもの推定される。

以上の調査から、舟塚古墳の墳形・規模は、径19~20mの円墳ということになった。また、築造時期については、判断材料になる遺物も少量しか出土していないが、第4トレンチの土師器杯や埴輪の特徴などから6世紀後葉頃と考えられる。

(15) 黒田2号墳（花園町）

所在地 大里郡花園町大字黒田字上川端1898~1907

調査年月日 平成4年10月27日（火）~平成4年11月13日（金）（12日間）

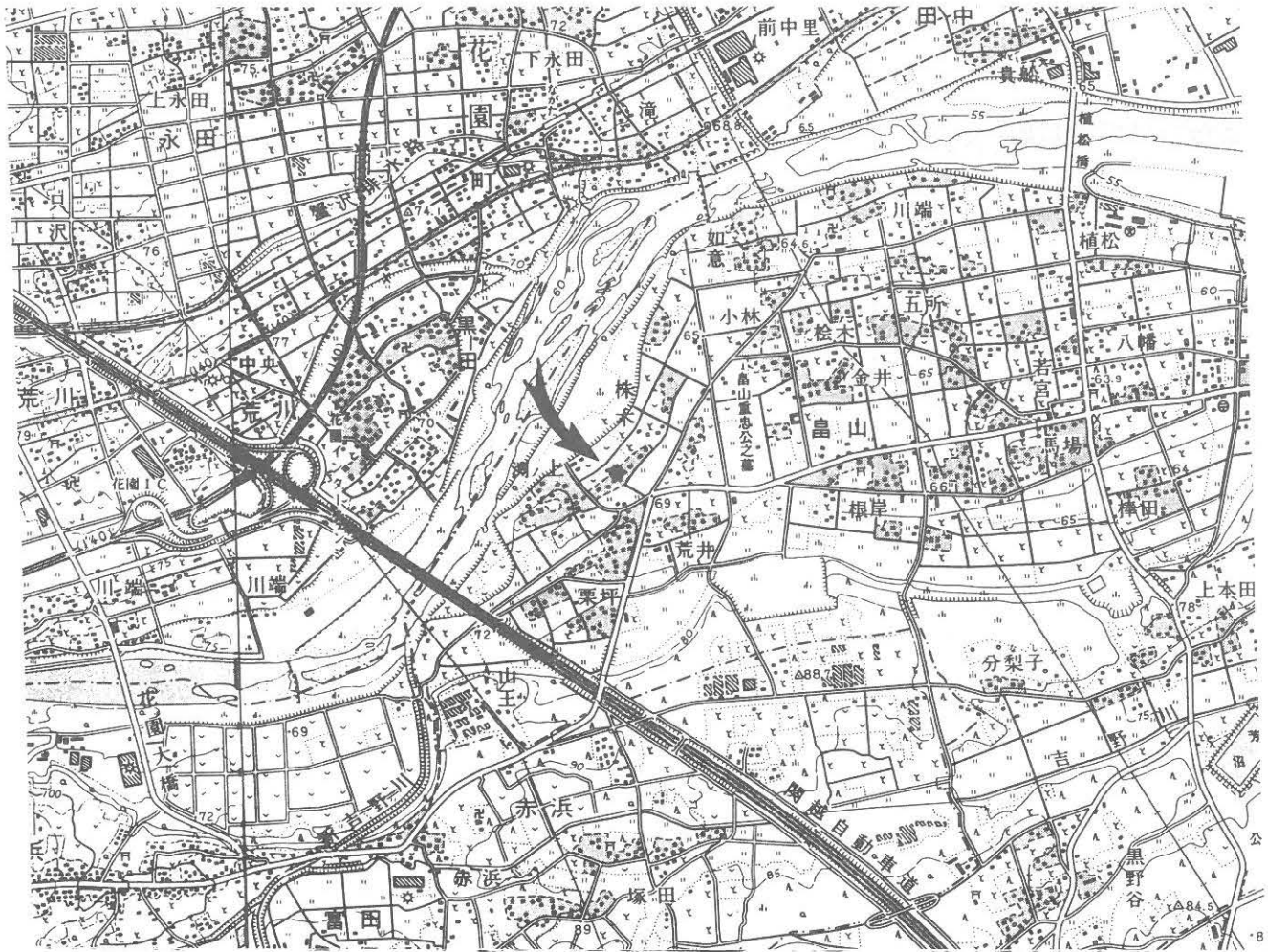
立地・現況 黒田古墳群は荒川中流域左岸の河岸段丘に所在する。東西約800m、南北約300mの範囲にあり、消滅したものを含めて総数22基が確認されている。2号墳は群の最西端部にあり、昭和49年に県営ほ場整備事業に伴い調査された1号墳・3号墳の中間の位置に現存している。

古墳の周囲はすべて畑地であり、墳丘裾部も西側の一部が小さな畔道状になっているのを除いたすべての部分で耕作が行われている。前方部が西南西方向に伸びる帆立貝形古墳とされているが、前方部にあたる墳丘南西部は大きく土取りされており、高さ1m以下のわずかな高まりが残っているだけである。後円部の東側も直線的に変形しており、墳丘中段あたりに新しい石垣が造成されている。この石垣に使われている石材は、黒田古墳群に使用されていた石室・葺石の用材とおなじ河原石であるので、別の古墳の石材を転用したものかもしれない。

この部分以外の後円部の墳丘は比較的良好に保存されており、丸い形をよく残していた。ただし、墳頂部には小さい盗掘坑がある。

調査の概要 黒田2号墳は、昭和62年度に県内主要古墳調査の一環として、埼玉県立さきたま資料館が測量調査を実施しているため、測量調査は省略し、昭和62年度の測量図を援用して、ただちにトレンチの設定にとりかかった。

調査は、墳丘の全長の確認のために東西の主軸方向に、東側に第1トレンチ、西側に第3トレンチ、後円部の径を確認するため後円部の南側に第2トレンチ、くびれ部位置の確認のために南側くびれ部付近に第4トレンチ、さらに前方部の開きを確認するために前方部南側に第5トレンチを設定して実施した。北側にトレンチを設定することが不可能だったため、前方部の形態を確定することはできなかった。



第36図 箱崎4号墳位置図

第1トレンチでは、幅3.9m、深さ0.5mの周堀を検出した。また、第3トレンチでは、幅2.3m、深さ0.3mの周堀を検出した。この2本のトレンチからは円筒埴輪片・形象埴輪片がわずかに出土したほか、追葬時以降に置かれたと思われる7世紀中葉頃の時期の土師器杯の完形品が、第3トレンチ周堀底部付近から出土した。この結果、古墳の全長は約41mであることが判明した。

第2トレンチでは、幅5.4m、深さ0.5mの周堀を検出し、後円部径が約30mであることが確認された。

第4トレンチでは、周堀の幅が大きく広がり、幅7.6m、深さ0.5mである。このトレンチは正確にはくびれ部位置に入らず、わずかに後円部寄りの位置にあたるということがわかった。そこで、トレンチを西側に拡張した。ここでは、石室用石材や葺石と思われる石材が多量に転落した状態で検出された。また、円筒埴輪・形象埴輪も出土したもののほとんどはこのトレンチからであった。くびれ部付近に多量の埴輪が樹立されていた可能性があるかもしれない。出土した埴輪は人物埴輪の頭部・胴部片、馬形埴輪片等の形象埴輪が大半で、円筒埴輪の方がむしろ少ないくらいであった。

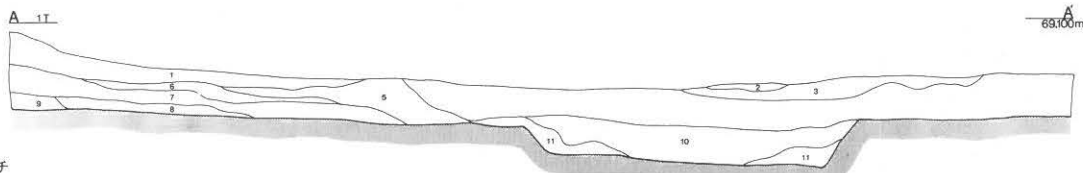
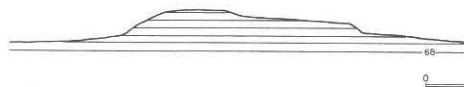
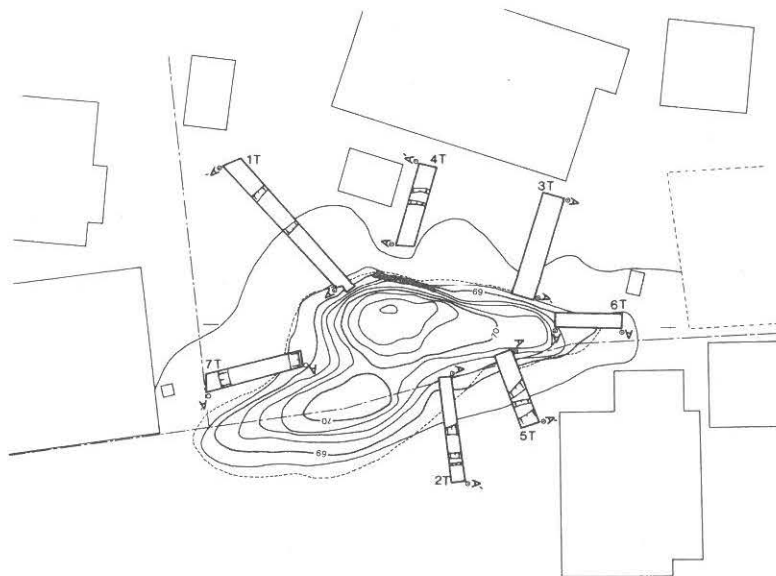
第5トレンチでは、周堀の幅が東西で異なっており、東壁部分で幅4.9m、西壁部分で2.75mであった。前方部側に行くほど狭く浅くなる傾向があることがわかった。深さは0.3mである。

第3・4・5トレンチで検出された周堀の状況からは、推定幅29m、長さ13mの前方部が考えられ、帆立貝形古墳であることが想定できる。

古墳の築造時期は、前方部の墳丘から採集した須恵器も含め、埴輪が形象埴輪主体となっていることや円筒埴輪の特徴などから、6世紀末葉頃と考えられる。

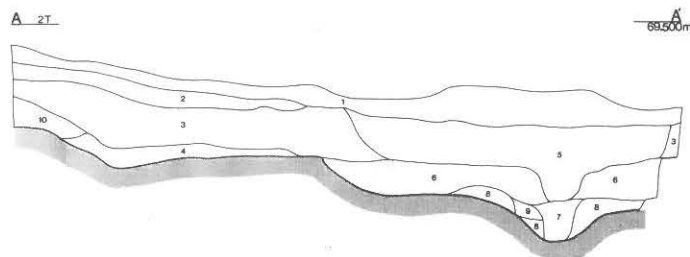
(16) 箱崎4号墳 (川本町)

所在地 大里郡川本町大字畠山字株木270~272



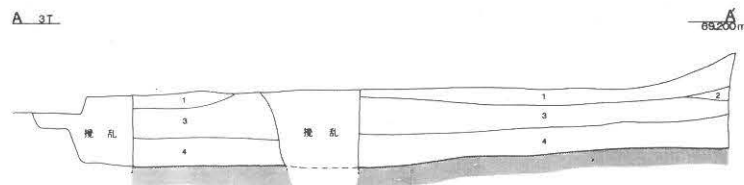
第1トレンチ

- | | | | |
|------------------|------------------------------|-------------------|-------------------------------|
| 1 暗褐色土 7.5Y R3/4 | 砂質土。小礫と砂が混じった土。表土。 | 8 暗褐色土 10Y R3/3 | 褐色土を斑状に含む。 |
| 2 茶褐色土 10Y R5/4 | 褐色土と黒色土が混じった土。表土。 | 9 黒褐色土 10Y R2/3 | 褐色土を斑状に含む。 |
| 3 炭化物層 10Y R2/1 | 砂質土にたき火跡の灰と炭化材が腐食して混入した土。表土。 | 10 黒褐色土 10Y R2/3 | 砂質に近いがしまりよい。5~10cm大の礫をやや多く含む。 |
| 4 暗茶褐色土 10Y R3/4 | 1~2cm大の礫をやや多く含む。 | 11 灰褐色砂礫 10Y R5/2 | 砂礫層。しまりが悪い。礫は大小多数。 |
| 5 茶褐色土 10Y R4/6 | 1~2cm大の礫をやや多く含む。 | | |
| 6 茶褐色土 10Y R4/3 | ローム粒を斑状に含む。 | | |
| 7 黒褐色土 10Y R2/3 | 褐色土粒を若干含む。 | | |



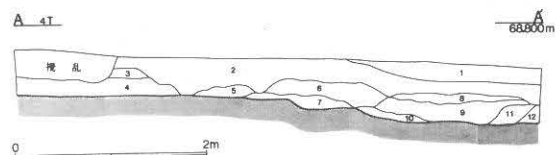
第2トレンチ

- | | |
|-------------------|--------------------------|
| 1 暗褐色土 10Y R3/3 | 小礫多く、たき火跡の炭化物を多量に含む。表土。 |
| 2 茶褐色土 10Y R4/3 | 砂質土。桑の根が多く入り、しまりが悪い。 |
| 3 茶褐色土 10Y R4/4 | 2より淡い色。桑の根多く、攪乱される。 |
| 4 暗褐色土 10Y R3/2 | 褐色土を少量含む。2~5cm大の礫を多量に含む。 |
| 5 茶褐色土 10Y R5/4 | 砂質。10~60cm大の礫を多量に含む。 |
| 6 茶褐色砂 10Y R5/3 | 3~7cm大の礫を多量に含む。 |
| 7 暗褐色土 10Y R3/3 | 砂質シルト質土。小礫をわずかに含む。 |
| 8 灰褐色砂 10Y R2/6 | 礫を多量に含む。 |
| 9 砂礫ブロック | |
| 10 暗茶褐色土 10Y R3/4 | やや砂質。2~5cm大の礫を多量に含む。 |



第3トレンチ

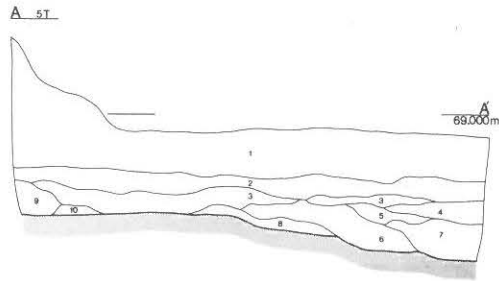
- | | |
|------------------|--------------------------------------|
| 1 暗茶褐色土 10Y R3/3 | 褐色土と暗褐色土が混じった土。 |
| 2 暗褐色土 10Y R2/3 | 黒色土と褐色土が混じった土。 |
| 3 茶褐色土 10Y R4/6 | 暗褐色土を若干含む。1cm大の礫をやや多く、10cm以上の礫も若干含む。 |
| 4 暗褐色土 10Y R2/3 | 褐色土を若干含む。1~2cm大の礫を少量含む。 |



第4トレンチ

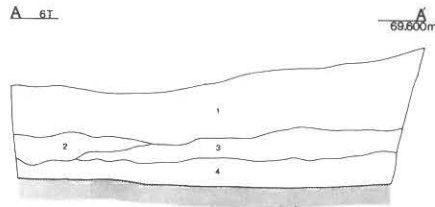
- | | |
|-------------------|------------------------------------|
| 1 暗茶褐色土 10Y R5/4 | 砂質シルト質。黄褐色土・暗褐色土・2mm大の礫を多量に含む。 |
| 2 茶褐色土 10Y R4/6 | 砂・1mm大の小礫をやや多く含む。たき火跡状の焼土も混じる。 |
| 3 暗茶褐色土 10Y R4/4 | 褐色土をやや多く、黄褐色土を少量含む。 |
| 4 黒褐色土 10Y P2/3 | 褐色土を少量、斑状に含む。 |
| 5 暗茶褐色土 10Y R3/4 | やや砂質。5mm大の礫を少量含む。 |
| 6 暗茶褐色土 10Y R3/4 | 砂質シルト質。5mm大の礫を少量含む。 |
| 7 灰褐色土 10Y R5/4 | 黄褐色砂質土主体。褐色土をやや多く、5mm大の礫を少量含む。 |
| 8 暗茶褐色土 10Y R4/4 | 砂質シルト質。5mm大の礫をこくわずかに含む。 |
| 9 暗茶褐色土 10Y R4/3 | 砂質シルト質。灰褐色土・黄褐色土を若干含む。2cm大の礫を少量含む。 |
| 10 灰褐色土 10Y R6/4 | 砂質シルト質。黒色土を若干含む。2cm大の礫をやや多く含む。 |
| 11 暗褐色土 10Y R3/3 | 砂質シルト質。灰褐色土を少量、5mm大の礫をやや多く含む。 |
| 12 暗茶褐色土 10Y R4/4 | 砂質シルト質。暗褐色土を若干、1cm大の礫を少量含む。 |

第37図 箱崎4号墳測量図(1)



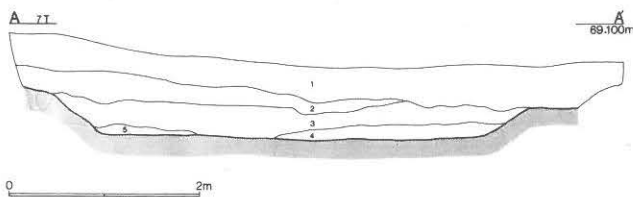
第5トレンチ

- | | | |
|----|-------|--|
| 1 | 礫層 | 茶褐色土 (10Y R4/3) をわずかに含み、間隙が大きい。攪乱。 |
| 2 | 淡茶褐色土 | 10Y R4/4 2~7 cm大の礫をやや多く含む。 |
| 3 | 暗茶褐色土 | 10Y R3/4 褐色土を若干含む。1~2 cm大の礫を若干含む。 |
| 4 | 茶褐色土 | 10Y R4/3 褐色土を少量含む。1 cm大の礫をわずかに含む。 |
| 5 | 暗茶褐色土 | 10Y R3/3 1 cm大の礫をわずかに含む。 |
| 6 | 暗褐色土 | 10Y R3/3 褐色砂質土を若干含み、やや砂質。2~5 cm大の礫を少量含む。 |
| 7 | 黒褐色土 | 10Y R2/2 褐色砂質土を若干含む。2~5 cm大の礫を若干含む。 |
| 8 | 褐色砂質土 | 10Y R4/6 黄褐色砂を若干含む。1 cm大の礫をやや多く含む。 |
| 9 | 暗褐色土 | 10Y R3/3 褐色土を少量含む。1 cm大の礫を少量含む。 |
| 10 | 茶褐色土 | 10Y R3/4 やや砂質。1 cm大の礫を少量含む。 |



第6トレンチ

- | | | |
|---|-------|---|
| 1 | 礫層 | 10~50 cm大の礫多量。暗褐色土 (10Y R3/2) をわずかに含む。間隙大きく、攪乱。 |
| 2 | 淡茶褐色土 | 10Y R5/4 1 cm大の礫を少量含む。 |
| 3 | 茶褐色土 | 10Y R4/4 5 mm大の礫を少量含む。褐色土を少量含む。 |
| 4 | 暗褐色土 | 10Y R3/3 わずかに砂質。褐色土を少量含む。 |



第7トレンチ

- | | | |
|---|-------|---|
| 1 | 暗茶褐色土 | 10Y R3/4 根が多く、攪乱されている。 |
| 2 | 茶褐色土 | 10Y R5/6 暗褐色土 (10Y R3/2) を少量含む。 |
| 3 | 暗褐色土 | 10Y R3/2 黄褐色土をやや多く含み、1~2 cm大の礫もやや多量に含む。 |
| 4 | 灰褐色土 | 10Y R5/3 暗褐色土を少量含む。 |
| 5 | 淡黄褐色土 | 10Y R6/4 やや砂質。暗褐色土を若干含む。3~5 cm大の礫を多く含む。 |

0 2m

第38図 箱崎4号墳測量図(2)

調査年月日 平成4年12月1日(火)~平成4年12月15日(火)(9日間)

立地・現況 箱崎古墳群は荒川中流域右岸の河岸段丘上に所在し、東西約800m、南北約250mの範囲に32基の古墳の分布が確認されている。花園町黒田古墳群とは荒川を挟んでお互いを見渡せるような位置関係にある。古墳数もそれぞれ20~30基という中小古墳群であり、性格も類似するかもしれない。箱崎4号墳は古墳群の東部にあり、周囲に3~4基の古墳の分布が確認されている。

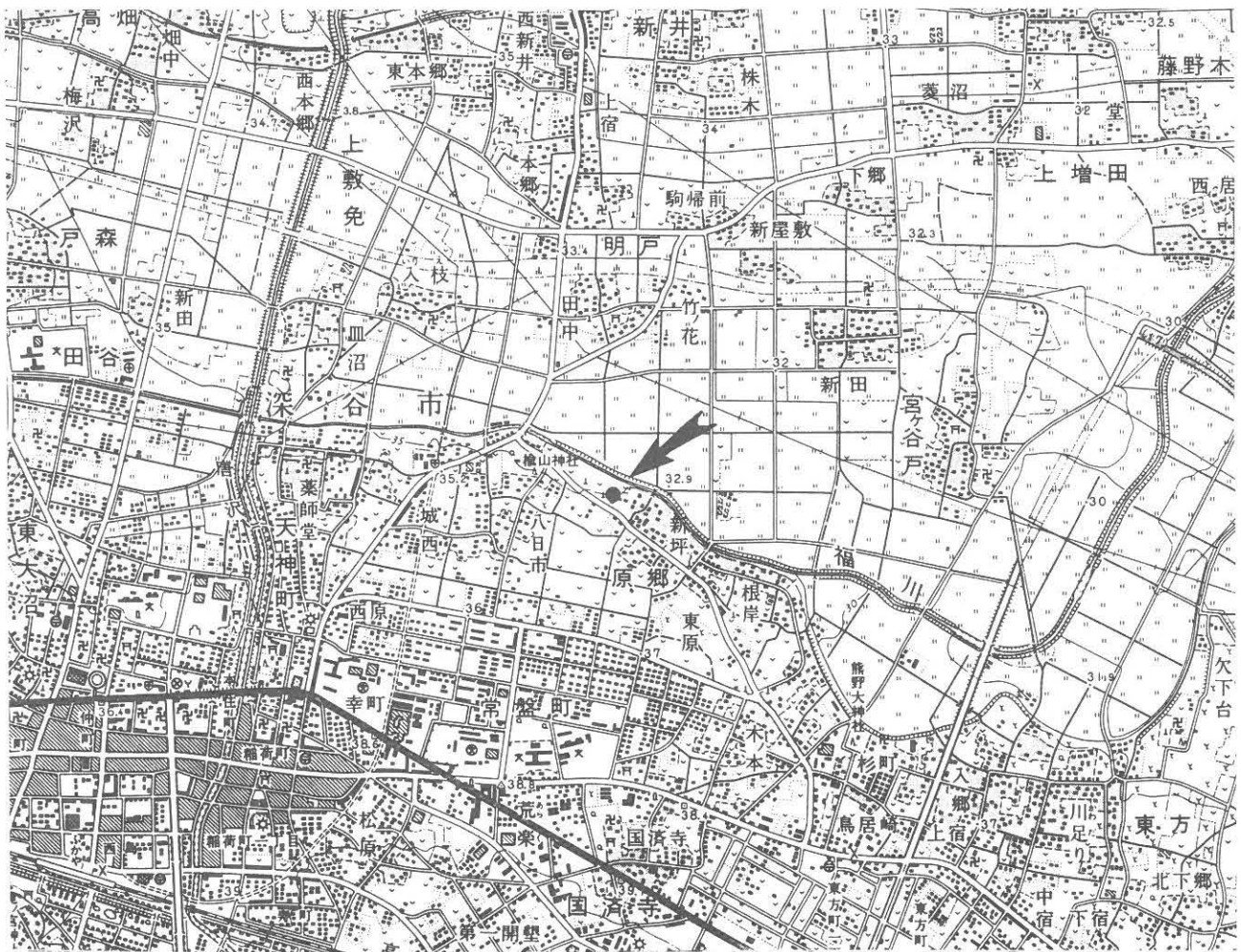
古墳は民家の裏山の状態になっており、土塁状に大きく変形していた。西側に細長く伸びる形態が残っていたため、前方後円墳状を呈していた。東側を後円部と考えた場合、後円部の南側はほぼ垂直に立ち上がっている部分があり、ここは墳丘の崩壊を防ぐためか石垣で固められていた。また、北側の墳丘外表部は一面に多量の河原石が置かれていたが、整然と積まれた状態には程遠く、乱雑に積み上げられたように見受けられた。なお、北側の土塁状の張り出しはもう一つ同じくくらいの大きさの墳丘を築いたようで、同じ墳丘の一部と考えてよいか、疑わしかった。

調査の概要 調査は、東側の推定後円部中心点の対角線方向に、南に第1トレンチ、北に第2トレンチ、前方部の形態確認のために推定前方部の南に第3トレンチ、北に第5トレンチ、西に第6トレンチ、さらに後円部径の確定のために後円部の南に第4トレンチ、東に第7トレンチを設定した。第1トレンチでは幅3.5m、深さ0.5mの周堀を検出した。第2トレンチでは幅3.4m、深さ0.8mの落ち込みが確認されたが、上に厚い二次堆積礫層が乗るため、周堀ではないかもしれない。

推定前方部の周辺では、第3・6トレンチで周堀が検出されず、北側の第5トレンチのみ深さ約0.4mの周堀を検出した。周堀は前方部の伸びる方向より南側に向かって余計に回り込んでいくように伸びていた。第5・6トレンチではやや大きく墳丘を断ち割ってみたが、推定前方部と見られていた部分のほとんどが二次的に積まれた礫の堆積と、それを被覆した表土であることが判明した。

第4トレンチでは深さ0.2mの周堀を検出したが、外側の立ち上がり部が家屋の下に入り込んでいるので、幅は確認できなかった。第7トレンチでは、内側の立ち上がり部が不明瞭であるが、幅5.0m、深さ0.3mの周堀を検出した。

第3・6トレンチで周堀が確認されなかったのは、それが石室の開口方向で、そこにブリッジがあったた



第39図 木の本10号墳位置図

めである、と考えるのが最も妥当であろう。第4トレンチと第3トレンチの間がくびれ部となり、第3トレンチが墳丘基底部の地山部分だとすると、前方部の開き方が不自然なほど大きくなってしまふからである。第3トレンチをブリッジと見たいもう一つの根拠は、第1トレンチ→第4トレンチ→第3トレンチと進むにつれて周堀の深さが浅くなるという事実である。勾配を考慮するならば、第3トレンチで自然に周堀がなくなるように周堀を掘るのは、黒田古墳群の例などからも十分ありうることである。

したがって、ここでは箱崎4号墳を、伝承されるような前方後円墳でなく、円墳と想定しておきたい。第1・2・4・7トレンチの調査結果からは、径17~18mの円墳に復原できる。そして、横穴式石室の開口方向である南西側は幅6m以上のブリッジ状態あるいは周堀が全周しない形態となる。

出土遺物は多くはなかったが、円筒埴輪片、形象埴輪片がある。これらから考えられる築造時期は6世紀末葉頃であろう。

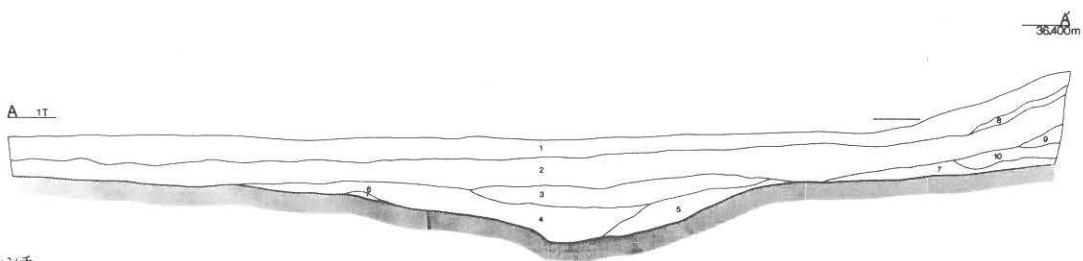
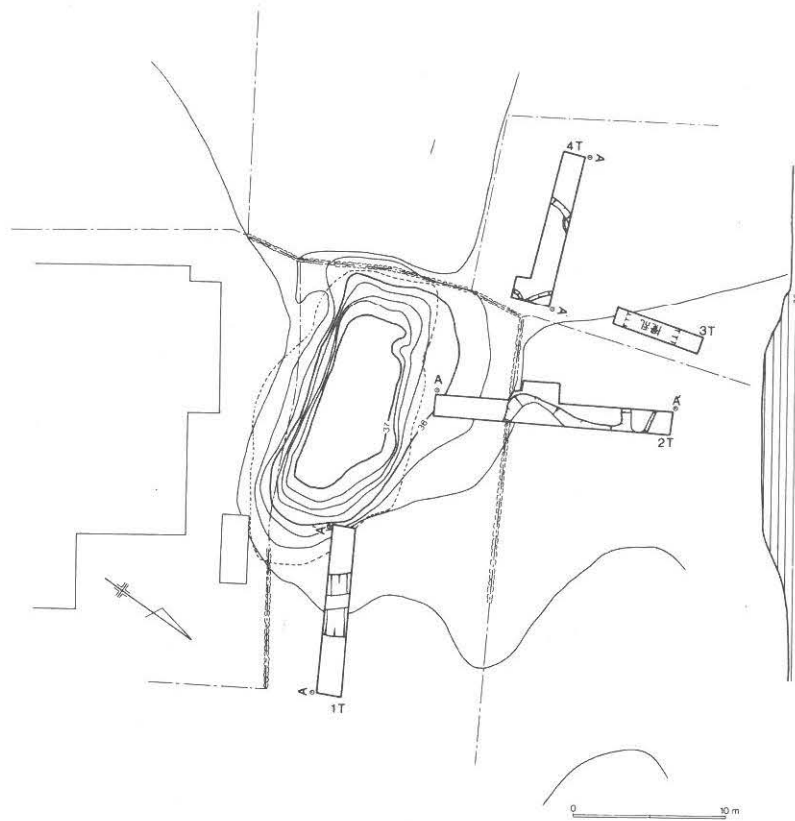
(17) 木の本10号墳（深谷市）

所在地 深谷市大字原郷1258-1

調査年月日 平成5年1月12日（火）～平成5年1月29日（金）（10日間）

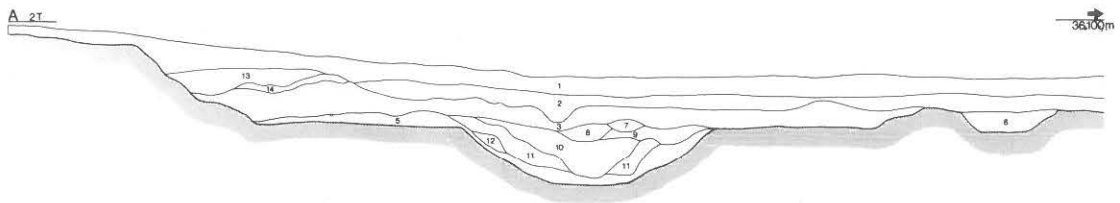
立地・現況 木の本古墳群は、櫛挽台地東縁部の福川右岸の台地上にあり、東西3,000m、南北300mの範囲に12基の古墳が現存している。多くは開墾によって破壊されており、かつては30~40基程はあったものと考えられる。10号墳は群の西部にあり、現福川に面する台地北側斜面を登り切った平坦面に立地している。

民家と墓地の裏側に所在する10号墳は、現況では円墳状を呈し、垣根で囲まれている。東側は民家の垣根によって切られ、半円形に残っているが、西側の畑地には埴輪片がかなり多く散布しているので、前方後円墳の可能性もあることが予想された。



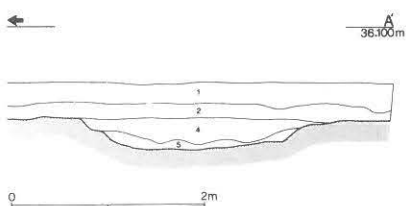
第1トレンチ

- | | | | |
|------------------|----------------------------------|-------------------|------------------------|
| 1 暗灰褐色土 10Y R4/2 | 表土。炭化物・近現代廃棄物多量に含む。攪乱。 | 6 黄褐色土 10Y R7/8 | ソフトローム。黒褐色土をわずかに含む。 |
| 2 褐色土 10Y R5/4 | 炭化物・近現代廃棄物多量に含む。客土多い。耕作土。 | 7 暗黄褐色土 10Y R5/6 | ローム土再堆積。暗褐色土を斑状に含む。 |
| 3 黒褐色土 10Y R2/3 | 黒色土主体。褐色土やや多量、ローム粒少量含む。 | 8 茶褐色土 10Y R4/3 | 砂質で、軟らかくしまりよい。天明期テフラカ。 |
| 4 暗茶褐色土 10Y R4/4 | 黒色土主体。ローム粒・焼土粒（ないし埴輪片粒）をやや多量に含む。 | 9 黒褐色土 10Y R2/2 | 黒色土主体。ローム土を少量含む。 |
| 5 暗茶褐色土 10Y R5/3 | ローム土やや多量に含む。4より明るい色。墳丘崩落土。 | 10 暗茶褐色土 10Y R3/4 | 黒色土主体。ローム土をやや多量に含む。 |

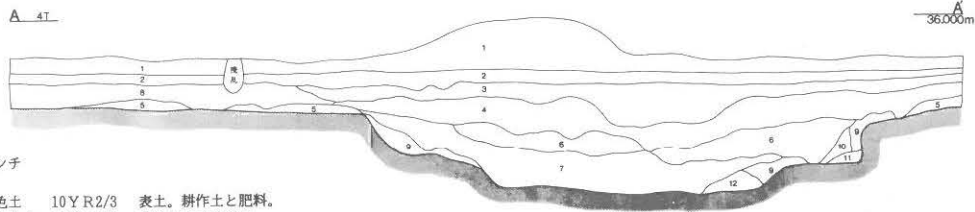


第2トレンチ

- | | |
|-----------------------|-----------------------------|
| 1 暗灰褐色土 10Y R5/2 | 表土。小礫・焼土粒を少量含む。攪乱。間隙大きい。 |
| 2 灰褐色土 10Y R6/2 | 小礫・焼土粒を少量、黒色土を多量に含む。耕作土。 |
| 3 暗褐色土 10Y R3/3 | ローム土少量含む。 |
| 4 黒褐色土 10Y R2/3 | 褐色土・ローム土をやや多量に含む。 |
| 5 黄褐色土 10Y R7/6 | ローム土再堆積。黒色土・褐色土をやや多量に含む。 |
| 6 暗褐色土 10Y R3/4 | 縄文期土壙覆土。ローム土をやや多量、黒色土を少量含む。 |
| 7 暗茶褐色土 10Y R3/4 | ローム土を少量含む。軟らかくしまりよい。 |
| 8 暗茶褐色土 10Y R3/4 | 7に類似。ローム土を多量に含む。 |
| 9 暗褐色土 10Y R3/3 | 色は濃い。ローム土を多量に含む。 |
| 10 暗褐色土 10Y R3/2 | 4よりやや淡い色。ローム土少量含む。 |
| 11 茶褐色土 10Y R4/3 | ローム土・黒色土を多量に含む。 |
| 12 暗黄褐色土ブロック 10Y R4/3 | ローム土と黒色土を混合した硬質土のブロック。 |
| 13 暗茶褐色土 10Y R4/4 | ローム粒・黒色土を少量含む。やや砂質。 |
| 14 茶褐色土 10Y R5/4 | 天明期テフラを多量に、黒色土を少量含む。砂質。 |

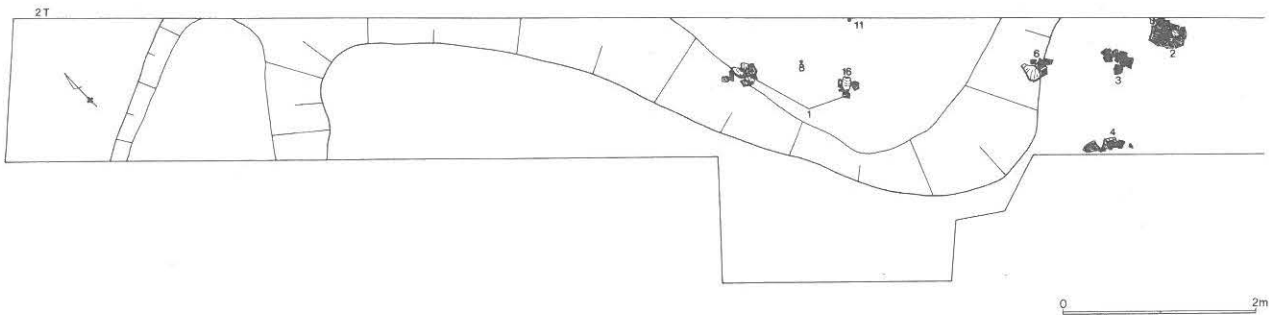


第40図 木の本10号墳測量図(1)



第4トレンチ

- | | | | | | |
|---------|----------|--|----------|----------|--------------------|
| 1 黒褐色土 | 10Y R2/3 | 表土。耕作土と肥料。 | 8 暗茶褐色土 | 10Y R4/4 | 小礫・ローム土をわずかに含む。 |
| 2 暗灰褐色土 | 10Y R5/3 | 耕作土直下の客土。 | 9 暗黄褐色土 | 10Y R6/8 | 5に類似。墳丘崩落土を含む。 |
| 3 暗茶褐色土 | 10Y R4/4 | ローム粒を少量含む。やや砂っぽい感じ。 | 10 暗褐色土 | 10Y R3/3 | ローム土を少量含む。 |
| 4 黒褐色土 | 10Y R2/1 | ローム土をわずかに含む。埴輪粒多量に混入。下層に部分的に天仁期テフラを含む。 | 11 暗茶褐色土 | 10Y R3/4 | ローム土を多量に含む。 |
| 5 暗黄褐色土 | 10Y R6/8 | ローム土主体。黒色土を少量含む。 | 12 黒褐色土 | 10Y R2/1 | 黒色土主体。ローム土をわずかに含む。 |
| 6 暗茶褐色土 | 10Y R4/3 | 黒色土を多量に含むが、全体的にやや淡い色。 | | | |
| 7 暗褐色土 | 10Y R2/2 | 下端はローム土・ロームブロックを多量に含むが、全体的には少ない。 | | | |



第41図 木の本10号墳測量図(2)

調査の概要 調査は、現存する墳丘の東側の宅地内と南側の墓地部分にトレンチを設定するのが、ほとんど不可能であったため、北側に第1トレンチ、西側に第2トレンチ、南西方向に第3・4トレンチを設定して進めた。第1トレンチでは、幅4.4m、深さ0.6mの周堀を検出した。第2トレンチではくびれ部と前方部左隅角部分及び前方部前面の周堀が検出された。このトレンチは当初くびれ部のみ確認されていたが、前方部の前面まで確認できそうであったため、外側に6m拡張して前方部前面を確認した。

くびれ部部分は、周堀の外側立ち上がり部を確認できなかったため、周堀幅は不明であるが、深さは0.7mである。

第3トレンチは前方部前面の周堀の続き、第4トレンチは南側くびれ部の確認が想定される位置に設定した。第3トレンチは、「天地返し」が行われたような後世の激しい攪乱にあっており、ほとんど地山の確認ができなかった。第4トレンチでは、幅5.3m、深さ0.9mの周堀と南側くびれ部を確認することができた。くびれ部付近の周堀から墳丘裾部への立ち上がりは急傾斜であり、前方部の前端部に向かうにしたがって傾斜が緩くなる傾向があった。

トレンチ3本の確認ではやや不安な点も残るが、木の本10号墳は、墳丘相似形に周堀が巡る帆立貝形古墳または造出し付き円墳であり、全長約41m、後円部径約34m、前方部幅約10~12m、前方部長約7mという数値を想定することができる。後円部あるいは円丘部が大きめで、前方部または造出し部が狭く短い形態である。

なお、第2・4トレンチからは多量の円筒埴輪片、女子人物埴輪頭部・馬形埴輪片・靱形埴輪片などの形象埴輪片が出土した。特に、第2トレンチからは後円部からくびれ部にかけて原位置に近い状態で墳丘テラス上に倒れた状態で出土した円筒埴輪が多かった。

これらの遺物から考えられる築造時期は6世紀の中葉を前後する頃と考えられる。

2 遺物の概要

ここでは発掘調査を行った古墳から出土した遺物の概要を述べることにする。胎土や色調などの詳細は観察表を参照されたい。

(1) 雷電塚古墳出土遺物 (第42・43図)

雷電塚古墳から出土した遺物には、円筒埴輪、朝顔形埴輪がある。いずれも全体を復原できる資料ではなく、一段目が残存している程度である。また、朝顔形埴輪はくびれ部でその形が判明するものなので、底部の形状は不明であり、円筒埴輪として報告した中にも朝顔形埴輪が含まれている可能性がある。実測できた資料は、すべてくびれ部に設定した1T出土のものに限られる。

円筒埴輪A類 (1・2・5・7・8) 底部径が13cm前後で、第一段高が13cm前後のもの。B類に比較し第一段高が高く、底部径は小さいことから、全体に細い印象を受ける。調整は外面タテハケ、内面ナナメハケを施すものとナデ調整のものがある。焼成は硬質のものが多く、須恵質や焼けむら、器壁に亀裂があるものも存在する。透孔は円形が確認でき、突帯は台形もしくはM字形を呈するが、B類に比べしっかりしたものが多し。なお、5は全体の形状は他のA類と同一であるが、底部径15.2cm、第一段高15cmとやや大きい。朝顔形埴輪の可能性も存在するが、ここでは円筒埴輪として把握しておきたい。

円筒埴輪B類 (3・4) 底部径が16cm前後で、第一段高が10cm前後のもの。A類に比較し第一段高が低く、底部径は大きいものであり、全体につぶれた印象を受ける。調整、胎土はA類とほぼ同一であるが、色調は赤色、赤橙色を呈する。透孔は円形が確認でき、突帯はつぶれたM字形である。

朝顔形埴輪 (6・9~12) 9・10はくびれ部分の破片であり、体部径などは不明。11・12はやや残存状態が良い資料であり、これらを参考にすると朝顔形埴輪の体部は径19・22cmの寸胴なものである。円筒埴輪が底部から上方にやや開いていく形態をもつことから、明確に分離することができる。このことから、6に関しても体部径や寸胴な形態から朝顔形埴輪の可能性が高い。調整、胎土、焼成などは円筒埴輪とほぼ同一で、色調は赤色や褐灰色を呈する。突帯はM字形で、透孔は円形が確認できる。

小 結 雷電塚古墳の築造年代は出土した埴輪から6世紀中葉頃に位置付けることができよう。

(2) 大類2号墳出土遺物 (第44図)

大類2号墳から出土した遺物には、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪(人物、不明)、土師器がある。円筒埴輪・朝顔形埴輪は相当量が存在するが、いずれも細片となっており、体部径などを具体的に復原できる資料は存在しない。

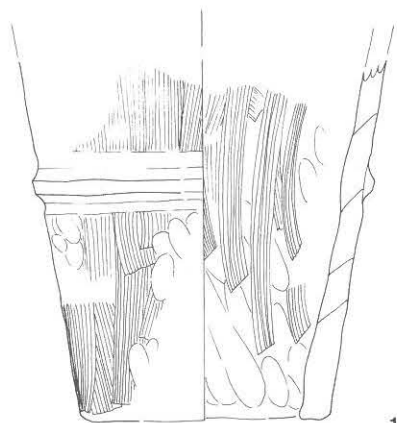
円筒埴輪・朝顔形埴輪 (1~5) 突帯はM字形、台形であるがいずれもシャープさはなく、透孔は円形を確認することができる。外面はタテハケ、内面はナデ調整である。焼成は良好であるが、砂質であるため表面の剝離が著しい。

人物埴輪 (6) 人物埴輪の台部と考えられ、体部径は16.4cm、低い台形の突帯の直下に径3cmの円形の透孔を穿つ。底部と上部を欠損している。外面ナナメハケ、内面斜位のナデ。胎土、焼成、色調などは円筒埴輪とほぼ同一である。

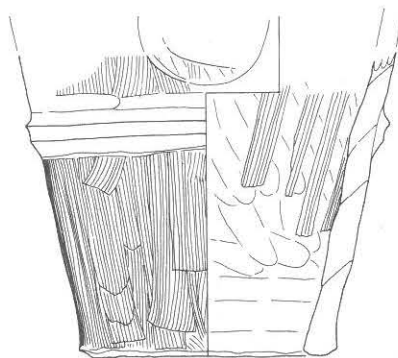
不明形象埴輪 (7) 胎土、焼成、色調などが円筒埴輪とほぼ同一であり、内・外面の調整はナデ調整の不明形象埴輪である。粘土紐の接合痕、表面の磨滅度などから、上方に開く形態の円筒部に上向き突帯を貼り付けたものである。上端径は13.1cm、下端径は10.2cmを測る。現状では何を表現したものかは不明である。

土師器 (8) 器高7.45cm、口径14.7cm、頸部径14.2cm、体部最大径14.8cm。いわゆる比企型坏と呼ばれるものである。外面の肩部より上と内面に赤彩を施す。外面は肩より上ヨコナデ、下ヘラ削り、内面ヨコナデ、底部は不定方向のナデ。他に図化できなかったが、やや大きい比企型坏が出土している。

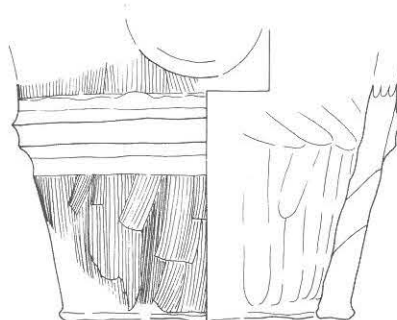
小 結 大類2号墳の築造年代は出土した埴輪、土師器などから6世紀前葉から中葉頃と考えられる。



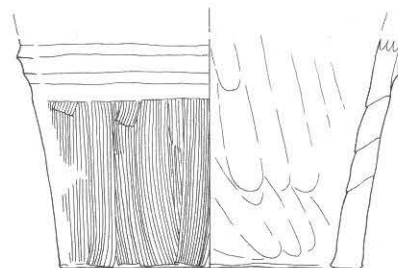
1



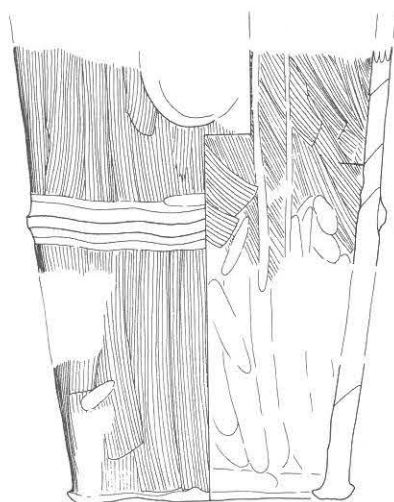
2



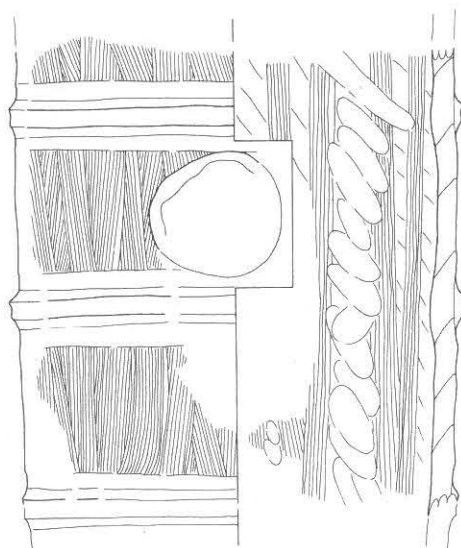
3



4



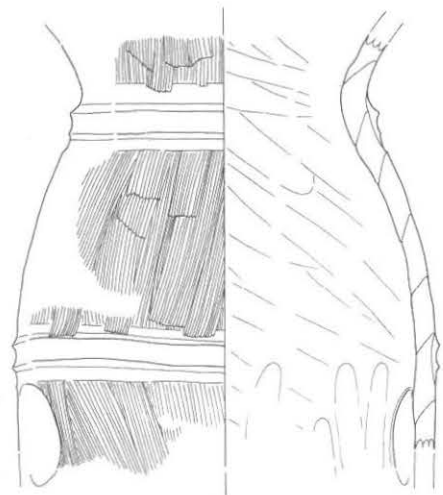
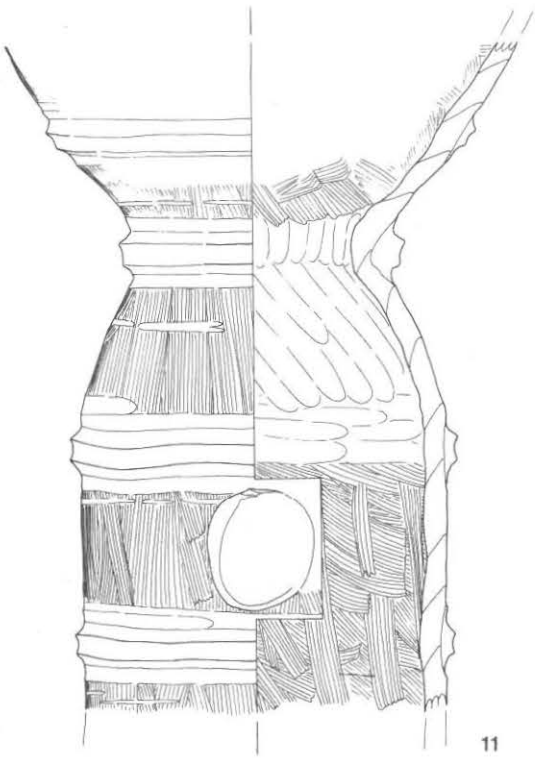
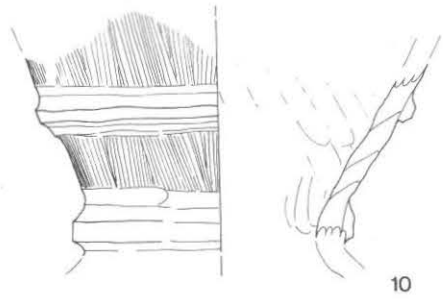
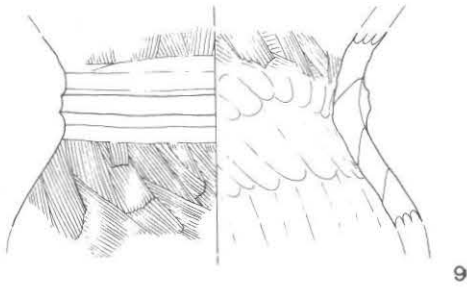
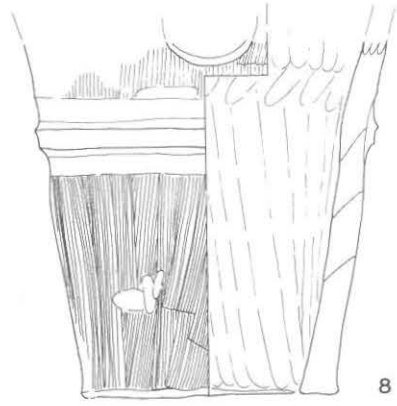
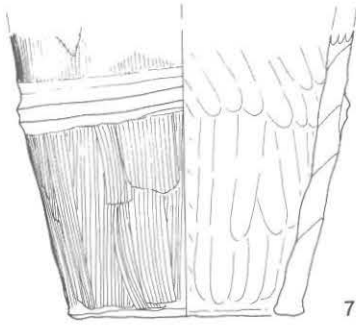
5



6

0 10cm

第42図 雷電塚古墳出土遺物(1)



0 10cm

第43図 雷電塚古墳出土遺物(2)

(3) 天神山古墳出土遺物 (第45図)

天神山古墳から出土した遺物には、土師器がある。2時期の土器が混在しており、坏2点は後世の所産と推察される。

土師器 (1~3) 1は復原口径30cmの大型の複合口縁壺であり、内面には赤彩を施す。内・外面ともにヨコナデ、焼成は良好である。2・3はいわゆる比企型坏である。いずれも浅く、やや小型の坏である。外面肩部より上と内面に赤彩を施す。外面は肩より上ヨコナデ、下ヘラ削り、内面ヨコナデ。

小 結 天神山古墳の築造年代は墳形が前方後方墳であり、1が五領期の所産と考えられることから、4世紀後葉頃に位置付けることができる。2・3の資料は6世紀後葉頃の所産であり、天神山古墳の築造時期を示すものではない。

(4) 根岸稲荷神社古墳出土遺物 (第46図)

根岸稲荷神社古墳から出土した遺物には、弥生土器、土師器、円筒埴輪がある。全体として出土遺物は少量で1を除いては小破片のみである。

弥生土器 (1) 器高34cm、口径19.6cm、頸部径12.5cm、体部最大径24.6cm、底部径7.4cmを測る。口縁部には幅1cmの粘土紐を三段に貼り付け、ヨコナデを施す。頸部は縦位のヘラ磨きであり、肩部に三段に亘る縄文を施す。下半部の上位には斜位のヘラ磨き、下位には縦位のヘラ磨きを施す。内面はナデ調整である。焼成は良好で黒斑がある。一応弥生土器の範疇として把握しておく。

土師器 (2~4) 2は壺底部の破片で底径7cm、焼成後穿孔されている。外面はヘラ磨き及びハケ、ヨコナデを施し、内面はナデ調整、黒斑がある。3は小型鉢底部の破片で底部径3.6cmを測る。外面は板ナデ、ヨコナデ、内面はナデ調整。焼成はやや軟質で黒斑がある。4は複合口縁の壺であり、口縁部には羽状縄文の後ヨコハケを施す。頸部はタテハケ後ヨコハケ、内面はナデ調整。外面に赤彩がある。

円筒埴輪 (5) 円筒埴輪の底部の破片で、残存高7cmを測る。外面タテハケ、内面ヨコナデを施す。

小 結 1はいわゆる吉ヶ谷式系の壺であり、根岸稲荷神社古墳に伴うものかどうか疑問も残る。しかし、2Tの周溝底から40cm浮いたところから完形で出土しており、一応古墳に伴うものとして把握しておきたい。土師器はいずれも五領式の範疇に入ると考えられ、4世紀前葉頃に位置付けることができよう。5の円筒埴輪は他古墳からの混入と思われる。

(5) 山の根古墳出土遺物 (第47図)

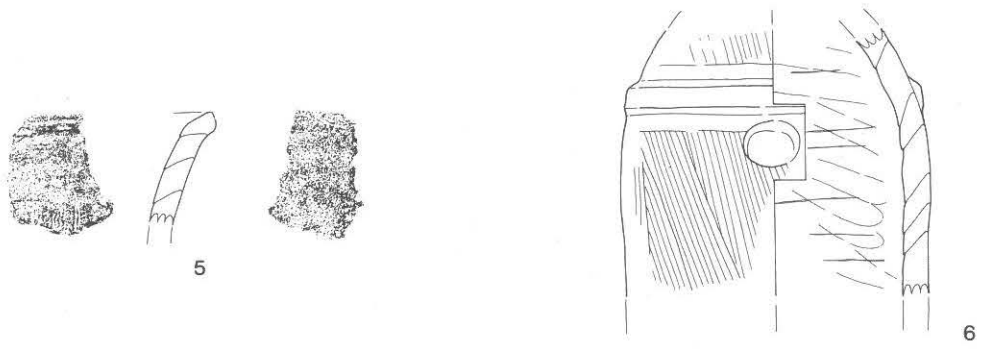
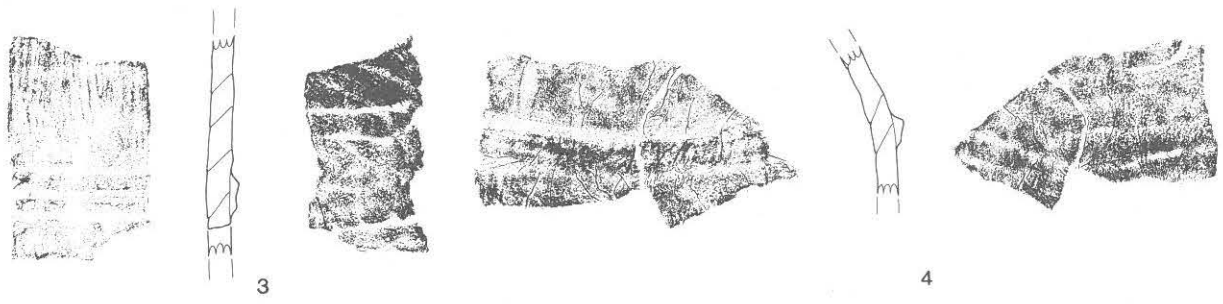
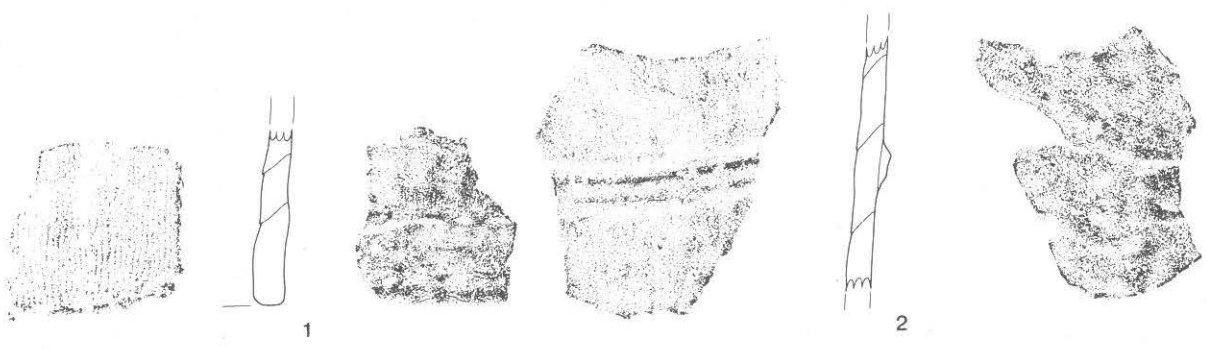
山の根古墳から出土した遺物には、土師器がある。図示し得たものは8点であるが、他は細片となっており、器形などの判別できるものはない。

土師器 (1~8) 1は複合口縁の壺であり、頸部の屈曲が強い。調整は焼成が軟質であることと、胎土が砂質であるために識別できない。2~5は甕の破片で、2・3は平底部、4は口縁部、5は体部である。焼成は軟質なものが多く、調整も外面のハケメが薄く見える程度である。内面はナデ調整。6は器高7~7.6cm、口径8.5cm、底部径8.5cmを測るやや大型の鉢であり、底には木葉痕が残る。口縁部上面には粘土紐の接合痕が残っていることから、ある部分まで粘土紐を積み上げたあとヘラ状工具で切り離したと考えられる。外面上半はナデ、下半はヘラ磨き、内面はヘラ削り後ヨコナデ。焼成は良好で内・外面に黒斑がある。7は甕で口径16cm、体部最大径23.8cmを測る。外面口縁部はヨコナデ、他はナナメハケ、内面はナデ調整、焼成はやや軟質であり黒斑がある。8は器高15.5cm、口径23.7cm、脚部径13.7cmを測る高坏である。外面は脚部上半はヨコナデ、他はヘラ磨き、内面坏部は器面が荒れているため不明、脚部はヨコハケ及びナデ調整。脚部には6個の透孔が千鳥状に配される。

小 結 山の根古墳の築造年代は、8の高坏脚部の透孔の数、坏部径の約1/2が脚部径となる形態、脚部の開きなどから五領式でも古相に位置付けられ、4世紀前葉頃に位置付けることができよう。

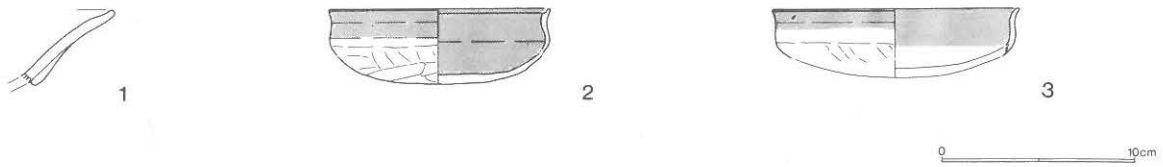
(6) 天神塚古墳出土遺物 (第48図)

天神塚古墳から出土した遺物には、円筒埴輪、形象埴輪(人物)がある。出土量はあまり多くなく、いずれも細片となっており体部径などを具体的に復原できる資料は存在しない。



0 10cm

第44図 大類2号墳出土遺物



第45図 天神山古墳出土遺物

円筒埴輪（1～5） 突帯は台形もしくはややつぶれたM字形、透孔は円形を確認することができる。外面タテハケ、内面タテハケもしくは縦位のナデ。焼成は良好であるが胎土が砂質のため、表面の剝離がある。

人物埴輪（6） 人物埴輪の腕部の破片である。中実の作りで、表面はナデ調整、胎土、焼成は円筒埴輪と同一である。

小 結 天神塚古墳の築造年代は短冊形の横穴式石室であることと、出土した埴輪の諸特徴から6世紀後葉頃に位置付けることができよう。

(7) 長沖157号墳出土遺物（第49図）

長沖 157号墳から出土した遺物には、円筒埴輪がある。出土量はあまり多くなく、いずれも細片となっており、4を除き体部径などを具体的に復原できる資料は存在しない。

円筒埴輪（1～6） 突帯は突出度の高い台形、透孔は半円形を確認することができる。外面は6の資料が一次調整のタテハケであるので、第一段がタテハケ、第二段より上は二次調整のB種ヨコハケ、口縁部はナナメハケが確認される。内面は縦・斜位のナデ。焼成は良好で黒斑があり、外面には赤彩がある。

小 結 長沖 157号墳の築造年代は、出土した埴輪から5世紀中葉頃に位置付けることができよう。

(8) 白岩銚子塚古墳出土遺物（第50図）

白岩銚子塚古墳から出土した遺物には、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪（馬、^鞆）がある。出土量はあまり多くなく、いずれも細片となっており、体部径や全体の形状などが復原できる資料は存在しない。

円筒埴輪・朝顔形埴輪（1～5） 突帯は3を除き比較的しっかりした台形で、口縁端部も丁寧なヨコナデを施す。外面はタテハケ、内面ナナメハケ及び斜位のナデ。焼成は良好、色調は橙色を呈する。

馬形埴輪（6） 馬形埴輪の鈴部分の破片である。表面はナデ調整、裏面は剝離している。

不明形象埴輪（7） 台形の突帯を二条貼り付け、図面上の下方に透孔を穿っている。形状からは何を表現したものか不明であるが馬形埴輪である可能性が高く、上下を逆にした場合、面繫及び引手部分と考えることも可能である。内・外面ナデ調整、焼成は良好である。

鞆形埴輪（8） 鞆形埴輪の右鱗部分の破片である。前面には櫛状の断面台形の突帯を貼り付け、ナデ調整を施す。後面はヨコハケ後斜位のナデ。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

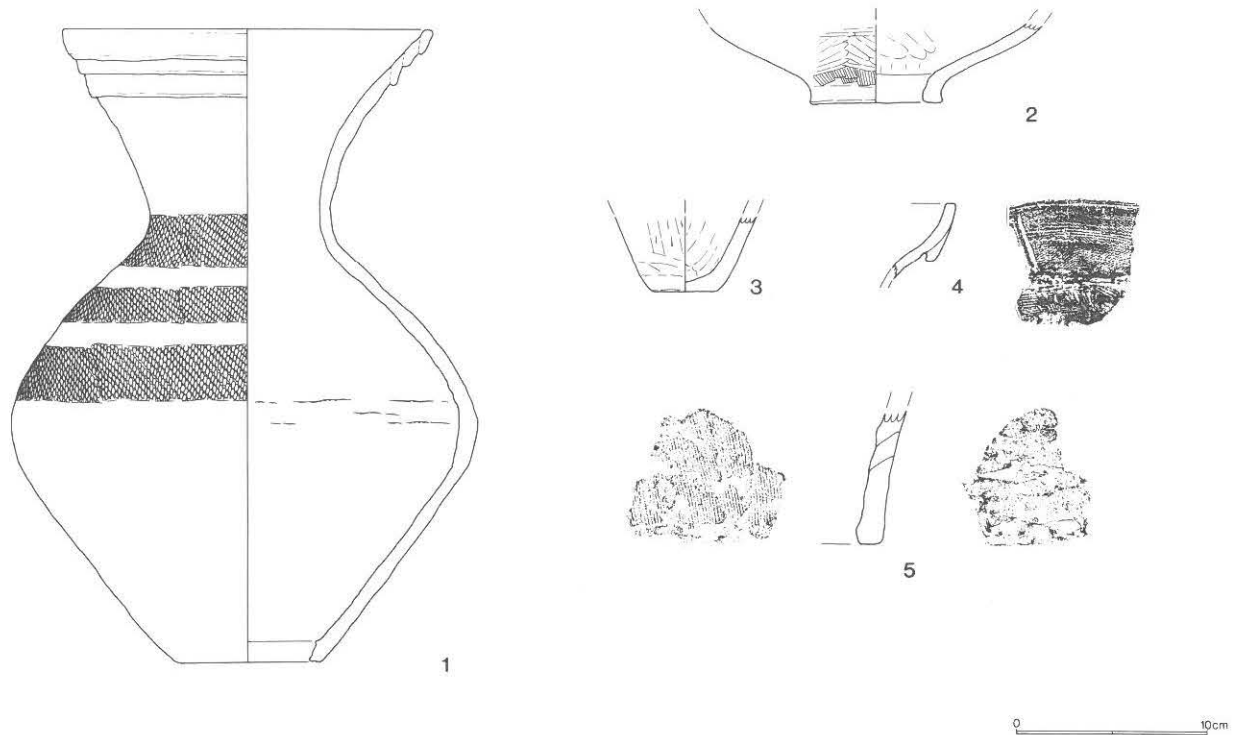
小 結 白岩銚子塚古墳の築造年代は、出土した埴輪から6世紀前葉から中葉頃に位置付けることができよう。

(9) 目沼10号墳出土遺物（第51～54図）

目沼10号墳から出土した遺物には、円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪（人物、馬、家）がある。形象埴輪に関しては、いずれも細片であり全体を復原できる資料は存在しない。

円筒埴輪A1類（1・3・7・8・19） 底部から口縁部まで直線的に開いていく形態のもので、透孔が半円形であることを指標とする。この中でも1・3・7は突帯が三角形であり、8・19は突帯がM字形を呈する。外面はタテハケ、内面は上半がナナメハケ、下半が縦位のナデ。また、1・3は内面上半のナナメハケの上に一部縦位のナデを施している。1・7・8の内面上方にヘラ記号がある。焼成は良好で、色調は浅黄橙色、淡橙色、1・19には赤彩がある。19は4 Tにおいて検出された埴輪棺である。

円筒埴輪A2類（4・6・9～12・17・18・20） 底部から口縁部まで直線的に開いていく形態はA1類と同様であるが、透孔が円形であることを指標とする。突帯はM字形もしくは台形である。透孔は円形



第46図 根岸稲荷神社古墳出土遺物

であるが、6・9・12・18・20は透孔の周りに円形のユビナデがある。外面はタテ・ナナメハケ、内面は上半がナナメハケ、下半が縦位のナデ。4・10・12・17・18・20にヘラ記号がある。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈し、第一段目が極めて長い11のみ淡橙色、明褐灰色を呈する。また、20は他とやや形態を異にし、第三段目が長くなるものであり、第一段目には部分的にヨコハケを施す。しかし突帯の形状、透孔の周りにユビナデがあることなど、A 2類の範疇に入るものと考えられる。9・12・17・18・20には赤彩がある。17・18・20は4 Tにおいて検出された埴輪棺である。

円筒埴輪B類 (2・5) 器高がA類に比べ低く、その分やや縦につぶれた形態を呈するものである。突帯は三角形か三角形に近い台形、透孔は半円形である。外面はタテハケ、内面は上半がナナメハケ、下半が縦位のナデ。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。

朝顔形埴輪 (13~16) 円筒部は三条突帯で、二・三段目に半円形の透孔を穿つ。14は比較的背が高くなるもので、16はやや縦につぶれた形態を呈する。突帯は三角形である。外面はタテハケ、内面は縦位のナデ、口縁部は斜位のナデを施すものとナナメハケのものがある。焼成は良好で、色調は浅黄橙色、淡黄色、黄灰色を呈し、一部須恵質の個体もある。

人物埴輪 (22) 美豆良の破片である。表面はナデ調整、焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。

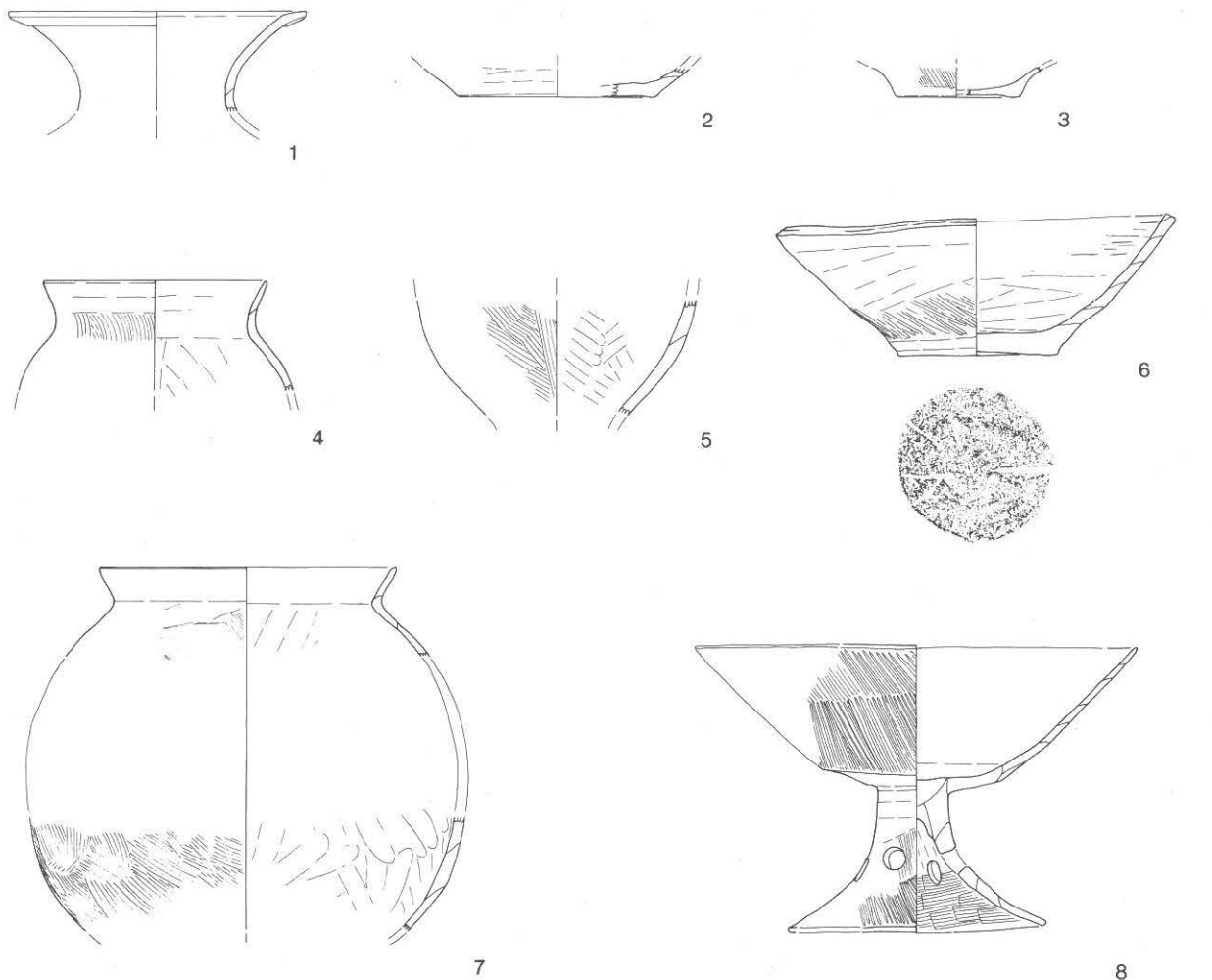
馬形埴輪 (21) 馬形埴輪の鞍もしくはタテガミの破片である。表面はタテ・ナナメハケ、接合部と端部はヨコナデを施す。焼成は良好で、色調は浅黄橙色である。

家形埴輪 (23) 家形埴輪の堅魚木の破片である。棟押さえの板の上に据え付けるための刻みを下半に入れている。表面は剝離が著しく調整は不明である。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。

小 結 目沼10号墳の築造年代は、出土した埴輪の諸特徴から6世紀前葉頃に位置付けることができる。

(10) 舟塚古墳出土遺物 (第55図)

舟塚古墳から出土した遺物には、円筒埴輪、形象埴輪(人物、盾、不明)、土師器がある。出土した埴輪は相当量が存在するが、いずれも細片となっており、体部径や全体の形状などが復原できる資料は存在しない。また、土師器には別の周溝墓に伴うものも含まれている。



第47図 山の根古墳出土遺物

0 10cm

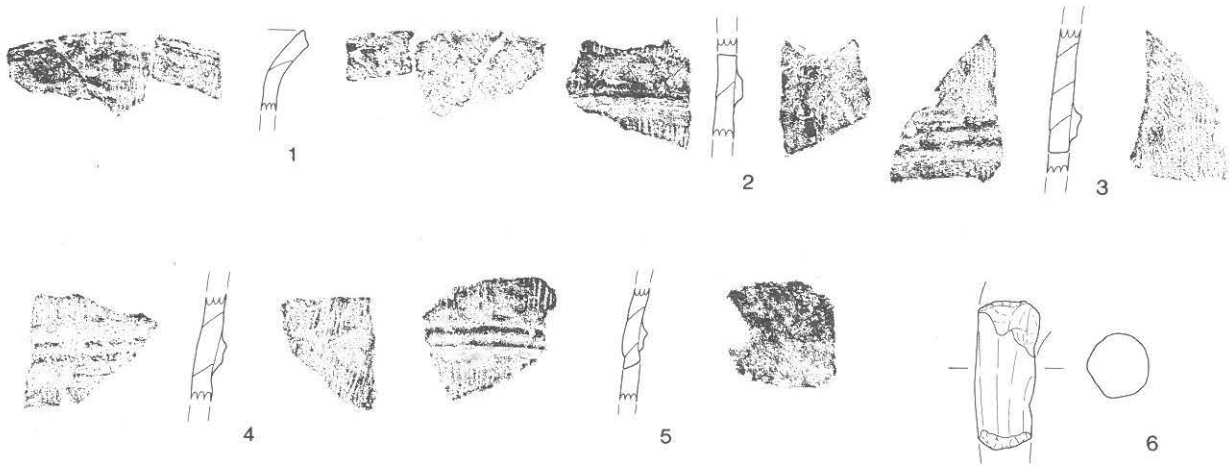
円筒埴輪（1～3） 突帯は台形。外面はタテハケ、内面はナナメハケ、口縁部付近はヨコハケ及びヨコナデ。焼成は良好であり、色調は赤色を呈する。

人物埴輪（4～7） 4は腕の付け根部分の破片である。中実の腕であり、表面はナデ調整。焼成は良好で、色調は浅黄橙色、橙色を呈する。5は男子の振り分け髪の破片と考えられる。表面はナデ調整、焼成は良好、色調は橙色を呈する。6は眉から目にかけての破片であり、諸特徴が5と近似することから、同一個体の可能性が高い。7は体部裾にあたる破片であろう。外面はタテハケ、内面はナデ調整。焼成は良好であるが、表面はもろい。色調は橙色を呈する。

盾形埴輪（9） 盾もしくは鞆の破片。鱗部分は剥離している。前面はナデ調整、後面はナナメハケ、接合部はタテハケである。焼成は良好で、色調は赤橙色を呈する。

不明形象埴輪（8・10） 8は板状の器壁に突出度の高い突帯を貼り付けたもので、下方には段差のある透孔をもつ。家形埴輪などが考えられるが詳細は不明である。外面はタテハケ、内面はナナメハケ。色調は赤色を呈する。10は径6cmの円筒状の破片であり、動物埴輪の足、水鳥などの首が考えられる。外面は縦位のナデ、内面は斜位のナデ。焼成は良好で、色調は赤橙色を呈する。

土師器（11～13） 11は模倣坏である。口縁部と底部の境に明瞭な稜をもち、外面の口縁部はヨコナデ、底部はヘラ削り、内面はヨコナデ後暗文状のヘラ磨きが施される。焼成は良好で、色調は外面橙色、内面にぶい橙色を呈する。12は4 Tにおいて検出された周溝墓の周溝から出土した壺である。やや胴の張る球



第48図 天神塚古墳出土遺物

0 10cm

形の胴部から、緩やかに開く口縁部に至る。外面はタテハケ、胴部中間はヨコハケ、下半はナナメハケ及び波状のヘラ磨き、内面は口縁部にヨコハケ、頸部はヘラ削り、胴部はナデ調整を施す。外面の一部に赤彩が残る。焼成は良好で黒斑があり、色調はにぶい黄橙色を呈する。13は複合口縁の壺の破片である。口縁部には縄文を羽状に三段に配し、中段には円形浮文を8個貼り付ける。外面の頸部は縦位のヘラ磨き、内面は縦・横位のヘラ磨きを施す。内面には赤彩がある。焼成は良好で、色調は黄褐色を呈する。

小 結 舟塚古墳の築造年代は、出土した埴輪、11の土師器・坏の形態から6世紀後葉頃に位置付けることができよう。12・13は舟塚古墳の周囲に存在する周溝墓に伴う資料である。

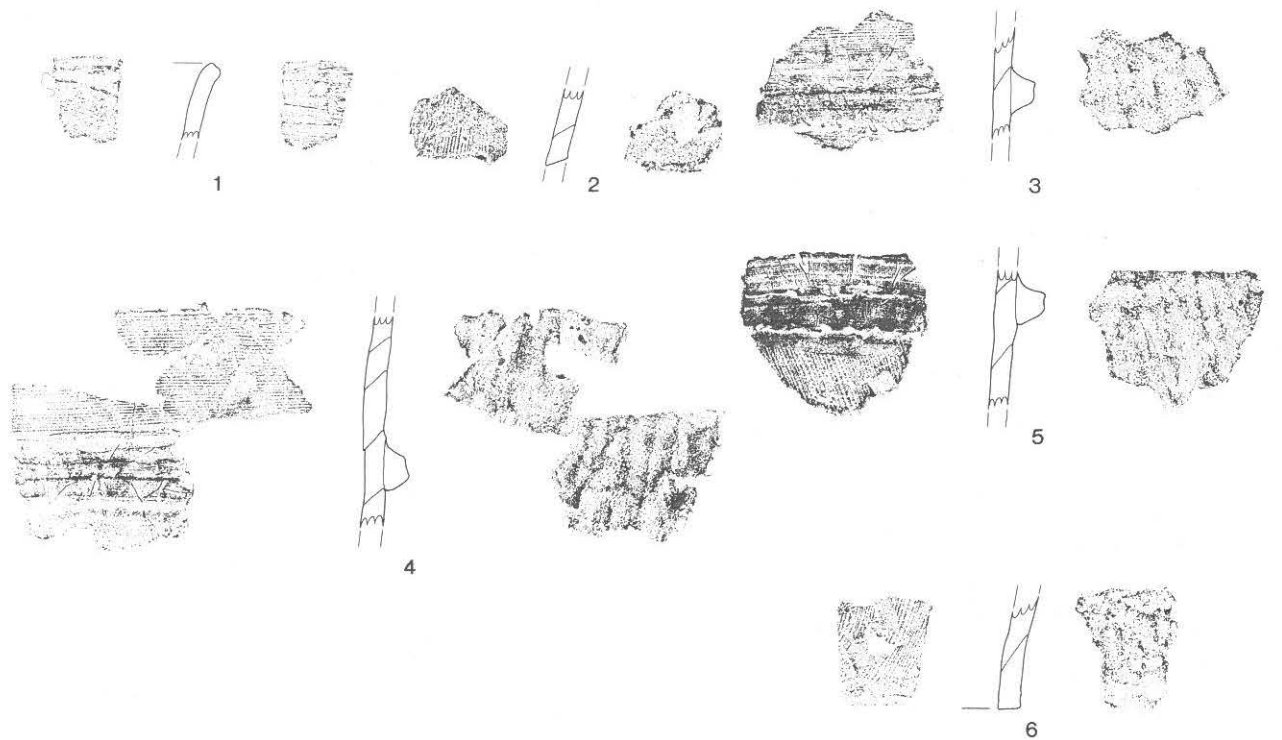
(11) 黒田2号墳出土遺物 (第56～58図)

黒田2号墳から出土した遺物には、円筒埴輪、形象埴輪(人物、馬)、土師器、須恵器がある。一部を除き細片となっている資料が多いが、形象埴輪の種類や数量は相当多かったことが予想される。

円筒埴輪(1・2) 1は第二段目、2は第一段目の破片である。突帯はつぶれたM字形、透孔は円形。外面はタテハケ、内面はナナメハケ及びナデ調整。外面の底部には底部調整のヘラ削りが存在する。焼成はやや軟質で、色調は赤色を呈する。ハケメは極めて粗いものである。

人物埴輪(6～21) 6～9は武人埴輪の破片である。頭部には脇立、鍔の表現があり、脇立には円形浮文による鋌を貼り付けている。首には円形浮文の首飾りが、肩部には肩甲、前後には胸甲の表現がある。7の資料から腕は極めて短いものであったと思われる。内・外面はナデ調整である。目から頬にかけての三角形の部分と脇立の前端部に赤彩が確認できる。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。少なくとも3個体の武人埴輪が存在していたことが分かる。10・11は美豆良の破片で、おそらく武人埴輪に伴うと考えられる。内・外面はナデ調整である。12～14は顔面部の破片で、男女の識別はできない。12・13の内・外面はナデ調整、14は外面ナデ調整、内面ナナメハケ。焼成は良好だが表面の剝離がある。15は大型の人物埴輪腕部の破片である。中実の作りで、表面はナデ調整、一部に赤彩が確認される。16は男子顔面部の破片であり、美豆良の剝離痕が存在する。武人埴輪よりもかなり大型で、顔面赤彩も鼻、額から頬にかけて帯状に確認される。外面ナデ調整、内面ナナメハケ。焼成は良好であるが、表面の剝離がある。色調は橙色である。17は女子島田髻の破片である。表・裏面ハケ調整。焼成は良好で、色調は赤橙色を呈する。18～21は人物埴輪の破片と考えられるが、男女の識別はできない。18は腰部、19は中実の腕部、20は勾玉状土製品、21は男子の振り分け髪破片である。

馬形埴輪(22～28) いずれも破片となっており、全体の形状を復原できる資料はない。22は耳部、23は顔面の面繫と引手の部分、24は脚の破片である。25は胸繫部分の破片で鐘形杏葉の一部が残存している。



第49図 長沖157号墳出土遺物

0 10cm

内・外面ナナメハケ、焼成は良好だが表面はもろく、色調は橙色を呈する。26は耳の下部分の破片である。面繫の一部が残存しており、外面はナナメハケ及びナデ調整、内面はナデ、指頭圧痕、一部ナナメハケ。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。27は泥障と本体との接合部分の破片である。外面はタテハケ後ヨコナデ、内面はタテハケ後ナデ調整。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。28は鞍から泥障さらに鐙にかけての破片である。後輪は剥離しており、鐙も下部は欠落している。外面はヨコハケ後部分的にナデ調整、内面はナナメハケ及びナデ調整。焼成は良好だが表面はもろく、色調は赤橙色を呈する。29は鐙状破片であり、鐙の端部は直線になっている。円筒に付く形態のようであるが何を表現したものかは不明である。表面はナデ調整、焼成は良好で、色調は赤橙色を呈する。

土師器 (3) 口径12.4cm、器高5.3cmの坏である。外面は口縁部がヨコナデ、以下はヘラ削り、内面はヨコナデ、底部は不定方向のナデ調整。焼成は良好で黒斑があり、色調は橙色を呈する。

須恵器 (4・5) 4は甕の口頸部の破片である。外面は口縁部に2本の沈線、波状文、凸線、波状文の順に文様を配置する。内面はヨコナデであり、緑黒色の自然釉がかかる。焼成は良好で、色調は明青灰色を呈する。5は把手部分の破片であり、調整との関係から横瓶と思われる。外面はカキ目、内面は回転ナデ。焼成は良好であり、色調は青灰色を呈する。

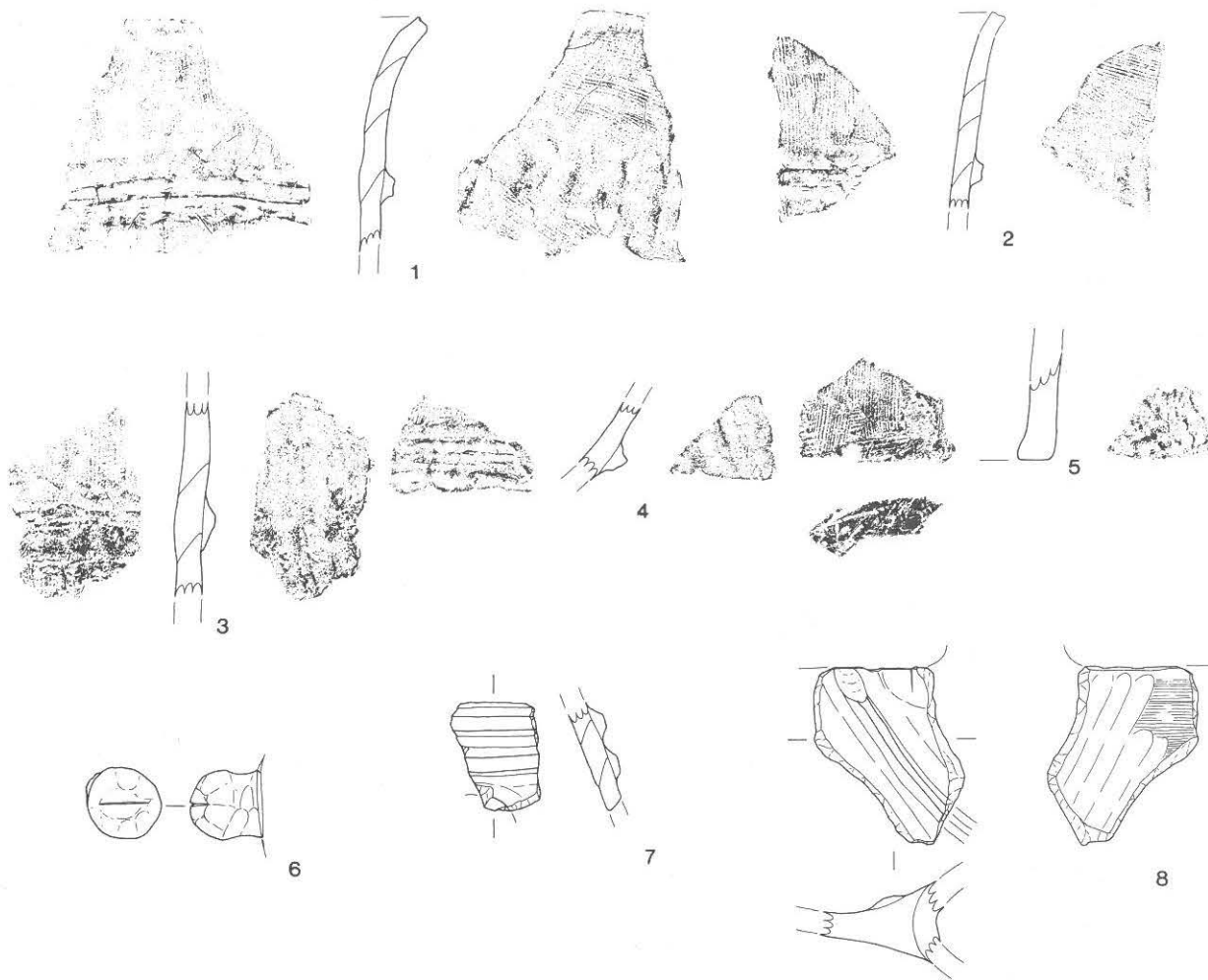
小 結 黒田2号墳の築造年代は円筒埴輪に底部調整があること、須恵器などから6世紀末葉頃に位置付けることができよう。土師器はやや時期の下る資料であろう。

(12) 箱崎4号墳出土遺物 (第59・60図)

箱崎4号墳から出土した遺物には、円筒埴輪、形象埴輪(人物、馬、勅、盾、不明)がある。いずれも細片となっており、体部径や全体の形状などが復原できる資料は存在しない。

円筒埴輪 (1~4) 突帯は台形、透孔は円形を確認することができる。外面はタテハケ、内面はナナメハケ、縦位のナデ。焼成は良好で、色調は橙色、淡橙色を呈する。

人物埴輪 (5~7) 5は中実の腕部破片であり、表面ハケ及びナデ調整。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。6は男子の腰部に佩用された、大刀の破片である。柄を刀身部分に差し込んで接合する。表面



第50図 白岩銚子塚古墳出土遺物

0 10cm

はハケ及びナデ調整。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。7は胴部の破片である。外面はタテハケ及びナデ調整、内面はナデ調整。焼成は良好で、色調は赤色、橙色を呈する。8・9も人物埴輪となる可能性があるが、部位などは不明。また、11はスカート部分の、12は着衣の結び目の可能性もある。

馬形埴輪 (10・13) 10・13ともに胸繫部分の破片であり、突帯の上に円形浮文を貼り付ける。10は突帯の直下に円形の透孔があることから、ほぼ正面と考えられる。外面はタテハケ及びナデ調整、内面はヨコハケ。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

靴形埴輪 (14・16・17) 17は鱗右下部の破片である。前面にはリボン状飾りを付け、その下方には刺突を配し、赤彩を塗布する。前面はナデ調整、後面はナナメハケ及びナデ調整、内面は斜位のナデ。焼成はやや軟質で、色調は橙色を呈する。14は鱗上半部、16は体部の破片である。

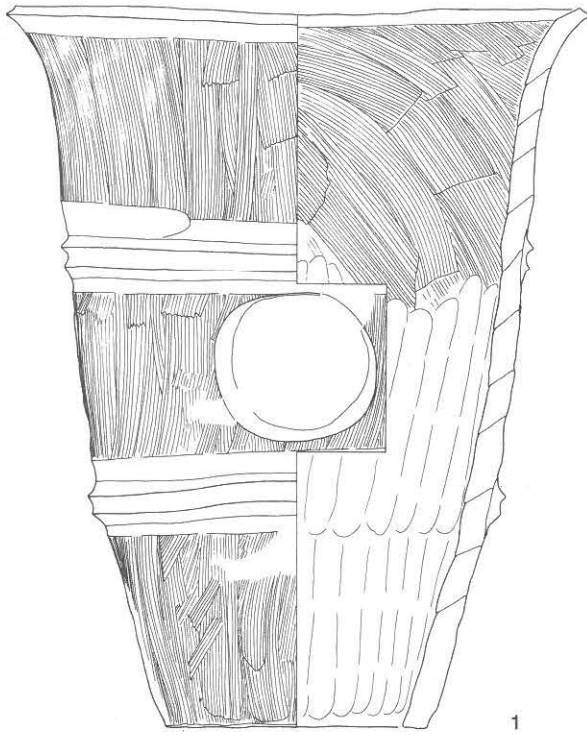
盾形埴輪 (15) 前面には線刻で鋸歯文を配する。前・後面ナナメハケ。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。靴の可能性もある。

不明形象埴輪 (18) 本体にY字状の突帯を貼り付けたものである。図面上の左側は筒状に続いていく形態であるが、何を表現したものか不明である。内・外面ともにナデ調整。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。

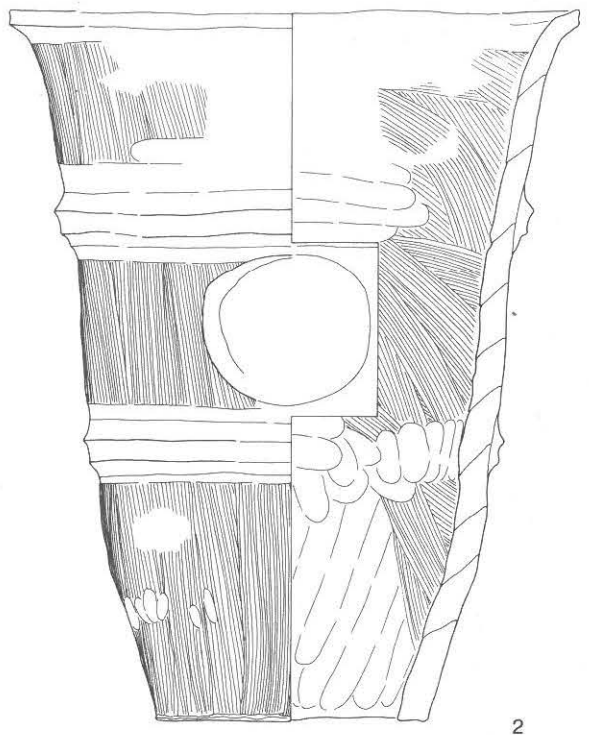
小 結 箱崎4号墳の築造年代は埴輪の諸特徴から6世紀末葉頃に位置付けることができよう。

(13) 木の本10号墳 (第61～63図)

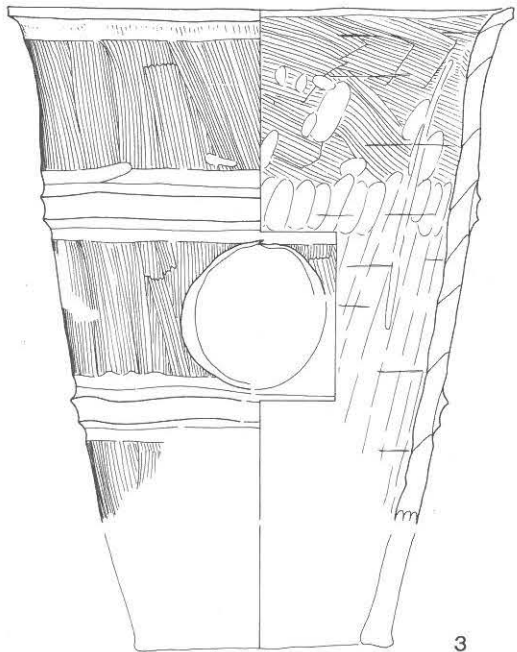
木の本10号墳から出土した遺物には、円筒埴輪、朝形埴輪、形象埴輪 (人物、馬) がある。形象埴輪



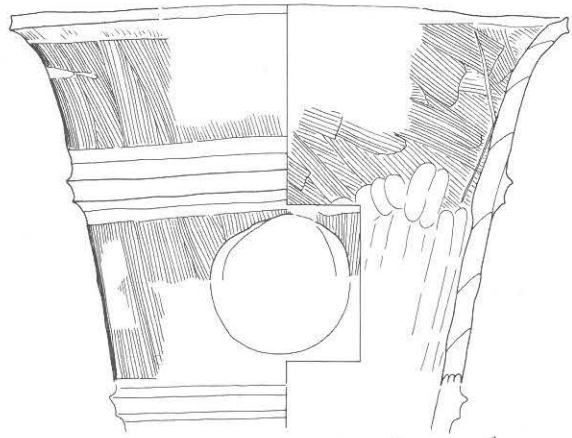
1



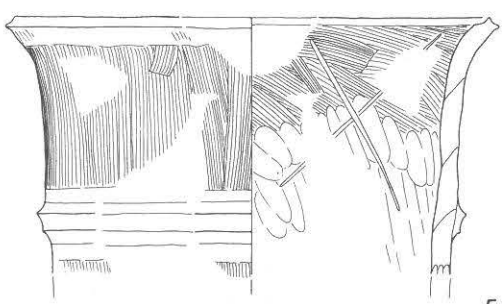
2



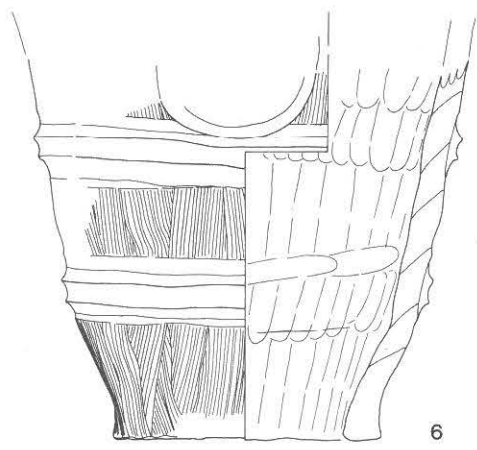
3



4



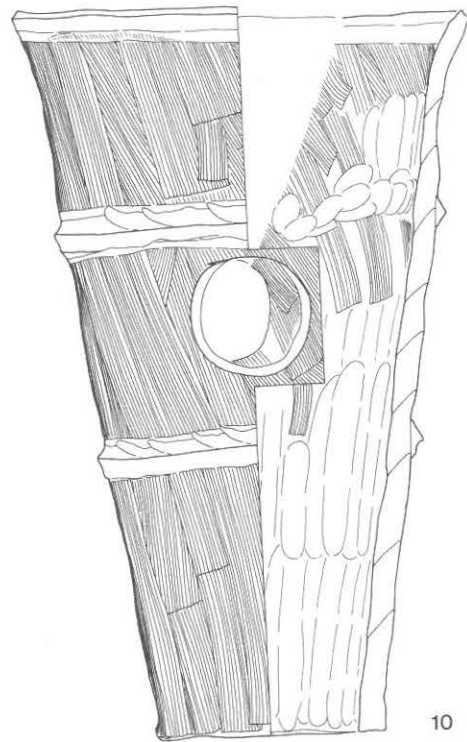
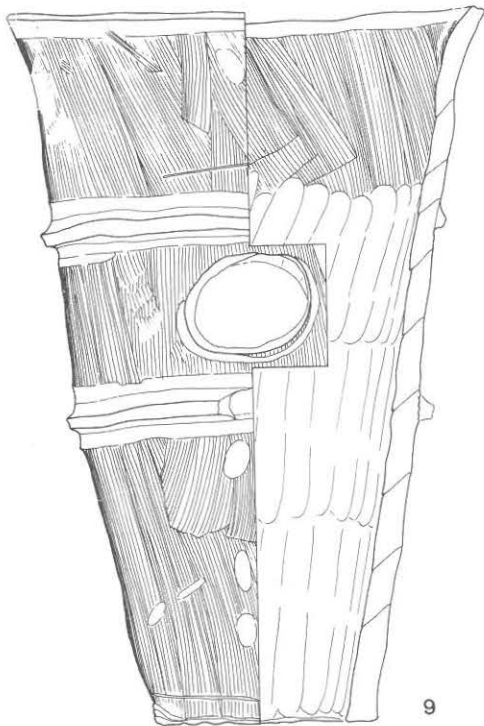
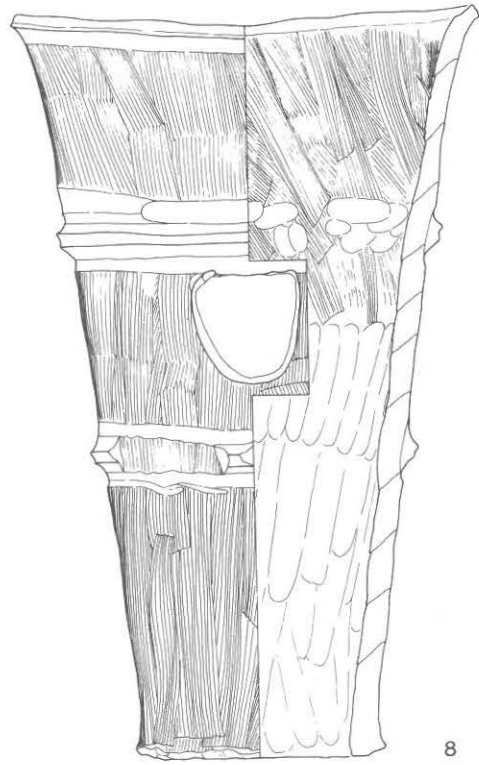
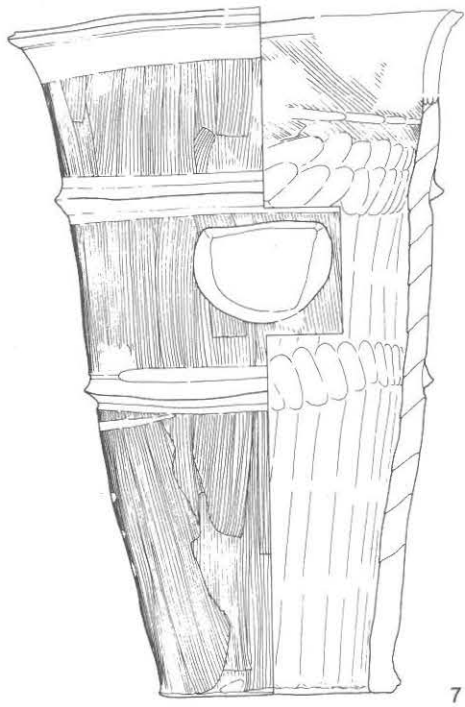
5



6

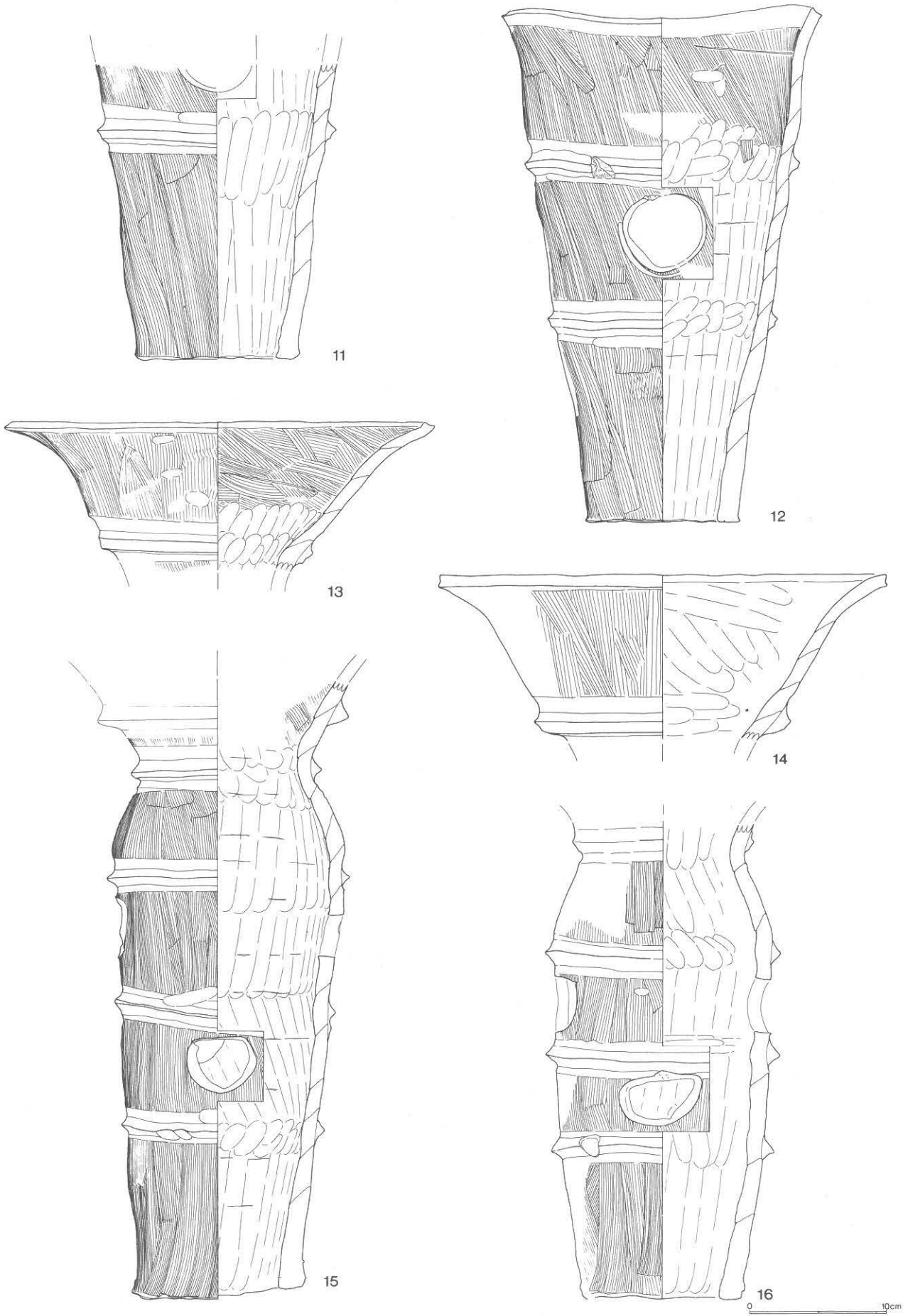
0 10cm

第51图 目沼10号墳出土遺物(1)

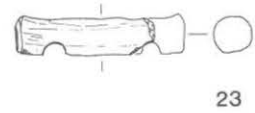
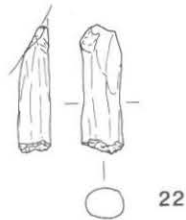
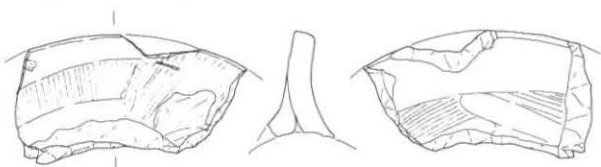
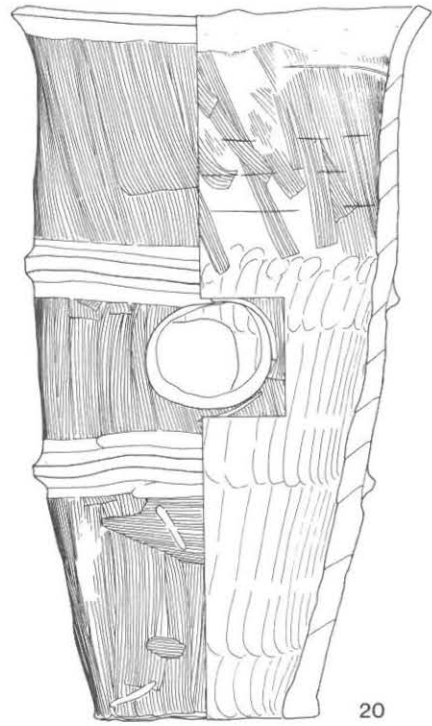
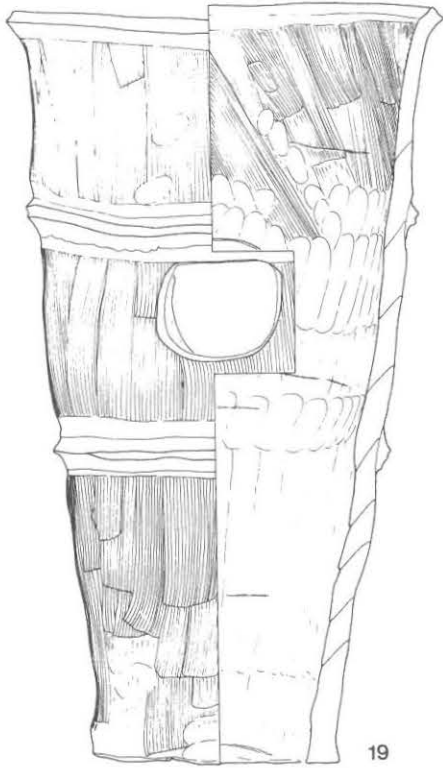
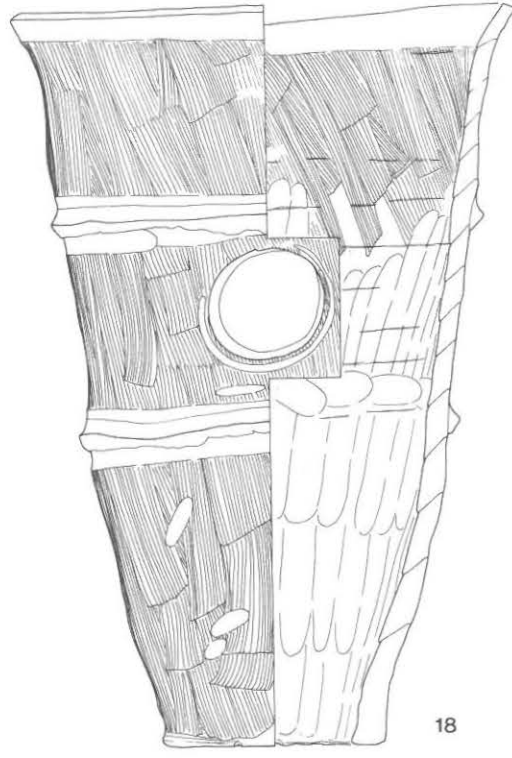
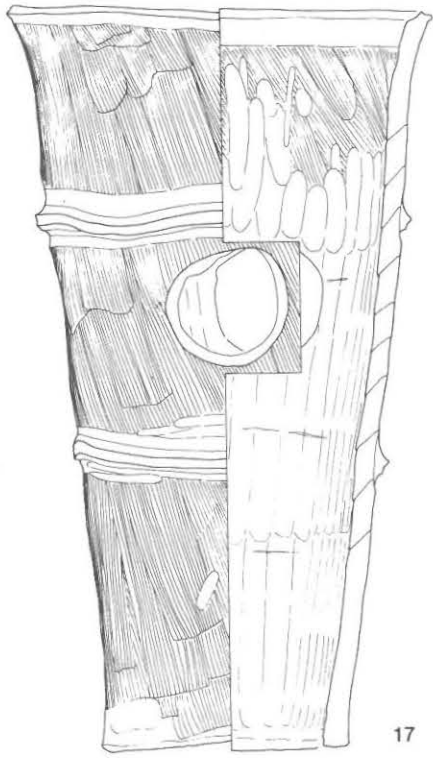


0 10cm

第52図 目沼10号墳出土遺物(2)

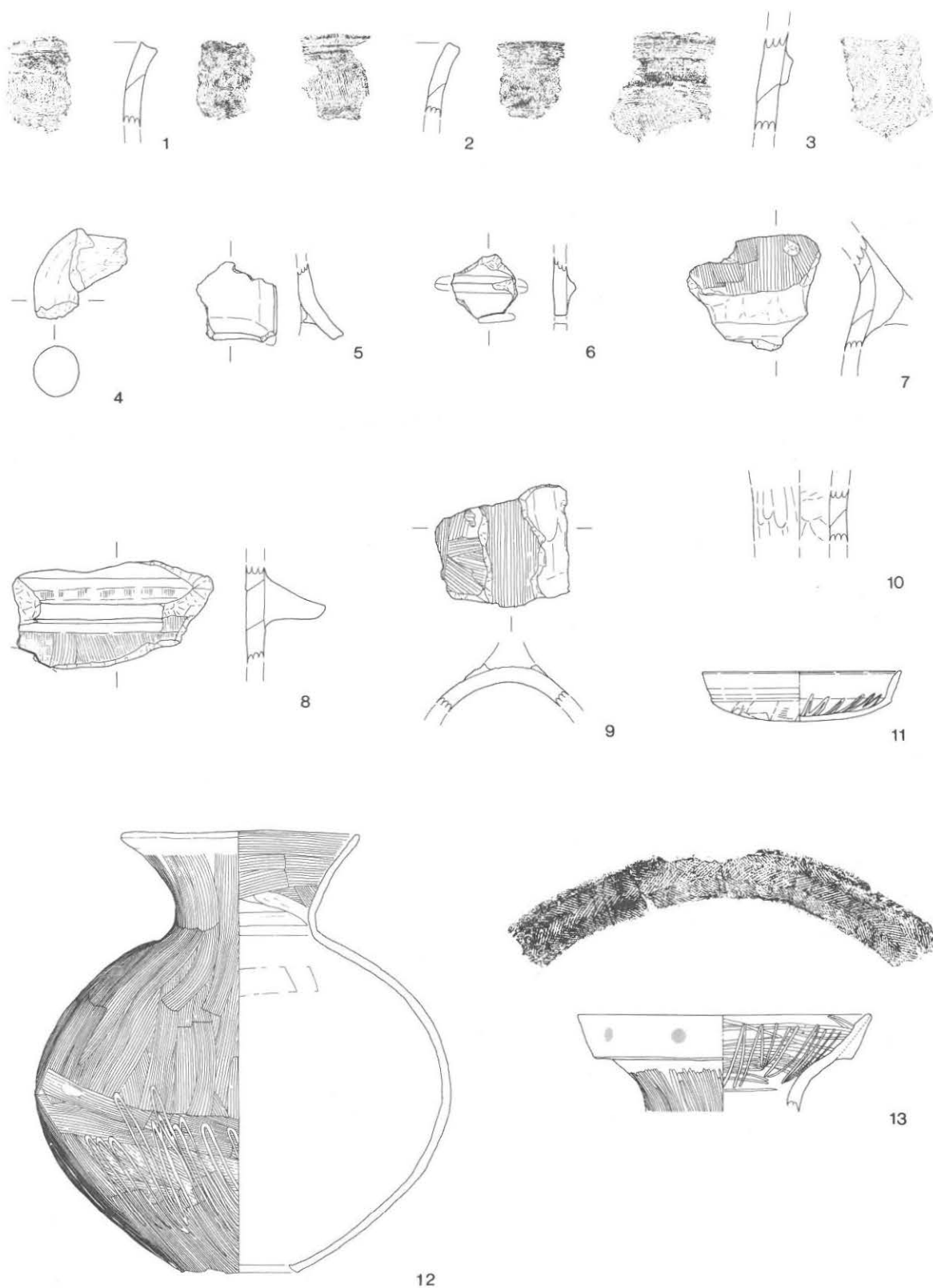


第53図 目沼10号墳出土遺物(3)



0 10cm

第54図 目沼10号墳出土遺物(4)



第55図 舟塚古墳出土遺物

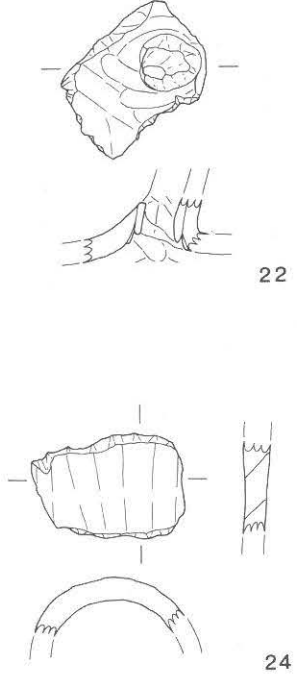
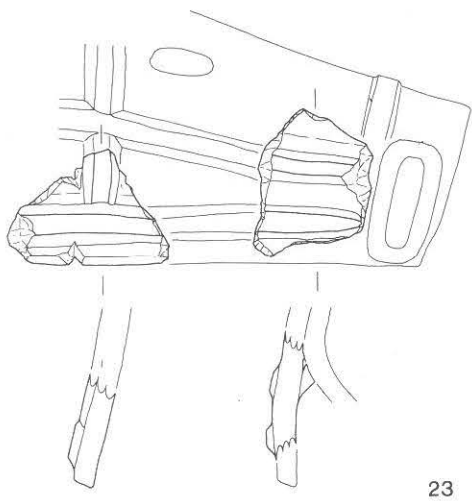
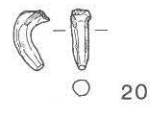
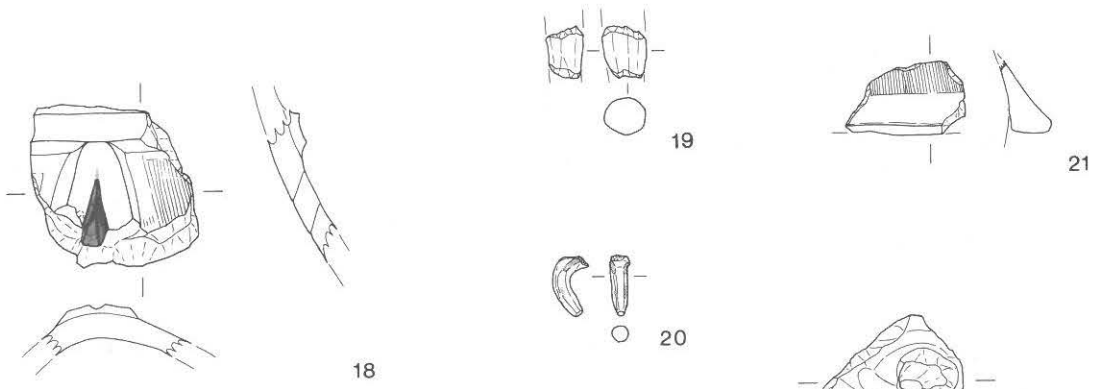
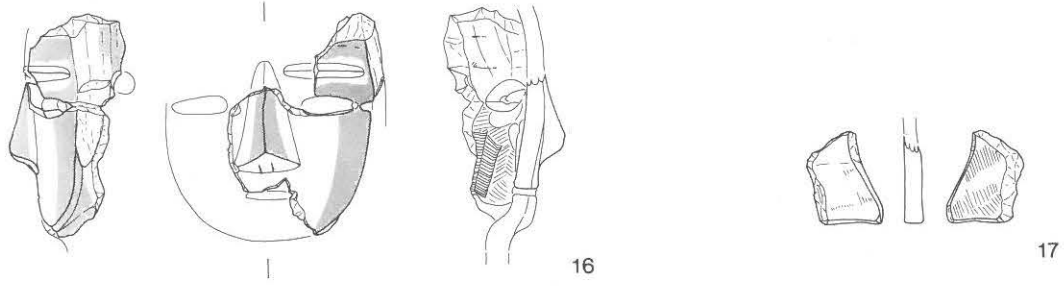
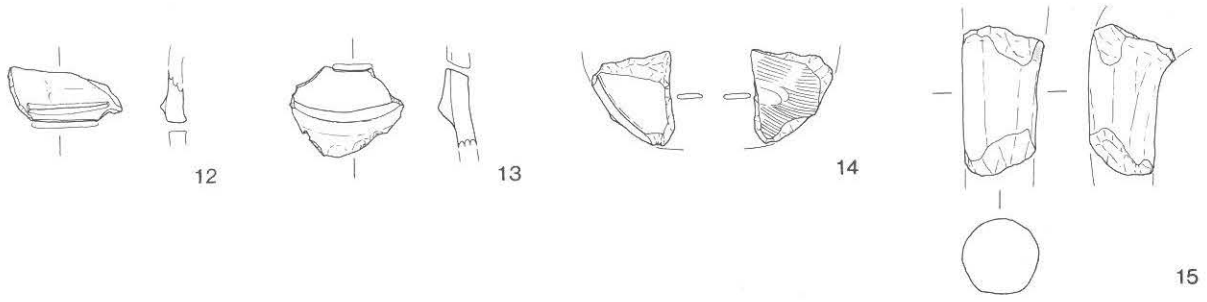
はいずれも破片であり、全体の形状などが復原できる資料は存在しない。

円筒埴輪A類 (1～5) 二条突帯で、器高に比べて口縁部径が大きいもの。突帯はM字形、透孔は円形。外面はタテハケ、内面は上半ナナメハケ、下半縦位のナデ。焼成は良好で、色調はにぶい橙色、浅黄橙色、橙色を呈する。4・5の内面上方にヘラ記号が存在する。

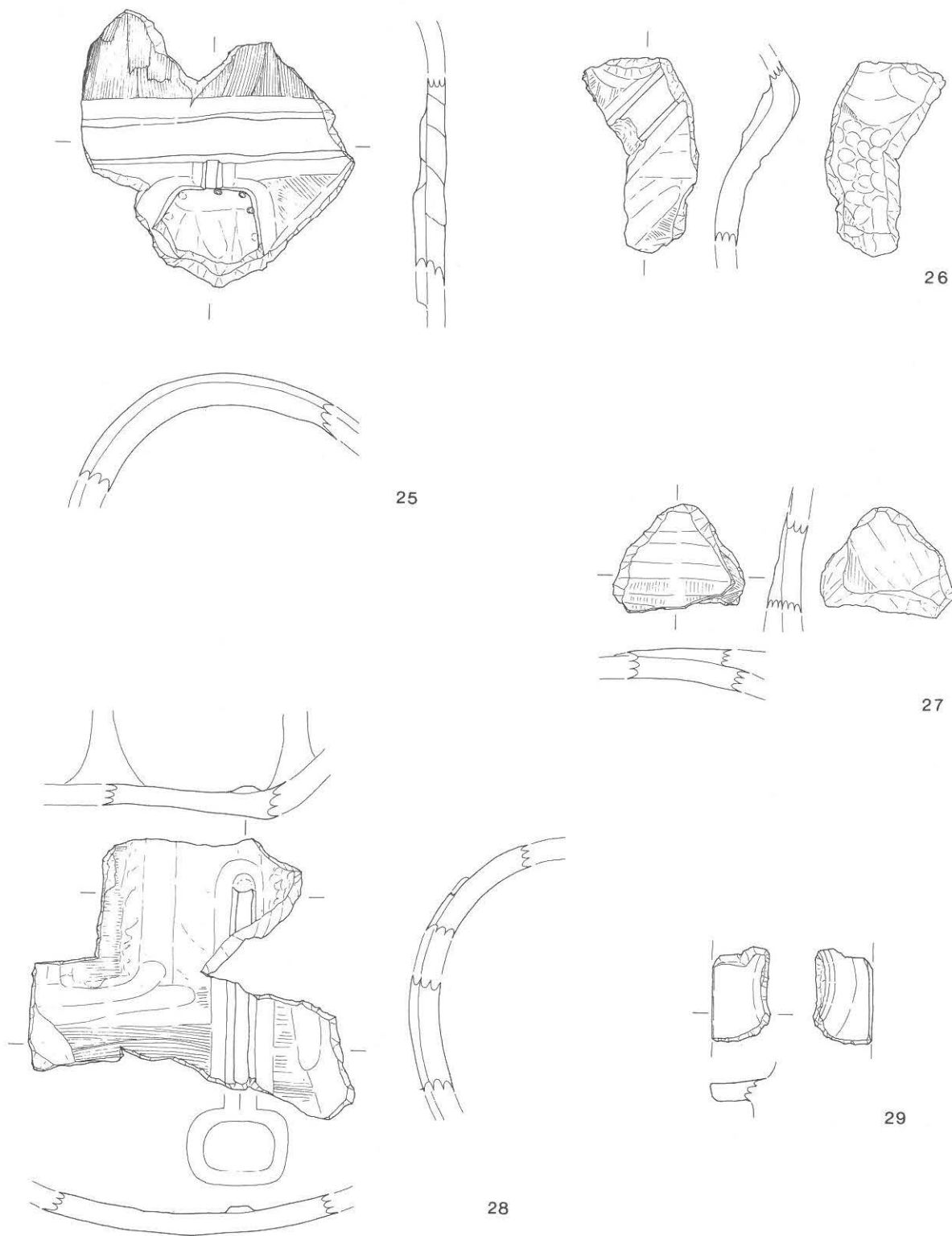


0 19cm

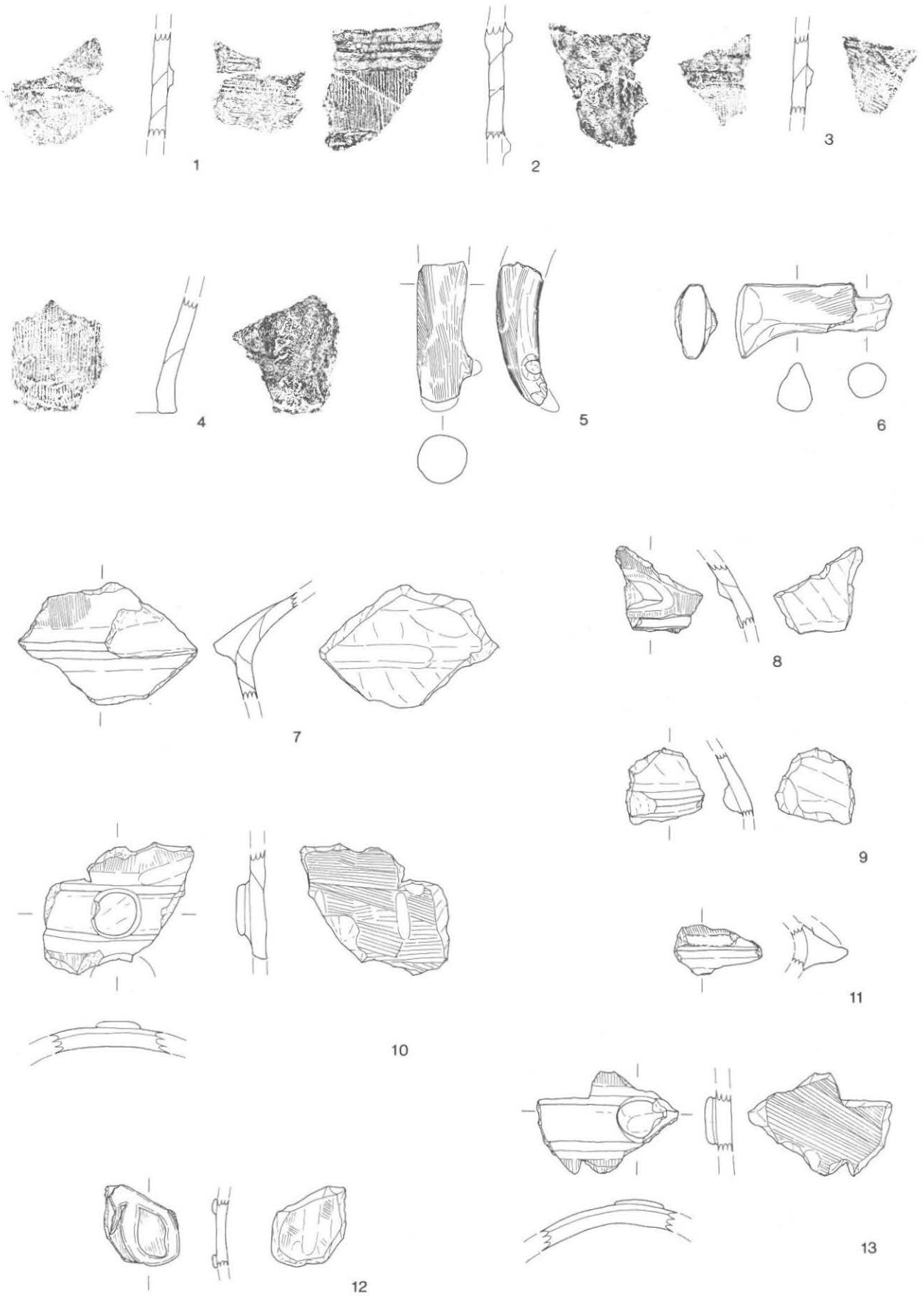
第56図 黒田2号墳出土遺物(1)



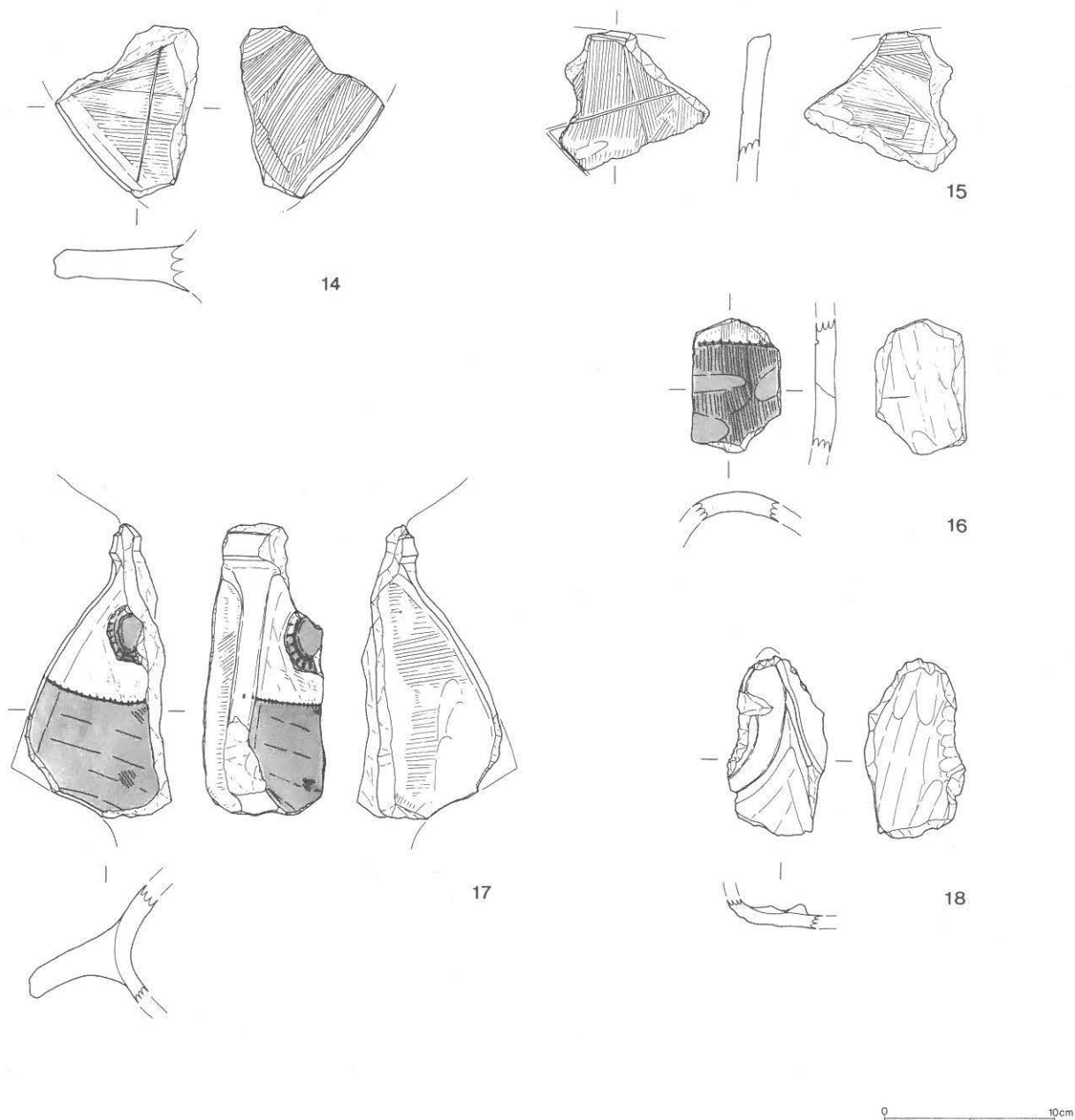
第57図 黒田2号墳出土遺物(2)



第58図 黒田2号墳出土遺物(3)



第59图 箱崎4号墳出土遺物(1)



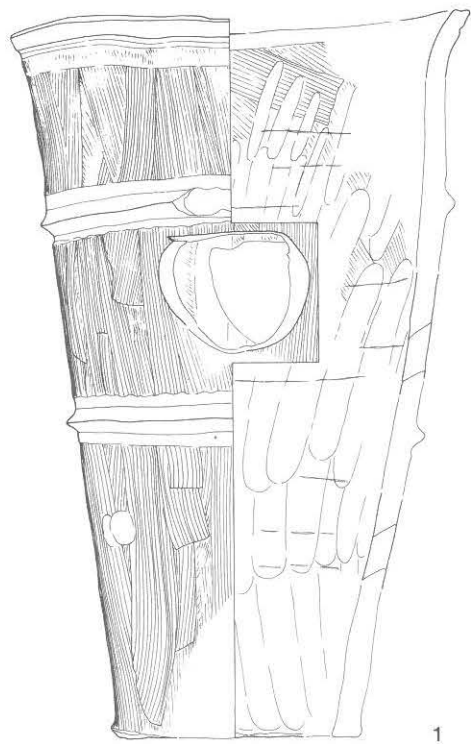
第60図 箱崎4号墳出土遺物(2)

円筒埴輪B類(6) 三条以上の突帯をもつもの。突帯はM字形、透孔は三段目に円形を穿つ。外面はタテハケ、内面は縦位のナデ及び一部ヨコナデ。焼成は良好で、色調はにぶい褐色を呈する。

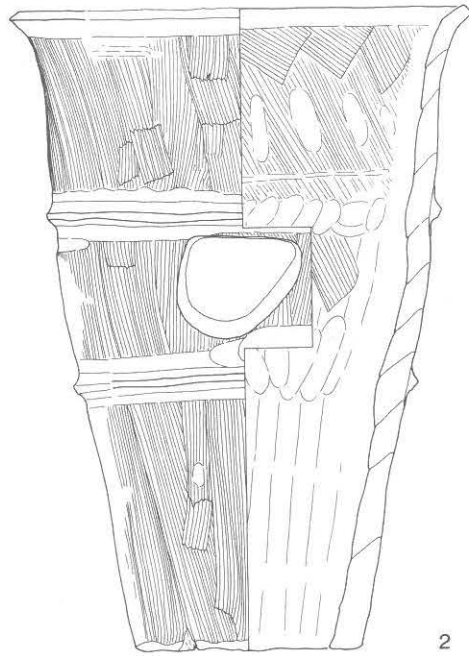
朝顔形埴輪(7) 肩部の破片であり、残存部分の形態ではあまり肩が張らず、円筒部も直線的である。突帯はM字形、透孔は円形が確認できる。外面はタテハケ、内面は斜位のナデ。焼成は良好で、色調はにぶい橙色を呈する。

人物埴輪(8~19) 16は女子の頭部である。烏田髷は剥離しており、耳部は円孔の周りに粘土環を貼り付け、耳環と耳玉を付ける。額の縁周りから眉の上、鼻の頭から頬にかけて三角形に、また耳の横から口に向かって带状に、さらに首の前面に赤彩が認められる。外面はナデ調整及び一部タテハケ、内面はナデ調整。焼成は良好で、色調は浅黄橙色を呈する。15も同様な赤彩を施す女子である。8は中実の腕部、9は美豆良、10は下半身部、11・13は烏田髷の破片、12は指を別作りにした右指部分、14は右耳部分である。17~19はいずれも人物埴輪の脇の下の破片であり、18は右手を腰に添える形態のものであろう。

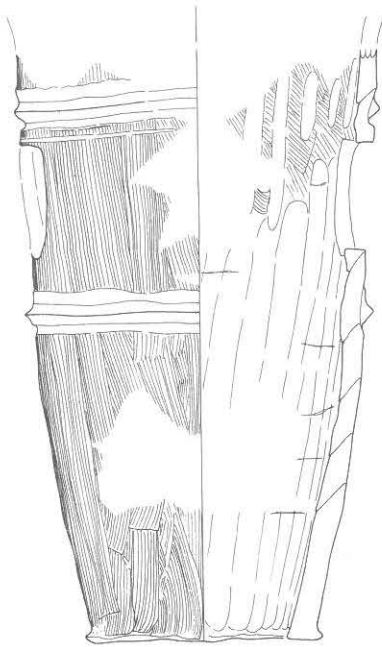
馬形埴輪(21~38) 馬形埴輪はいずれも細片となっており、具体的な馬装の構造は断片的な資料のみで



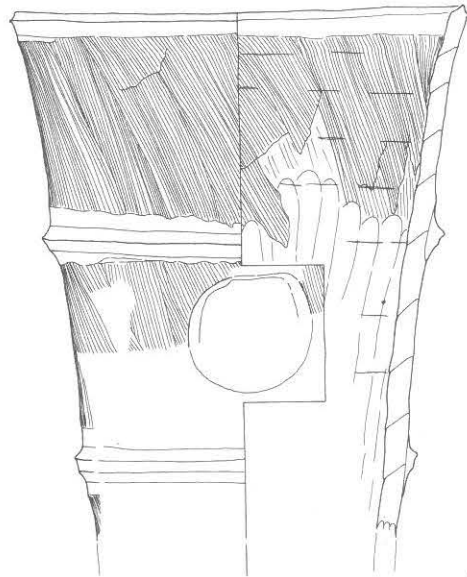
1



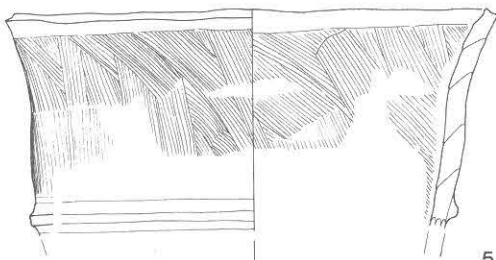
2



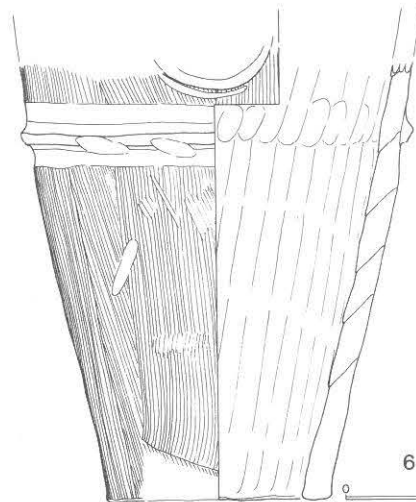
3



4



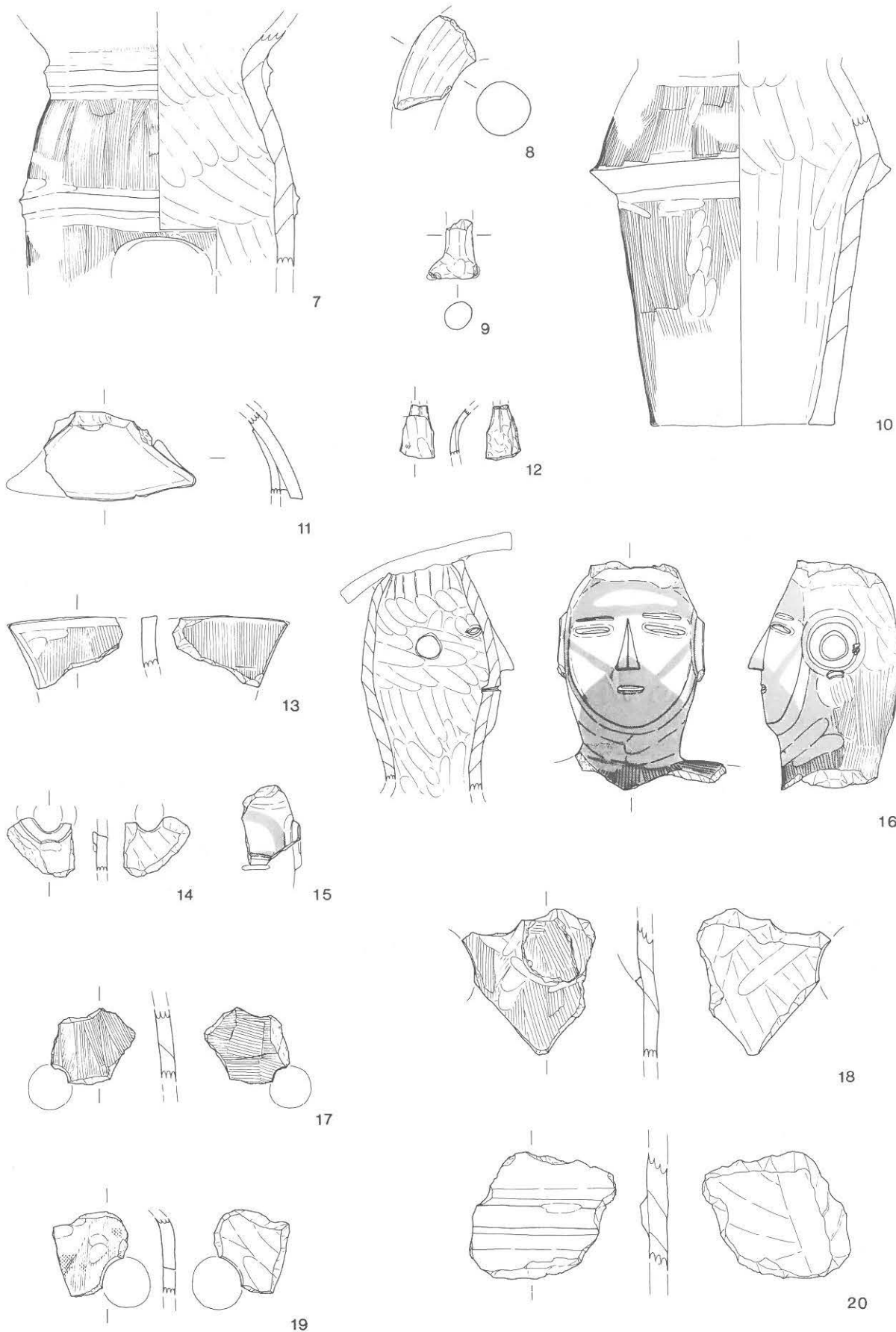
5



6

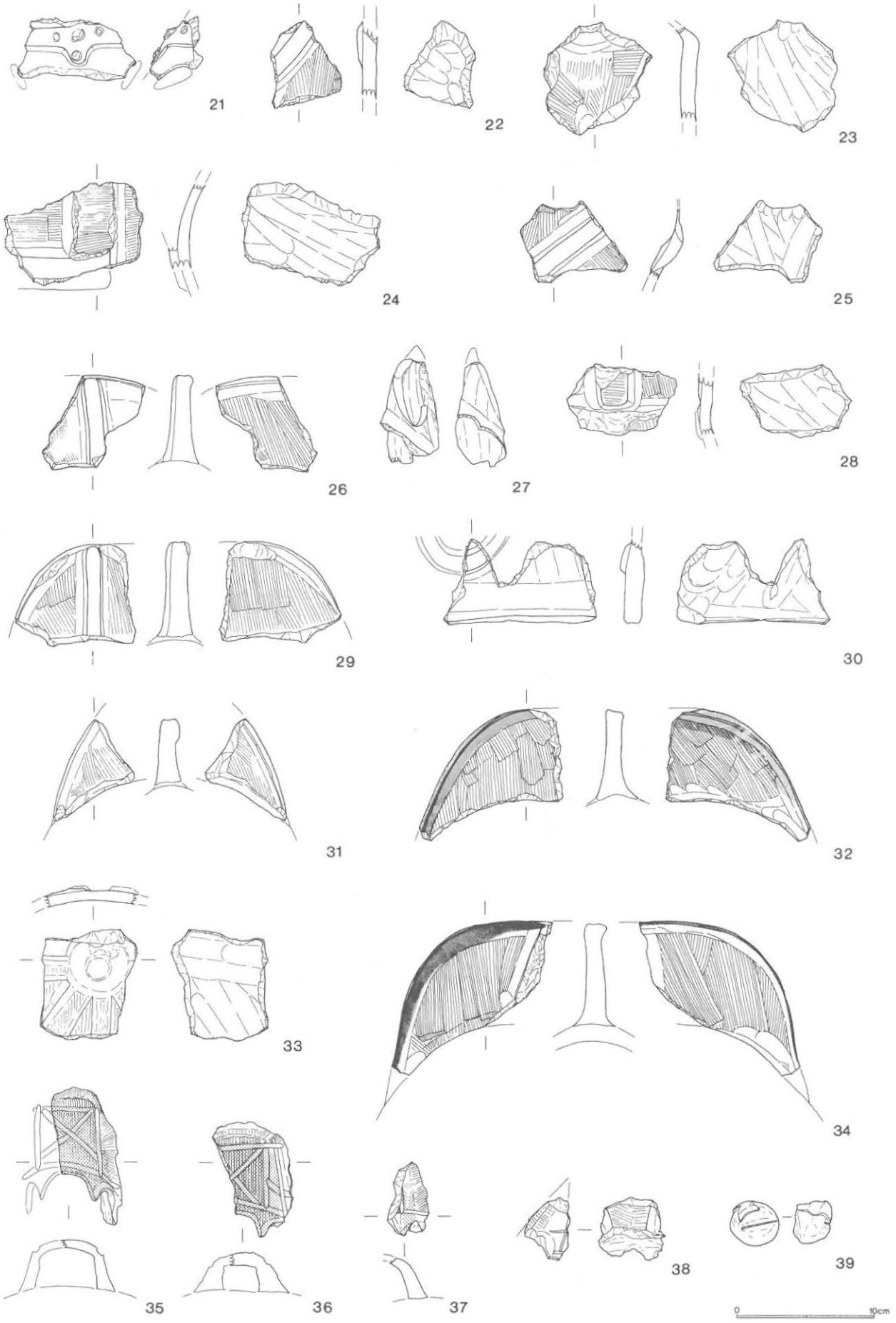
0 10cm

第61図 木の本10号墳出土遺物(1)



0 10cm

第62図 木の本10号墳出土遺物(2)



第63図 木の本10号墳出土遺物(3)

ある。21は額部分、22・23・25・27は耳及びその下部、24・30は体部の泥障付近の破片、26・29・31・32・34は鞍の可能性が高いが、26・29は縦位に突帯を貼り付けており、構造的に他の部分の可能性もある。32・34の端部には赤彩が認められる。33は雲珠の破片で、現状では5脚表現が確認できる。35～38は馬鐸の破片である。35～37は同一個体に装着されていたと考えられ、半裁した馬鐸を本体に貼り付けている。いずれも線刻で文様を表現しており、表面には白色粘土を塗布している。38は側面に線刻が認められるが、馬鐸上部の表現や調整の違い、白色粘土の塗布が認められないことなど別個体である可能性が高い。39は鈴の破片である。28も馬形埴輪と考えられるが、部位は決め手を欠く。

不明形象埴輪 (20) 比較的平坦な器壁に横位の突帯を貼り付けたもの。厚さなど他とは相違が著しいことから、他種類の形象埴輪である。例えば家形埴輪の壁部分などが考えられるが、他に破片もなく決め手を欠く。

小 結 木の本10号墳の築造年代は、出土した埴輪の諸特徴から6世紀中葉頃に位置付けられる。

(日高 慎)

出土遺物観察表

凡 例

1. 胎土に含まれる鉱物の名称は次の通り、略称とした。
チャート→チ、長石→長、火山ガラス→火、角閃石→角、雲母→雲、石英→石、酸化鉄粒→酸、白色パミス→パ、黒色砂粒→黒
2. 色調は、新版標準土色帖（小山・谷原、日本色研、昭和45年）によった。
3. ハケメは比較しやすいように、10本あたりの幅（cm）で表示した。
4. 遺物の番号は、本文および図版と共通する。

番号	種 別	形態・調整技法などの特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10本)	出土 T
雷電塚古墳出土遺物（第42・43図）						
1	円筒埴輪 (A類)	残存高19cm、底部径13.4cm、第一段高12.5cm。突帯は台形。外面タテハケ一部ナデ。内面斜位のナデの後タテハケ。	0.5~3.0mm のチ、長、石、パをやや多く含む。	やや軟質（焼けむら顕著） 藍(7.5YR7/4)	内外 1.5cm/10本 1.1cm/10本	1 T
2	円筒埴輪 (A類)	残存高16cm、底部径13.6cm、第一段高12cm。透孔は円形、突帯は台形。外面タテハケ、内面ナデ、及びナメハケ。	0.5~2.0mm のチ、長、石、酸、パ。	良好 藍(5YR7/6)	内外 1.5cm/10本	1 T
3	円筒埴輪 (B類)	残存高12.5cm、底部径15.6cm、第一段高10cm。透孔は円形、突帯はM字形。外面タテハケ、内面縦・斜位のナデ。	0.5~2.0mm の長、角、石、酸、パ。	良好 緑(10R6/8)	外1.0cm/10本 1.8cm/10本	1 T
4	円筒埴輪 (B類)	残存高12.1cm、底部径16cm、第一段高10.7cm。突帯はM字形。外面タテハケ、内面斜位のナデ。	0.5~1.0mm のチ、長、石、パ。	良好 赤(7.5R4/6)	外1.4cm/10本	1 T
5	円筒埴輪 (A類)	残存高24cm、底部径15.2cm、第一段高15cm、体部径20cm。透孔は円形、突帯は台形。外面タテハケ、内面下半縦位のナデ、他はナメハケ。	0.5~1.0mm のチ、長、パ。	須恵質（器壁に亀裂あり） 黒(10YR6/1)	内外 1.5cm/10本 1.7cm/10本	1 T
6	円筒埴輪 (朝顔か)	残存高24.1cm、体部径23cm、突帯間長10.5cm。透孔は円形、突帯はM字形。外面タテハケ、内面斜位のナデ、タテハケ。	0.5~1.0mm の長、角、石、酸、パ。	やや軟質 藍(5YR7/6)	内外 1.8cm/10本	1 T
7	円筒埴輪 (A類)	残存高15cm、底部径12.4cm、第一段高10.8~12.5cm。突帯は台形。外面タテハケ、内面縦位のナデ。	0.5~1.0mm の長、石、酸、パ。	須恵質 黒(10YR5/2)	外 2~2.3cm/10本	1 T
8	円筒埴輪 (A類)	残存高18.7cm、底部径13.4cm、第一段高14cm。透孔は円形、突帯はM字形。外面タテハケ、内面縦・斜位のナデ。	0.5~2.0mm の長、角、石、酸、パ。	良好 藍(2.5YR7/6)	外1.4cm/10本	1 T
9	朝顔形埴輪	残存高10cm、くびれ部径16.4cm。突帯はM字形。外面突帯以上タテハケ、以下ナメハケ、内面突帯以上ナメハケ、以下斜位のナデ。	0.5~2.0mm の長、角、石、酸、パを多く含む。	良好 赤(10R4/8)	内外 1.4cm/10本	1 T
10	朝顔形埴輪	残存高10cm、くびれ部径16.4cm。突帯は台形。外面タテハケ、斜位のナデ。	0.5~2.0mm の長、石、パ。	良好 黒(10YR5/1)	外2.3cm/10本	1 T
11	朝顔形埴輪	残存高35.5cm、くびれ部径15cm、体部径19cm、突帯間長10.5cm。透孔は円形、突帯はM字形。外面タテハケ、内面肩部は斜位のナデ、他はナメハケ。	0.5~1.0mm の長、角、石、酸、パ。	良好 藍(2.5YR6/8)	内外 1.2cm/10本 1.7cm/10本	1 T
12	朝顔形埴輪	残存高21.5cm、くびれ部径16cm、体部径22cm、突帯間長13cm。透孔は円形、突帯はM字形。外面タテハケ、内面斜位のナデ。	0.5~1.0mm の長、角、石、パ。	良好 赤(7.5R4/6)	外1.5cm/10本	1 T
大類2号墳出土遺物（第44図）						
1	円筒埴輪	残存高9.7cm。底部の破片。外面タテハケ、内面ナデ調整。	0.3~0.5mm の長、角、石、酸、パを多く含む。	良好だが表面の剥離が著しい 藍(2.5YR6/8)	外2cm/10本	3 T
2	円筒埴輪	残存高13cm。突帯はM字形。外面タテハケ、内面ナデ調整。	0.3~0.5mm の長、角、石、酸、パを多く含む。	良好だが表面の剥離が著しい 藍(2.5YR6/8)	外2cm/10本	3 T
3	円筒埴輪	残存高11.5cm。透孔は円形、突帯はM字形。外面タテハケ、内面ナデ調整。	0.3~0.5mm の長、角、石、酸、パを多く含む。	良好だが表面の剥離が著しい 藍(2.5YR6/8)	外2cm/10本	3 T
4	朝顔形埴輪	残存高7.7cm。突帯は台形。外面タテハケ、内面ナデ調整。	0.3~0.5mm の長、角、石、酸、パを多く含む。	良好だが表面の剥離が著しい 藍(2.5YR6/8)	外2cm/10本	3 T
5	円筒埴輪	残存高5.8cm。口縁部の破片。外面タテハケ、内面ナデ調整。	0.3~0.5mm の長、角、石、酸、パを多く含む。	良好だが表面の剥離が著しい 藍(2.5YR6/8)	外2cm/10本	表採
6	形象台部	残存高14cm、体部径16.4cm。透孔は円形、突帯は台形。外面ナメハケ、内面斜位のナデ。	0.3~0.5mm の長、角、石、酸、パを多く含む。	良好だが表面の剥離が著しい 藍(2.5YR6/8)	外2cm/10本	3 T

7	形象埴輪	残存高5cm、下端径10.2cm、上端径13.1cm。外面ヨコナデ、内面ナデ調整。	0.3~0.5mmの長、角、石、酸、パを多く含む。	良好だが表面の剥離が著しい體(2.5YR6/8)		3 T
8	土師器・坏(比企型)	器高7.45cm、口径14.7cm、頸部径14.2cm、体部最大径14.8cm。外面肩部以上ヨコナデ、以下ヘラ削り。内面ヨコナデ、底部は不定方向のナデ。外面肩部以上と内面に赤彩。	0.3~2.0mmの長、石。	良好に釉(10YR7/3)		1 T
天神山古墳出土土遺物(第45図)						
1	土師器・壺	口径30cm(復元)。内・外面ヨコナデ。内面には焼成前の赤彩。	0.3~1.0mmの長、火、石。	良好に釉(10YR8/3)		3 T
2	土師器・坏(比企型)	残存高2.5cm、口径13cm、頸部径12.5cm、体部最大径12.6cm。外面肩部以上ヨコナデ、以下ヘラ削り。内面ヨコナデ。外面頸部以上と内面に赤彩。	0.3~0.5mmの長、火、角、石。	良好に釉(5YR7/4)		3 T
3	土師器・坏(比企型)	器高4.95cm、口径11.6cm、頸部径11.3cm、体部最大径11.5cm。外面肩部以上ヨコナデ、以下ヘラ削り。内面ヨコナデ。外面肩部以上と内面に赤彩。	0.3~1.0mmの長、石、酸、パ。	良好に釉(10R6/6)		3 T
根岸稲荷神社古墳出土土遺物(第46図)						
1	弥生・壺	器高34cm、口径19.6cm、体部最大径24.6cm、底径7.4cm。外面口縁部ナデ、頸・体部ヘラ磨き、体部三段に縄文あり。焼成後底部穿孔。	0.3~2.0mmの長、角、石、パを多く含む。	良好(黒斑あり)に釉(10YR8/4)		2 T
2	土師器・壺	残存高4cm、底部径7cm。外面ナメハケ後ヘラ磨き、底部はヨコナデ、内面ナデ調整。焼成後底部穿孔。	0.3~1.0mmの長、角、雲、石、小礫含む。	良好(黒斑あり)に釉(7.5YR8/3)	外1.2cm/10本	2 T
3	土師器・小型鉢	残存高4cm、底部径3.4cm。外面板ナデ、底部はヨコナデ、内面ナデ調整。	0.3~1.0mmの長、火、雲、石、パ。	やや軟質(黒斑あり)に釉(10YR8/3)		3 T
4	土師器・壺	残存高4cm。外面複合口縁部羽状縄文、ヨコハケ。頸部タテハケ後ヨコハケ。外面赤彩。	0.3~1.0mmの長、酸、石。	良好に釉(10YR8/2)	外1.4cm/10本	2 T
5	円筒埴輪	残存高7cm。外面タテハケ、内面ヨコナデ。	0.3~2.0mmの長、火、石。	良好に釉(10YR8/2)	外1.6cm/10本	3 T(混入か)
山の根古墳出土土遺物(第47図)						
1	土師器・壺	残存高5.4cm、口径16cm、頸部径8.2cm。調整不明。	0.3~2.0mmの長、角、雲、石、パ。砂質。	やや軟質に釉(5YR7/6)に釉(10YR7/4)		2 T
2	土師器・甕	残存高1.5cm、底部径10.8cm。内・外面ナデ調整。	0.3~1.0mmの長、雲、石、酸、パ。	やや軟質に釉(5YR7/4)		3 T
3	土師器・甕	残存高1.5cm、底部径10.8cm。外面タテハケ、底部ヨコナデ、内面ナデ調整。	0.3~1.0mmの長、雲、石、酸。	やや軟質に釉(10YR4/2)	外1.3cm/10本	7 T
4	土師器・甕	残存高6cm、口径12.2cm、頸部径10.7cm。外面タテハケ、口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ及びナデ調整。	0.3~2.0mmの長、角、石、酸、パ、小礫含む。	軟質に釉(5YR7/6)	外1.5cm/10本	7 T
5	土師器・甕	残存高6.2cm。外面ナメハケ、内面ナデ調整。	0.3~1.0mmの長、角、雲、石、酸、パ。	良好(黒斑あり)に釉(7.5YR7/6)	外1.3cm/10本	7 T
6	土師器・鉢	器高7~7.6cm、口径21.5cm、底部径8.5cm。外面ヨコナデ及びヘラ磨き、内面ヘラ削り後ヨコナデ。底面に木葉痕。口唇部ヘラ切り未調整。	0.3~2.0mmの長、雲、石をやや多く含む。	良好(黒斑あり)に釉(7.5YR7/6)		7 T
7	土師器・甕	口径16cm、体部最大径23.8cm、頸部径14.4cm。外面口縁部ヨコナデ、他はハケ、内面ナデ調整。	0.3~1.0mmの長、酸、パ。	やや軟質(黒斑あり)に釉(10YR8/3)	外1.5cm/10本	7 T
8	土師器・高坏	器高15.5cm、口径23.7cm、頸部径3.9cm、底部径8.5cm、脚部径13.7cm。外面環部ヘラ磨き、脚部上半ヨコナデ、下半ヘラ磨き。内面環部不明、脚部上半ナデ、下半ヨコハケ。	0.3~2.0mmの長、雲、石、酸、パ。	良好に釉(10YR8/3)に釉(7.5YR7/4)	内1.5cm/10本	7 T
天神塚古墳出土土遺物(第48図)						
1	円筒埴輪	残存高4.3cm。口縁部の破片。外面タテハケ、内面ナメハケ。	0.3~1.0mmの長、雲、石、パ。砂質。	良好に釉(2.5YR7/4)	内外3cm/10本	1 T
2	円筒埴輪	残存高5.2cm。透孔は円形、突帯は台形。外面タテハケ、内面斜位のナデ。	0.3~1.0mmの長、雲、石、パ。砂質。	良好に釉(2.5YR7/4)	外2.4cm/10本	1 T

3	円筒埴輪	残存高7.5cm。透孔は円形、突帯はM字形。外面タテハケ、内面タテハケ。	0.3~1.0mmの長、雲、石、パ。砂質。	良好 靨(5YR7/6)	内外 2cm/10本	1 T
4	円筒埴輪	残存高7.5cm。突帯はM字形。外面タテハケ、内面タテハケ。	0.3~1.0mmの長、雲、石、パ。砂質。	良好 靨(5YR7/6)	内外 2.4cm/10本	1 T
5	円筒埴輪	残存高7.5cm。透孔は円形、突帯はM字形。外面タテハケ、内面タテハケ。	0.3~1.0mmの長、雲、石、パ。砂質。	良好 靨(5YR7/6)	内外 2.4cm/10本	3 T
6	人物埴輪 (腕)	残存長7.9cm。表面ナデ調整。中実。	0.3~0.5mmの長、雲、石。砂質。	良好 肌色(7.5YR7/3)		3 T
長沖 157号墳出土遺物 (第49図)						
1	円筒埴輪	残存高3.9cm。口縁部の破片。外面ナナメハケ、内面ヨコナデ。	0.3~0.5mmの長、角、石。	良好 靨(2.5YR7/6)	外1.2cm/10本	2 T
2	円筒埴輪	残存高4.1cm。透孔は半円形。外面タテハケ、内面斜位のナデ。外面に赤彩。	0.3~0.5mmの長、角、石。	良好 靨(2.5YR7/6)	外1.7cm/10本	1 T
3	円筒埴輪	残存高5.9cm。突帯は台形で突出度高い。外面B種ヨコハケ、内面斜位のナデ。外面に赤彩。	0.3~0.5mmの長、角、石。	良好 靨(10YR8/3)	外1.3cm/10本	2 T
4	円筒埴輪	残存高11cm、体部径29cm。突帯は台形で突出度高い。外面突帯以上B種ヨコハケ、以下タテハケ、内面縦位のナデ。外面に赤彩。	0.3~0.5mmの長、角、石。	良好 靨(10YR8/3)	外1.4cm/10本	2 T
5	円筒埴輪	残存高7.1cm。突帯は台形で突出度高い。外面タテハケ、内面縦位のナデ。外面に赤彩。	0.3~0.5mmの長、角、石。	良好 靨(10YR8/3)	外1.8cm/10本	2 T
6	円筒埴輪	残存高5.9cm。底部の破片。外面タテハケ、内面縦位のナデ。	0.3~0.5mmの長、角、石。	良好 靨(10YR8/3)	外1.5cm/10本	2 T
白岩銚子塚古墳出土遺物 (第50図)						
1	円筒埴輪	残存高12.5cm。口縁部の破片。突帯は台形。外面タテハケ、内面ナナメハケ。	0.3~1.0mmの長、雲、石、酸、パ。	良好 靨(2.5YR7/6)	内外 1.8cm/10本	1 T
2	円筒埴輪	残存高9.3cm。口縁部の破片。突帯は台形。外面タテハケ、内面ナナメハケ。	0.3~1.0mmの長、雲、石、酸、パ。	良好 靨(2.5YR7/6)	内外 1.8cm/10本	2 T
3	円筒埴輪	残存高10.3cm。突帯は三角形。外面タテハケ、内面斜位のナデ。	0.3~1.0mmの長、雲、石、酸、パ。	良好 靨(2.5YR7/6)	外1.8cm/10本	3 T
4	朝顔形埴輪	残存高4.1cm。突帯は台形。外面タテハケ、内面斜位のナデ。	0.3~1.0mmの長、雲、石、酸、パ。	良好 靨(2.5YR7/6)	外1.8cm/10本	1 T
5	円筒埴輪	残存高5.7cm。底部の破片。外面タテハケ、内面縦位のナデ。	0.3~1.0mmの長、雲、石、酸、パ。	良好 靨(2.5YR7/6)	外1.8cm/10本	3 T
6	馬形埴輪 (鈴)	残存長3.7cm。外面ナデ。裏面は剥離。	0.3~1.0mmの長、雲、石、酸、パ。	やや軟質 靨(5YR7/8)		1 T
7	形象埴輪 (不明)	残存長5.7cm。台形の突帯を二条貼付し、下方に円形透孔。内外面ナデ。	0.3~1.0mmの長、雲、石、酸、パ。	良好 靨(2.5YR7/6)		3 T
8	靴形埴輪	残存長9.4cm。靴形埴輪の右踵部分。前面に襷状の台形の突帯を貼付。前面ナデ、後面ヨコハケ後部分的に斜位のナデ。	0.3~1.0mmの長、雲、石、酸、パ。	良好 靨(2.5YR7/6)	後1.5cm/10本	1 T
目沼10号墳出土遺物 (第51~54図)						
1	円筒埴輪 (A1類)	器高38.3cm、口径24.1cm、底部径13cm、第一段高16.9cm、突帯間長10.9cm。透孔は半円形、突帯は三角形。外面タテ・ナナメハケ、内面上半ナナメハケ及び縦位のナデ、下半縦位のナデ。内面にヘラ記号あり。三段目に赤彩。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 靨(7.5YR8/4)	内外 1.2~1.5cm/10本	1 T
2	円筒埴輪 (B類)	器高34cm、口径24.4cm、底部径12cm、第一段高14cm、突帯間長9.2cm。透孔は半円形、突帯は三角形に近い台形。外面タテハケ、内面上半ナナメハケ及び縦位のナデ、下半縦位のナデ、突帯部に指頭圧痕。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ、黒。	良好 靨(7.5YR8/4)	内外 1.4cm/10本	2 T
3	円筒埴輪 (A1類)	残存高31.4cm、底部径12cm、第一段高17.5cm、突帯間長10.8cm。透孔は半円形、突帯は三角	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、	良好 靨(5YR8/3)	内外 1.5cm/10本	2 T

		形。外面タテハケ、内面上半ナナメハケ及び縦位のナデ、下半縦位のナデ。	パ。			
4	円筒埴輪 (A2類)	残存高28.3cm、口径24.2cm、突帯間長11.9cm。透孔は円形、突帯はM字形。外面ナナメハケ、内面上半ナナメハケ、下半縦位のナデ。内面にヘラ記号-あり。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 鉄鏝(7.5YR8/4)	内外 1.5cm/10本	2T
5	円筒埴輪 (B類)	残存高11.8cm、口径26cm。口縁部の破片。突帯は台形。外面タテ・ナナメハケ、内面ナナメハケ。	0.3~1.5mmの長、角、石、酸、パを多く含む。	やや軟質 土質(7.5YR7/3)	内外 1.5cm/10本	3T
6	円筒埴輪 (A2類)	残存高11.8cm、底部径11.8cm、第一段高19.4cm。突帯は台形。外面タテハケ、内面縦位のナデ、突帯部に指頭圧痕。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 鉄鏝(7.5YR8/4)	外1.5cm/10本	2T
7	円筒埴輪 (A1類)	器高36.4cm、口径24cm、底部径12.7cm、第一段高16.5cm、突帯間長10cm。透孔は半円形、突帯は三角形。外面タテ・ナナメハケ、内面上半ナナメハケ、下半縦位のナデ、突帯部に指頭圧痕。内面にヘラ記号×あり。三段目に赤彩。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 鉄鏝(7.5YR8/4)	内外 1.5cm/10本	3T
8	円筒埴輪 (A1類)	器高39.6cm、口径24.6cm、底部径13.2cm、第一段高16cm、突帯間長11.5cm。透孔は半円形、突帯はM字形。外面タテハケ、内面上半ナナメハケ、下半縦位のナデ、突帯部に指頭圧痕。内面にヘラ記号\あり。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パをやや多く含む。	良好 鉄鏝(7.5YR8/4)	内外 1.5cm/10本	3T
9	円筒埴輪 (A2類)	器高38cm、口径25.2cm、底部径11.7cm、第一段高17cm、突帯間長9.6cm。透孔は円形、突帯は台形。外面ナナメハケ、内面上半ナナメハケ、下半縦位のナデ。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パをやや多く含む。	良好 鉄鏝(10YR8/4)	内外 1.5cm/10本	3T
10	円筒埴輪 (A2類)	器高39cm、口径24cm、底部径12.2cm、第一段高15.5cm、突帯間長11.7cm。透孔は円形、突帯はM字形。外面ナナメハケ、内面上半ナナメハケ、下半縦位のナデ、突帯部に指頭圧痕。内面にヘラ記号-あり。三段目に赤彩。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 鉄鏝(10YR8/4)	外1.4cm/10本 内1.8cm/10本	3T
11	円筒埴輪 (A2類)	残存高22cm、底部径12.2cm、第一段高17cm。突帯はM字形。外面ナナメハケ、内面縦位のナデ。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 鉄鏝(5YR8/3) 銅鏝(5YR7/2)	外1.4cm/10本	3T
12	円筒埴輪 (A2類)	器高36.3cm、口径23.8cm、底部径11.5cm、第一段高15cm、突帯間長11.6cm。透孔は円形、突帯は台形。外面ナナメハケ、内面上半ナナメハケ、下半縦位のナデ、突帯部に指頭圧痕。内面にヘラ記号-あり。三段目に赤彩。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 鉄鏝(10YR8/4)	内外 1.5cm/10本	3T
13	朝顔形埴輪	残存高11cm、口径32cm。口縁部の破片。突帯は台形。外面タテハケ、内面ナナメハケ、突帯部に指頭圧痕。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 鉄鏝(7.5YR8/4)	外1.4cm/10本 内1.8cm/10本	3T
14	朝顔形埴輪	残存高11cm、頸部径14.2cm、体部径17.1cm、底部径12.8cm、突帯間長9.2cm。透孔は二・三段目に半円形、突帯は三角形。外面タテハケ、内面上部ナナメハケ、他は縦位のナデ、一部突帯部に指頭圧痕。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	須恵質 鉄鏝(2.5Y8/4) 銅鏝(2.5Y6/1)	外1.2cm/10本 内1.5cm/10本	2T
15	朝顔形埴輪	残存高12.4cm、口径33.4cm。口縁部の破片。突帯は台形。外面ナナメハケ、内面斜位のナデ、突帯部はヨコナデ。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 鉄鏝(7.5YR8/4)	外3.2cm/10本	3T
16	朝顔形埴輪	残存高35.7cm、頸部径13.4cm、体部径16cm、底部径12.2cm、突帯間長7.7cm。透孔は二・三段目に半円形、突帯は三角形。外面タテハケ、内面縦位のナデ、一部突帯部に指頭圧痕。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 鉄鏝(2.5Y8/4)	外1.5cm/10本	2T
17	円筒埴輪 (埴輪棺) (A2類)	器高39.4cm、口径22.5cm、底部径13cm、第一段高16cm、突帯間長12.5cm。透孔は円形、突帯はM字形。外面ナナメハケ、内面上半ナナメハケ、下半縦位のナデ。内面にヘラ記号、あり。二・三段目に赤彩。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 鉄鏝(10YR8/4)	内外 1.5cm/10本	4T
18	円筒埴輪 (埴輪棺) (A2類)	器高39.4cm、口径26.4cm、底部径11.8cm、第一段高16.7cm、突帯間長11.3cm。透孔は円形、突帯はM字形。外面ナナメハケ、内面上半ナナメハケ、下半縦位のナデ、一部ヨコナデ。内面にヘラ記号-あり。二・三段目に赤彩。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 鉄鏝(10YR8/4)	内外 1.5cm/10本	4T
19	円筒埴輪 (埴輪棺) (A1類)	器高40.5cm、口径23cm、底部径13cm、第一段高16.6cm、突帯間長13.1cm。透孔は半円形、突帯はM字形。外面ナナメハケ、内面上半ナナメハケ、下半縦位のナデ、一部突帯部に指頭圧痕。二・三段目に赤彩。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 鉄鏝(10YR8/4)	内外 1.5cm/10本	4T

20	円筒埴輪 (埴輪箱) (A2類)	器高38.1cm、口径22.1cm、底部径12cm、第一段高13.5cm、突帯間長10.9cm。透孔は円形、突帯は台形。外面ナナメハケ、一段目に一部ヨコハケ、内面上半ナナメハケ、下半縦位のナデ、一部突帯部に指頭圧痕。内面にヘラ記号一あり。三段目に赤彩。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 浅緑(10YR8/4)	外1.6cm/10本 内1.1cm/10本	4 T
21	馬形埴輪	残存長12cm、幅5.2cm。馬形埴輪の鞍もしくはタテガミ。表面はタテ・ナナメハケ後端部及び接合部をヨコナデ。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 浅緑(7.5YR8/4)	表1.5cm/10本	2 T
22	人物埴輪 (美豆良)	残存長6.5cm。人物・男子の美豆良。表面はナデ。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 浅緑(7.5YR8/4)		2 T
23	家形埴輪 (堅魚木)	残存長7.2cm。家形埴輪の堅魚木。両端部がやや膨らみ、棟に装着する為の刻みが二ヶ所あり。表面は剝離が著しい。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 浅緑(7.5YR8/4)		墳丘南 表 採

舟塚古墳出土遺物 (第55図)

1	円筒埴輪	残存高5.0cm。口縁部の破片。外面タテハケ、内面ヨコハケ・ヨコナデ。	0.3~1.0mmの長、角、石、酸、パを多く含む。	良好 赤(10R5/8)	内外 1.6cm/10本	2 T
2	円筒埴輪	残存高5.5cm。口縁部の破片。外面タテハケ、内面ヨコハケ。	0.3~1.0mmの長、角、石、酸、パを多く含む。	良好 黄(5YR7/6)	内外 1.0cm/10本	1 T
3	円筒埴輪	残存高6.5cm。突帯は台形。外面ナナメハケ、内面ナナメハケ。	0.3~1.0mmの長、角、石、酸、パを多く含む。	良好 赤(10R5/8)	内外 1.6cm/10本	2 T
4	人物埴輪 (腕)	残存長7.5cm。人物埴輪の腕の破片。表面はナデ。中実。	0.3~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 浅緑(10YR8/4) 黄(2.5YR6/6)		4 T
5	人物埴輪 (髪か)	残存長5.2cm。人物埴輪・男子の振り分け髪の破片か。表面はナデ。	0.3~0.5mmの長、角、石、酸、パ。	良好 黄(2.5YR7/8)		4 T
6	人物埴輪 (顔)	残存長4.5cm。人物埴輪の右目部分の破片。内外面ナデ。5と同一個体の可能性が高い。	0.3~0.5mmの長、角、石、酸、パ。	良好 黄(2.5YR7/8)		4 T
7	人物埴輪	残存高7.7cm。人物埴輪の体部裾か。外面タテハケ、内面ナデ。	0.5~2.0mmの長、火、角、石、酸、パ。	良好 黄(2.5YR7/6)	外1.5cm/10本	7 T
8	形象埴輪	残存長13cm。板状の粘土に幅4.1cmの突帯を貼り付け、下方に段差のある透孔を穿つ。家形埴輪の屋根と壁体の接合部か。外面タテハケ、内面ナナメハケ。	0.3~1.0mmの長、角、石、パ、黒。	良好 赤(10R5/8)	内外 1.5cm/10本	4 T
9	盾形埴輪	残存高7.5cm。盾あるいは鞆の破片。外面の前面ナデ、後面ナナメハケ、内面ナナメハケ。接合部はタテハケ。	0.3~0.5mmの長、火、角、石、パ。	良好 緑(10G6/8)	内外 1.8cm/10本	2 T
10	形象埴輪	残存長3.3cm、径6cm。馬の足あるいは水鳥などの首か。外面盾位のナデ、内面斜位のナデ。	0.3~0.5mmの長、火、角、石、パ。	良好 緑(10G6/8)		4 T
11	土師器・坏	器高3.3cm、口径13cm。外面の口縁部はヨコナデ、底部はヘラ削り、内面ナデ後暗文状のヘラ磨き。	極めて精緻。白・黒色微粒子を微量に含む。	良好 外緑(2.5YR7/6) 内面黄緑(10YR7/3)		4 T
12	土師器・壺	器高29.7cm、口径15.8cm、胴部径27.4cm、孔径7.5cm。外面タテハケ、胴部中間ヨコハケ・ナナメハケ、胴部下半には波状のヘラ磨きあり。内面口縁部ヨコハケ、頸部ヘラ削り、胴部ナデ。焼成後底部穿孔。赤彩あり。	0.1~0.3mmの長、火、パを微量に含む。	良好(黒斑あり) 黄緑(10YR7/4)		4 T
13	土師器・壺	残存高6.5cm、口径19.4cm。口頸部の破片。外面口縁部に幅3cmの粘土を貼り付け、縄文を三段に施す。中段に円形朱文を八個配置する。頸部は縦位のヘラ磨き。内面は縦・横位のヘラ磨き。内面赤彩。	極めて精緻。白・黒色微粒子を微量に含む。	良好 黄(2.5Y7/4)		2 T

黒田2号墳出土遺物 (第56~58図)

1	円筒埴輪	残存高15cm、胴部径23cm、突帯間長11cm。透孔は円形、突帯はM字形。外面タテハケ、内面ナナメハケ、一部断続ナデあり。	0.5~3.0mmの長、火、角、石、酸、パ。	やや軟質 赤(10R5/8)	内外 2.7cm/10本	4 T
2	円筒埴輪	残存高15.5cm、底部径16.6cm、第一段突帯高14.5cm。突帯はM字形。外面タテハケ、底部調整のヘラ削りあり。内面ナナメハケ・ナデ。	0.5~3.0mmの長、火、角、石、酸、パ。	やや軟質 赤(10R5/8)	内外 2.7cm/10本	4 T

3	土師器・坏	器高5.3cm、口径12.4cm。外面口縁部付近ヨコナデ、以下へら削り、内面ヨコナデ、底部は不定方向のナデ。	0.3~1.0mmの長、石、酸、パ。	良好(黒斑) ■(2.5YR6/6)		3 T
4	須恵器・甕	残存高5.6cm、口径24cm(復元)。口頸部の破片。外面は口縁部に二本の沈線、中段に凸線を施し、その中間と凸線以下に波状文あり。内面はヨコナデ、緑黒色の自然釉がかかる。	0.3~0.5mmの長、パ、黒。	良好 ■(10BG7/1)	波状文 1.3cm/10本	前方部 墳丘
5	須恵器・横瓶	残存長7.2cm。下方向へ断面長方形の把手がつく。外面カキ目、内面回転ナデ。	0.3~0.5mmの長、パ、黒。	良好 ■(10BG6/1)	カキ目 2.2cm/10本	4 T
6	人物埴輪(武人)	残存高20.5cm。武人埴輪の目から脇の下までの破片。脇立、鑲、円形浮文の首飾り、肩甲、前掛け状の胸甲が残存する。胴部の一部にタテハケ、その他はナデ。内面ナデ。目の下・脇立の正面部に赤彩。美豆良の剥離痕あり。腕は中実。	0.3~2.0mmの長、火、角、石、酸、パをやや多く含む。	良好だが表面の剥離がある ■(5YR7/6)	外1.7cm/10本	4 T
7	人物埴輪(右腕)	残存長8.6cm。人物埴輪の右腕の破片。表面ナデ、一部に板目あり。武人埴輪の腕に近似する。中実。	0.3~0.5mmの長、火、角、石、酸、パ。	良好 ■(2.5YR7/6)		4 T
8	人物埴輪(武人)	残存長5.5cm。武人埴輪の脇立の破片。表面ナデ、脇立の正面部に赤彩。	0.3~1.0mmの長、火、角、石、酸、パ。	良好 ■(2.5YR7/5)		4 T
9	人物埴輪(武人)	顔面部残存高9.9cm、体部残存高8.9cm。武人埴輪の顔から脇の下までの破片。脇立、鑲、円形浮文の首飾り、右肩甲、前掛け状の胸甲が残存する。内・外面ナデ。腕は中実。	0.3~2.0mmの長、火、石、酸、パ。	良好 ■(2.5YR6/6)		4 T
10	人物埴輪(美豆良)	残存長7.1cm。人物埴輪・男子の美豆良(右)破片。外面ナデ。最下部後面に剥離痕あり。	0.3~0.5mmの長、角、石、パ。	良好 ■(2.5YR7/6)		4 T
11	人物埴輪(美豆良)	残存長7.1cm。人物埴輪・男子の美豆良破片。外面ナデ。全面に赤彩。	0.3~0.5mmの長、角、石、パ。	良好 ■(2.5YR7/6)		4 T
12	人物埴輪(顔)	残存長6.1cm。人物埴輪の眉部の破片。内・外面ナデ。	0.3~0.5mmの長、酸、石、パ。	良好 ■(2.5YR6/6)		4 T
13	人物埴輪(顔)	残存長6.1cm。人物埴輪の頸部の破片。頸は粘土貼り付け。内・外面ナデ。	0.3~2.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好だが表面の剥離がある ■(2.5YR6/6)		4 T
14	人物埴輪(顔)	残存長5.1cm。人物埴輪の頸部の破片。頸は粘土貼り付け。外面ナデ、内面ナメハケ。	0.5~2.0mmの長、火、石、酸、パを多く含む。	やや軟質 ■(2.5YR6/8)	内1.7cm/10本	4 T
15	人物埴輪(腕)	残存長7.9cm。人物埴輪の腕部の破片。表面ナデ。中実。一部に赤彩あり。	0.5~2.0mmの長、火、石、パを多く含む。	良好だが表面の剥離がある ■(10R6/8)		4 T
16	人物埴輪(顔)	残存高11.6cm。人物埴輪・男子の顔面部の破片。外面ナデ、内面ヨコハケ・ナデ。側面に美豆良の一部が残存し、その後ろに径1.3cmの小孔あり。頸は粘土貼り付け。	0.3~1.0mmの長、火、角、石、酸、パをやや多く含む。	良好だが表面の剥離がある ■(2.5YR7/6)		4 T
17	人物埴輪(島田髷)	残存長7.9cm。人物埴輪の島田髷の破片。表面ハケ後ナデ、裏面ナメハケ。	0.3~0.5mmの長、火、石、パ。	良好 ■(10R6/8)	表裏 1.5cm/10本	4 T
18	人物埴輪(腰)	残存高8.3cm。人物埴輪の腰帯とそこから垂れ下がる結び目。外面タテハケ、内面ナデ。結び目の内側に赤彩あり。	0.5~2.0mmの長、火、石、パを多く含む。	良好だが表面の剥離がある ■(2.5YR6/6)		4 T
19	人物埴輪(腕)	残存長2.7cm。人物埴輪の腕部の破片。表面ナデ。中実。	0.5~2.0mmの長、火、石、パを多く含む。	やや軟質 ■(5YR7/8)		4 T
20	形象埴輪	残存長3.2cm。勾玉状の形態であり、人物埴輪の首飾りか。表面ナデ。一部に赤彩色あり。	0.3~0.5mmの長、火、石、パ。	良好 ■(10R6/6)		4 T
21	形象埴輪	残存長6.1cm。人物埴輪・男子の振り分け髪の破片か。表面タテハケ、裏面は剥離。	0.3~1.0mmの長、火、角、石、パ。	良好 ■(10R6/6)		4 T
22	動物埴輪(耳)	残存長7.5cm。馬・犬などの耳部(左)の破片。内・外面ナデ。	0.5~2.0mmの長、火、石、パを多く含む。	良好 ■(2.5YR7/6)		4 T
23	馬形埴輪(顔)	残存長8.5cm(左)、5.7cm(右)。馬形埴輪の右頬部の破片。面繫を幅2cmほどの粘土紐で表現している。外面ナデ、内面ヨコハケ・ナデ。裏面には本体との剥離痕あり。	0.3~2.0mmの長、火、角、石、パをやや多く含む。	良好 ■(2.5YR7/6)	内1.4cm/10本	4 T
24	動物埴輪(足)	残存高5.5cm。馬・犬などの脚部付け根付近の破片。外面縦位のナデ、内面斜位のナデ。	0.3~2.0mmの長、火、角、石、パを多く含む。	良好 ■(2.5YR7/6)		4 T

25	馬形埴輪 (胸繫)	残存長17.7cm。馬形埴輪胸繫のやや右寄りの部分。胸繫からは鐘形杏葉が垂れ下がっている。内・外面ナナメハケ、杏葉部はナデ。	0.3~2.0mm の長、火、角、石、パを多く含む。	良好だが表面はもろい 縷(2.5YR7/6)	外1.4cm/10本 内1.5~1.7cm/10本	4 T
26	馬形埴輪 (顔)	残存長12.6cm。馬形埴輪の耳部の下の破片。耳との付け根で欠損しており、直下に幅2.5cmの面繫がある。外面ナナメハケ・ナデ、内面ナデ・指頭圧痕、一部ナナメハケ。	0.3~1.0mm の長、火、石、パ。	良好 縷(2.5YR7/6)	内外 1.5cm/10本	4 T
27	馬形埴輪 (泥障)	残存長8.5cm。馬形埴輪の泥障と本体との接合部分。外面タテハケ後ヨコナデ、内面タテハケ後ナデ調整。	0.5~2.0mm の長、火、石、パ。	良好 縷(2.5YR7/6)	内外 1.7cm/10本	4 T
28	馬形埴輪 (鞍・鎧)	残存長20.9cm。馬形埴輪の後輪・鎧の一部の破片。後輪は剥離、鎧も下部は欠損している。外面ヨコハケ後部分的にナデ、内面ナナメハケ・ナデ。	0.3~2.0mm の長、火、石、パをやや多く含む。	良好だが表面はもろい 縷(10R6/8)	内外 1.5cm/10本	4 T
29	形象埴輪 (不明)	残存長6.2cm。罌状破片であり、端部は直線である。円筒状のものにとりつく形態であるが、現状では対象物の特定は困難。表面はナデ。	0.3~0.5mm の長、火、角、石、酸、パ。	良好 縷(10R6/6)		4 T
箱崎4号墳出土遺物 (第59・60図)						
1	円筒埴輪	残存高7.5cm。突帯は台形。外面タテハケ、内面ナナメハケ。	0.3~2.0mm のチ、長、角、石、酸、パ。	良好 縷(2.5YR7/6)	外1.8cm/10本 内2.2cm/10本	1 T
2	円筒埴輪	残存高8.2cm、突帯間長8cm。透孔は円形、突帯は台形。外面タテハケ、内面縦位のナデ。	0.3~1.0mm の長、角、石、パ。	良好 縷(5YR8/4)	外1.8cm/10本	1 T
3	円筒埴輪	残存高5.7cm。突帯は台形。外面タテハケ、内面ナナメハケ。	0.3~1.0mm の長、角、石、酸、パ。	良好 縷(2.5YR7/6)	外1.8cm/10本 内2.0cm/10本	4 T
4	円筒埴輪	残存高8.3cm。底部の破片。外面タテハケ、内面縦位のナデ。	0.3~1.0mm の長、角、石、酸、パ。	良好 縷(2.5YR7/6)	外2.0cm/10本	1 T
5	人物埴輪 (腕)	残存長9.7cm。人物埴輪の右腕部の破片。表面ハケ・ナデ調整。中実。	0.5~2.0mm のチ、長、角、石、パ。	良好 縷(2.5YR7/6)	表面 1.7cm/10本	3 T
6	人物埴輪 (大刀)	残存長10.9cm。人物埴輪・男子の腰に佩用される大刀の破片。柄を刀身部分に差し込んで接合する。表面ハケ・ナデ調整。中実。	0.3~1.0mm のチ、長、角、石、酸、パ。	良好 縷(2.5YR6/6)	表面 1.5cm/10本	2 T
7	人物埴輪 (胸部)	残存高8.7cm。人物埴輪のスカート部の破片。外面タテハケ・ナデ、内面ナデ。女子か。	0.5~2.0mm のチ、長、角、石、酸、パ。	良好 赤(10R5/8) 縷(2.5YR7/6)	外1.5cm/10本	5 T
8	形象埴輪 (不明)	残存長5.6cm。外面タテハケ、内面斜位のナデ。帯状の粘土紐の直上に、さらに粘土塊を貼り付けている。	0.5~2.0mm の長、石、酸、パ。	良好だが表面の剥離が著しい 赤(10R4/8)	外1.5cm/10本	2 T
9	形象埴輪 (不明)	残存長5.7cm。外面ナデ、内面斜位のナデ。帯状の粘土紐を貼り付けており、8と同様の器種となろう。	0.5~2.0mm の長、石、酸、パ。	良好だが表面の剥離が著しい 赤(10R4/8)		2 T
10	馬形埴輪 (胸繫)	残存長9.7cm。馬形埴輪の胸繫部分の破片であり、幅4cmの突帯に径3.7cmの円形浮文を貼り付けている。直下に透孔が存在することから、ほぼ正面である。外面タテハケ、内面ヨコハケ。	0.3~0.5mm のチ、長、角、石、パ。	良好 縷(2.5YR7/6)	外1.5cm/10本 内1.5cm/10本 2.0cm/10本	5 T
11	形象埴輪 (不明)	残存長6.2cm。内傾する円筒に幅2.8cmの突帯を貼り付け、さらにその突帯の上に粘土塊を貼ったものであり、それぞれ剥離している。人物埴輪のスカート部などの可能性はあるが、詳細は不明。外面タテハケ・ナデ。	0.3~1.0mm の長、雲、石、パ。	良好 縷(2.5YR7/6)	外1.5cm/10本	2 T表採
12	形象埴輪 (不明)	残存高5.5cm。円筒に粘土紐の結び目を貼り付けたもの。人物埴輪の胸部、大刀・鞆の飾りなどが考えられる。外面タテハケ、内面タテ・ナナメハケ、及び縦位のナデ。	0.3~2.0mm の長、石、酸、パ。	軟質 縷(10YR8/3)	内外 1.5cm/10本	3 T
13	馬形埴輪 (胸繫)	残存長9.9cm。馬形埴輪の胸繫部分の破片。幅4cmの突帯に径3.5cmの円形浮文を貼り付けている。外面タテハケ、内面ナナメハケ。	0.3~0.5mm のチ、長、角、石、パ。	良好 縷(2.5YR7/6)	外1.5cm/10本 内1.5cm/10本 2.0cm/10本	3 T
14	鞆形埴輪 (鐙部)	残存長10.3cm。鞆形埴輪の右踵下半部の破片。正面には線刻で鋸歯文を表現。前・後面ナナメハケ。盾の可能性もある。	0.5~2.0mm のチ、長、石、酸、パ。	良好 赤(10R5/8)	前後 2.0cm/10本	2 T
15	盾形埴輪 (鐙部)	残存長7.4cm。盾もしくは鞆形埴輪の破片。正面には線刻で鋸歯文を表現。前・後面ナナメハケ。	0.3~1.0mm のチ、長、角、石、パ。	良好 縷(2.5YR7/6)	前1.7cm/10本 後2.0cm/10本	7 T

16	靱形埴輪 (円筒部)	残存高7.9cm。靱形埴輪の円筒部。沈線と刺突の下方に赤彩。外面タテハケ、内面縦位のナデ。	0.5~2.0mmのチ、長、角、石、パ。	良好 靱(5YR7/6)	外1.4cm/10本	表採
17	靱形埴輪 (鱗石下部)	残存高17.2cm。靱形埴輪の鱗部の破片で、前後の関係よりボン状円環などから右下部分と推察する。破片部分には上下を分ける刺突が3~5mm間隔で施され、下半には赤彩。また、円環にも赤彩が施される。正面ナナメハケ後斜位のナデ、後面ナナメハケ・ナデ。内面斜位のナデ。	0.3~2.0mmのチ、長、角、石、パ。	やや軟質 靱(2.5YR7/6)	前後 2.0cm/10本	6 T
18	形象埴輪 (不明)	残存長10.7cm。本体にY字状の突帯を貼り付けたもので、一方が筒状に続いていく形態をとる。内外面ともにナデ調整。内面の筒状に続いていく部分は丁寧にユビナデが施される。	0.3~1.0mmのチ、長、角、石、パ。	良好 靱(2.5YR7/6)		6 T
木の本10号埴出土遺物(第61~63図)						
1	円筒埴輪	器高38.2cm、口径30.7cm、底部径14cm、第一段高12.5cm、突帯間長12.5cm。透孔は円形、突帯はM字形。外面タテハケ、内面上半ナナメハケ、下半縦位のナデ。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 にぶい靱(10YR7/4)	内外 1.5cm/10本	2 T
2	円筒埴輪	器高37.7cm、口径30cm、底部径14.3cm、第一段高14.3cm、突帯間長12.2cm。透孔は円形、突帯はM字形。外面タテハケ、内面ナナメハケおよび縦・横位のナデ、第一突帯部には指頭圧痕。	0.5~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 靱(7.5YR/10本)	内外 1.5cm/10本	2 T
3	円筒埴輪	残存高27.5cm、口径26.6cm、突帯間長11cm。底部を欠損。透孔は円形、突帯はM字形。外面タテハケ、内面上半ナナメハケ、下半縦位のナデ、第一突帯部には指頭圧痕。	0.5~2.0mmの長、石、酸、パ。	良好 靱(2.5YR6/6)	外1.7cm/10本 内1.5cm/10本	2 T
4	円筒埴輪	残存高19.4cm、口径29.4cm、突帯間長11.6cm。底部を欠損。透孔は円形、突帯はM字形。外面タテハケ、内面上半ナナメハケ、下半縦位のナデ、第二突帯部には指頭圧痕。内面にヘラ記号×あり。	0.5~1.0mmの長、石、パ。	良好 靱(5YR6/6)	内外 1.6cm/10本	2 T
5	円筒埴輪	残存高13.6cm、口径26cm。口縁部の破片。突帯はM字形。外面タテハケ、内面上半ナナメハケ、第一突帯よりやや上部には指頭圧痕、その他は縦位のナデ。内面にヘラ記号×あり。	0.5~1.0mmの長、石、酸、パ。	良好 靱(2.5YR6/6)	内外 1.5cm/10本	1 T
6	円筒埴輪	残存高20.1cm、底部径14cm、第一段高8cm、突帯間長7.5cm。透孔は円形、突帯はM字形。外面タテハケ、内面縦位のナデ、一部ヨコナデ。透孔が三段目にあることから三条突帯の円筒埴輪となる。	0.5~1.0mmの長、石、酸、パ。	良好 にぶい靱(7.5YR6/3)	外1.5cm/10本	2 T
7	朝顔形埴輪	残存高17.5cm、体部径19cm、くびれ部径16.2cm。透孔は円形、突帯はM字形。外面タテハケ、内面斜位のナデ。	0.5~1.0mmの長、石、酸、パ、黒。	良好 にぶい靱(5YR7/4)	外1.4cm/10本	2 T
8	人物埴輪 (腕)	残存長7.5cm。人物埴輪の腕部の破片。表面ナデ調整。中実。	0.5~1.0mmの長、石、パ、黒。	良好 靱(2.5YR7/8)		2 T
9	人物埴輪 (美豆良)	残存長4.3cm。人物埴輪・男子の美豆良先端の破片。前後の様相から左側の美豆良である。表面ナデ調整。	0.3~1.0mmの長、石、酸、パ。	良好 にぶい靱(5YR7/4)		2 T 表採
10	人物埴輪 (下半部)	残存高26cm、底部径13cm、くびれ部径14.4cm。人物埴輪(半身像)の下半部の破片。腰部には低い突帯を貼り付ける。外面タテハケ、一部指頭圧痕、内面斜位のナデ。	0.5~3.0mmの長、石、酸、パ、黒。	良好 靱(5YR8/4)	外1.3cm/10本	4 T
11	人物埴輪 (島田鬘)	端部長13.4cm、くびれ部長4.1cm。人物埴輪・女子の島田鬘後半部の破片。内外面ナデ。くびれ部分には鬘留の剥離痕あり。	0.3~0.5mmの長、角、石、酸、パ。	良好 靱(10R6/8)		2 T
12	人物埴輪 (右指)	残存長3.7cm。破片の右側に端部が存在することから、右側の指である。指は一本ずつ作っている。表面ナデ調整。	0.3~0.5mmの長、角、石、酸、パ。	良好 にぶい靱(5YR7/4)		2 T
13	人物埴輪 (島田鬘)	残存長7.5cm。湾曲の度合いから、島田鬘の前端部分の破片である。表面ハケ・ナデ調整、裏面ハケ調整。	0.3~0.5mmのチ、長、石、パ。	良好 にぶい靱(5YR7/4)	表裏 1.5cm/10本	2 T
14	人物埴輪 (右耳)	残存長3.9cm。耳部に径2cmの透孔をあけ、周りに円環状の粘土紐を貼り付ける。下部には耳飾りの剥離痕がある。内外面ナデ調整。色調・焼成などの諸特徴から15と同一個体とである。	0.5~1.0mmの長、酸、石、パ、黒。	やや軟質 靱(5YR7/6)		2 T

15	人物埴輪 (顔)	残存長5.4cm。耳部に径2cmの透孔をあげ、周りに円環状の粘土紐を貼り付ける。額の縁周りと眉に赤彩あり。16との共通性から女子の可能性が高い。内・外面ナデ調整。14と同一個体である。	0.5~1.0mmの長、石、酸、パ、黒。	やや軟質 土(5YR7/6)		2 T
16	人物埴輪 (頭部)	残存高16.2cm、顔長11.6cm、首径6.8cm。島田鬚が剥離していることから、女子埴輪と判断できる。耳部に径1.5cmの透孔をあげ、周りに円環状の粘土紐を貼り付け、後側に耳玉、下方に耳環と思われる表現がある。額の縁周りに肩の上、鼻の頭から頬にかけて三角形状に、さらに耳の横から口に向かって幅6mmの帯状に、また首の前面に赤彩が認められる。外面顔面部及び後背部上半はナデ調整、後背部下半と胸部付近はタデハケ、内面ナデ調整。	0.3~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 洗滌(7.5YR8/4)	外1.4cm/10本	2 T
17	人物埴輪 (胸部)	残存長5.2cm。円筒状の本体に径3.2cmの透孔をあけたもので、18との共通性から人物埴輪の脇の下の破片であろう。外面タデハケ、内面ヨコハケ。	0.3~0.5mmのチ、長、石、パ。	良好 土(10R6/6)	内外 1.5cm/10本	2 T
18	人物埴輪 (右胸部)	残存長10.4cm。右掌の剥離痕があり、その後側に円形の透孔を穿つ。右手を腰に添える形態の人物埴輪となろう。外面タデハケ、内面斜位のナデ。	0.3~0.5mmのチ、長、石、酸、パ。	良好 土(2.5YR7/6)	外1.5cm/10本	4 T
19	人物埴輪	残存長5.6cm。円筒状の本体に径3.5cmの透孔をあけたもので、18との共通性から人物埴輪の脇の下の破片であろう。外面タデハケ、内面斜位のナデ。	0.3~1.0mmの長、角、石、酸、パ。	良好 土(2.5YR7/6)	外1.5cm/10本	2 T
20	形象埴輪 (不明)	残存長9.1cm。比較的平坦な器壁であり、幅2.6cmの突帯を横位に貼り付けている。厚さも他の形象埴輪とは異なっており、家形埴輪などの平坦面が存在するものと思われる。外面ナデ調整、内面斜位のナデ。	0.5~1.0mmのチ、長、石、酸、パ。	良好 洗滌(5YR6/4)		2 T
21	馬形埴輪 (頭部)	残存長8.5cm。馬形埴輪の面繫部分。下方には両目の一部が確認できる。面繫の交差する部分の辻金具の表現は省略されているが、円形浮文による紙が4個存在する。内外面ナデ調整。	0.5~1.0mmのチ、長、石、酸、パ。	良好 洗滌(7.5YR6/4)		4 T
22	馬形埴輪 (耳下部)	残存長5.9cm。粘土紐の接合痕や調整の方向から、馬形埴輪の耳下部分の面繫と考えられる。外面タデハケ、内面斜位のナデ。	0.3~1.0mmのチ、長、石、酸、パ。	良好 洗滌(5YR7/4)	外1.5cm/10本	2 T
23	馬形埴輪 (耳下部)	残存長5.9cm。上方で屈曲しており、耳へ続いていく部分であろう。外面には斜位のナデがあり、面繫の表現である突帯が存在したものとと思われる。外面ハケ調整、内面ナデ調整。	0.3~0.5mmの長、角、石、酸、パ。	良好 洗滌(5YR7/4)	外1.4cm/10本	4 T
24	馬形埴輪 (体部)	残存長10.2cm。縦位と横位の突帯が逆L字に交差している部分の破片。縦位の突帯は上に広がっており、このことから鞍となる可能性が高い。外面ヨコハケ、内面斜位のナデ。	0.3~1.0mmのチ、長、石、酸、パ、黒。	良好 土(2.5YR7/6)	外1.5cm/10本	4 T
25	馬形埴輪 (耳下部)	残存長6.9cm。上方で屈曲しており、耳へ続いていく部分であろう。斜めに幅2cmの突帯を貼り付けている。外面ハケ調整、内面ナデ調整。	0.3~0.5mmのチ、長、石、パ、黒。	良好 土(2.5YR7/8)	外1.5cm/10本	4 T
26	馬形埴輪 (鞍か)	残存長6.7cm。円筒部に扇形の鱗部を貼り付けたもので、円筒部からは剥離している。鱗部には幅1.5cmの粘土紐を縦に貼り付けており、何を表現したものかは不明。表面ハケ・ナデ調整。馬形埴輪の鞍部か。	0.5~3.5mmの長、長、石、パ、黒。	良好 土(2.5YR7/8)	表面 1.5cm/10本	4 T
27	馬形埴輪 (耳)	残存帳7.5cm。ナデ調整の方向と形状から、左耳と考えられる。粘土板を巻いて成形。表面ナデ調整。	0.3~1.0mmのチ、長、石、酸、パ、黒。	良好 洗滌(5YR7/4)		4 T
28	形象埴輪 (不明)	残存帳7.8cm。縦横に突帯が交差する部分の破片。図上での縦位に幅2.9cmの低い突帯を貼り付ける。外面及び突帯上にハケ調整、内面ナデ調整。不明埴輪であるが、面繫の交差部分の可能性もある。	0.3~1.0mmの長、石、酸、パ。	良好 土(2.5YR6/6)	外1.5cm/10本 突帯上 1.8cm/10本	2 T
29	馬形埴輪 (鞍か)	残存長8.7cm。円筒部に扇形の鱗部を貼り付けたもので、円筒部からは剥離している。鱗部には幅1.5cmの粘土紐を縦に貼り付けており、何を表現したものかは不明。表面ハケ調整。馬形埴輪の鞍部か。	0.3~0.5mmの長、石、パ。	良好 洗滌(7.5YR8/6)	表面 1.5cm/10本	4 T
30	馬形埴輪 (泥障)	残存長11.2cm。馬形埴輪の泥障下部の破片。上方には輪縁の下部が確認できる。表・裏面ナデ調整。	0.3~0.5mmの長、石、酸、パ。	良好 土(2.5YR7/6)		4 T

31	馬形埴輪 (鞍か)	残存長8.7cm。円筒部に扇形の臍部を貼り付けたもので、その端部である。円筒部からは剥離している。26などと同種類の破片と推察され、馬形埴輪の鞍部であろう。表面ハケ調整。	0.3~0.5mm のチ、長、石、酸、パ。	良好 靱(2.5YR7/6)	表面 1.4cm/10本	4 T
32	馬形埴輪 (鞍)	残存長13.1cm。馬形埴輪の鞍部分。本体とは剥離している。上面及び端部に赤彩。表面ハケ調整。	0.3~0.5mm の長、石、酸、パ。	良好 靱(7.5YR8/4)	表面 1.5cm/10本	2 T
33	馬形埴輪 (雲珠)	残存長8cm。雲珠及び帯の表現などはほとんど剥離しているが、現状で5脚が確認できる。外面ハケ及びナデ、内面ナデ調整。	0.3~1.0mm の長、石、酸、パ。	やや軟質 靱(2.5YR7/6)	外1.5cm/10本	4 T
34	馬形埴輪 (鞍)	残存長15.7cm。馬形埴輪の鞍部分。本体とは剥離している。上面及び端部に赤彩。表面ハケ調整、一部に斜位のナデ。	0.3~0.5mm の長、角、石、パ。	良好 靱(7.5YR8/4)	表面 1.3cm/10本	2 T
35	馬形埴輪 (馬鐸)	残存長10.5cm。馬形埴輪の胸繫もしくは尻繫に付属する馬鐸の破片。外面はハケ調整の後へラで「☒」状の文様を施す。内面はナデ調整。正面を中心に白色粘土を塗布する。	0.3~1.0mm のチ、長、石、パ、黒。	良好 靱(5YR7/4)	外面 1.4cm/10本	2 T
36	馬形埴輪 (馬鐸)	残存長8.5cm。馬形埴輪の胸繫もしくは尻繫に付属する馬鐸の破片。外面はハケ調整の後へラで「☒」状の文様を施す。内面はナデ調整。正面を中心に白色粘土を塗布する。	0.3~1.0mm のチ、長、石、パ、黒。	良好 靱(5YR7/4)	外面 1.4cm/10本	2 T
37	馬形埴輪 (馬鐸)	残存長5.4cm。馬形埴輪の胸繫もしくは尻繫に付属する馬鐸の破片。外面はハケ調整の後へラで「☒」状の文様を施す。内面はナデ調整。正面を中心に白色粘土を塗布する。	0.3~1.0mm のチ、長、石、パ、黒。	良好 靱(5YR7/4)	外面 1.4cm/10本	4 T
38	馬形埴輪 (馬鐸)	残存長4.5cm。馬形埴輪の胸繫もしくは尻繫に付属する馬鐸の破片。外面はハケ調整の後側面に線刻がある。35などとは構造的に異なるものであり、馬鐸本体から剥離している。	0.3~1.0mm のチ、長、石、パ。	良好 靱(5YR7/4)	外面 1.7cm/10本	2 T
39	馬形埴輪 (鈴)	残存長3.5cm。馬形埴輪の胸繫などに伴う鈴と考えられる。表面はナデ調整。	0.3~0.5mm の長、角、石、パ、黒。	軟質 靱(2.4YR7/8)		2 T

Ⅶ 結 語

前章までに示したように、約30年振りの全県下の古墳分布の悉皆調査を、各市町村ごとの概況調査に基づくカード・分布図作成と主要古墳の試掘・測量調査について行ってきた。

本章においては、5か年の調査全体を通じた総括として、調査成果のまとめと残された問題点等について若干触れておきたい。

1 概況調査について

古墳分布の概況調査については、既に一覧表・分布図等に成果を示したとおりである。また、分布の特徴についても各郡市別に概要をまとめた。ここでは、古墳分布の全体的な様相について特に注意すべき点と調査上の問題点を指摘しておきたい。

まず、県南部地域・県東部地域の古墳希少地域についてである。北足立・入間・南埼玉・北葛飾の各郡のうち、東京近郊になる地域は古墳数が格段に少なく、今回の調査においても微増という状況であった。特に、旧利根川河道の江戸川・中川とその支流の流域では越谷市・吉川町以南では古墳がまったく確認されていない。これは、古墳時代の集落遺跡もほとんど未確認なことから考えれば、当然のことかもしれない。しかし、草加市に古墳が所在することが確認され、毛長川対岸の東京都足立区伊興遺跡や竹の塚周辺の古墳群の存在を考えると、草加市周辺にはまだ未知の古墳が眠っている確率が高い。越谷市も、古く発掘調査された見田方遺跡のような古墳時代遺跡の存在などから、将来的には古墳が確認される可能性をまだ残している。やや北になるが、幸手市・騎西町などでは、数多くはないけれど、古墳時代遺跡の確認例がある。県東部・東京隣接地域などでも今後の古墳時代遺跡の確認の動向を見守っていききたい。

県北部から県中央部の児玉・大里・秩父・比企郡市については、丘陵・台地が広がっている地域であり、大部分の古墳が山林の中に所在する。近年、各地の山林は有用性が失われて、ほとんどが管理の行き届かない状況になってしまい、踏み込むことさえできない、かつての道がまったくわからないという状態にある。したがって、本来ならば所在確認が十分できるはずの古墳の確認が大変困難であった。

過去に発掘調査が行われた古墳群で未報告のものの記録類も、不十分とはいえ追跡調査した。しかしながら、正確な全体測量図や遺構分布図が発見できないケースが多かった。その意味では、児玉町と美里町の境界の丘陵地帯に所在し、こだまゴルフクラブのゴルフコース内とその周辺に分布する生野山古墳群の分布図を美里町教育委員会とこだまゴルフクラブで発見できたことは今回の調査における収穫の一つであった。

古墳の分布密度の濃い古墳群には、拡大分布図を作成したが、本書の編集の都合で、拡大図の必要性の多少認められるものでも、やや無理をして1/35,000の基本図の方に納めてしまったものが多い。ただし、事務局には、各古墳群の1/10,000あるいは1/2,500の分布図の元本があるので、必要な場合には参照することができる。

なお、過去の記録の空白のため古墳の存在の事実は判明したが、位置の不明な古墳については、一覧表の記述のみ行う、という方法をとった。

県北・県央地域で現在までに発掘調査された古墳はかなり多く、結果的には古墳数は激増している。県全体の約8割の古墳がこの地域に集中していることになる。しかし一方、墳丘の残存する古墳も確実に減少しており、残念である。もっとも、県南部の墳丘が残存する古墳数の激減に比較すれば、まだかなりの古墳群の保存状態が良好なのであり、一層の保存整備が望まれる。

さて、今回確認された県内の古墳の総数は実に4,696基に達している。その内訳は前方後円墳（帆立貝形古墳を含む）131基、前方後方墳7基、円墳3,963基、方墳97基、上円下方墳2基、八角形墳2基、横穴墓297基、不明197基である。このうち、不明のものはほとんどが円墳の可能性が高いものである。

市町村ごとに見ると、美里町562基が最も多く、東松山市462基、児玉町291基、滑川町268基、神川町268

基、吉見町235基、熊谷市219基、江南町207基などが特に古墳が集中する区域である。

一方、今回の調査で古墳あるいは古墳の可能性の残された「塚」の所在が確認されなかったのは、新座市、伊奈町、飯能市、入間市、大井町、三芳町、名栗村、玉川村、都幾川村、横瀬町、大滝村、荒川村、両神村、東秩父村、神泉村、大利根町、北川辺町、越谷市、久喜市、白岡町、三郷市、幸手市、鷲宮町、吉川町の23市町村であった。

2 詳細調査について

詳細調査については、「詳細調査の概要」にしめしたとおりであるが、調査対象古墳選定の経緯・各古墳の調査が提起する問題等について本節にまとめてみたい。

調査対象古墳の選定基準は既述したとおりであるが、実際の選定作業においては、あらかじめ事務局で条件をいくつか加味しておいた。まず、「前方後円墳・前方後方墳の可能性のある古墳」ということである。全県下の主要古墳を調査するという立場に立つとき、円墳・方墳よりは規模も大きいこれらの方が将来的にも保存の条件が整いやすいため、試掘・測量調査を行って学術情報を増やしておくことが有益であることになる。

次に、古墳周辺の現地の状態を重視した。試掘のトレンチ位置は、調査の状況変化に対応して変えられなければ、確実な墳形確認は望めない。したがって、望ましい調査を行うために、トレンチ設定位置が極端に限定される場合は対象から除外した。

また、古墳の築造時期や性格を判断する材料、つまり、出土遺物が得られることも条件とした。調査の結果、遺物が得られなかった場合、調査の意味が半減するからである。将来の保存についても逆効果にならないとも限らない。

以上の3点を既述の条件に加えて、調査の効率化と調査成果の増加を図ったため、各市町村や委員・調査員各位から調査対象候補としてお勧めいただいたいくつかの古墳については調査対象から除外せざるをえなかった。また、特定市町村に偏るのも調査の広域性から考えて望ましいとはいえないので、一部を除いて各市町村にたいして1か所という扱いにならざるをえなかった。

具体例を述べておこう。吉田町太田部古墳群は県全体で最高の標高を持つ地点に築かれた古墳群として県選定重要遺跡及び町指定文化財になっている。しかし、古墳の周囲には古墳時代の集落遺跡はなく、古墳であることを疑問視する向きもある。しかし、土地利用が進んでいる平野部から300m以上も高く、特に遺跡を破壊してしまうような開発行為にかかる緊急性はない。そこで、あえて試掘の形は取らず、平成5年度に再び現地確認を行うに留めた。この確認によっても結局、古墳であること、古墳でないこといずれの積極的証拠も見いだせず、「塚」の可能性を残しながら、古墳の扱いを継続していかざるをえないことになった。吉田町内では結果的には牧林古墳の試掘・測量調査を実施した。

児玉町・美里町の境界付近にある物見塚古墳も、主丘が30m近い大きさになり、前方後円墳説・前方後方墳説・双方中円墳説などがある。この古墳はゴルフ場の外周道路に近い位置にあり、前述の諸条件を満たさなかったため、選定しなかった。児玉町では、比較的古式の古墳の一つとされていた長沖157号墳を調査対象に選定した。また、同じように古い段階の前方後円墳らしいとされる美里町諏訪山古墳も調査対象からはずさざるを得なかった。

浦和市塚本塚山古墳は現状でも5m近い高さの墳丘を残しており、前方後円墳ないし前方後方墳である可能性が高い古墳である。しかし、トレンチを設定できそうな場所が南側の畑地に限定されており、墳形確認が十分できないと推察されたため、対象から除外した。鳩ヶ谷市仙元祠古墳は、かつて高射砲陣地となったために墳丘が削平されてしまったが、全長80m近い大きさの前方後円墳とされていた。現状では住宅地になっているため、トレンチ位置に制約が大きく、墳形確認が十分できにくいと判断して、対象外とした。この結果、北足立郡市においては試掘・測量調査を実施しなかった。

これら以外にも調査対象候補はいくつかあったが、トレンチ設定位置が著しく限定されていたり、地権者

の調査への同意が取り付けられなかったり、調査効率・安全確保・作業員確保など調査の諸条件を整えることがむずかしいなどという作業上の障害があって除外したもの、将来的な保存の展望について明確でなく、史跡指定・保存整備などへの各市町村の対応がスピーディーには図られる状況にないと見て除外したものがある。このような調査の今後の機会については現在のところ特別な計画はないが、千葉県のように実態不明の主要古墳を毎年数基試掘・測量調査することによって実態究明の努力を重ねているケースもあるため、今回試掘・測量調査を断念したものについては、本調査の最終的な補充を日常的にどう位置付けていくかの問題とともに考えてみたい。

詳細調査の成果と課題を簡単にまとめておこう。まず、前期段階の古墳からである。東松山市根岸稻荷神社古墳は、いわゆる「出現期」古墳として把握してもよい状況で検出された。前方後方形・弥生土器系土器と土師器の共伴など興味深い事実が明らかになった。また、吉見町山の根古墳でも東海系の高坏などがくびれ部から出土し、古墳の年代も埼玉最古級にできる可能性が出てきた。これらは今後の埼玉県における古墳の発生を考えるための良好な材料となろう。また、東松山市天神山古墳は、事務局の詳細調査の後に、別件の発掘調査を東松山市教育委員会が実施し、前方後方墳であることが確定した。

中期から後期前半では、児玉町長沖 157号墳の調査により外面調整B種ヨコハケの埴輪がともなうことが明らかになり、児玉地域でこの種の埴輪を持つ古墳を1基増加させた。なぜか前方後円墳でなく、円墳ばかりにこの手法の埴輪が採用されていることについて引き続き考えていかなくてはならない。杉戸町目沼10号墳は下総型埴輪の分布地域でありながら、下総型採用以前の古い形態の、北埼玉地域などと同様な埴輪を出土し、円筒埴輪棺も出土した。鈴杏葉を出土した9号墳の位置付けとともにこの地域の古墳の評価をもっと高くしなければならない事例であろう。

後期古墳の中では注目すべき形象埴輪の出土が目立った。深谷市木の本10号墳の顔面彩色のある女子人物埴輪・馬鐸表現のしっかりした馬形埴輪、花園町黒田2号墳の武人埴輪や馬形埴輪などは今後形象埴輪研究で問題になりそうな資料である。

また、滑川町天神山横穴墓群は、レーダー探査資料の解析により、今回の詳細調査で確認した3基以外に23基の横穴墓の所在が確認され、合計26基が県指定史跡となった。

以上のように、本県の古墳研究に関する重要な基礎資料を蓄積することができたのは、今回の大きな成果であった。本書においては資料提示を主眼とした。これらの資料の提起する問題については引き続き追求していきたい。

参考文献抄

今回の古墳詳細分布調査を行う中で、各年度の調査及び本書の作成にあたって参考図書とした文献は数多い。本来ならば、各図書の名称を正式にすべて記載すべきであるが、本書の編集の都合により略記するにとどめたい。紙数の都合で省略した文献もあるので記載漏れ等についてはご海容願いたい。

1 全県に関するもの

『埼玉県史』(旧版)、『新編埼玉県史』、『古墳調査報告書』第1～8編、『埼玉県遺跡地図・地名表』、『埼玉県埋蔵文化財調査要覧』Ⅰ～Ⅵ、『埼玉県埋蔵文化財調査年報』昭和55～平成3年、『埼玉の文化財』第1～32号、『埼玉県埋蔵文化財調査事業団年報』1～13、『埼玉県遺跡発掘調査報告会発表要旨』第1～25回、『古墳詳細分布調査概報』1～3、『荒川 人文Ⅰ』、『中川水系 人文』

2 調査報告書(主要なもの)

『埼玉県遺跡発掘調査報告書』第1～30集、『埼玉県埋蔵文化財調査報告』第1～18集、『埼玉県遺跡調査会報告書』第1～38集、『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書』第1～131集、『白幡本宿遺跡』、『白楯遺跡』、『白楯宮腰遺跡』、『本柵遺跡』、『本村遺跡』Ⅰ～Ⅹ、『南原(高知原)遺跡』、『台耕地稻荷塚古墳』、『原遺跡』、『稻荷塚古墳周溝調査』、『No.166遺跡』、『殿山遺跡・殿山古墳』、『川田谷の遺跡と遺物』、『西台遺跡の発掘調査』、『川田谷古墳群』、『北本市の埋蔵文化財』、『宮登古墳の調査』、『生出塚遺跡』、『下閭遺跡』、『鴻巣市遺跡群』Ⅰ～Ⅷ、『袋・台遺跡』、『南大塚古墳群』、『滝之城横穴墓群』、『山下後・吉野・白旗塚・山口城跡』、『笹井古墳群・八木北遺跡・滝祇園遺跡』、『川崎横穴群』、『埋蔵文化財の調査』(上福岡市)Ⅴ、『松の外遺跡・西戸古墳群』、『坂戸市遺跡群』第Ⅰ～Ⅲ集、『古代のさかど』Ⅰ、『三千塚古墳群発掘調査中間報告』、『冑塚古墳』、『大谷遺跡』、『諏訪山古墳群』、『柏崎古墳群』、『花見堂』、『行司免遺跡』、『黒岩横穴群』、『羽尾窯跡』、『寺前古墳・大道古墳』、『秩父』、『飯塚・招木古墳群』、『上長瀬古墳群』、『塚古墳群』、『御手長山古墳』、『旭・小島古墳群』Ⅰ・Ⅱ、『本庄住宅団地遺跡群』Ⅰ・Ⅱ、『本庄市遺跡群』Ⅰ～Ⅷ、『長沖古墳群』、『秋山古墳群』、『大御堂稻荷塚古墳』、『広木大町古墳群概報』、『日の森遺跡』、『後山王遺跡』、『神川町遺跡群』Ⅰ～Ⅶ、『中条遺跡群』Ⅰ～Ⅲ、『女塚』、『上増田古墳群』、『黒田古墳群』、『塩前遺跡』、『姥ヶ沢遺跡』、『塩西遺跡Ⅱ』、『本田・東台・上前原』、『江南町内遺跡群』Ⅰ～Ⅲ、『箱崎3号墳』、『埼玉稻荷山古墳』、『埼玉古墳群発掘調査報告書』第2～8集、『八幡山古墳石室復原報告書』、『行田市No.40遺跡』、『中の山古墳』、『酒巻古墳群』行田市第18～25集、『あたご山古墳・南河原条里遺跡』、『椿山遺跡』(第5次)

3 市町村史など

『浦和市史』、『川口市史』、『与野市史』、『戸田市史』、『鳩ヶ谷市史』、『草加市史』、『朝霞市史』、『志木市史』、『和光市史』、『大宮市史』、『上尾市史』、『桶川市史』、『北本市史』、『鴻巣市史』、『川越市史』、『所沢市史』、『狭山市史』、『富士見市史』、『坂戸市史』、『鶴ヶ島町史』、『東松山市史』、『嵐山町史』、『吉見町史』、『滑川村史』、『吉田町史』、『本庄市史』、『上里町史』、『美里町史』、『神川町誌』、『熊谷市史』、『寄居町史』、『花園村史』、『妻沼町誌』、『大里村史』、『行田市史』、『加須市史』、『羽生市史』、『春日部市史』、『岩槻市史』など

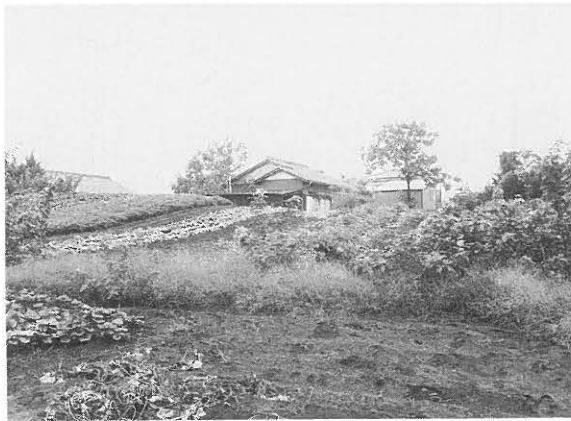
4 雑誌・単行本など

『東京国立博物館紀要』、『国立歴史民俗博物館研究報告』、『埼玉県立博物館紀要』、『調査研究報告』(埼玉県立さきたま資料館)、『埼玉県立歴史資料館研究紀要』、『埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』、『埼玉考古』、『埼玉研究』、『台地研究』、『土曜考古』、『いぶき』、『いにしえ』、『鳳翔』、『縣市町村史研究誌』、『縣市町村立博物館資料館研究誌・特別展図録』、『吉見百穴横穴墓群の研究』、『古代東国史の研究』、『日本の古代遺跡 埼玉』、『東京国立博物館図版目録古墳遺物篇(関東Ⅲ)』、『日本の考古学』Ⅳ、『新版古代の日本 8 関東』、『古墳時代の研究』1～13など

圖 版



東松山市野本將軍塚古墳(西上空から)



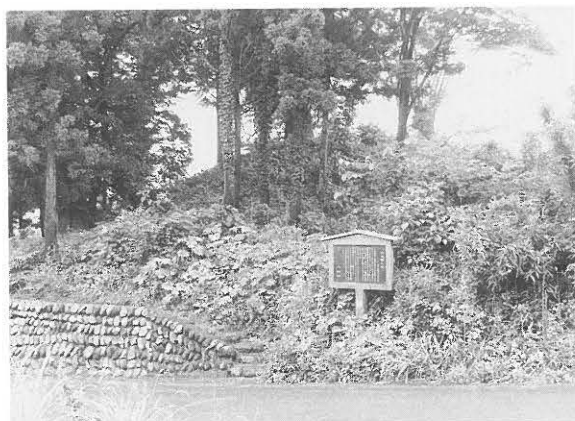
東松山市天神山古墳



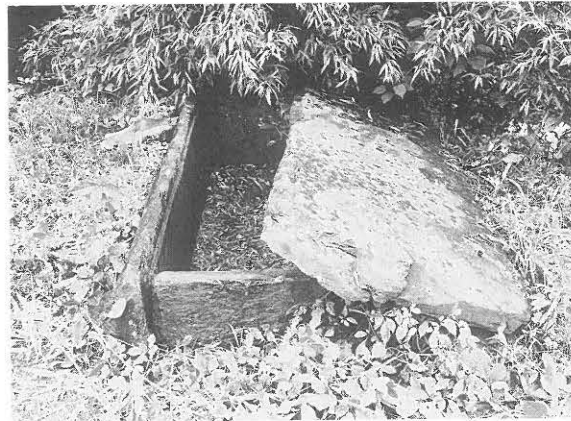
東松山市根岸稻荷神社古墳



嵐山町稲荷塚古墳



小川町穴八幡古墳



川島町大塚古墳組合式箱式石棺



坂戸市雷電塚古墳(雷電塚1号墳)



毛呂山町大類2号墳



秩父市飯塚・招木古墳群



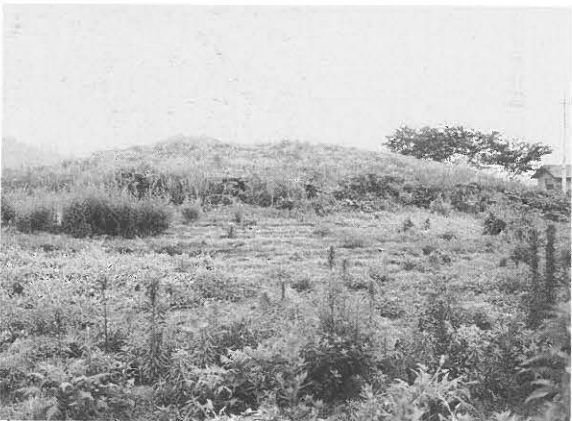
皆野町大塚3号墳



皆野町大塚古墳



上里町浅間山古墳



美里町長坂聖天塚古墳



美里町生野山16号墳



神川町白岩銚子塚古墳



神川町大塚稻荷古墳



行田市斎条1号墳



行田市小見真観寺古墳



行田市白山古墳



加須市鶴ヶ塚古墳



羽生市永明寺古墳



春日部市塚内3号墳



菖蒲町夫婦塚古墳



杉戸町木野川古墳群No.67古墳



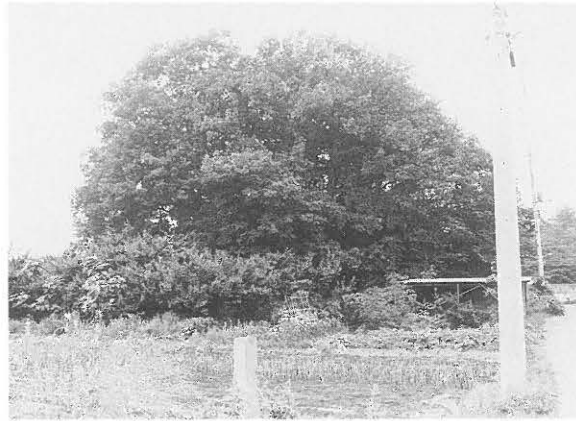
桶川市熊野神社古墳



大宮市三橋稲荷塚古墳



朝霞市柁塚古墳



熊谷市三ヶ尻二子山古墳



熊谷市横塚山古墳



深谷市木の本1号墳



岡部町お手長山古墳



大里村甲山古墳



坂戸市雷電塚古墳第1トレンチ



雷電塚古墳第1トレンチ埴輪出土状態



吉見町山の根古墳第1トレンチ



山の根古墳第7トレンチ土器出土状態



滑川町天神山横穴墓群2号墓



吉田町牧林古墳第1トレンチ



皆野町天神塚古墳第1トレンチ調査風景



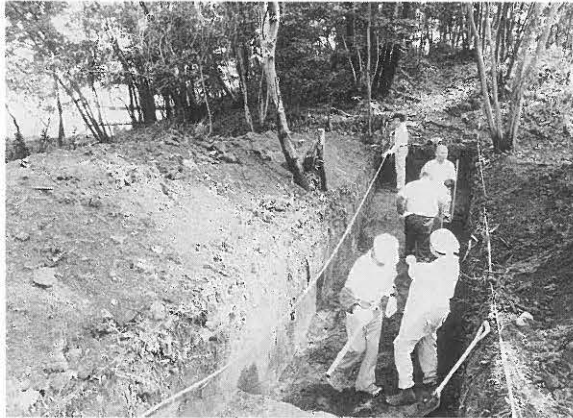
天神塚古墳墳裾



秩父市狐塚古墳第1 トレンチ調査風景



神川町白岩銚子塚古墳前方部周堀



児玉町長沖157号墳第2 トレンチ調査風景



長沖157号墳第1 トレンチ周堀



杉戸町目沼10号墳



目沼10号墳第1 トレンチ埴輪出土状態



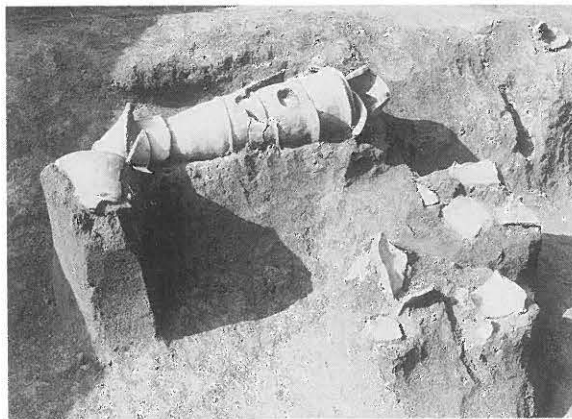
目沼10号墳第3 トレンチ上部埴輪出土状態



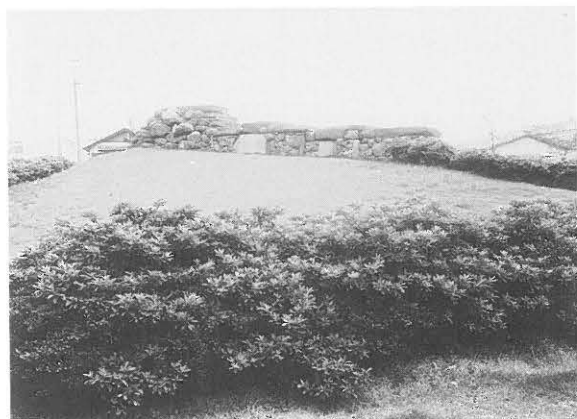
目沼10号墳第3 トレンチ下部埴輪出土状態



目沼10号墳第4 トレンチ円筒埴輪棺



目沼10号墳円筒埴輪棺 (拡大)



行田市八幡山古墳



八幡山古墳第3 トレンチ墳裾



八幡山古墳第1 トレンチ土層断面



川里村舟塚古墳所在地現況



舟塚古墳第2 トレンチ周堀



舟塚古墳第4 トレンチ土器出土状態



花園町黒田2号墳



黒田2号墳第1 トレンチ周堀



黒田2号墳第3 トレンチ土器出土状態



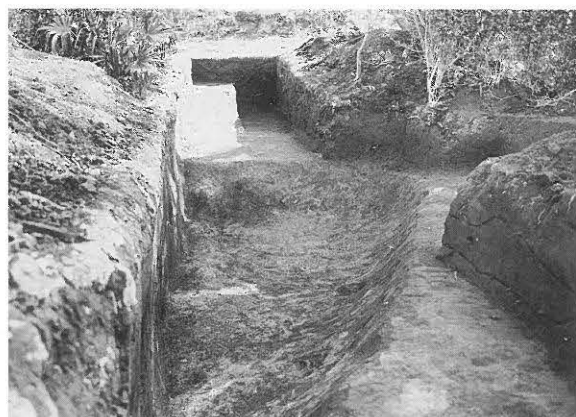
川本町箱崎4号墳第1 トレンチ周堀



箱崎4号墳第2 トレンチ周堀



深谷市木の本10号墳第1 トレンチ周堀



木の本10号墳第2 トレンチ北側くびれ部



木の本10号墳第4 トレンチ南側くびれ部



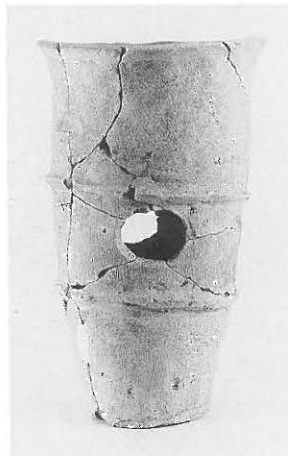
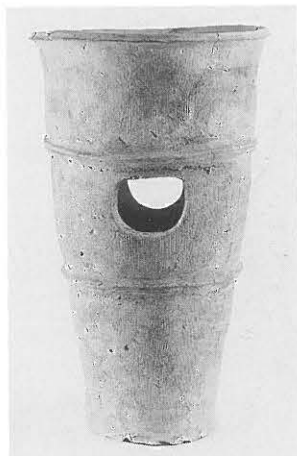
根岸稲荷神社古墳出土 壺



山の根古墳出土 高坏



山の根古墳出土 鉢



目沼10号墳出土 円筒埴輪棺使用埴輪 (左から第54図17・18・19・20)



黒田2号墳出土 武人埴輪



木の本10号墳出土 女子人物埴輪頭部



埼玉県古墳詳細分布調査報告書

発行日	平成 6 年 3 月 24 日
編集	埼玉県立さきたま資料館
発行	埼玉県教育委員会
印刷所	関印刷株式会社

頁	行	誤	正
7	18	騎宮	駒宮
9	地図	91	92
"	"	92	91
"	市町村一覧	26 坂戸市	26 毛呂山町
"	"	27 毛呂山町	27 坂戸市
207	37	基荒川	元荒川
210	1	段層分化	階層分化
"	6	叩	叩き
211	10	9基	18基
221	7	彷彿	仿製
222	第10図	測量図	測量図（左：1号墓，右：2号墓）
225	5	1990年	平成2年
247	1	伴うもの推定	伴うものと推定
259	15	靱	靱
"	23	靱形埴輪	靱形埴輪
261	8	靱	靱
263	18	靱	靱
264	7	靱形埴輪	靱形埴輪
"	11	靱	靱
"	17	朝形埴輪	朝顔形埴輪
289	37	4,696基	4,693基
"	" ³⁸	3,963基	3,955基
"	" ³⁸	97基	101基
"	38 ⁹	197基	198基

「埼玉県古墳詳細分布調査報告書」正誤表（古墳一覧・地名表）

頁	古墳番号	欄	誤	正
13	12-002-003	立地・現況	「 〃 」	台地・山林、神社境内
16	15-002-019	出土品	耳輪	耳環
17	15-003-011	備考	横穴式石室	横穴式石室 △
〃	16-002-001	墳形	帆立貝式古墳	帆立貝形古墳
18	19-001-006	墳形	帆立貝式古墳	帆立貝形古墳
24	(坂戸市古墳数)		137基	135基
25	27-007-004	出土品	台地・畑	(「立地・現況」欄に移動)
26	27-009-003	No.	27-009-002	27-009-003
〃	27-009-004	No.	27-009-003	27-009-004
〃	27-009-005	No.	27-009-004	27-009-005
〃	27-010-007	墳形	(空白)	円墳
27	27-015-002	立地・現況	玉・耳環	(「出土品」欄に移動)
33	34-014-003	出土品	須恵	須恵器
34	34-015-004	備考	横穴式石室、周縁確認 △	横穴式石室、周縁確認
36	34-024-002	立地・現況	丘陵、台地	丘陵、台地・山林
37	34-026-022	所在地	大谷字長原-168	大谷字長原4168
〃	34-026-023	所在地	大谷字長原-168	大谷字長原4168
〃	34-026-033	古墳名	◎▽三塚Ⅲ-32	◎▽三塚Ⅲ-33
〃	34-028-002	立地・現況	ゴル	ゴルフ場
40	36-008-003	立地・現況	台地・宅地	台地・山林
〃	36-009-001	備考	「 〃 」	(空白)
〃	36-009-002	備考	「 〃 」	(空白)
41	36-017-003	立地・現況	丘陵・畑	丘陵・山林
〃	36-017-009	備考	(空白)	△

頁	古墳番号	欄	誤	正
42	36-024-003	備考	「 〃 △」	(空白)
50	39-011-003	県番号	306	308
52	39-037-024	備考	(空白)	旧41号墳
〃	39-037-027	古墳名	◎月輪27号墳	◎月輪27号墳(田44)
〃	39-037-028	古墳名	◎月輪28号墳	◎月輪28号墳(田45)
52	39-037-029	古墳名	◎月輪29号墳	◎月輪29号墳(田46)
〃	39-037-030	古墳名	◎月輪30号墳	◎月輪30号墳(田47)
〃	39-037-031	古墳名	◎月輪31号墳(屋田2号墳)	◎月輪31号墳(屋田2号墳、田53号墳)
〃	39-037-032	古墳名	◎月輪32号墳	◎月輪32号墳(田57)
〃	39-037-033	古墳名	◎月輪33号墳	◎月輪33号墳(田58)
〃	39-037-034	古墳名	◎月輪34号墳	◎月輪34号墳(田60)
56	43-002-005	立地・現況	「 〃 」	段丘・畑、宅地
61	53-001-029	備考	「 〃 」	「 〃 △」
〃	53-001-046	備考	「 〃 △」	「 〃 」
62	53-008-001	所在地	小島字林	小島字林110-1, 114-1, 118-2・3
63	53-008-021	備考	粘土礫、周堀確認 △	粘土礫、周堀確認
64	53-008-064	古墳名	◎蚕影山古墳	◎▽蚕影山古墳
〃	53-008-065	古墳名	山の神古墳	◎▽山の神古墳
74	56-001-001	古墳名	◎長坂聖天塚古墳	◆◎長坂聖天塚古墳
〃	56-002-016	備考	「 〃 」	(空白)
75	56-005-001	古墳名	大町両子塚古墳	◎▽大町両子塚古墳
76	56-005-048	備考	古墳跡(周堀)	古墳跡(周堀) △
77	56-005-087	備考	古墳跡(周堀)。墳丘下に祭祀跡あり	古墳跡(周堀)。墳丘下に祭祀跡あり △
〃	56-005-113	出土品	(空白)	埴輪

頁	古墳番号	欄	誤	正
81	56-010-051	出土品	埴輪	(空白)
85	56-014-001	古墳名	道灌山古墳	道灌山古墳
87	57-007-008	備考	横穴式石室、周堀確認 △	横穴式石室、周堀確認
"	57-007-013	墳形	古墳	円墳
"	57-007-017	墳形	古墳	円墳
88	57-007-030	墳形	古墳	円墳
"	57-007-051	墳形	古墳	円墳
"	57-007-053	墳形	古墳	円墳
89	57-008-001	備考	横穴式石室、葺石、周堀確認 △	横穴式石室、葺石、周堀確認
90	57-009-017	備考	横穴式石室、葺石確認 △	横穴式石室、葺石確認
91	57-011-025	古墳名	◎No.256古墳	◎No.257古墳
97	60-001-001	古墳名	◎▽稲荷町北古墳	稲荷町北古墳
"	60-002-001	古墳名	◎▽火の見塚	火の見塚
"	60-003-001	古墳名	◎△木の木1号墳	◎▽木の木1号墳
"	60-003-002	古墳名	◎△木の木2号墳	◎▽木の木2号墳
"	60-003-003	古墳名	◎△木の木3号墳	◎▽木の木3号墳
"	60-003-004	古墳名	◎△木の木4号墳	◎▽木の木4号墳
"	60-003-005	古墳名	◎△木の木5号墳	◎▽木の木5号墳
"	60-003-006	古墳名	◎△木の木7号墳	◎▽木の木7号墳
"	60-003-007	古墳名	◎△木の木8号墳	◎▽木の木8号墳
98	60-003-008	古墳名	◎△木の木9号墳	◎▽木の木9号墳
"	60-003-009	古墳名	◎△木の木10号墳	◎▽木の木10号墳
"	60-003-010	古墳名	◎△木の木11号墳	◎▽木の木11号墳
"	60-003-011	古墳名	◎△木の木12号墳	◎▽木の木12号墳

頁	古墳番号	欄	誤	正
99	62-001-006	墳形	帆立貝式古墳	帆立貝形古墳
〃	62-001-007	古墳名	小前田7号墳	小前田7号墳(中小前田5号墳)
101	62-018-001	所在地	末野	末野字拾人小路
119	68-007-021	備考	横穴式石室。周墓前祭祀跡検出	横穴式石室。墓前祭祀跡検出
121	74-001-003	備考	(空白)	周堀確認
〃	76-001-009	出土品	直刀・歯・埴輪	直刀・歯
122	(喜瀬町古墳数)		11基	12基
123	89-001-010	墳形	帆立貝式古墳	帆立貝形古墳

「埼玉県古墳詳細分布調査報告書」正誤表(出土遺物観察表)

頁	行	誤	正
281	50	靱形埴輪	靱形埴輪
〃	〃	靱形埴輪	靱形埴輪
283	42	靱	靱
285	63	靱形埴輪	靱形埴輪
〃	〃	靱形埴輪	靱形埴輪
〃	66	靱形埴輪	靱形埴輪
286	1	靱形埴輪	靱形埴輪
〃	〃	靱形埴輪	靱形埴輪
〃	4	靱形埴輪	靱形埴輪

